平安京跡研究調査報告

第3輯

東洞院大路・曇華院跡
発掘調査報告書

財團法人　古代學協會

昭和52年

目　　次

第１部

はじめに …… 1

第１章　調査の経過 …… 4

第１節　遺構の概要（４）　第２節　層　　序（７）

第２章　遺　　構 …… 7

第１節　溝　　（７）　第６節　土　器　溜（23）
第２節　溝状遺構（９）　第７節　瓦　　溜（24）
第３節　建築遺構（10）　第８節　土　　壙（24）
第４節　列石遺構（11）　第９節　集石遺構（28）
第５節　井　　戸（12）　第10節　小　　結（29）

第３章　遺　　物 …… 34

第１節　瓦　塼　類（34）　第４節　石　製　品（72）
第２節　土　器　類（40）　第５節　貨　　幣（72）
第３節　木　製　品（67）　第６節　平安京造営以前の土器（73）

第４章　調査地の沿革 …… 74

第１節（74）　第３節（82）
第２節（79）　第４節（84）

おわりに …… 85

第２部

はじめに …… 89

第１章　遺　　構 …… 91

第２章　出土遺物 …… 100

まとめ …… 106

図 版 目 次

第 1 部

図版第1　上；A区調査前全景　下；B区調査前全景
図版第2　左；当初調査第2トレンチ調査後全景　右；当初調査第1トレンチ調査後全景
図版第3　左；当初調査第3トレンチ調査後全景　右；当初調査第4トレンチ調査後全景
図版第4　A区遺構全景
図版第5　B区遺構全景
図版第6　A区遺構南・北半部全景
図版第7　上；A－1～4区遺構　下；A－5～8区遺構
図版第8　上；A－9・10区遺構　下；A－11・12区遺構
図版第9　上；A区北壁断面　中上；A－12・10東壁区断面　中下；A－10・8区東壁断面　下；A－8区東壁断面
図版第10　上；A区北壁1・2溝断面　中；A－11区溝1・2断面　下；A－9区北壁溝1・2断面
図版第11　上；A－7区北壁溝1・2断面　中；A－5区北壁溝1断面　下；A－1区北壁溝1断面
図版第12　上；溝1・2　下；A－7区南部溝1の段差
図版第13　A－7区溝1上層土器出土状態
図版第14　A－7区溝1上層下半土器出土状態
図版第15　溝状遺構1・2
図版第16　上；A－9・10区建築遺構3・4　下；A－2区集石遺構1・ピット
図版第17　上左；A－5区列石遺構2　下左；A－1区列石遺構1と石敷遺構　下右；A－11区列石遺構3
図版第18　上左；井戸14・15　上右；井戸15　中左；井戸14　中右；井戸14細部　下左；井戸8　下右；井戸10
図版第19　上左；井戸1　上右；井戸2　中左；井戸3　中右；井戸3内部　下左；井戸4　下右；井戸4内部
図版第20　上右；井戸9　上左；井戸9内部　中左；井戸13　中右；井戸5　下左；井戸6　下右；井戸6内部
図版第21　上左；井戸11　上右；井戸11内部　下左；井戸7　下右；井戸12
図版第22　上；A－10区土器溜2・3　下左；A－10区土器溜2　下右；A－10区土器溜3
図版第23　上；A－1区土壙1　下；A－10区土壙9
図版第24　上；A－3・4区土壙2　下；A－6・8区土壙6
図版第25　上；A－6区土壙4　下；B－3区土壙14
図版第26　上；B－1区土壙11　下；B－4区土壙15
図版第27　上；B－4区土壙19　下左；土壙19埋土遺物出土状態　下右；土壙19掘り方
図版第28　上；B－4区土壙20埼出土状態　下；土壙20埼除去後の状態
図版第29　上；B－5区土壙22　下；A－8区土壙7
図版第30　B－5区集石遺構12・13・14
図版第31　B－5区集石遺構12
図版第32　左；B－5区集石遺構13　右；B－5区集石遺構14
図版第33　上；B－1区集石遺構5～11分布状態　下；B－1区集石遺構8
図版第34　上；A－4区集石遺構2・3　下；A－6区集石遺構
図版第35　上；B－1区ピット20礎板出土状態　下；ピット20掘り方
図版第36　上・中；各種ピット　下左；B6－区土壙21　下右；B－4区丸瓦・平瓦出土状態
図版第37　上左；A－10区井戸10上層軒丸瓦出土状態　上右；A－6区軒丸瓦出土状態　中左；B－1区集石遺構5羽釜出土状態　中右；A－6区石臼出土状態　下左；B－6区砂層木の実出土状態　下

右：B－3区砂層流木出土状態
図版第38　軒瓦(1)
図版第39　軒瓦(2)
図版第40　軒瓦(3)
図版第41　軒瓦(4)
図版第42　特殊瓦・塼・火鉢
図版第43　緑釉陶器
図版第44　灰釉陶器・須恵質土器
図版第45　青磁・白磁類
図版第46　土師皿(1)
図版第47　土師皿(2)
図版第48　土師皿(3)
図版第49　土師皿(4)
図版第50　塩壺・大皿
図版第51　土釜・土鍋類
図版第52　各種土器・墨書土器
図版第53　大甕
図版第54　擂鉢・片口
図版第55　片口・石製品
図版第56　陶器類(1)
図版第57　陶器類(2)
図版第58　陶器類(3)
図版第59　陶器類(4)
図版第60　木器(1)
図版第61　木器(2)
図版第62　木器(3)

第 2 部

図版第63　上：Aトレンチ発掘前　下：完掘後
図版第64　上：Bトレンチ発掘前　下：調査状況
図版第65　Bトレンチ溝Ⅲ
図版第66　Bトレンチ完掘後全景
図版第67　上：Bトレンチ井戸状遺構(WⅢ)
　　下：Bトレンチ溝Ⅳ(RⅣ)
図版第68　上：Bトレンチ溝断面　下：溝Ⅳ部分
図版第69　上：Cトレンチ発掘前　下：調査状況
図版第70　Cトレンチ溝Ⅰ遺物出土状況
図版第71　Cトレンチ完掘後全景
図版第72　Cトレンチ溝Ⅳ（RⅣ）全景
図版第73　Cトレンチ断面
図版第74　上：Dトレンチ発掘前　下：完掘後
図版第75　上：Eトレンチ発掘前　上：完掘後
図版第76　軒平瓦及土師皿・塩壺
図版第77　美濃・瀬戸及唐津系陶器
図版第78　美濃及唐津系陶器

挿 図 目 次

第 1 部

第1図　発掘調査地位置図……1
第2図　調査区配置図(1)……2
第3図　調査区配置図(2)……5
第4図　A区遺構平面実測図……折込
第5図　B区遺構平面実測図……折込
第6図　A区・B区断面実測図……折込
第7図　A－7区溝1上層出土土器群……8
第8図　B－1区ピット20……10
第9図　A－5区列石遺構2……11
第10図　A－11区列石遺構3……12
第11図　A－7区井戸8，A－10区井戸10……13
第12図　B－2区井戸15・14……14
第13図　A－1区井戸1・2……15
第14図　A－3区井戸3，A－3・4区
　　井戸4……16
第15図　A－9区井戸9，B－1区井戸13……17
第16図　A－4区井戸5・6……18
第17図　A－6区井戸7，B－1区
　　井戸12・11……19
第18図　井戸14・10・8下底部木枠
　　構造模式図……20
第19図　井戸9・5・15・1下底部木枠
　　構造模式図……21
第20図　井戸3・13・4下底部木枠
　　構造模式図……22
第21図　A－10区土器溜2・3……23

第22図　B－4区土壙19……26
第23図　B－4区土壙20……27
第24図　B－6区土壙21……28
第25図　B－5区土壙22……28
第26図　B－5区集石遺構12・13・14……30
第27図　B－1区集石遺構5～11……31
第28図　A－2・4区集石遺構1～4……32
第29図　軒丸瓦拓影・実測図……35
第30図　軒平瓦拓影・実測図……37
第31図　中世の軒瓦拓影・実測図……39
第32図　緑釉陶器実測図……41
第33図　灰釉陶器・須恵質土器実測図(1)……42
第34図　灰釉陶器・須恵質土器実測図(2)……43
第35図　青磁・白磁類実測図……43
第36図　土師皿実測図(1)……45
第37図　土師皿実測図(2)……46
第38図　土師皿実測図(3)……47
第39図　土師皿実測図(4)……49
第40図　塩壺実測図……50
第41図　土釜・土鍋類実測図……51
第42図　鉢実測図……52
第43図　各種土器実測図……52
第44図　陶書土器実測図……53
第45図　大甕類実測図……54
第46図　大甕……55
第47図　甕底部実測図……55
第48図　擂鉢実測図(1)……56
第49図　擂鉢実測図(2)……57
第50図　片口実測図……58
第51図　陶器類実測図(1)……59
第52図　陶器類実測図(2)……60
第53図　陶器類実測図(3)……60
第54図　陶器類実測図(4)……61
第55図　大皿実測図……61
第56図　木器実測図(1)……68
第57図　木器実測図(2)……69
第58図　木器実測図(3)……71
第59図　木器実測図(4)……72
第60図　貨幣拓影……73
第61図　平安京造営以前の土器拓影・実測図…74
第62図　左京条坊概念図……75
第63図　三条大路・東洞院大路街路図……77
第64図　寛永平安町古図……83
第65図　調査地付近条坊復原図(1)……86
第66図　調査地付近条坊復原図(2)……87

第 2 部

第67図　発掘区位置図……90
第68図　A・Eトレンチ平面図……92
第69図　B・C・Dトレンチ平面図……94
第70図　A・B・Cトレンチ断面図……95
第71図　D・Eトレンチ断面図……98
第72図　瓦拓本……100
第73図　土師器及陶器実測図……102
第74図　陶器及磁器実測図……104
第75図　銅銭拓本……105

例　　言

1．本書は，昭和50年から51年にかけて，平安博物館が，近畿郵政局の委託を受けて実施した中京郵便局新築敷地内の発掘調査報告書である。

2．報告は，調査区域によって第1部（別館部分）と第2部（本館部分）に分けた。

3．第1部の執筆分担は下記の通りである。

寺島孝一　はじめに，第3章（第3節，第6節を除く），おわりに

乗安和二三　第1章，第2章，第3章第6節

飯島武次　第3章第3節

芝野康之　第4章

第2部の執筆は甲元真之，佐々木英夫，松井忠春が行い，分担は本文末尾に（　）で示した。

4．編集は第1部が寺島，第2部は松井が担当し，寺島が最終的な統一を行った。第1部・第2部の章だては各々別にしたが，挿図，図版は索引の便のため通し番号をつけた。

5．第1部の遺構挿図は乗安が，遺物のうち木器については飯島が，他は寺島が作成した。尚土器の実測については三宅純子氏の助力を得た。図版に使用した写真は遺構については主として乗安が，遺物は寺島が撮影した。

6．第2部の遺構実測は調査参加者全員が行い，松井がトレースした。遺物の挿図は甲元，松井，奥野都が作成した。図版に使用した写真は佐々木が撮影し，焼付の一部は大槻雅生氏にお願いした。

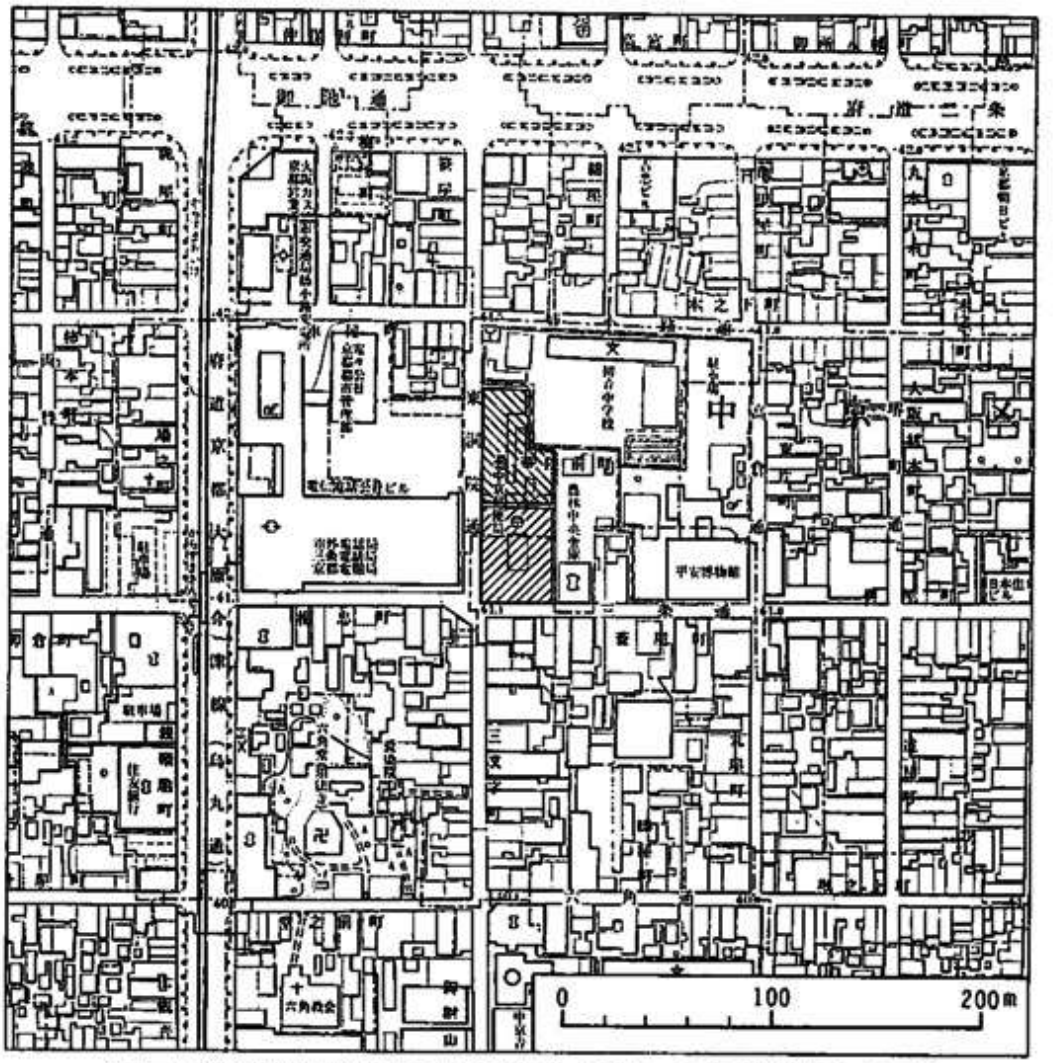
7．本報告に使用したレヴェルは海抜標高である。

第 1 部

はじめに

近畿郵政局では，京都市中京区三条通東洞院東入菱屋町30の中京郵便局の老朽化，業務機能の低下にかんがみて，局舎の新築を計画されていたが，該地が平安京内に位置することから，昭和49年９月，京都市文化財保護課を通じて，発掘調査を平安博物館に委嘱された。

平安博物館では，この地が平安京高倉宮跡推定地に相当し，また東洞院大路，三条大路など平安京のプランを確認するうえで，極めて重要な遺構が検出される可能性があり，また，かつて三条東殿・西殿などの近接する地点を調査していることもあって，この発掘調査を実施する

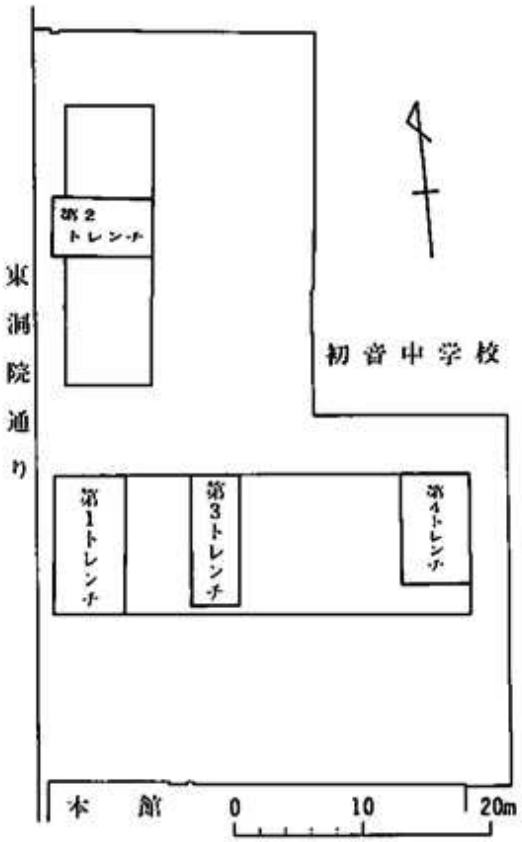


第１図　発掘調査地位置図（右下り斜面部が第１次調査，左下り斜線部が第２次調査）

ことになった(第1図)。

その後，調査期間・方法などについて検討を重ねたのち，敷地北側の旧別館部分のうち約600m² について発掘調査を行うことになり，近畿郵政局と平安博物館との間に契約書が取り交わされた。期間は昭和50年3月12日から同5月11日の2か月が予定された。

調査は約600m² を荒掘りし，そのうち4か所を精査したところ，第1トレンチおよび第2トレンチで，東洞院大路の側溝と思われる溝状遺構が，また，第3トレンチおよび第4トレンチでは柱穴群などが確認された(第2図，図版第2・3)。



第2図　調査区配置図(1)

このような極めて良好な遺構が検出されたため，再び近畿郵政局と協議した結果，幸にも御理解を得て，当初の計画を変更して，別館敷地内の全面調査を行うことになった。このため，精査した地点は山砂を入れて埋め戻し，4月中旬をもって一応調査を打ち切った。

その後，全面調査の方法・期間などについて協議した結果，敷地をA区，B区の2つに分け，片側づつ調査を行うことが決まり，近畿郵政局と平安博物館の間で契約が交わされた。調査期間は昭和50年6月20日から同年11月30日までの5か月間とされた。また当初は別館の基礎をそのまま残して調査を行ったが，遺構の重要性からみて基礎を全て取り壊して発掘調査することにしたため，A区については5月末から6月中旬にかけて，B区については9月下旬に基礎の取り壊しに伴う立合調査を行った。

調査は，角田文衛館長を責任者として，寺島孝一助手(考古学第3研究室)を調査主任，乗安和二三助手(同，昭和50年5月から)，近藤喬一助教授(同)を調査員として，A区は6月27日から9月10日まで，B区は10月1日から11月30日まで実施した。

調査補助員としては以下の学生諸氏の協力を得た。

谷口俊治・芝野康之・三宅純子・藤井寿美男・藤懸彰了・大城邦義(以上大谷大学)，内藤善史(仏教大学)，淀川協子(立命館大学)，浅香佳子(カールトン大学)，桜井隆・楠原浩之・赤井隆夫・山下武久(以上関西大学)，北山友昭・古田典之・田中勝之・大槻真純(以上京都産業大学)，石原利樹・高橋明子・辻佐和子(以上金沢大学)，佐野良彦・築信久・

佐藤信・小鮒滋則(以上東京大学)，国木田明子(龍谷大学)，片山幸子・森本和代(以上家政短期大学)

作業員としては向日市在住者を中心とした以下の方々の参加を得た。

橋本庄次・橋本政一・吉田竜太郎・吉田辰之助・品川仙太郎・生島嘉仲・木村栄三郎・大根清一・五十棲清二・吉田藤三郎・藤田太三郎・橋本博・小泉隆・中野裕司・斉藤宏康・永原廣三・荒木賢治・長谷川忠司

また遺物の水洗・接合・注記などの室内作業は以下の諸氏にお願いした。

芝野康之・内藤善史・桜井隆・楠原浩之・国木田明子・赤井隆夫・古田典之・田中勝之・永原廣三・小泉隆・中野裕司・斉藤宏康・川又裕子・半田尚紀・高田好子・大森稔・岡良子・工藤ゆかり・川満昭夫・増田三恵子・林照賢・布田緑・中野英洋・矢野哲司・三宅純子

特に三宅純子氏には整理の最終段階で大変御世話になった。また遺構の実測及び埋め戻しについては考古学第3研究室の植山茂，平安京調査本部の甲元真之・佐々木英夫・松井忠春各氏の協力を得た。ベルトコンベアーや重機類については，小谷工務店および大林組に便宜をはかっていただいた。さらに京都市文化財保護課浪貝毅氏には郵政局との窓口として，また平安博物館研究部・事務局の方々にもいろいろと御協力いただいた。厚く謝意を表する次第である。

なお，別館部分の調査の結果，本館部分についても調査の必要性が認められたため，トレンチ掘りではあるが発掘調査を行うこととなった(第2部)。

思えば，まだ寒さの残る3月から酷暑の夏を経て，本館部分を含めればほぼ1年に渉る長期間の調査であった。この間を大きな事故もなく調査ができたのは上記した諸氏の御協力によるものであるが，当初の予定を大幅に変更して，期間・費用ともに平安博物館の要請に応えていただいた近畿郵政局には厚く感謝申上げたい。特に設計課中野昭一氏には繁雑な事務処理に協力いただくなどひとかたならぬ御世話になった。

今回検出された東洞院大路の側溝，曇華院跡の遺構の保存については京都市文化財保護課・近畿郵政局・平安博物館で協議を重ねたが，庁舎の機能からいって地下を用いる必要があること，他に適当な代替地が無いことなどから，やむを得ず一部を除いて破壊されることになった。ただし新庁舎内の駐車場の床には，溝の位置に標識を埋め込み，また，これと共に今回検出された遺構の表示板を作り一般の理解に供することになった。

本報告は，時間的な制約もあり不十分なものになってしまったが，諸先学の研究に少しでも資するところがあれば幸である。

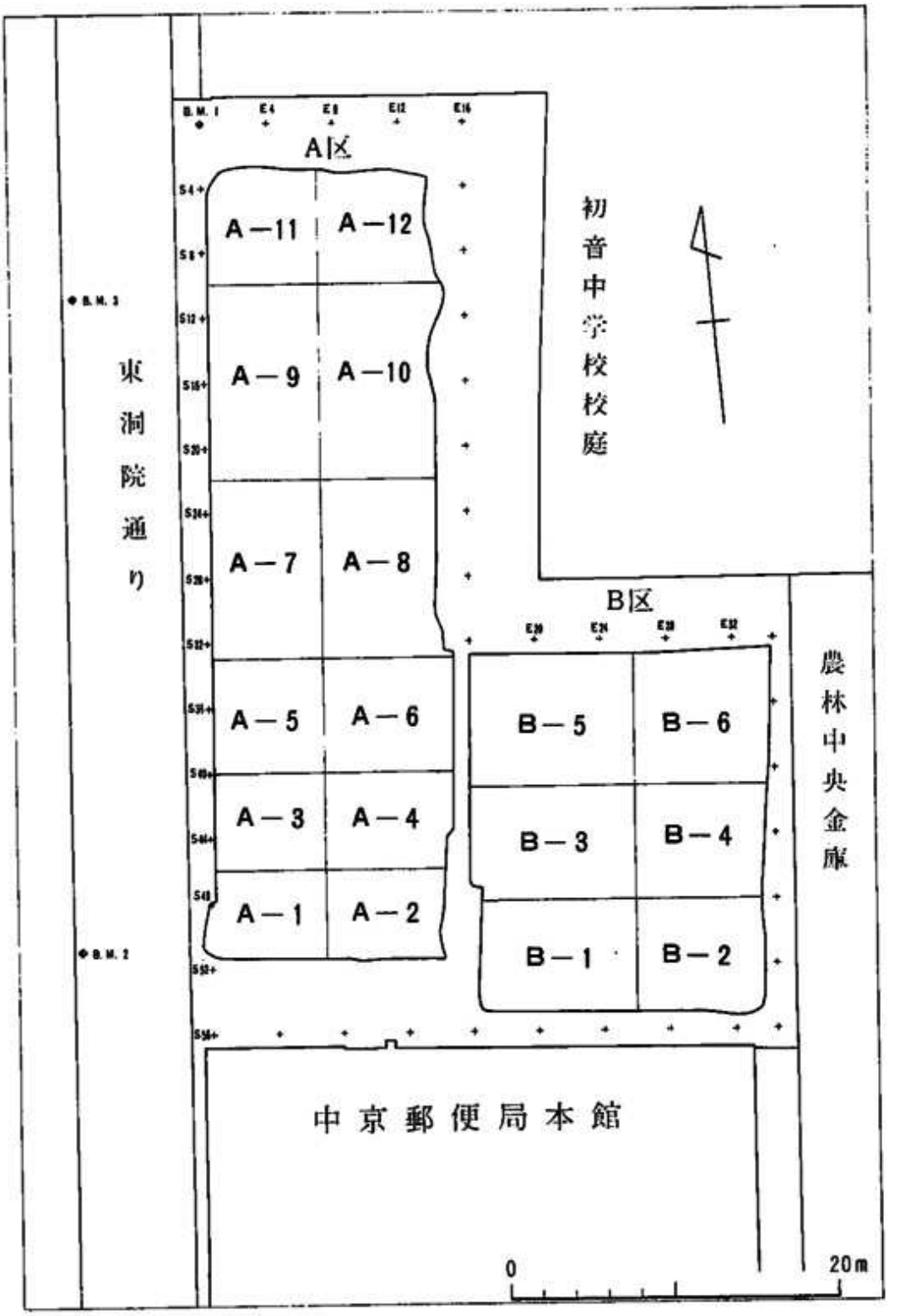
第1章　調査の経過

調査地は，中京郵便局別館敷地部分のほぼ全域で，排土の置き場所を確保するために東西片側ずつ調査することにし，西半部をA区(東西約15m，南北約48m)，東半部をB区(東西約18.5m，南北約22m)として，A区より調査を開始した。当初の調査の結果より，地表下約70cm前後の深さまで近世末から現代に至る撹乱層が存在し，さらに明治35年建築の中京郵便局建物のコンクリート基礎が地表下約1.2mの深さまで縦横に及んでいることが判明していた。遺構の全面調査の必要上からみて，発掘に先立ち，まずこのコンクリート基礎の除去作業を建設機械によって行なわざるを得なかった。

コンクリート基礎除去後，調査区の設定を行なった(第3図)。A区西北端に仮のベンチマークを設置し，コンクリート基礎に平行して南北方向に主軸(Sライン)をとり，これと直交する軸線をEラインとし，この直交する2本の軸線をもとに4×4mのグリッドを調査地の全域に設定した。当初，標示はEラインをE4・E8・E12……，SラインをS4・S8・S12……として各地点は，例えばE4・S28，E16・S32と標記することとしたが，発掘作業にあたっては，縦横に走るコンクリート基礎の残りおよびその掘り方が障害となり，作業の便宜のため，コンクリート基礎で囲まれた区画を調査の単位とし，調査区の南から北へかけて各々A－1区・A－2区……A－12区，B－1区・B－2区……B－6区とすることにした。従って調査単位の大きさは一定していないが，各単位の東西・南北軸線は，当初のE・Sラインに合致させて，調査においては両者を併用することとした。主軸Sラインの方位は，N 3°32′00″ E である。

第1節　遺構の概要(第4図・第5図)

調査は各区とも，基礎コンクリートの残滓および撹乱土の除去後，遺構の検出にあたり，A区・B区とも南から北へ順次展開した。A区では暗褐色ないし暗赤褐色土層において，1・2区南部や5・6区中央部，7区西半部，10区北部において近世や中世の土器溜が検出された。1区ではこの層中に列石遺構や石敷遺構が認められた。列石遺構はこのほか，5区・11区で検出されているが，これらはいずれも石の面をそろえたもので，前者とは若干様相が異なるものであった。2区では，暗赤褐色土層の下に青灰色の砂層がみられ，この上面にピットや集石遺構が存在した。この集石遺構は，4・6区の地山面に集中して分布していた。大半の遺構は地山面において検出され，ほぼA区全面にわたって性格不明の中世・近世と推測される土壙や落ち込みが認められた。ピットも多数検出されているが，9・10区や2・4・6区，1・3区において組み合わせをもつものが認められる以外，確実な組み合わせをもつものは確認されなかった。なお，1・3・5・7区の西半部には，南北方向帯状に地山面が若干高くなり，そこにピットが多数存在することが注目されたが，その性格は明らかでない。A区では計10基の井戸


A区
A－11
A－12
A－9
A－10
A－7
A－8
A－5
A－6
A－3
A－4
A－1
A－2
B区
B－5
B－6
B－3
B－4
B－1
B－2
B.M. 1
B.M. 2
B.M. 3
東洞院通り
初音中学校校庭
農林中央金庫
中京郵便局本館
0
20m

第3図　調査区配置図(2)

が検出されたが，そのうち7基までが区の南半に集中して分布しており，それらは大半が中世から近世のものであり，ピットの多数存在することと相俟って，中世以降形成された町屋の存在との関連が推測されよう。瓦溜は8・10区に集中してみられ，焼土と近世の瓦を多量に含んだ大規模なものである。当初の調査の段階で検出された5・6区の溝は，A区の北端から南端まで南北方向に連続して存在していることが確認され，さらにこれに重複した溝が7・9・11区に連続して検出された。さらにA区西壁直下に溝と推定される落ち込みが認められたことから，時期を異にする計3条の溝が，時期が新しくなるにつれて西側へ移動していることが確認された。また，A区の中央部南北方向に溝状遺構3条が検出され，そのうちの2条は根石をもつピットを底にもち，築地状の遺構の可能性も推測され，溝と平行して存在することから，両者の関連が注目された。12区は他とは状況が異なり，撹乱土の下に暗褐色土層をはさんで暗黒青色粘質土が広く分布し，木片多数が検出された。この層の下は砂利層となり，暗黄灰色粘質土を地山とする他区の状況とは異質であるが，理由は明らかでない。

B区では，3・5区に大規模なコンクリート基礎の掘り方が存在し，また区の中央部南北方向にやはり帯状のコンクリート基礎の掘り方が残り，実質的な調査可能な範囲はかなり限定された。1区では，近世の大規模な瓦溜の下に中世と推測される集石遺構がまとまって分布していた。またこうした集石遺構は5区でも3基まとまって砂層上面に検出された。土壙は，多数検出されているが，1区の土壙11，4区の土壙15など近世初頭の土器類が充満するもの，4区土壙19のように隅状の板枠をもつもの，4区土壙20・21のように塀を埋置するもの，5区土壙22のように壙底に木材を組むものなど特色のあるものが多く検出された。ピットは全域で多数検出され，3区や6区では集中して認められたが，明確な組み合わせをもったものは確認されなかった。中には1区ピット20のようにしっかりした掘り方をもち，中に根石と一種の礎板とみられるものを置いたものも存在した。井戸は，1区・2区に計6基検出されている。なお，当初の調査では4・6区に中世かと推測される粘土質の貼り床面が検出された(図版第2・右)が，他の区では検出されず，その性格を明らかにすることはできなかった。この貼り床の下には，幅約3m，深さ約0.4～1mの砂と砂礫の互層が溝状に存在した。この溝状の落ち込みは，その上面の砂層ないし砂礫層(地点により異なる)が暗黄灰色粘質土の地山と同レベルにあり，この暗黄灰色粘質土の下は井戸などの掘り方の観察によればレベルを異にして砂礫層となっているため，両者を同一のものと当初みなしていたが，最後の断ち切り調査により，当初の地山下層の砂礫層とは異なり，平安京創設以前の自然の流路であることが判明した。この砂層・砂礫層中より，弥生土器などの土器片，シジミ，木の実(図版第37・下左)，自然木(図版第37・下右)，木片などが検出された。この砂層ないし砂礫層は，B－2区南壁中央下部より北へ帯状に連続し，B－5・6区中央部で屈曲してB－3区南西部へつづいている。当初A－2区で認められた砂層(図版第16・下)は，このつながりと推定されよう。

以上，今回の調査で検出された遺構は井戸10や溝1・2，溝状遺構，若干のピットなどの中世以前とみられる遺構を除いて，大半が中世～近世の時期のものと推測され，この地に康暦2

年(1380年)以降通玄寺(曇華院)が所在し，かつ応永年間以降町屋が境内の西の一画に形成されることからすれば，これらに関連した性格のものと推定されよう。

第2節　層　　序（第6図）

調査区はほぼ全面にわたって，中京郵便局が明治35年に建てられた際の建物コンクリート基礎およびその掘り方によって地表下約1.8mの深さまで破壊・攪乱を受けていた。コンクリート基礎の掘り方は深い所では地山面にまで達しており，とくにB－3・5区では大半の部分が地山を1m以上掘り込んで基礎が造られている状態であった。さらに近世以前の攪乱もみられるため，層序はきわめて複雑であるが，部分的に残された堆積層によれば，2枚の焼土層をはさんで大きくは3層に区分し得る。すなわち，地表下約70cmに第1の焼土層がみられ，元治元年(1864年)の大火によるものと推定される。これより上層は近世末以降の攪乱層であり，調査区の全面にわたっている。A－10区やB－1・2区では，この焼土層を掘り込んだ近世の大きな瓦溜が認められる。第2の焼土層はA－12区東壁やB－1区南壁にその痕跡がみられ，慶長8年(1603年)の曇華院焼亡(『京都坊目誌』)に照応するものである蓋然性が高い。この上・下2つの焼土層の間の堆積層は近世層であり，第2の焼土層より下層が近世初頭から中世の堆積層と推定される。これらの堆積層は土層断面ではさらに細かく区分し得るが，コンクリート基礎が縦横に走っていたなどもあって，細分される層を面的に確認することは困難であった。地山は，調査区の大部分においては暗黄灰色粘質土となっており，その下には砂利層が認められる。暗黄灰色粘質土の厚さは一定ではなく，砂利層と境をなす面は必ずしも水平ではない。なお，中世以前の堆積層は，若干の井戸やピットなどの埋土を除いて明確には確認されなかった。また遺構の検出は土層断面で細分しうる各層が面的に確認することが困難な状況にあったため，大半が地山面においてなされたものである。

第2章　遺　　構（第4図・第5図，図版第4・図版第5）

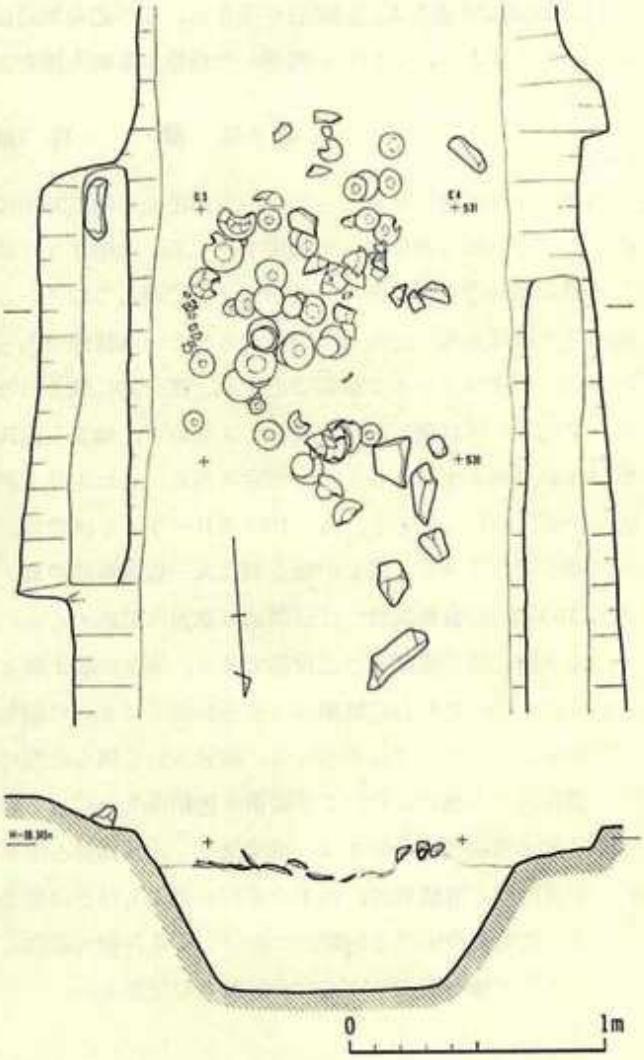
今回の調査で検出した遺構には，溝・溝状遺構・建築遺構・列石遺構・井戸・土器溜・瓦溜・土壙・集石遺構などがある。以下，各遺構について順次説明を加えたい。

第1節　溝

今回の調査で確認された溝は，A区西半部で2条あり，さらに溝の可能性の認められるもの1条が検出されている。

溝1　A区の北端から南端にかけて南北方向約46.5mにわたって検出されている。幅約120cm前後，深さ約40cmの素掘りの溝である。溝中には，暗赤褐色砂質土が堆積し，この上層部に中世～近世の土師質土器片多数が含まれている(第7図，図版第13・図版第14)。この溝は，S

32ライン以北とS43ライン以南は溝底レベルが約40cm前後低くなっており(図版第12・下)，各々の溝肩よりの深さは60cm前後で，以北では北にかけて若干深くなっている。ある時期，恐らくは溝底レベルの高い部分すなわち本来の溝がある程度埋没した段階で，以北と以南はかつての溝に重複する形でさらに掘り下げられたものと推測される。以北部と以南部との掘り下げが同時になされたものかどうかは問題であるが，各々の溝底の基本的な堆積土は，前者が暗青灰色粘質土，後者が暗赤褐色砂質土と相違していることを重視すれば，時間差を想定すべきであろう。以北部では，上層は暗褐色砂質土を基調とし，中世～近世の土師質土器を多く含んでいる。なお，S24ラインより以北では上層は暗黒青色粘質土を基調とし，中世～近世の土師質土器片のほか漆器・木片などを含んでいる。溝の時期については，溝底より顕著な遺物の出土をみないため確証はないものの，上層には中世ないしは近世にかけての遺物が認められることからすれば，少なくとも中世以前の時期を想定することができ，また応永年間にはすでに三条東洞院通玄寺西面に町屋の存在が知られている(『教言卿記』)ことからしてこの時期には溝が埋没していたことが推測されることからも，これは傍証しうるであろう。



第7図　A－7区溝1上層出土土器群

溝2　溝1の西肩に重複して検出された(図版第12・上)。調査区北端からS29ライン付近まで南北方向に約25m確認され，幅約120cm前後，深さ約30～40cmの素掘りの溝で，北へかけて深くなっている。方向は溝1に対して若干西にふれている。堆積土の下層は，暗赤褐色砂質土，上層は暗赤褐色土であり，いずれも土師質土器片などを含んでいる。溝の時期については遺物の上では確証は得られないものの重複関係より溝1よりは新しい(図版第10)。そして町屋

の形成時期を重視するとすれば，中世ないしはそれ以前で，かつ溝1よりは下がる時期といえよう。

溝3　A区西壁のコンクリート基礎の下に，暗青灰色粘質土を埋土とする落ち込みが南北に連なって検出されている。調査区の北端から南端までほぼ認められるが，コンクリート基礎の掘り方と大部分重複しているため，詳細は不明である。しかし，A—11区列石遺構が西に面して構築されていることは，すなわちこれがこの西側に何らかの遺構が存在して，それに規制されたものと判断されることや，さらに列石遺構が落ち込みの肩にほぼ相当している状況などからして，溝の可能性が強いと考えられる。列石遺構との密接な関連性が想定されるとすれば，その時期は近世初頭と推測されよう。

従来における平安京条坊制の復原研究の成果によれば，かつての大路・小路は現在における道路と大幅な変化はしておらず，これらの溝は，その位置からすれば，各時期における東洞院大路の東側溝と推定されよう。当初従来の当博物館の条坊復原によれば，これらの溝が西側溝にあたる可能性も推測されたが，大路8丈(約24m)の道路幅を想定した場合，B区において溝が検出されるはずであるが，その痕跡は全く認められないことから，東側溝であることは確定的となった。

第2節　溝　状　遺　構

A区のほぼ中央，溝1の東肩より約1.4～2m東側の位置で南北方向に走る溝状の落ち込み3条が検出されている。

溝状遺構1(図版第15)　長さ約12m，幅約60cm，深さ約20cmで，南端は井戸4に切られて，明らかでない。底部には，この遺構に伴うとみられるピット4個所が2～2.4mの間隔で認められ，その内2つは根石をもっている。溝1に平行してほぼ南北方向に走っており，埋土中よりへそ皿を含む土師質皿形土器が検出されている。

溝状遺構2(図版第15)　長さ約8m，幅約60cm，深さ約10cmで，北端は土壙8に，また南端は井戸7によって切られていて不明。この遺構に伴うとみられるピット4個が底部に認められるが，間隔は一定していない。遺構はほぼ南北方向に走るが，南部ではやや東にカーブしている。溝状遺構1によって切られており，それよりは古いとみられるが，埋土中からは同じくへそ皿を含む土師質皿形土器が検出されている。

溝状遺構3　長さ約11m，幅約80cm，深さ約5cmで，前二者の遺構に比べてやや幅広くて浅い。北端は土壙によって切られていて不明だが，南端は土壙8の北側部分で終っている。遺構の中ほどは削平を受けて途切れている。溝状遺構2の北の延長線上に位置するが，直接には結びつかない。

これら溝状遺構のうち，1と2については，ピット列を有することから，何らかの建築物に関係する性格のものかと推測され，あるいは築垣の可能性も想定されよう。時期としては，少なくとも室町期以前にさかのぼる可能性がある。とすれば，溝1との関連性が問題となるが，

両者を結びつける直接的な確証は得られていない。

第3節 建 築 遺 構

A区・B区とも柱穴とみられるピットは多数検出されているが，明確な組み合わせをもつものは以外に少ない。以下ほぼ確実とみられるものについて記述する。

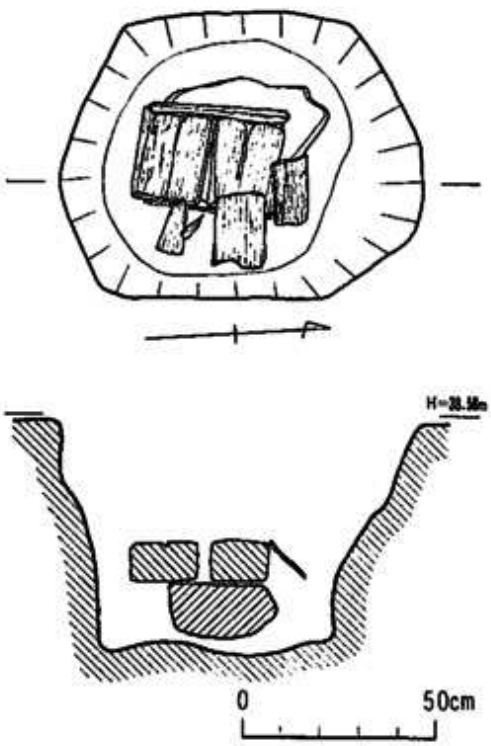
建築遺構1　A－1・3区ピット1～4で，柱間の寸法は約3m(10尺)で，ほぼ南北方向に並んでいる。柱穴は径約1m前後の大形の掘り方で，地山面で検出されている。これらに組み合わさる他の柱穴は確認されていない。また，この柱穴列のある部分は南北方向に地山面が若干高く，あるいは築地の存在も推測される。

建築遺構2　A－2・4・6区にかけて認められるピット7・8・9・12で，これに調査過程で検出されたA－2区の砂層上面に認められたピット3個が組み合わさり，少なくとも桁行4間・梁間1間以上の建築物と推定される。柱間の寸法は約3m(10尺)の等間隔で，桁行はほぼ南北方向である。

建築遺構3(図版第16・上)　A－9・10区のピット30・31・32・33で，桁行・梁間とも1間の建築物とみられる。柱間の寸法は桁行1.9m，梁間1.7m(約6尺)である。

建築遺構4(図版第16・上)　A－9・10区北部で検出されたピット15～18で，東西方向に並んでいる。柱間の寸法は3m(10尺)である。これらに組み合わさる他の柱穴は確認されていない。ピット17は土器溜2の下部に存在することから，この建築遺構は少なくとも近世初頭ないしはこれ以前の時期のものと推定される。

ピット20〔B－1区〕(第8図，図版第35)　B－1区のほぼ中央部で検出されている。径90×70cm，深さ約60cmの不整方形のピットで，底部に径約40cmの平坦な石が置かれている。さらにその上には，長さ23cm，幅15～17cm，厚さ10cmの角材2つが並置され，その両木口に板材を釘で打ちつけて2つを固定した状態で据えられている。柱の礎板の一種かと推測される。埋土は暗褐色の砂で，若干の布前のや土師質土器片が出土している。中世以目瓦ピットと推測されるが，これと組み合わさるピットは確認されていない。

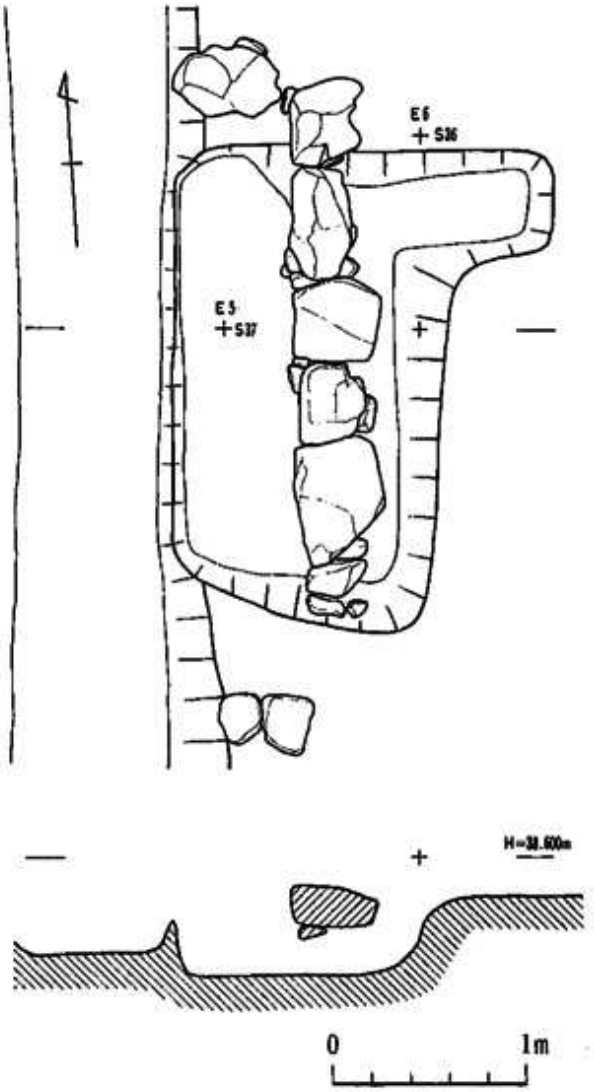


第8図　B－1区ピット20

第4節　列　石　遺　構

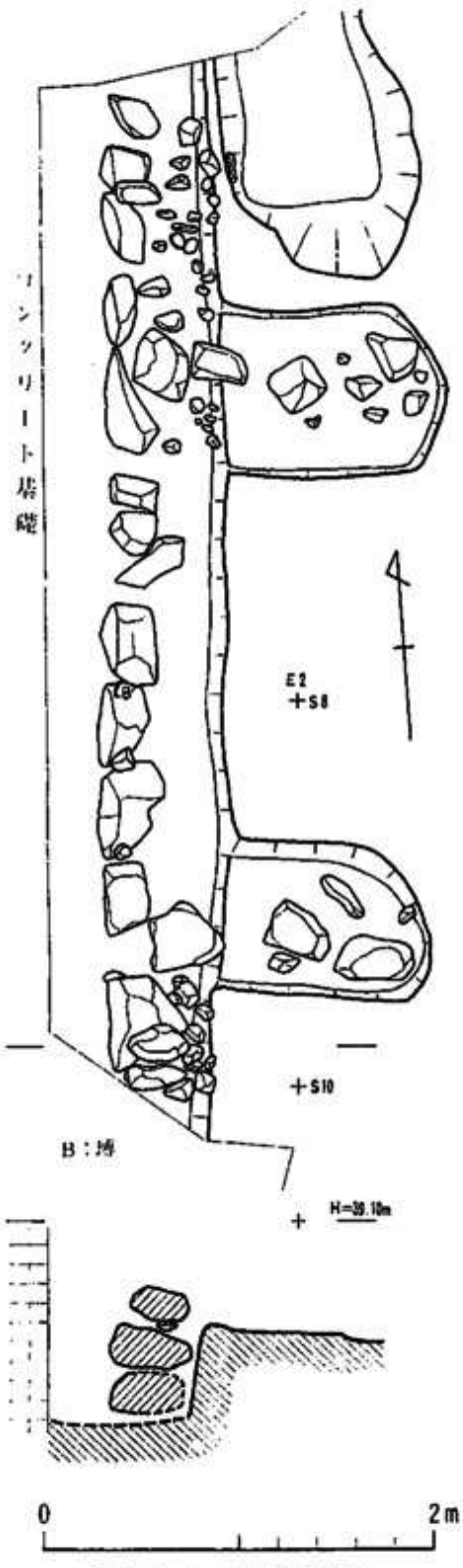
列石遺構1〔A－1区〕(図版第17・下左)　A－1区中央部暗赤褐色土層において，南北方向に長さ約3m(南端は調査区南壁により不明)，幅約1mの帯状に径20～40cm前後の円礫の分布が認められている。礫の上面はフラットな面ではない。さらに，この遺構の約1m西側には小円礫の石敷が検出されている。これらの遺構は層序からすれば，溝1廃絶以後かなりの期間をおいた時期に形成されたものとみられる。盛華院の東洞院大路に面した一画には，中世以降町屋の形成が知られており，あるいは町屋の建築物に関連する遺構かと推定される。

列石遺構2〔A－5区〕(第9図，図版第17・上左)　A－5区の東部に検出されたもので，南北方向長さ約2.8mにわたり，径40～60cmの大きな石5個が一列に並べられている。各石の西面はほぼ一直線にそろえられており，これらの石の間隙や下には径20cm前後の円礫がつめられている。北端の石の西北側には，南北方向の石面に対し直角方向に面をもつようさらに径約60cmの石1個が配されている。また，これと対向する約3m南の位置に径約20～30cmのやや平らな石2個が北面をあわせて配置されている。これらの状態からみれば，本来南北の内径約3mのコ字状の配置をもち，内側に各石の面をあわせた列石遺構とみられる。なお，南北方向の石列の下には，東北部に張り出しをもった約2.4×1.4mの大きさで深さ約40cmの長方形の掘り込みが認められる。この掘り込みは，溝1を切り込んでいる。



第9図　A－5区列石遺構2

列石遺構3〔A－11区〕(第10図，図版第17・下右)　A－11区西端部において，南北に長さ約5mにわたって，径約20～50cmの角礫を一列に連ねた遺構が検出されている礫は，各々西に面を合わせて並べられており，少なくとも三段積み重ねら



第10図　A一11区列石遺構3

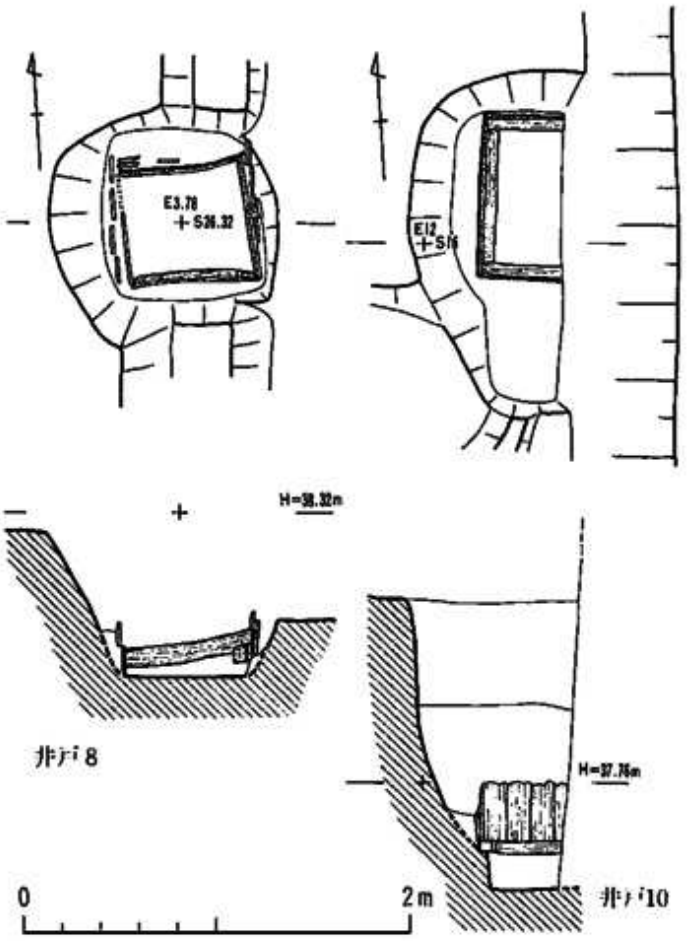
れていたものと推測される。礫の西面の線より約60cm東に列石の掘り方の肩が認められ，深さは少なくとも50cm以上とみられるが，遺構のすぐ西側にコンクリート基礎があるため詳細は不明である。列石の背後には，径10cm前後の円礫が裏込め石として用いられている。なお，この掘り方には南北2個所において東へ長さ約1m，幅約80cmの方形に近い張り出し部が認められ，各々内部に上面平坦な径30cm前後の角礫数個がみられる。この張り出し部は，柱穴および根石の可能性が強く，とすれば，この列石遺構部分はかなり大規模な建物の跡とも推測される。この列石遺構の西側は，コンクリート基礎と重複する形で暗青灰色粘質土を埋土とする南北方向に連なる落ち込みがみられ，あるいは溝の可能性が推測されることから，列石遺構は東洞院大路に直接面した位置に存在したと考えられる。袋華院は東洞院大路に面して西門をもっていたことが知られていることからすれば，あるいはその西門にあたる可能性も推測されるであろう。なお，この遺構は近世初頭頃の時期と推定される。

第5節　井　　戸

井戸はA区で10基，B区で6基，計16基が検出されている。井筒の構造によって大まかには，方形縦板組み井戸，円形石積み井戸，円形縦板組み井戸，円形漆喰井戸に分類される。

井戸10〔A一10区〕（第11図，第18図2，図版第16・下右）　一辺約1.8m，深さ約1.5mの方形の掘り方と推定され，井筒は北に偏して存在する。縦板組みの方形井戸で，長さ約80cm，径6cmの角材を組み合わせた横桟一段を底部近くに残している。側板は，幅10～15cm，厚さ2cmで，横桟より上部の残存長約30cm。西に6枚，北に4枚，南には5枚が認められる。井戸底は砂利層で，埋土中

より平安中期末～後期にかけての時期とみられる軒丸瓦や軒平瓦をはじめとして，緑釉土器・白磁・底部に赤色顔料の塗られた瓦質土器などが出土している。井戸の時期は平安中期末～後期と推定される。

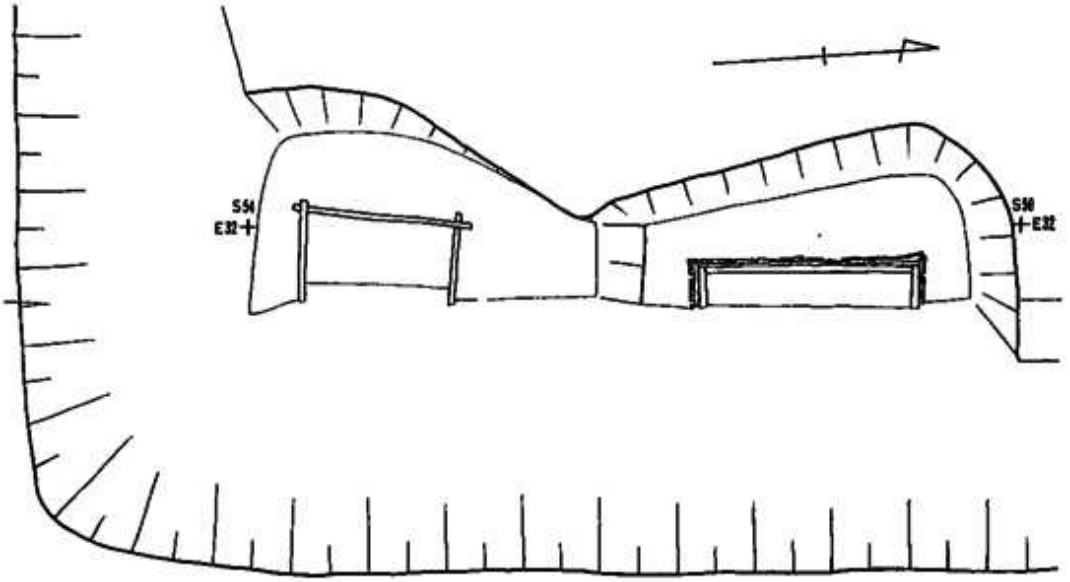


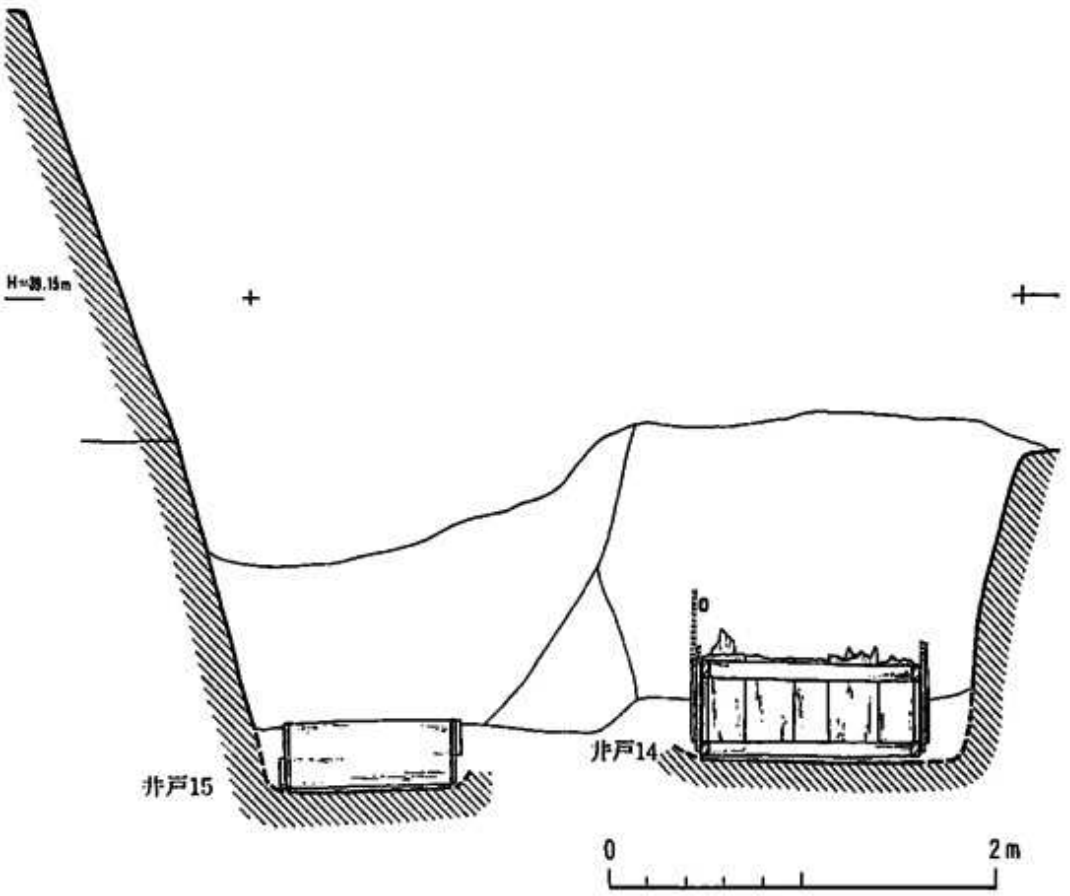
第11図　A－7区井戸8，A－10区井戸10

井戸8〔A－7区〕(第11図，第18図3，図版第18・下左)　一辺約1.2m，深さ約95cmの方形の掘り方をもつ。縦板組みの方形井戸で，長さ66cm，幅15cm，厚さ1cmの板材4枚を方形に組んだ横桟一段を底部に残している。側板は，幅10～15cm，厚さ約1cmで，西に4枚・北に2枚，東に4枚残され，東と北には側板の外にさらにあて板が認められる。側板のうち，西南と東北各コーナーのものは他より厚い約3cmの材が使われている。底部は砂利層で，埋土より布目瓦などが出土している。溝1を切り込んでつくられている。中世ないしはそれ以前の時期と推測される。

井戸14〔B－2区〕(第12図，第18図1，図版第16・中左)　一辺約2mの方形の掘り方と推測され，深さは約1.8m。縦板組みの方形井戸で，長さ約113cm，径8×約5cmの角材を方形に組んだ横桟が，底部より少なくとも三段認められる。内側各隅には，長さ33cm，径約3×4cmの角柱を用いて横桟を固定している。南西隅では，この角柱と側板との間に，上下2個所木楔を打ち込んでいる。側板は，残存長約60cm，幅約19～25cm，厚さ2.4cmで，西に5枚用いられ南北に各1枚認められる。厚さ約2cmのあて板が，西に11枚用いられており，北に2枚，南にも3枚認められる。井戸底は砂利層で，埋土より須恵器花瓶や磁器片などが出土している。井戸15に切られている。井戸築造の上限は平安期に求めることができるとみられる。

井戸15〔B－2区〕(第12図，図版第18・上右)　一辺2m以上の方形の掘り方かと推測され，深さは約1.8m。底部に長さ92cm，幅34cm，厚さ約3cmの板材を方形に組み合わせた木枠が認められる(第19図3)。本来はこの木枠の上部に石積みがなされて井筒を構成していたものでは



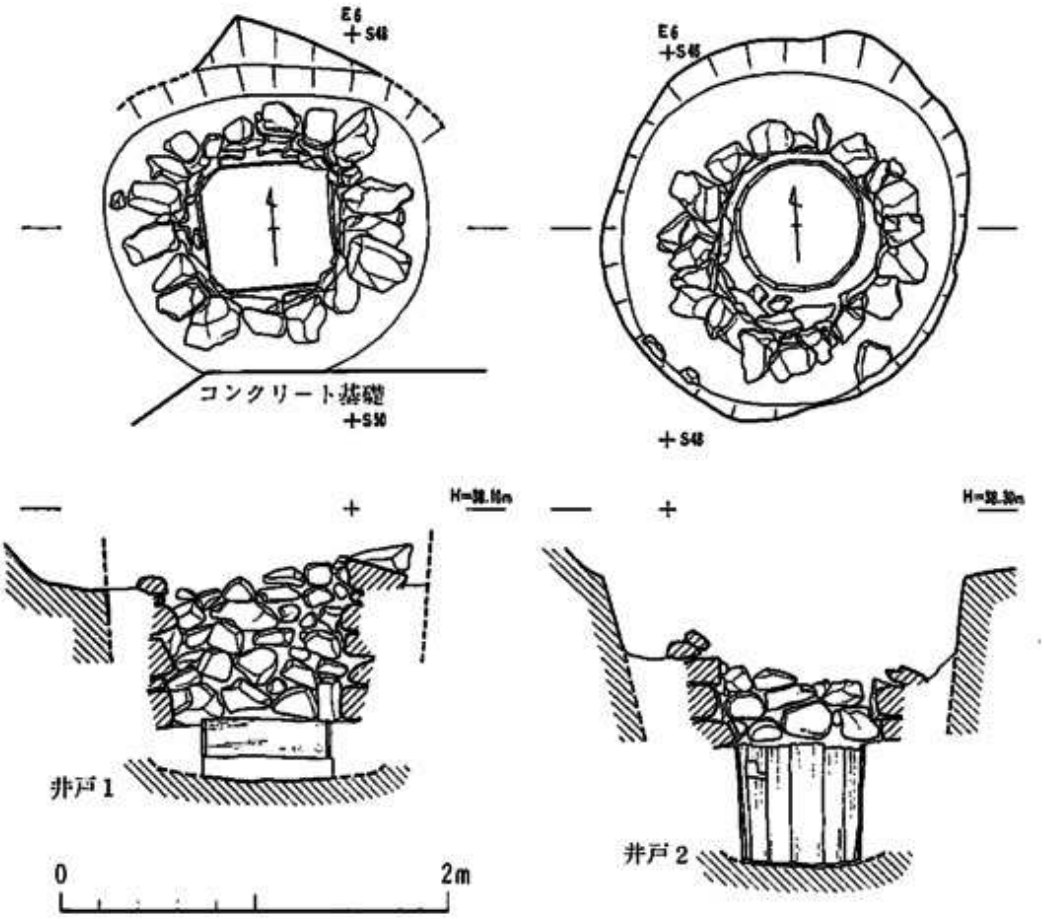


第12図　B－2区井戸15・14

ないかと推測される。井戸底は砂利層である。井戸14を切り込んでつくられている。

井戸1〔A－1区〕(第13図，図版第19・上左)　後世の削平を受けて掘り方は明瞭ではないが，推定径約2m，深さ1.5m以上の円形の掘り方とみられる。底部に長さ65cm，幅18cm，厚さ2cmの板材4枚を方形に組み合わせ(第19図4)，この木枠の上端と同レベルの位置から，内径約80cmの円筒状に径約10～30cmの礫を積み上げて井筒としている。底面は砂利層である。井戸上面より土師質小皿が多数出土している。井戸廃絶の下限は近世初頭とみられ，それを若干さかのぼる時期のものと推定される。

井戸2〔A－1・2区〕(第13図，図版第19・上左)　径1.9m，深さ1.5mの円形の掘り方。底部には，長さ約55cm，幅10～15cm前後，厚さ1.5～2cmの縦板16枚を内径約60cmの円筒形に組み合わせた桶状のものを据え，その上端とほぼ同一レベルの位置から内径約80cmの円筒状に径約20～30cmの礫を積み上げて井筒としている。底部は砂礫層である。井戸上面より土師質小皿多数が出土している。井戸の廃絶の下限は近世初頭頃に求められ，それを若干さかのぼる時期のものかと推定される。

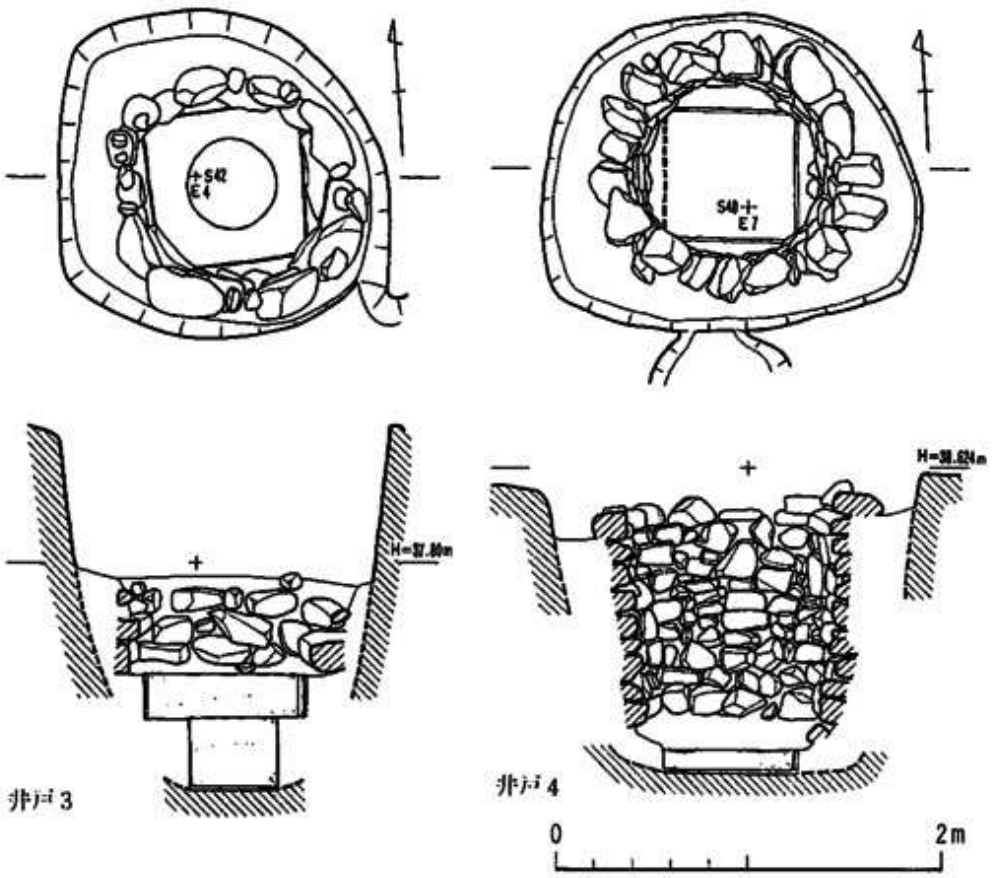


第13図　A－1区井戸1・2

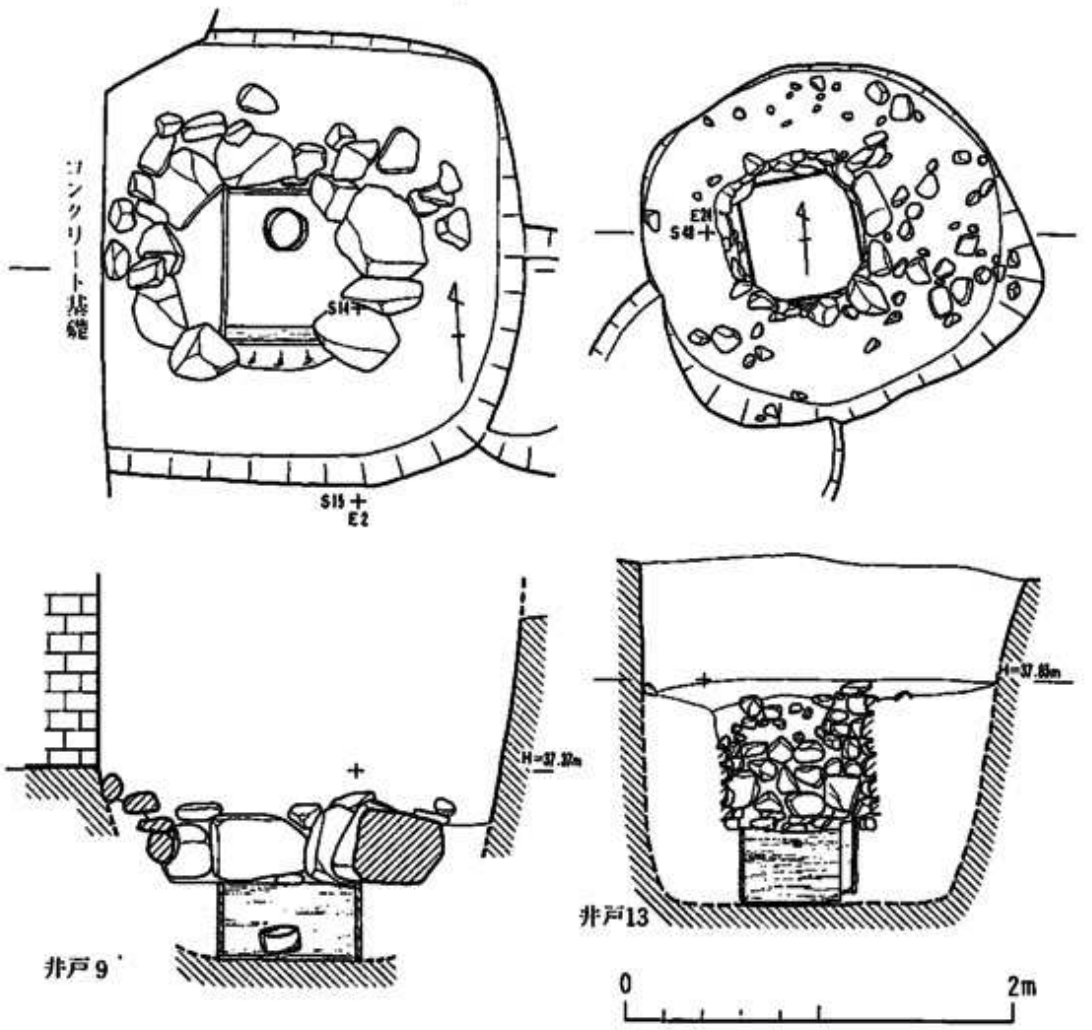
井戸3〔A－3区〕(第14図，図版第19・中左)　径約1.7m，深さ約1.9mの不整円形の掘り方をもつ。底部には径46cm，高さ36cm，厚さ約4cmのくり抜きの曲物を据え，その上端と同じレベル上に下端がくるように，長さ80cm，幅約25cm，厚さ1cmの板材4枚を方形に組み合わせた木枠(第20図1)を設け，さらにこの木枠上端とほぼ同一レベルから，内径約90cmの円筒状に径約20～30cmの礫を積み上げて井筒を構築している。石積みの間隙には径約10cm程度の礫がつめられている。井戸底は砂利層となっている。井戸築造の上限は，溝1を切り込んでいることなどから，室町期頃に推定することができよう。

井戸4〔A－3・4区〕(第14図，図版第19・下左)　径約1.8m，深さ約1.5mの不整円形の掘り方をもつ。底部は，長さ約65cm，幅15cm，厚さ約1cmの板材4枚(西側の板は腐っている)を方形に組み合わせ(第20図3)その木枠上端より約10～15cm上から，内径約90cmで上部がやや広がる円筒状に径約10～20cm前後の礫を積み上げて井筒としている。底面は砂利層である。埋土中より土師質土器や常滑焼破片などが出土している。井戸築造の上限は室町期に求めることができよう。

井戸9〔A－9区〕(第15図，図版第20・上右)　一辺約2.3m，深さ約2mの方形の掘り方をもつ。底部に，長さ85cm，幅32cm，厚さ2cmの板材4枚を方形に組み合わせ(第19図1)，その



第14図　A－3区井戸3，A－3・4区井戸4

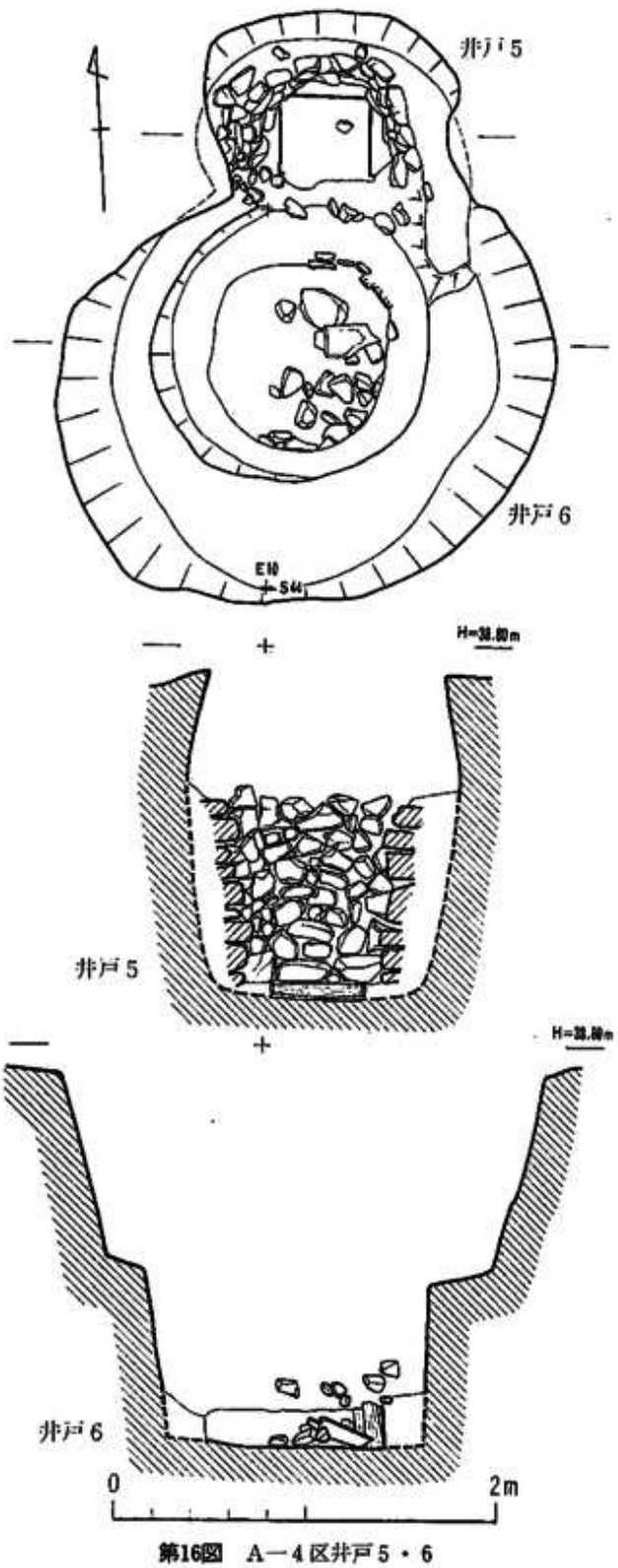


第15図　A－9区井戸9，B－1区井戸13

木枠上端とほぼ同じレベルから，内径約80cmの円筒状に径40～50cmの大きな礫を積んで井筒を構築している。大きな礫の間隙や裏込めには20cm前後の石が用いられている。底部は礫層となっている。埋土の暗黒青色バラス層や細砂層から木製品が多く出土しており，底部には，曲物の水桶が認められた。井戸築造の上限は近世初頭頃におくことができよう。

井戸13〔B－1区〕(第15図，図版第20・中左)　径1.8m，深さ約1.8mの不整円形の掘り方。底部に長さ62cm，幅39cm，厚さ1.5cmの板材4枚を方形に組み(第20図2)，この木枠上端と同レベルの位置から，内径約70cmの円筒状に径10～20cm前後の礫を積み上げて井筒を構築している。井戸底面は砂利層となっている。埋土より緑釉土器などが出土している。集石遺構11を切り込んで造られていることから，築造時期の上限は中世末頃におくことができよう。

井戸5〔A－4区〕(第16図，図版第20・中右)　径約1.3m，深さ約1.7mの不整円形の掘り方で，断面はやや袋状を呈す。底部に，長さ約48cm，幅約8cm，厚さ約2cmの板材4枚(南側の

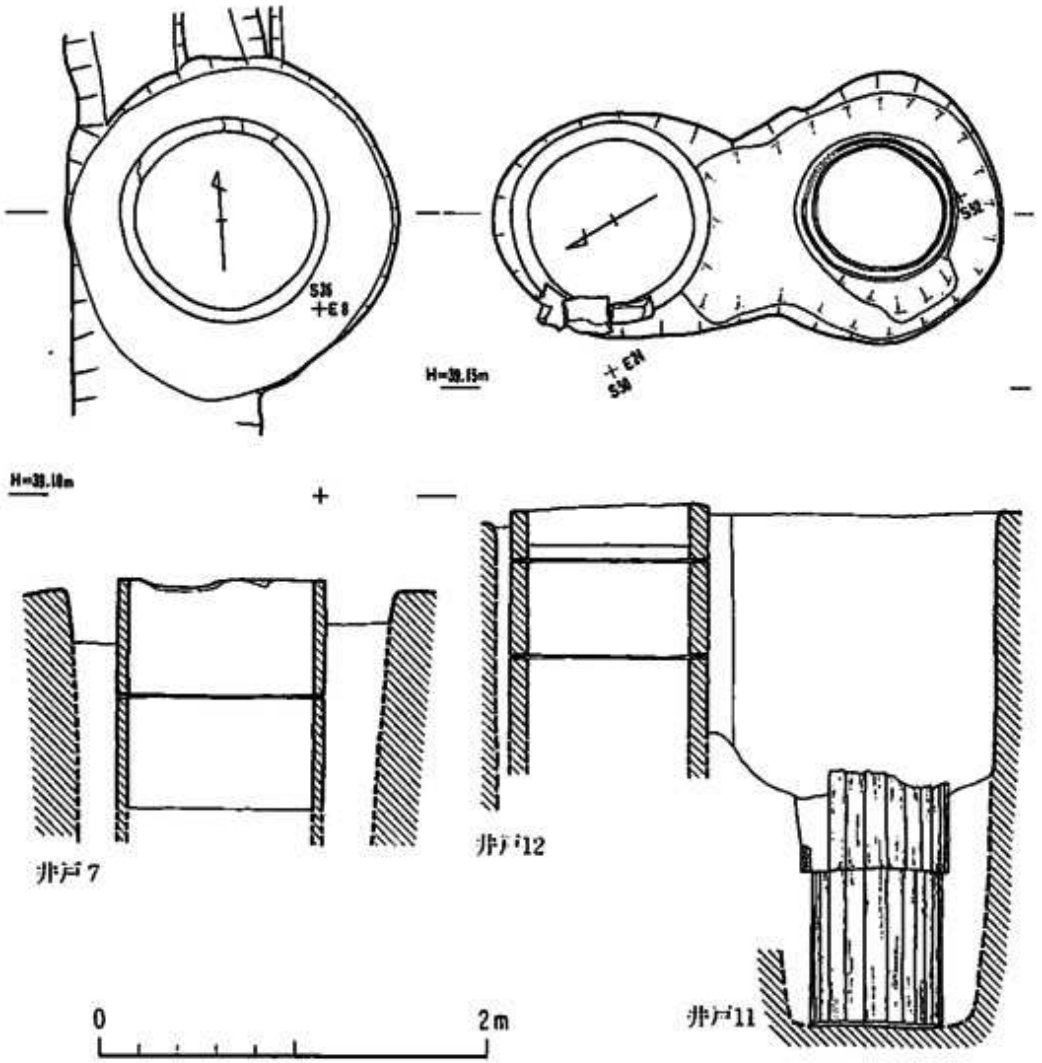


第16図　A－4区井戸5・6

板は腐っている）を方形に組み合わせ(第19図2)，この木枠の上端と同レベルの位置から，内径約70～80cmの上部がやや開く円筒状に，径10～30cm前後の礫を積み上げて井筒としている。石積みの下底部の礫は比較的大きなものを使用している。井戸底は砂礫層となっている。井戸6によって切られており，井戸6は集石遺構2を切り込んでいることから，井戸5の築造時期上限は中世末～近世初頭におくことができよう。

井戸6〔A－4区〕(第16図，図版第20・下左)　径2.5mの円形の掘り方で，上端より約1.1mの深さよりさらに径1.5mの円形の掘り込みをもち，二段掘りとなっている。深さ約2m。底部には，残存長25cm，幅14cm前後，厚さ1cmの縦板を円筒形に組み合わせて井筒としている。推定内径約90cm。井筒底部は砂利層で近世初頭頃とみられる丸瓦や平瓦片，小円礫が認められ，また埋土中より土師質小皿，陶器片などが出土している。井戸5を切り込んでつくられている。築造時期の上限は近世初頭頃に求めることができよう。

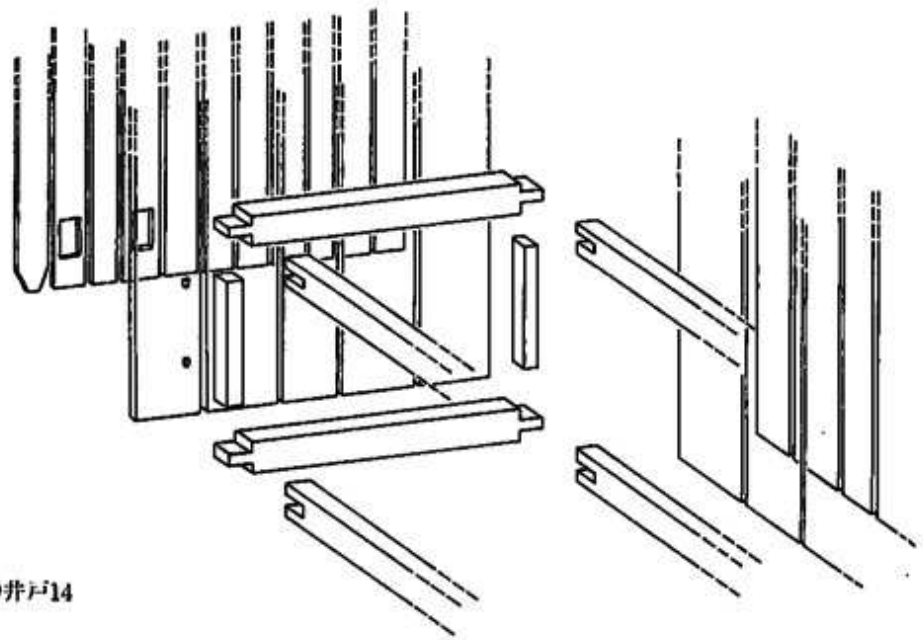
井戸11〔B－1区〕(第17図，図版第21・上左)　径1.3m，深さ約2.6mの円形の掘り方内に，くり抜き円筒桶の井筒が底部より二段残っている。下段の桶は内径64cm，長さ約89cm，幅11～15cm，厚



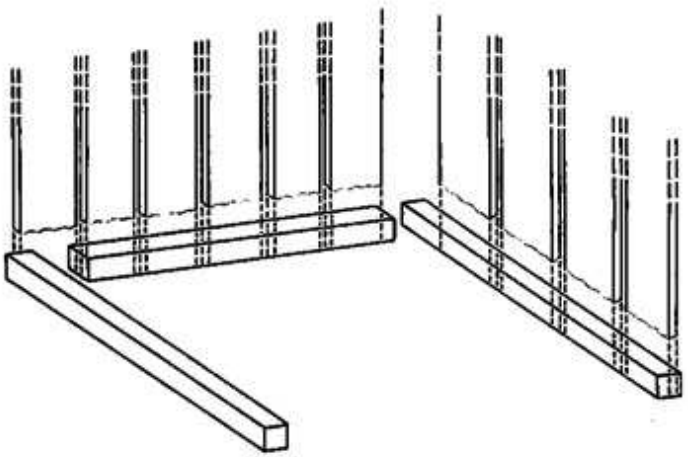
第17図　A－6区井戸7，B－1区井戸12・11

さ約3cmの縦板14枚よりつくられている。上段の桶は，内径74cm，長さ50cm以上，幅10～20cm，厚さ約2～3cmの縦板を組み合わせてつくられており，上下の桶の下端と上端はほぼ同一レベルにおかれている。掘り方埋土は砂利層で，井筒底面には粘土が貼られている。井筒内底部近くより木製の柄杓・鉄器片・酒盃などが出土し，その上部より近世の瓦や煉瓦が検出されている。この井戸は，明治35年中京郵便局が建てられる時点ではまだ開口していたものとみられる。井戸12によってこの井戸は切られている。近世後半期のものと推定される。

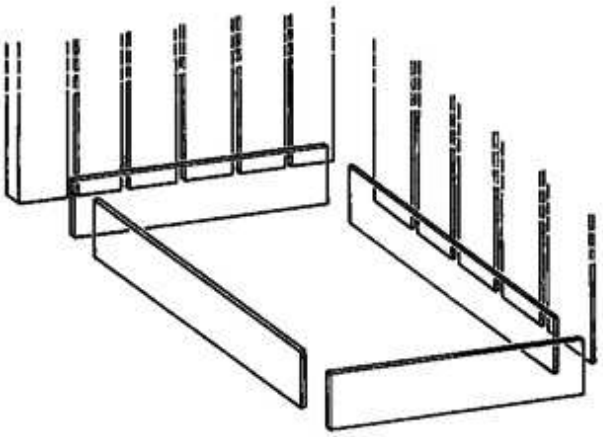
井戸12〔B－1区〕(第17図，図版第21・下右)　径1.2mの円形の掘り方で，深さは1.1m以上。井筒は内径85cm，深さ約50cm，厚さ約8cmの漆喰円筒を少なくとも三段積み上げてつくられている。内部には煉瓦が充満しており，明治35年に中京郵便局が造られる際にまだ開口していたものとみられる。時期は近世末と推定される。



(1)井戸14

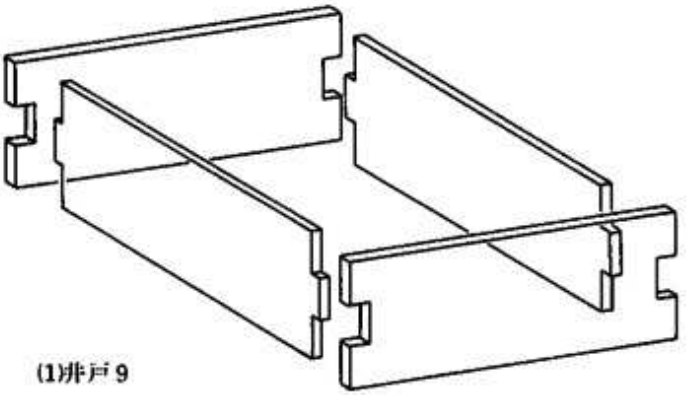


(2)井戸10

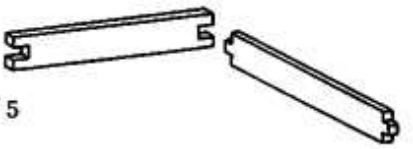


(3)井戸8

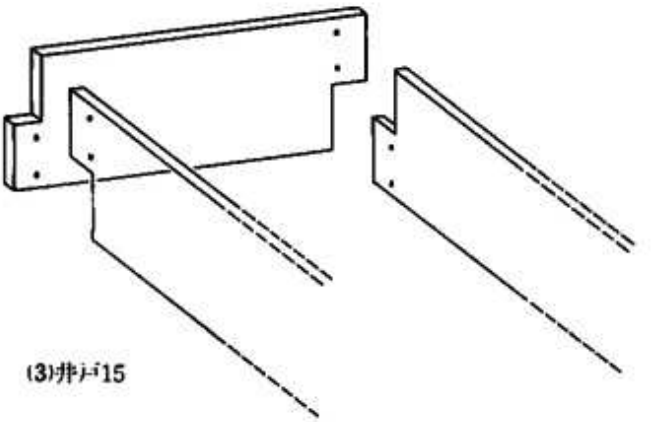
第18図　井戸14・10・8下底部木枠構造模式図



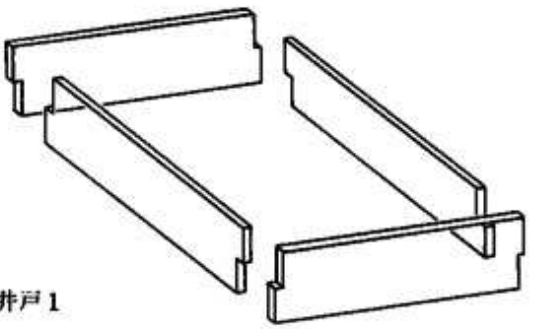
(1)井戸9



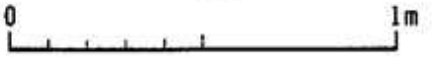
(2)井戸5



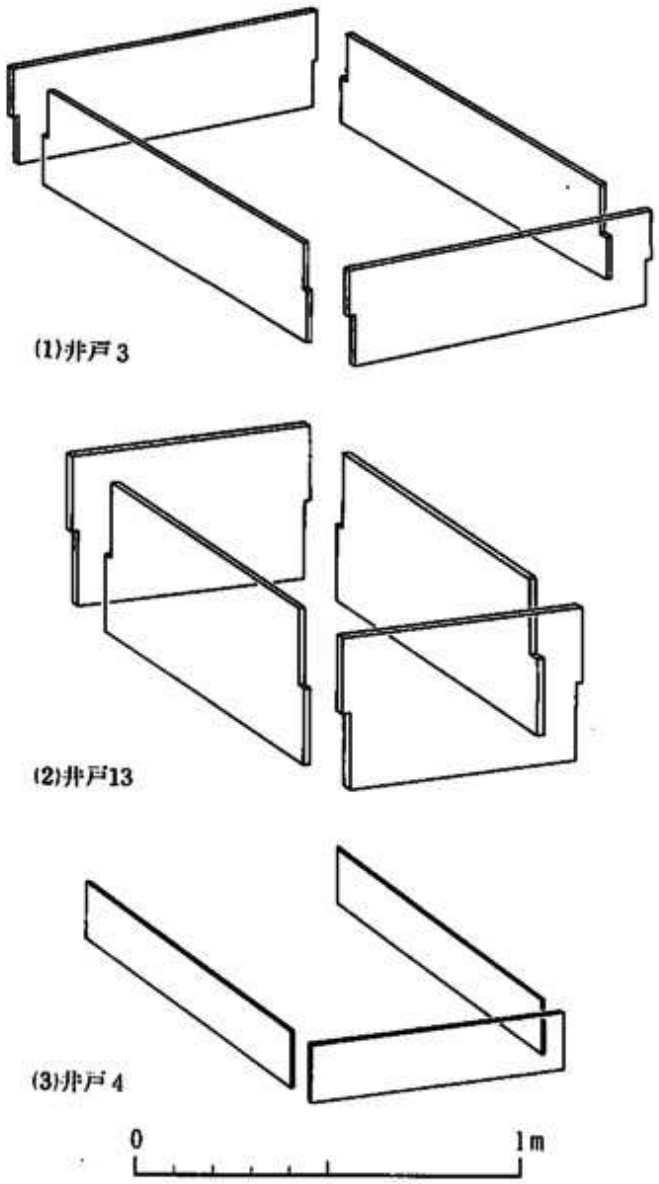
(3)井戸15



(4)井戸1



第19図　井戸9・5・15・1下底部木枠構造模式図



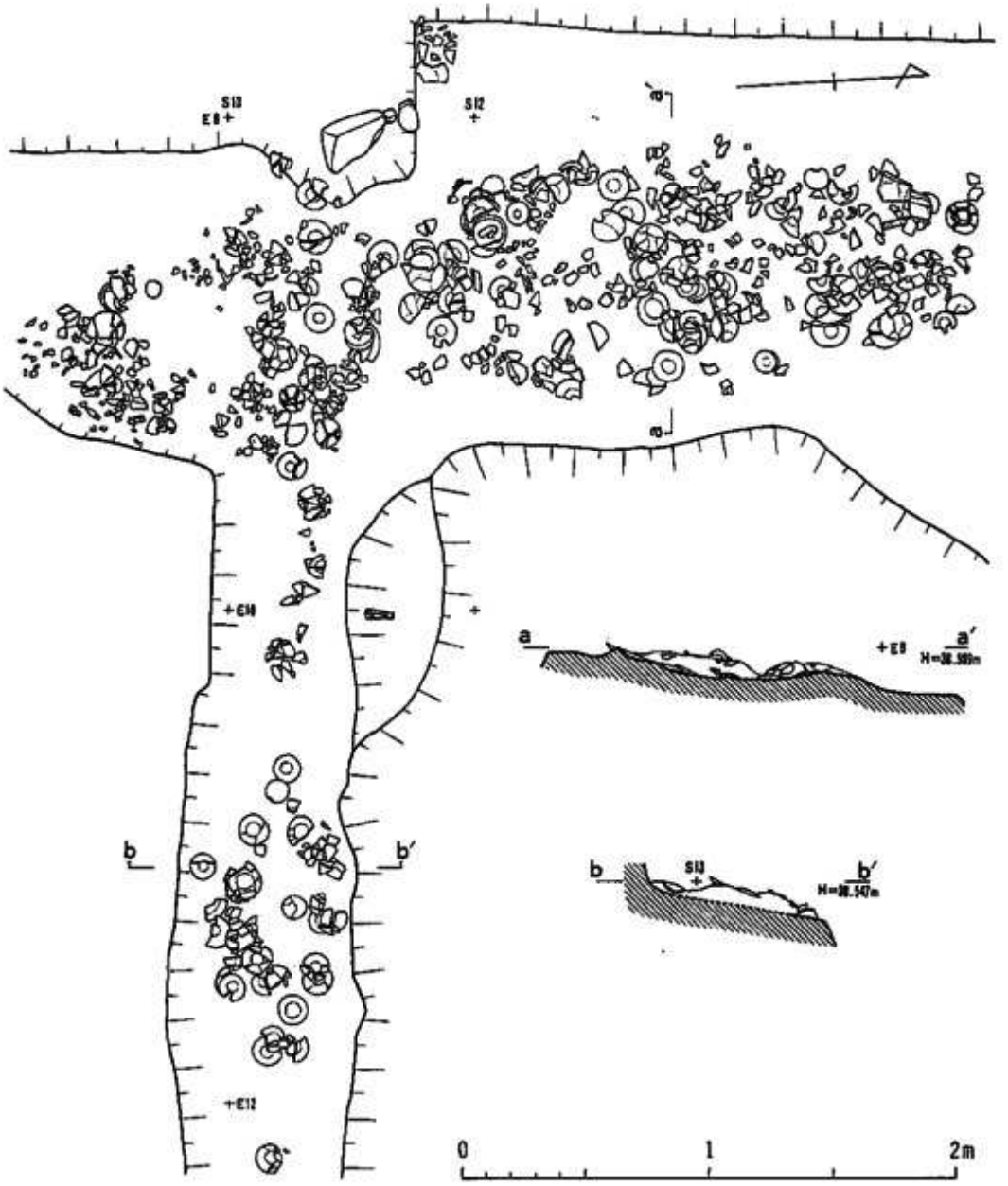
第20図　井戸3・13・4下底部木枠構造模式図

井戸7〔A－6区〕(第17図，図版第21・下左)　径1.7m，深さ1.1m以上の円形の掘り方をもち，井筒は内径92cm，深さ60cm，厚さ8cmの漆喰円筒を少なくとも二段以上積み重ねてつくられている。井筒内には上端より90cmの深さに，47×42cmの大きさで深さ32cm，厚さ1cmの木箱がみられ，内部には近世の瓦・染付・鉄釘などが流入していた。時期は近世末とみられる。

井戸16〔B－2区〕　B－2区北端中央部の砂礫層上面に，人頭大の円礫数個が認められたが，その上部には円形に近い形で暗赤褐色土がみられ，あるいは井戸の残欠の可能性がある。

第6節　土　器　溜（第21図，図版第22）

A—10区北半部にまとまって検出されている。分布状態から3グループに区別され，西側グループ（土器溜2）は，長さ約4m，幅約1mの帯状の堆積をもつ。明確な掘り方はもたない。多量の土師質皿形土器を主体としている。中央グループ（土器溜1）は土壙9の掘り方とほぼ重複し，その上部に分布をもつ。やはり土師質皿形土器を主体とし，塩壺・天目茶碗・漆器碗・



第21図　A—10区土器溜2・3

銅銭などがみられ，埋土にはカーボン・木質が多量に含まれている。東側グループは，長さ約3m，幅約50cmの帯状に分布し，これも明確な掘り方をもたないが，土器溜の下部には地山を掘り込んだ溝状の落ち込みが認められている。土師質皿形土器のみからなり，西側グループのものに比してやや大形品からなる。これらの土器溜は，いずれも近世初頭を中心とする時期のものと推定される。これらの他に，A－1・2区南部，A－5・6区南部，A－7区溝1上層，A－7区東南部などで暗赤褐色土層中において，多量の土師質皿形土器を主体とする土器溜が検出されている。そのうち，A－5・6区南部とA－7区東南部のものは，いわゆる「へそ皿」を多量に含んでいる。いずれの土器溜も明確な掘り方をもたず，各期の生活面に直接まとめて廃棄されたものとみられる。これらの多量の土師質皿形土器の中には，煤の付着した灯明皿と機能の限定できるものがかなり含まれており，曼殊院における諸種の仏事に関して使用され，しかも，完形品が多量にみられることからすれば，1回の仏事に使用されるごとに廃棄されたものである可能性も推測されよう。

第7節　瓦　　溜

A－8・10区，B－1・2区で合計6個所の近世の瓦溜が認められた。大半が元治元年(1864年)の大火によるものとみられる焼土層を切り込んでおり，さらに二次的に焼けた瓦や焼土などを含んでいることから，それ以後の整地に伴うものと考えられる。ただ瓦溜3については，出土瓦がやや古相を帯び，他のものより若干時期がさかのぼる可能性があろう。近世末期を主体とする巴文・菊花文などの軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などのほか五輪石や石臼なども含まれている。

第8節　土　　壙

土壙1〔A－2区〕(図版第23・上)　径約2.7m，深さ約1.5mの円形の土壙。壙の西壁は，三段の階段状に掘り込まれている。埋土上層は暗赤褐色土，下層は暗青灰色粘質土で，陶器大甕・須恵器片・緑釉土器片・木片などが検出されている。あるいは素掘りの井戸の可能性も推測される。

土壙2〔A－3・4区〕(図版第24・上)　長径2.5m，短径1.6m，深さ約40cmの不整な長円形の土壙。埋土は暗赤褐土＋赤褐色砂＋明褐色粘質土となっている。

土壙4〔A－6区〕(図版第25・上)　径1.8×1.1m，深さ約30cmのやや長方形の土壙。埋土は暗赤褐色土で，西側より土師質小皿多数が検出されている。底部東南コーナーに小ピットが認められる。

土壙5〔A－6区〕　径1.6×1.4m，深さ約20cmの方形の土壙。底部に小ピットが認められる。埋土は赤褐色土。

土壙6〔A－6・8区〕(図版第24・下)　長径3.2m，短径1.8m，深さ約50cmの楕円形の土壙。

土壙7〔A－8区〕(図版第29・下)　径1.8×1.6m，深さ約90cmの方形の土壙。底面に，長さ1.26m，径10cmの自然木が横たわって認められた。埋土は暗赤褐色土で土師質土器片など若干が認められた。

土壙8〔A－7・8区〕　長径推定2.4m，短径1.6m，深さ約40cmの長方形の土壙。埋土は暗赤褐色粘質土で，壙底面には河原石が敷かれた状態で検出されている。

土壙9〔A－10区〕(図版第23・下)　長径約3.6m，短径約1.2m，深さ約70cmの不整な長円形の掘り込み。埋土は青灰色粘質土で，カーボンや木片・竹根などが含まれている。この掘り込みの上部に，土師質小皿を主体とした土器溜1が形成されている。

土壙10〔B－1区〕　径約1.5m，深さ約2.2mの円形の土壙で，瓦溜6と同様の江戸時代末期とみられる瓦などが充満している。瓦溜6との切り合い関係からみれば，この遺構が新しく，元治元年の大火以降明治35年までの間につくられた廃棄壙とみられる。

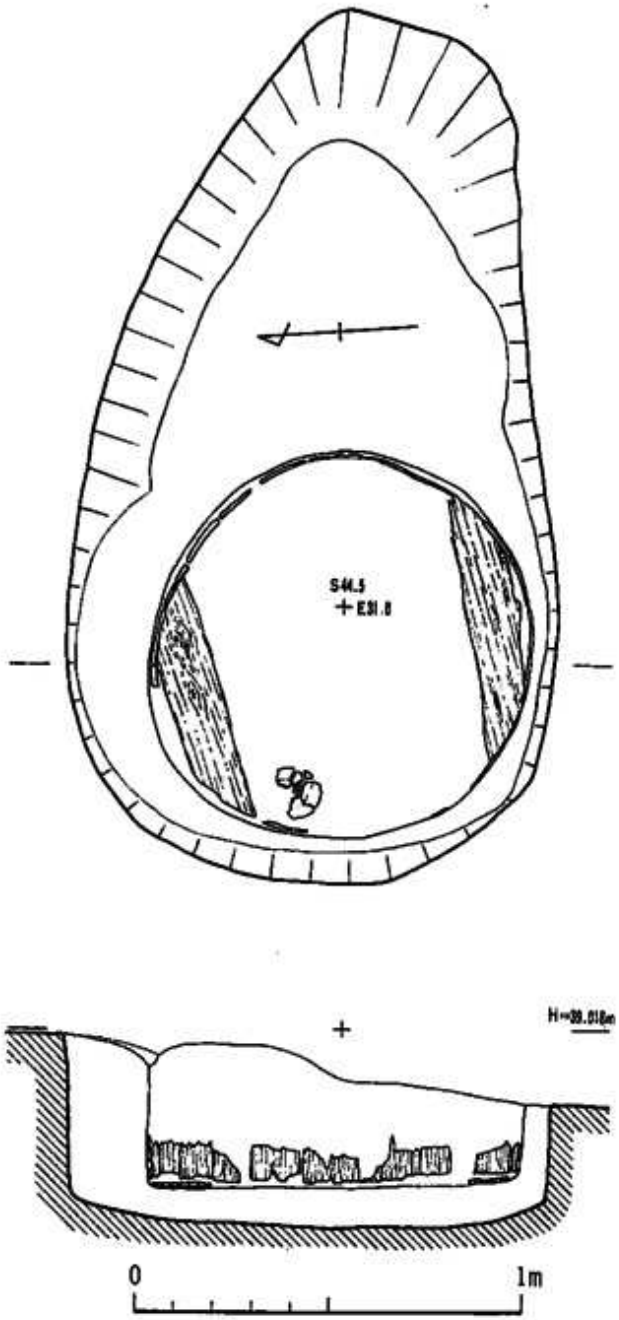
土壙11〔B－1区〕(図版第26・上)　長径1.6m，短径80cm，深さ約50cmの箱状の土壙。内部より完形品を含む土師質皿形土器多数のほか塩壺蓋・土師質小壺・木片・カーボンなどが充満して検出され，近世初頭の土器廃棄壙とみられる。なお，土壙底面北部に河原石1個が埋置されて認められた。

土壙12〔B－1区〕　推定径約2×2m，深さ約30cmの不整形をした浅い掘り込みである。上層は黒色腐蝕土，下層は青灰色土が堆積し，土釜・土師質皿形土器などが認められた。近世に属する一種のゴミ捨て壙とみられる。

土壙14〔B－3・4区〕(図版第25・下)　長径1.2m，短径1m，深さ約90cmの方形プランの土壙。青灰褐色の砂が充満し，この埋砂中より平安後期の軒平瓦などが若干出土している。この青灰褐色の砂は，土壙掘り込み面と同一レベルの周辺部には存在せず，また，砂以外の有機質土も壙内に認められない。従って意識的に砂で土壙が埋められた可能性も推測される。なお，このような土壙の性格については明らかでない。

土壙15〔B－4区〕(図版第26・下)　径約1.8m，深さ約1.3mのほぼ垂直に掘り込まれた円形の土壙。埋土の上層は暗赤褐色土で，土師質皿形土器多数のほか，塩壺・巴文軒丸瓦・「永楽通宝」のほか銅銭1枚，などが出土した。下層は青灰色土や暗黄褐色土となり，土師質小皿多数のほか，塩壺・陶磁器片・瓦・埦・箸・木片・高杯脚などが検出されている。概して土師質小皿は上層より，また埦は下層よりまとまった形で出土しており，そうした出土状況は，遺物の投棄が一時期にではなく，数度にわたってなされたことを推測させるものである。近世初頭における一種の廃棄壙とみられる。

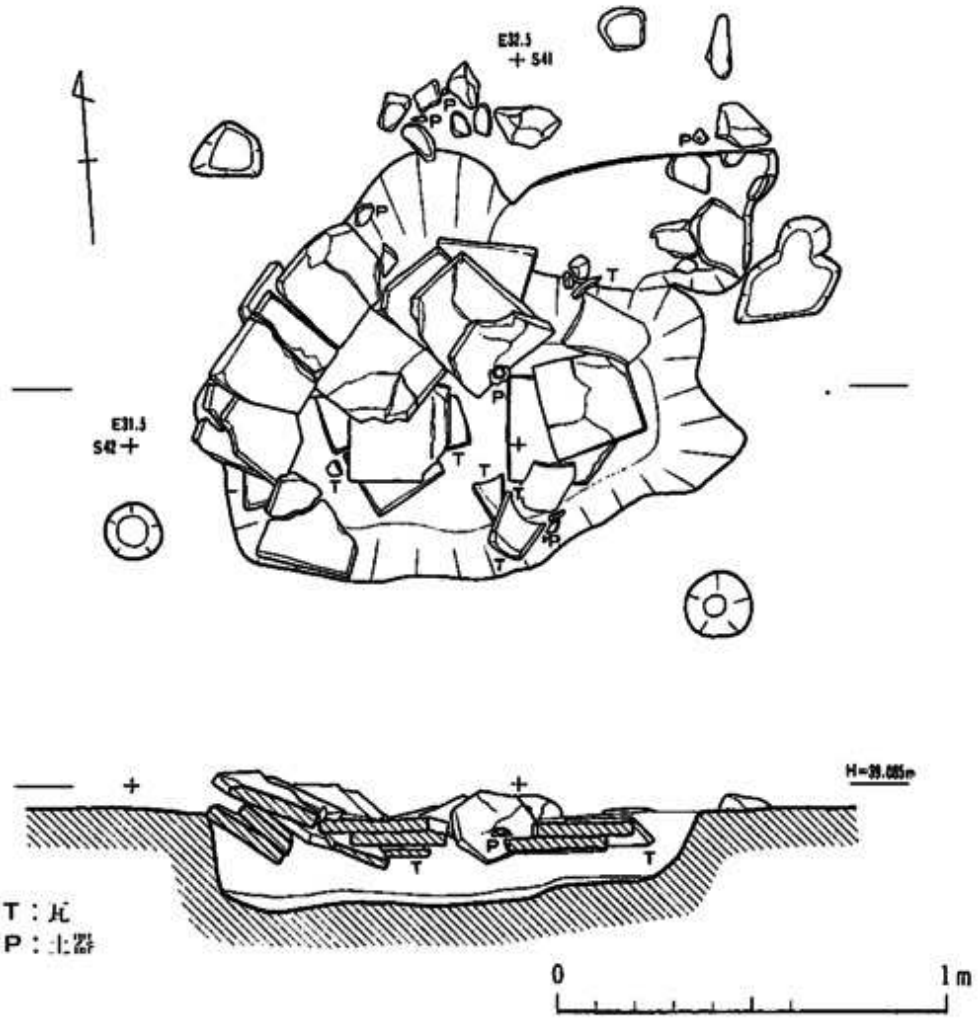
土壙19〔B－4区〕(第22図，図版第27)　径125cm，深さ約50cmの円形の掘り方の底部に盤状の桶が据え付けられている。この「桶」は，径95cm，残存の深さ約15cmで，幅12cm前後，厚さ約1cmの板を円形に組み合わせて側板とし，同じく数枚の板材を組み合わせて底板としている。暗赤褐色土の埋土にはカーボンが多く含まれ，絵付大皿・瓦・埦などが検出され(図版第27・下左)，さらに「桶」底面より土師質小皿が出土している(図版第27・上)。側板の状況から



第22図　B－4区土壙19

も推測されるように，上壙上面は後世の攪乱により削平されたとみられ，本来の上部構造は定かではない。ただ周辺に漆喰片が若干認められたことを重視するとすれば，いわゆる「木壺」に形態的には類したものかとも推測される。時期は近世でも後半期であろうかとみられる。

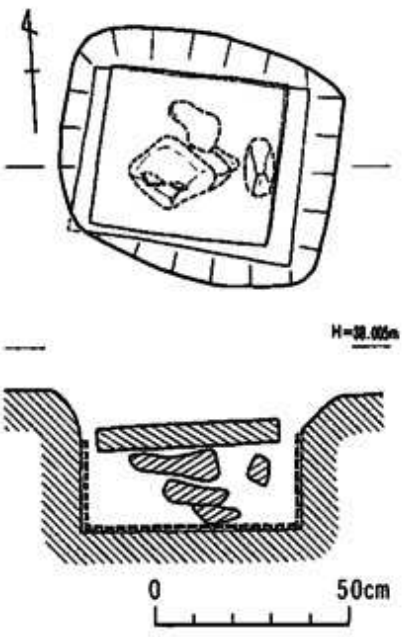
土壙20〔B－4区〕（第23図，図版第28）　長径1.3m，短径約1mの不整長円形の土壙。深さ約20cm前後で底部は浅い皿状を呈す。内部に塼の集積が認められる。塼は少なくとも4枚重ねられたものが1単位をなし，この単位が壙の上端に沿ってほぼ円形に配置され中心部にも置かれている。本来，4枚1組で少なくとも6単位配置されていたものと推測される。塼の大きさは，径約24cm，厚さ約3cm前後で規格性が認められるものである。この塼の集積の間隙には，平瓦および輪違が認められる。埋土は青灰色土・黄赤褐色土で土師質土器片や片口・おろし皿などの陶器片・カーボンが含まれている。なお，土壙の周囲には4個所ピットがみられ，そのうち南側の2つのピットは，各々径約15cm，深さ約20cmと6cmで，その位置からすればあるいはこの土壙と関係するものかと推測される。遺構の性格については，塼の出土状況からすれば，単に塼が廃棄されたものではなく，意図的に置かれたものとみられるが，具体的な内容は明らかではない。このような遺構の類例も従来知られてはいないが，塼の意図的な埋置状況と，またこれに地上標式としての機能を併わせ認められるとすれば，集石遺構と類似した性格，即ち一種の墳墓の可能性も推測されるであろう。時期は，桃山期ないしは若干これをさかのぼる頃かと推定される。



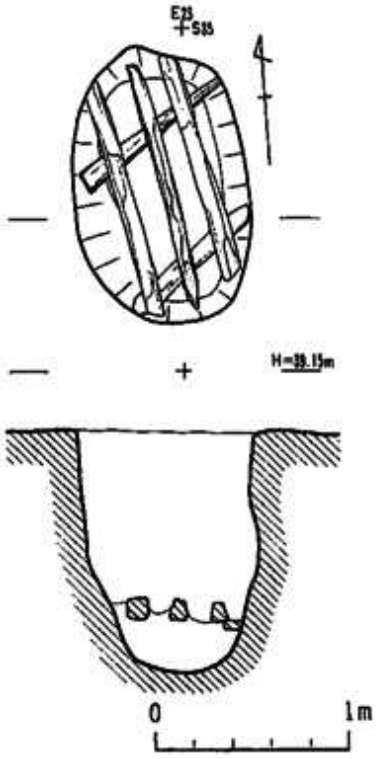
第23図　B－4区土壙20

土壙21〔B－6区〕(第24図，図版第36・下左)　径70×60cm，深さ35cmの方形の土壙。壙の上面を塞ぐ形で1枚の埒(44×42cm，厚さ5cm)が置かれ，その下には土器片や河原石4個が存在した。壙の底面や側面の一部には板状に木質が残存しており，本来木箱様のものであったと推測される。従って，土壙はこの木箱様のものを埋納するためにその大きさに合わせて掘られたものであり，埒はその蓋として機能したものかとみられる。内部には土器片や河原石のほかに遺物は認められていない。この遺構の性格については定かでないが，"埒"が蓋であり，かつ地上標式の機能を果たしていたとするならば，それを"集石"におきかえれば構造上の類似からは集石遺構12と同様の性格，すなわち一種の墳墓の可能性を考えることもできよう。なお，時期は中世末～近世初頭頃と推測されよう。

土壙22〔B－5区〕(第25図，図版第29・上)　長径約1.5m，短径約60cm，深さ約1mの長円形土壙で，断面袋状を呈す。壙内は，こぶし大から径20～30cmの河原石を主とする礫で底部近



第24図　B－6区土壙21



第25図　B－5区土壙22

くまでぎっしり閉塞され，下部になるほど礫は大きくなっている。礫の間隙に土師質小皿片・磁器片・瓦片・塼などが散在して認められた。底部近くには，北と南側には東西やや斜方向に2本木材がわたされ，その上に南北方向に3本の木材が平行して置かれて検出された。これらの木材は南北方向の真中の1本が丸太材，東西方向北側の1本が枘穴のみられる角材(柱材か)，その他はかなり厚い板材とみられる。各々の径・幅は約10cm前後で，長さは南北方向の材が約60cm，東西方向のものが約40cmで，いずれも廃材を利用して壙内の大きさぎりぎりに寸法を切断して用いたものとみられる。この壙内下部に縦・横にわたされた「木組」より下層は，底部に至るまで砂混りの暗青灰色土となり，土器質土器小片やカーボンが若干含まれていた。なお壙上層の礫は，「木組」直上のものが概して大きく，あるいはこれを押さえるために置かれたものともみられる。土壙の時期は，中世末～近世初頭頃かと推測されるが，性格については類例をみず，明らかではない。

以上のほかに，A区・B区とも多数の土壙や不明確な落ち込みが検出されているが，その性格を明らかにし得るものはみられない。

第9節　集　石　遺　構

こぶし大の円礫を集積した遺構で，A－2・4・6区およびB－1・5区にまとまって分布している。これらの遺構は，後世の掘り込みや攪乱によって保存状態は必ずしも良好とはいえ

ないが，最もよく旧状を保持しているとみられるB－5区の遺構についてまず記す。

集石遺構12(第26図，図版第30，図版第31)　集石部は径70×50cmの大きさで，やや楕円形である。こぶし大の集石部の下部には，径94×62cmの楕円形の掘り方を有し，その下底部は32×32cmの方形を呈している。深さは約45cm。掘り方上面の集石部以下の埋土は，暗赤褐色粘質土で，掘り方下半部は砂混暗赤褐色土となっている。この砂混暗赤褐色土上面から銅銭2枚および同土層中より木の実が検出されている。なお，掘り方底部には比較的大きな河原石2個が認められている。

集石遺構13(第26図，図版第30，図版第32・左)　約2.5×1.5mの範囲にこぶし大の円礫の分布をみ，その下部に約2.5×1.5mの不整な長方形で浅い皿状の落ち込みがみられる。最深部で約30cmをはかり，下面にまで円礫が認められる。埋土は暗赤褐色土で，土釜や剣頭文軒平瓦・土師質土器片などが散乱した状態で検出されている。土釜片は同一個体とみられるものがかなり認められる。

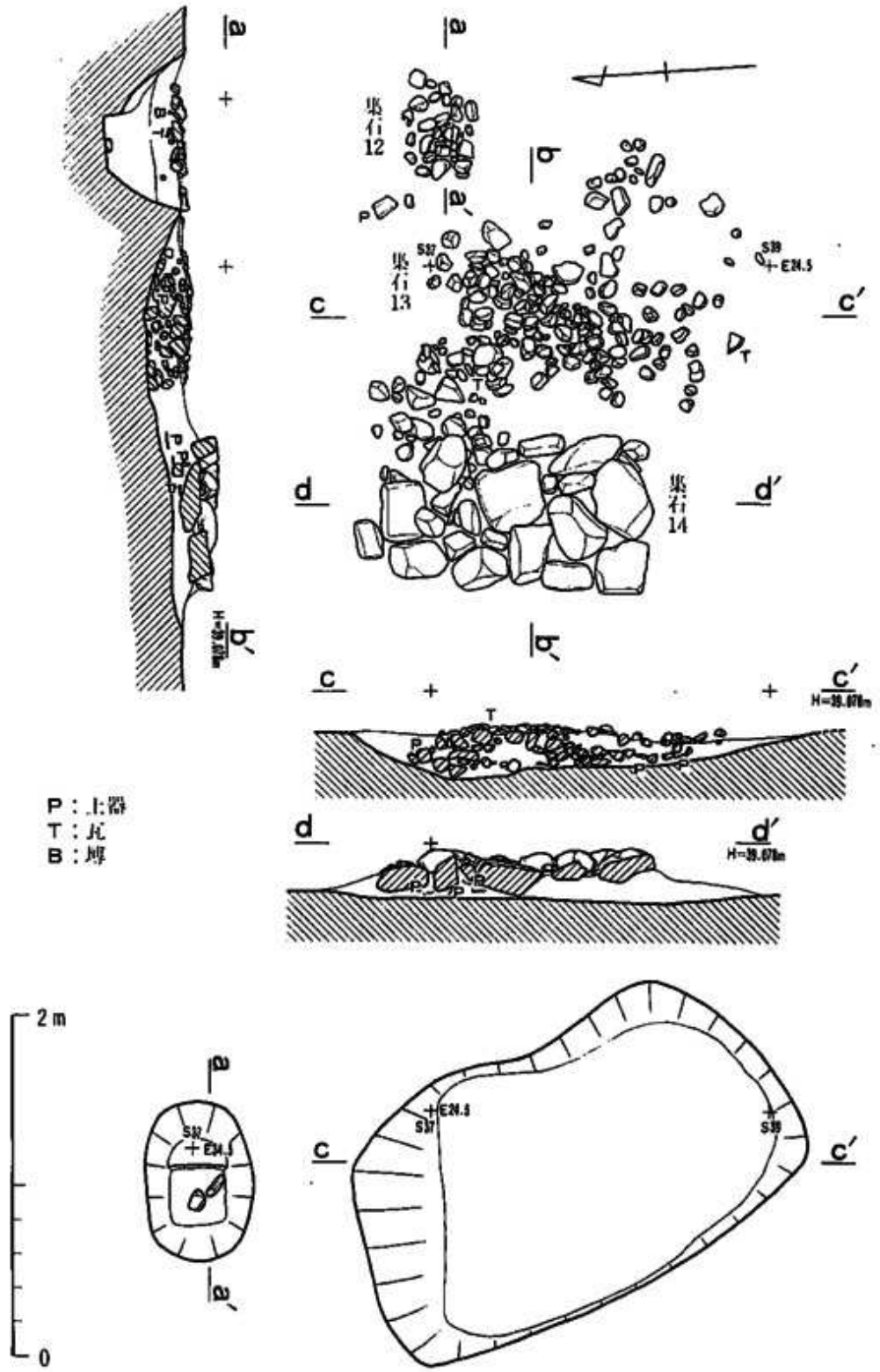
集石遺構14(第26図，図版第30，図版第32・右)　集石遺構13の東北コーナーに一部重複する形でその上部に存在する。他の集石遺構と異なり，30cm前後の大きな円礫を用いて，1.7×0.9mの長方形に近い集石部を形成する。円礫の間隙には若干砂がつまり，瓦片が検出されている。集石は，円礫を一段置き並べた状態で，その下部は暗赤褐色土をはさんで砂層となり，明確な掘り方をもたない。

以上のほか，B－1区(第27図，図版第33)やA－2・4・6区(第28図，図版第16・下，図版第34)で12個所集石遺構が検出されている。これらは，いずれも10～20cm前後の大きさの円礫を用いて径60～80cm前後の規模の集石部を形成し，その下部に明確な掘り方ではないが，最深部で20cm程度の浅い皿状の落ち込みが認められる。明確な遺物は認められないが，埋土中に土師質土器の細片やカーボンを若干含むものが多い。集石遺構5のみは若干様相が異なり，集石状態が散漫であり，あるいは複数が重複しているものかともみられる。ここではほぼ中央部に羽釜がふせた状態で出土している。

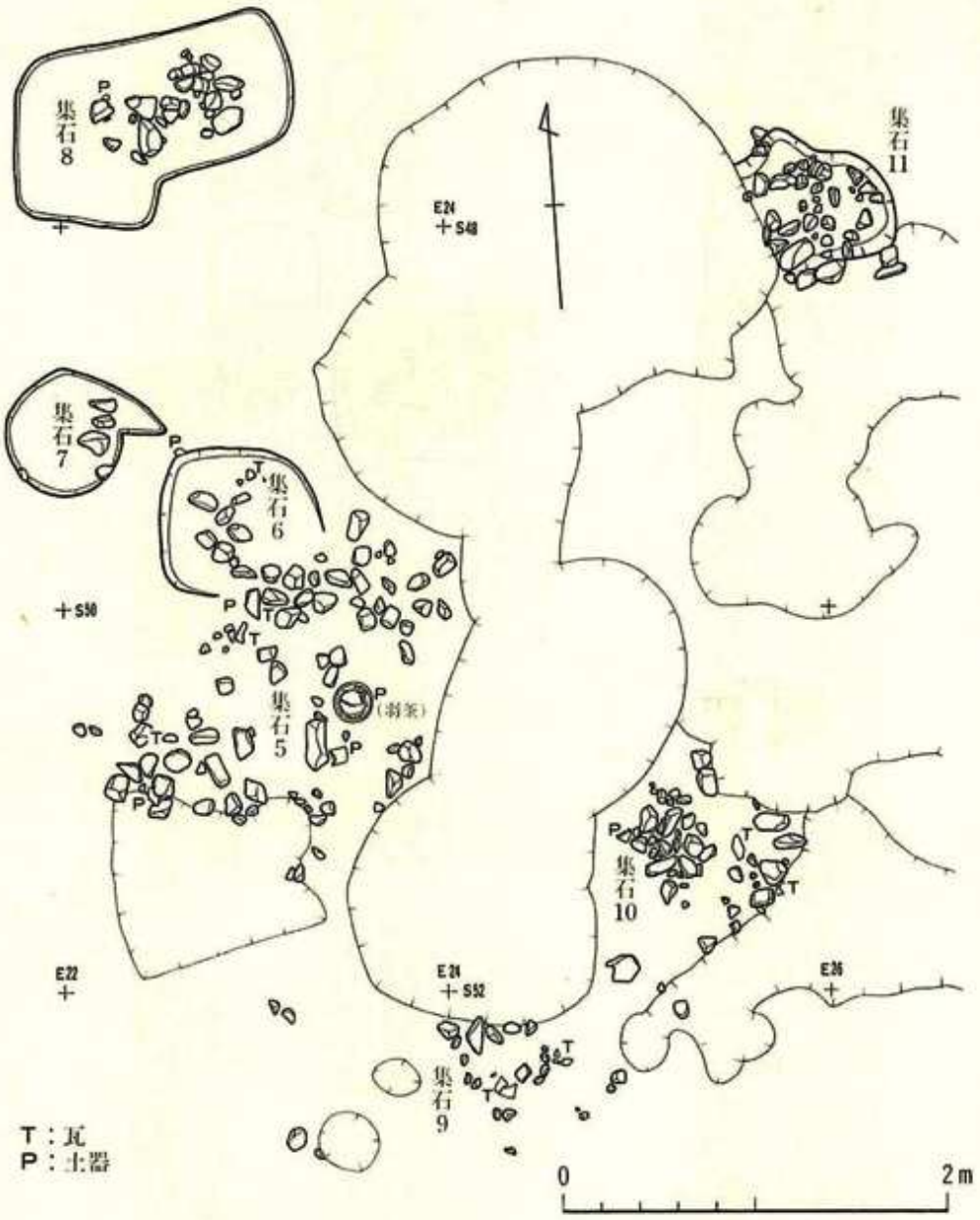
これらの集石遺構の性格については，確証はないものの，とくにB－1区集石遺構群の直上瓦溜において五輪石数点が検出されていることや，分布状態にまとまりが認められ，占地が意識的に限定されたものであると推定されること，さらにそれが曇華院境内の西南部の一画に占地していること，また，明確な蔵骨器などの埋葬主体施設を伴わない墳墓形態も知られていることなどから，一種の墳墓の可能性が推測されよう。とすれば，群在することからこの一画が墓地であったものと考えられよう。時期は集石遺構13や集石遺構5にみられる羽釜の編年からすれば，15世紀後半～16世紀初頭ないしは若干さがる時期のものと推定される。

第10節　小　　結

今回の調査を通じて検出した遺構は，溝・溝状遺構・建築遺構・列石遺構・井戸・土器溜・瓦溜・土壙・集石遺構など数多く，内容も多岐にわたる。これらは，溝1や井戸10，ピットな



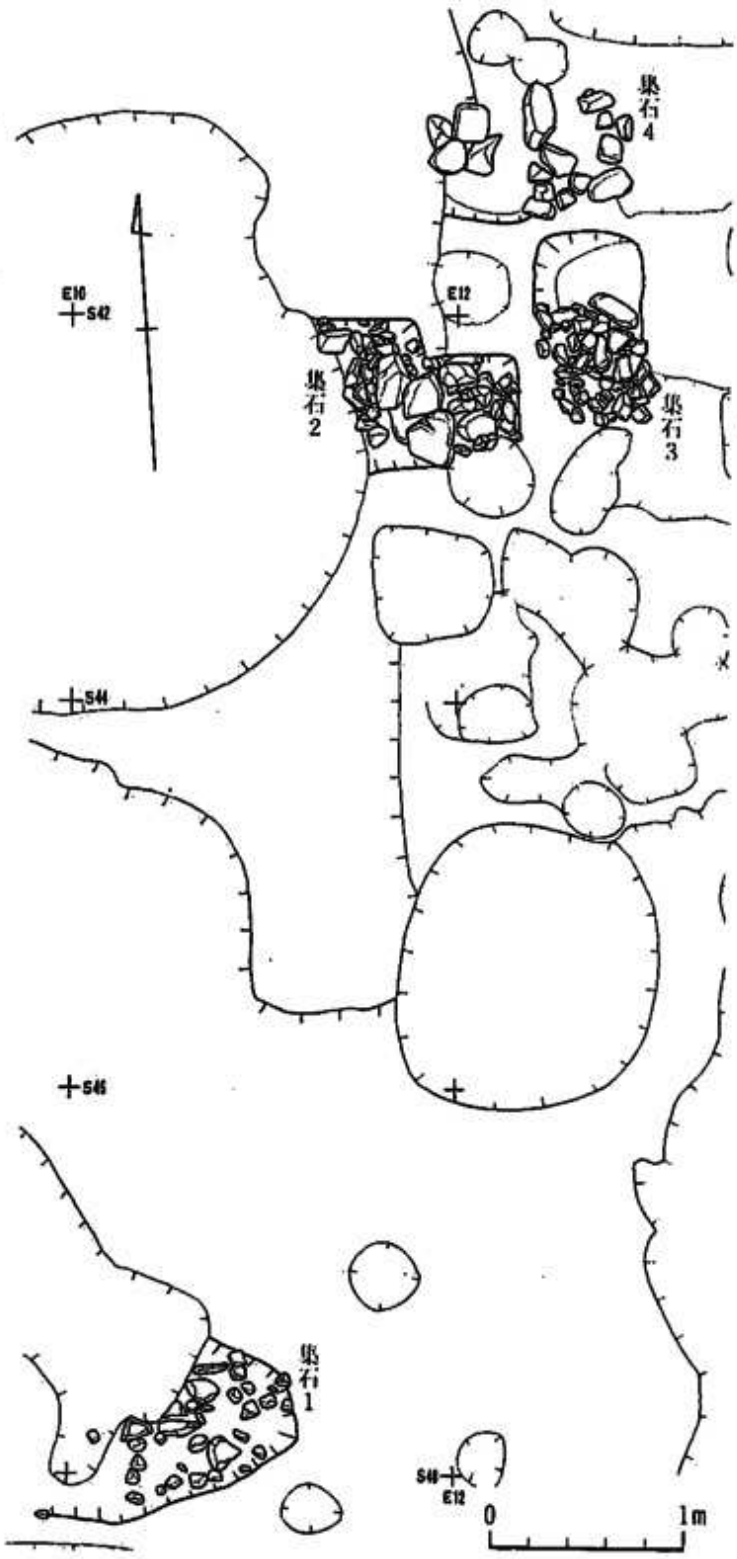
第26図　B－5区集石遺構12・13・14



第27図　B－1区集石遺構5・6・7・8・9・10・11

ど若干の中世以前と推定されるものを除いて，大半が中世以降における曇華院の一画および町屋に関するものである。個々の遺構はそれぞれ多くの問題点をはらむものであるが，ここでは若干の成果と問題点を指摘して小結としたい。

溝は，3条検出され，そのうち溝1と2は中世以前にさかのぼる時期のものと推定され，溝3は，近初頭頃とみられる。これらはいずれも位置関係からして東洞院大路の側溝と推定され，しかも，大路8丈(約24m)の道幅を想定した場合，B区で溝が確認されなかったことによ



第28図　A－2・4区集石遺構1・2・3・4

り，東洞院大路の東側溝であることは確定的となった。これらの溝は，時期が新しくなるにつれて西側，すなわち道路敷の方へ移動して営まれている。これは中世以降，古い溝の廃絶と町屋の形成に密接に関連をもつものと考えられ，いわゆる「巷所」の性格を明らかにする上で，新たな問題を提起するものといえよう。

溝状遺構は，底にピット列を有するものがあり，溝1と平行して，溝肩より約1.4～2m東側に検出されている。『延喜式』の京程によると，8丈の大路の場合，築地の基壇の幅が6尺，犬行5尺，溝幅4尺ということになっており，若干数値にずれが認められるものの，あるいはある時期溝1に伴う築地であった可能性も推測されよう。

建築遺構としては，多数の柱穴の存在があげられるが，明確な組み合わせをもつものは少なく，大半が規模の小さなものである。特に溝1より西側に集中して検出され，溝の廃絶以後のものが大半とみられ，またこれらの柱穴群の東南部に中世～近世と推測される井戸が多く営まれていることからして，多くは中世以降の町屋に伴うものであると考えられよう。

井戸は計16基検出された。方形縦板組み井戸・円形石積み井戸・円形縦板組み井戸・円形漆喰井戸に大まかに分類され，さらに円形石積み井戸は，石積みの下部に方形木枠をもち，その組み方も多様である。このような構造形態の差異が，時期差を反映するものか，他の要因によるものか，問題を含んでおり，今後町屋の形成およびその性格とからめて，総合的にとりあげるべき課題であろう。

土壙は数多く検出されているが，大半は土壙2・4・5・6・14などのように，確実な時期や性格不明のものである。しかし，これらの多くの土壙の中には，かなり時期や性格の限定されるものも認められ，また従来類例の知られていないものもみられる。土壙11・15は近世初頭と推定される土器溜で，完形品多数を含む土師質皿形土器などが充満した状態で検出された。これらは中・近世における土師質皿形土器の編年作業の上に良好な一括資料を提供したといえよう。また，これらの土器溜は，灯明皿を含む完形品が多く投棄されており，単なる日常使用品の廃棄壙とは考え難い。また，土壙15にみられるごとく，投棄に時間差が想定されることや，これらが盛華院の境内の一画に位置することからすれば，あるいは仏事に使用されるたびごとにまとめて廃棄されたものかと推測される。土壙20や土壙21のように壺を埋置したものも認められる。従来，類例をみず，積極的な論拠はないが，最近明らかにされてきている中世墳墓の内容は多種多様であり，一種の墳墓である可能性を指摘しておきたい。甕状の板枠を底部に据えた土壙19や，底部近くに木材を組み敷いて，その上部に礫がつめこまれた土壙22なども，従来例をみない特異な遺構である。その性格づけは，今後，類例の増加をまたねばならないであろう。

集石遺構については，中世墳墓の一種であり，群在することから墓地の可能性を指摘した。従来，平安京創設以来京内では原則として墳墓が営まれず，鳥辺野・蓮台野・化野など京外周辺の山麓部に墓地が形成されていた。しかしその実態は必ずしも明らかではなく，特に中世以降どのような変化をたどったかは定かでない。寺地という，いわば特殊な場所である以上，中

世以降墓地が形成されたとしてもあながち特異な現象とはいえないであろう。墓地とすれば，その形成の過程と被葬者の性格などが問題となるが，遺構の内容は貧弱で，特別な階層の墳墓とは考え難い。とすれば，その形成過程の問題と相俟って，ここでもあらためて町屋の形成とその性格が問題となってくるが，これまで京内においてこうした遺構は知られておらず，今後，類例の増加をまってあらためて検討すべき課題といえよう。

第3章　遺　　物

今回の調査で出土した遺物は，石炭箱にして数十箱にものぼる厖大な量にのぼる。種類としては，軒瓦をはじめとする瓦類，土器類，貨幣，木器類などがあるが，中世～近世の土師皿が最も多く，近世の瓦類も瓦溜などから多量に出土している。また，弥生時代から古墳時代にかけての土器もわずかではあるが出土している。時期的には中世～近世のものが多いが，平安期のものも相当量出土している。以下に項目別に述べてゆきたい。

第1節　瓦　塼　類

1　軒丸瓦(第29・31図，図版第38・40・41)

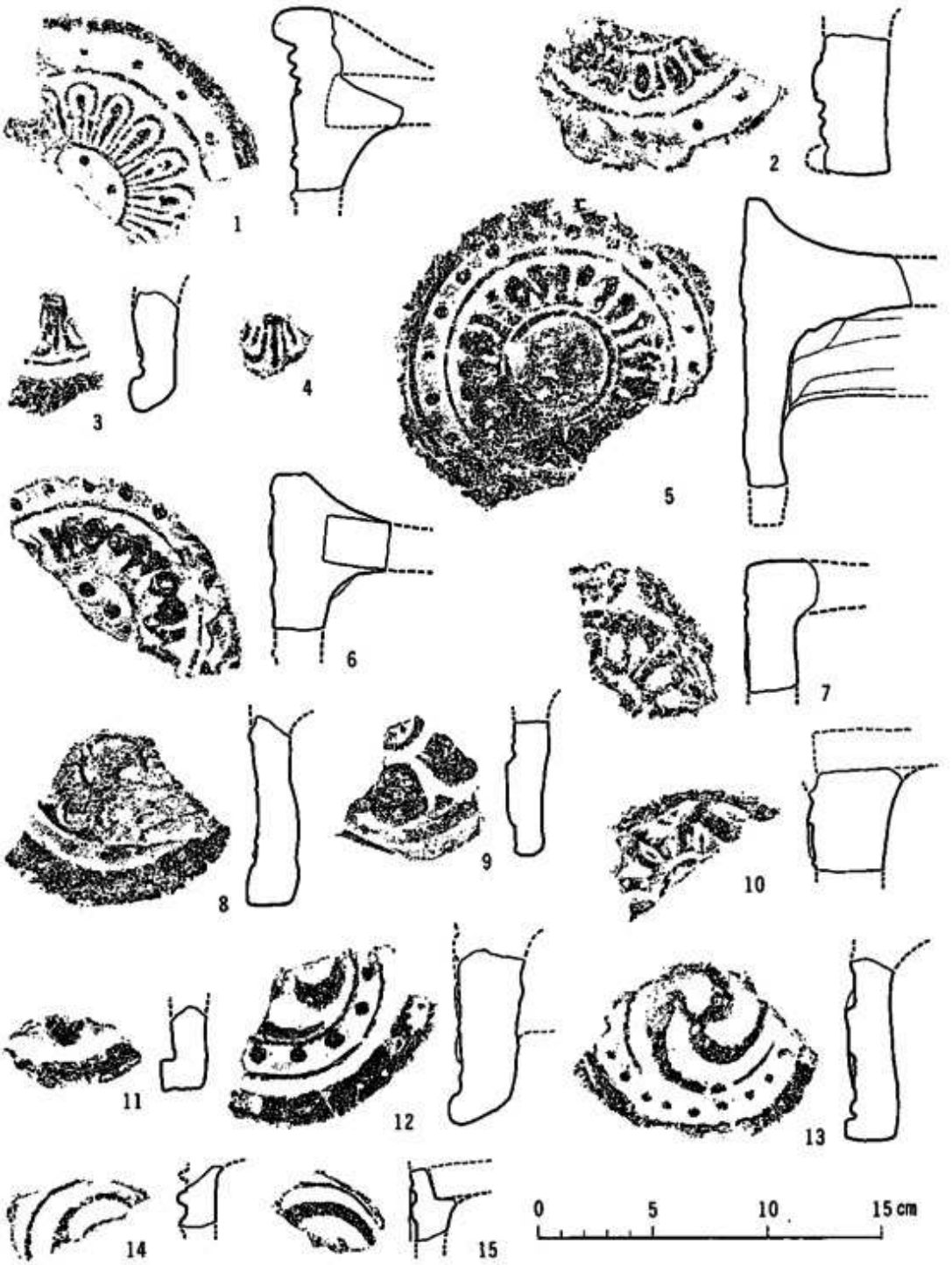
①単弁16葉蓮花文軒丸瓦(第29図1，図版第38の1)　平安時代前期の瓦として代表的なもので，平安宮からの出土例が多い。大阪府吹田市岸部瓦窯で生産されたもので，中房の蓮子は1＋6，珠文は花弁と対応して16個が付けられる。胎土に砂の混入が多く焼成はやや硬質である。A－11区南部青灰色泥質土層出土。

②単弁12葉蓮花文軒丸瓦(第29図2，図版第38の2)　中房は内区より窪むが蓮子数は不明である。花弁は小形でそりの強いものが密着して作られている。三条西殿(本遺跡より1町西)で同笵品が知られる。胎土に砂の混入は少く，やや軟質である。A－1区地山直上出土。平安時代前期。

③複弁8葉蓮花文軒丸瓦(第29図3・4)　いずれも小片であるが，いわゆる「栗栖野瓦屋」で作られたもので，裏面には布目痕が認められる。このモチーフを持つ瓦は数種あるが，中房に「栗」の銘のあるものもある。3がB－6区攪乱層，4はB－3区攪乱層より出土している。

④複弁6葉蓮花文軒丸瓦(第29図5・6，図版第38の3・4)　中房は不鮮明で蓮子数は不明である。弁間には，花弁と同じような複弁が，のぞき花弁風に配されている。珠文帯の外側にも圏線が作られている。接合式で，内外面ともに粗い指ナデを行っている。両者とも硬質で，5は青灰色を呈している。5がA－10区井戸10の上層から，6はB－6区の攪乱層から出土している。

⑤複弁蓮花文軒丸瓦(第29図7，図版第38の5)　通常の瓦と陰陽が全く逆になっており，弁子・界線・珠文が窪んでいる。断面形からみて一本造りの技法によるものと推定されるが，瓦



第29図　軒丸瓦拓影・実測図

当裏面に顕著な布目痕は認められない。焼成は硬質である。A区の撹乱層から出土。

⑥蓮花文軒丸瓦(第29図8，図版第38の6)　瓦当面が一部剝落しており文様が分りにくいが，

中房は小さく，そのまわりに平面的な単弁を配している。珠文はやや小粒で，周縁は巾が広い。胎土には砂の混入が多く焼成はやや硬質である。A－7区より出土。

⑦単弁蓮花文軒丸瓦(第29図9，図版第38の7)　中房および内外区を分ける界線は太く，花弁は大きく盛り上っている。比較的小形の瓦で瓦当面は正円形をなさないようである。接合式で焼成は硬質である。A－10区井戸10より出土。

⑧単弁蓮花文軒丸瓦(第29図10，図版第38の8)　厚い瓦当の瓦で，筒部が剝落しておりこのため文様の周辺部が欠落している。中房は界線で区切られ，花弁の大きさにはかなりの大小がある。胎土には砂の混入が多く焼成はやや硬質である。A－10区井戸10内出土。

⑨単弁蓮花文軒丸瓦(第29図11，図版第38の9)　比較的小形の瓦で花弁の先端がみえる。珠文は作られていないようである。瓦当裏面から外周にかけてはナデ調整を行っている。胎土に長石粒などを混じ，やや硬質である。尊勝寺など平安時代後期の遺跡に同文品の出土例がみられる。A－4区攪乱層出土。

⑩巴文軒丸瓦(第29図12，図版第40の7)　右捲きの三つ巴文で，2重の圏線の中には珠文を配している。瓦当裏面には指ナデの痕跡が顕著である。胎土には砂を混じ，やや硬質である。A－9区溝1内出土。

⑪巴文軒丸瓦(第29図13)　これも右捲きの三つ巴文軒丸瓦であるが，珠文を囲む圏線がみられない。左側の周縁に笵ワクの痕が認められる。また外周には縦方向の縄叩き痕が残っている。胎土には砂を混じ，焼成はやや硬質である。A－9区攪乱層出土。

⑫巴文軒丸瓦(第29図14・15)　いずれも左捲きの巴文で，三つ巴と推定される。両者とも胎土に砂を混じ，やや軟質である。いずれもA区の攪乱層出土である。

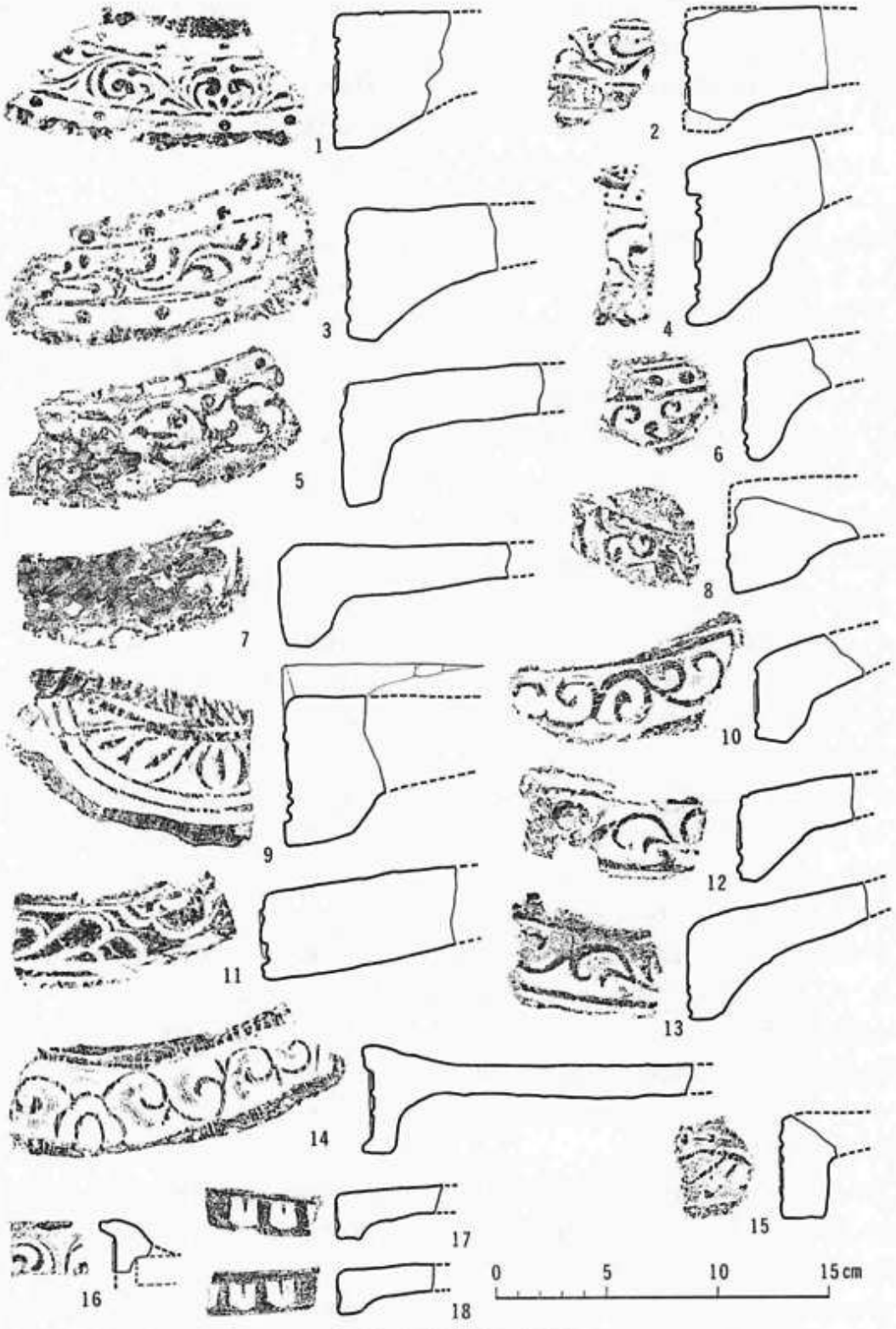
⑬巴文軒丸瓦(第31図1，図版第40の8)　右捲きの三つ巴文軒丸瓦で，頭は接しないが尾は互に接している。表面の一部に金箔が残っている。桃山時代の瓦である。B－4区土壙15上層出土。

⑭巴文軒丸瓦(第31図2，図版第40の9)　瓦当の下半を欠くが，筒部はほぼ完形を保っている。文様は線の細い右捲き三つ巴文で，尾は界線に接している。小粒の珠文の外側にも珠文様のものが認められる。筒内面には布目痕が顕著で尾部近くには，特殊な造作を施している。室町期のものと推定される。A－6区の地山直上で出土している。

⑮その他の軒丸瓦(図版第41の1～5)　ほとんどが江戸時代のものと思われ，B－1区の瓦溜6からの出土が多い。1は直径が14.6cmで黒色を呈する。A－9区南部暗赤褐色粘質土層出土。2は直径が16.3cmで黄褐色を呈する。A－8区の溝上層出土。3は直径が12.4cmとやや小ぶりである。B－1区瓦溜6出土。4は直径が14.3cmで菊花文風の瓦当文様を持つ。これは桃山時代のもので，A－8区東北瓦溜5出土。5はいわゆる桟瓦であるが，丸瓦当と軒平瓦の接合状態が理解できるので図示した。丸瓦当の直径が13.4cmでB－1区瓦溜6から出土している。

2　軒平瓦(第30・31図，図版第39～41)

①均正唐草文軒平瓦(第30図1，図版第39の1)　西寺跡出土の瓦に極めて良く似た文様である



第30図　軒平瓦拓影・実測図

が，やや退化している。胎土は良く焼成も硬い。三条西殿など，本遺跡の近辺で出土例が多い。A－3区ピット3底部出土。

②均正唐草文軒平瓦(第30図2・3，図版第39の2)　顕著な中心飾は認められず，左右にゆるやかな唐草が4反転する。凹面には粗い布目痕が残る。顎は縦方向のヘラ削りが顕著である。平安宮での出土例の多い瓦である。第2図2がA区撹乱層，3がA－2区の地山直上から出土している。

③均正唐草文軒平瓦(第30図4，図版第39の3)　丹波産の瓦で顎に縄叩き痕が顕著である。胎土は砂の混入が少くやや軟質で，灰白色を呈している。B－4区の撹乱層から出土している。

④唐草文軒平瓦(第30図5，図版第39の4)　捲きの大きな唐草が瓦当面いっぱいに反転するが，文様の表出は不鮮明である。上部には珠文が作られる。瓦当は薄く，裏面には指おさえのあとが認められる。焼成は極めて硬く青灰色を呈する。A－7区撹乱層から出土。

⑤唐草文軒平瓦(第30図6，図版第39の5)　右端の破片である。右端から唐草が中央に向って反転している。この文様を持つ瓦には中央で両側から出た唐草が出合うものもあり，偏行かどうかは不明である。A－9区溝1上層出土。

⑥素文軒平瓦(第30図7，図版第39の6)　本来唐草文の笵を押捺したものであるが，瓦当面の大半をヘラケズリし，右端の界線が一部残るのみとなっている。文様は10と同笵と推定される。顎には顕著な粘土のシワが認められる。B－4区土壙18出土。

⑦唐草文軒平瓦(第30図8，図版第39の7)　左端近くの破片である。小片で文様は判然としないが，かなり変形した唐草文のようである。胎土に砂を混じやや硬質である。A－6区暗褐色土層出土。

⑧蓮花文軒平瓦(第30図9，図版第39の8)　蓮花文状の文様を作り，まわりを界線で囲っている。上方には顕著な笵傷が認められる。瓦当面の上部および顎には縄叩き目痕が残っている。側面には，瓦成形の際のワクの痕跡が残り，段差を作っている。胎土は精良で硬く，灰白色を呈する。A－10区井戸10内青灰色粘土層出土。

⑨均正唐草文軒平瓦(第30図10，図版第39の9)　舌状の中心飾を持ち，左右に唐草が大きく反転する。そのまわりには界線が作られている。顎には粘土のシワがみえ，瓦当下端にはヘラ削りが施されている。胎土に小石の混入がみられ，やや硬質である。A－2区暗赤褐色土層出土。

⑩宝相華文軒平瓦(第30図11，図版第39の10)　中央に大きな宝相華文を，そのワキにやや小さな下向きの宝相華文を作っている。直線顎で，胎土には砂の混入が多くやや硬質である。B－4区茶褐色土層出土。

⑪均正唐草文軒平瓦(第30図12・13，図版第40の1)　10と同笵で，その左半分である。やはり顎には粘土シワが認められる。第30図12がA－7区溝1暗赤褐色粘質土層，13がB－1区集石5出土である。

⑫均正唐草文軒平瓦(第30図14，図版第40の2)　中心に簡略化した宝相華文を配し，左右に大きく唐草が反転する。接合式の瓦で，顎および上面はナデ調整の痕跡が顕著である。胎土には

砂の混入が多く焼成は硬質である。A－2区の西壁暗赤褐色土層出土。

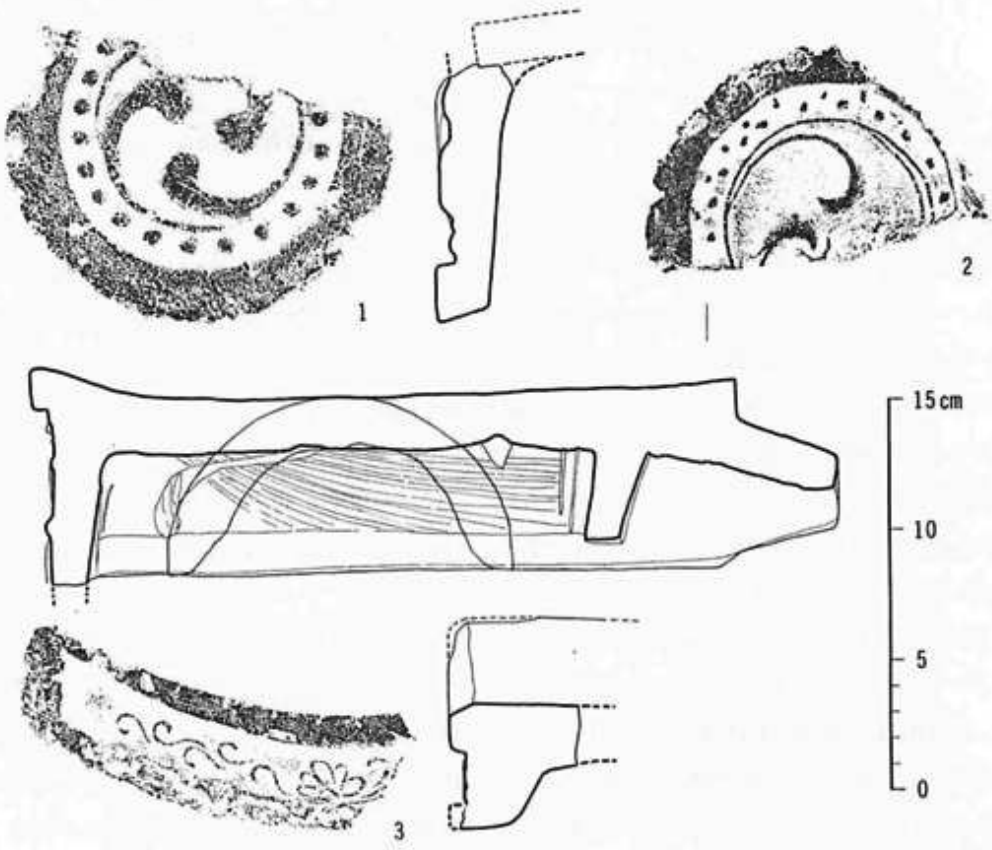
⑬変形唐草文軒平瓦(第30図15，図版第40の3)　直線的に変化した唐草状の文様を内区に，その上下に珠文を作っている。瓦当は断面長方形を呈している。胎土に砂の混入がみられ，焼成はやや軟質で黄褐色を呈している。A－10区井戸10内より出土している。

⑭巴文軒平瓦(第30図16，図版第40の4)　右捲きの三つ巴文が2つみえる。あるいは剣頭文と組み合わせた剣巴文であるかもしれない。接合式で，裏面には平瓦差し込みのための溝が作られている。A－7区溝1内出土。

⑮剣頭文軒平瓦(第30図17・18，図版第40の5・6)　ごく小形の瓦で，瓦当は折り曲げによって作られている。顎は横方向のナデによって調整している。ともにB－5区集石13から出土している。また図示したものよりもシノギの幅のやや広いものがA－11区暗黒青色粘質土層より1点出土している。

⑯均正唐草文軒平瓦(第31図3，図版第40の10)　中央に花文風の飾を置き，左右に細い唐草が反転する。瓦当面には離れ砂の痕跡が顕著である。平瓦凹面には布目痕が残り，顎の整形は丁寧である。室町期のものであろう。A－9区中央暗赤褐色粘質土層出土。

⑰その他の軒平瓦(図版第40の11・12，41の6・7)　11・12は桃山期の軒平瓦と考えられる。



第31図　中・近世の軒瓦拓影・実測図

11は現存幅11.2cmでA－7区溝1上層出土。12は現存幅12.3cmでA－2区撹乱層出土である。図版第41の6・7はいずれも桟瓦の軒平瓦部で江戸時代のものである。6は現存幅15.5cmでA－4区撹乱層，7は現存幅18.4cmでB－1区瓦溜6から出土している。

3　その他の瓦塔類(図版第42)

1・2はいわゆる小菊で径は1が8.5cm，2が8.3cmでいずれもA－10区瓦溜5出土である。3は鳥衾で幅9.7cm，A－9区南部暗赤褐色粘質土層の出土である。5・6・8は棟端の飾り瓦の一部で，幅は5が19.5cm，6が17cm，8が39cmである。いずれもB－1区瓦溜6出土である。以上の遺物は全て江戸期のものである。4は完形の丸瓦で全長34cmである。裏面には布目痕が認められ，端面，側縁部は大きく面とりしている。A－5区撹乱層出土である。

9・10はともに塔であるが，9がやや古く室町期にさかのぼる可能性もある。9の幅は25.1cm，片面には布目痕が残っている。側面はヘラ削り調整を行っている。10は江戸時代のもので片面に楔状の窪みをつけている。幅は23.2cmでA－6区茶褐色粘質土層出土である。

7は火鉢の破片で，菊花文風の刻印を口縁に並行に押捺している。現存幅は左が17cmでA－2区撹乱層出土である。

第2節　土　器　類

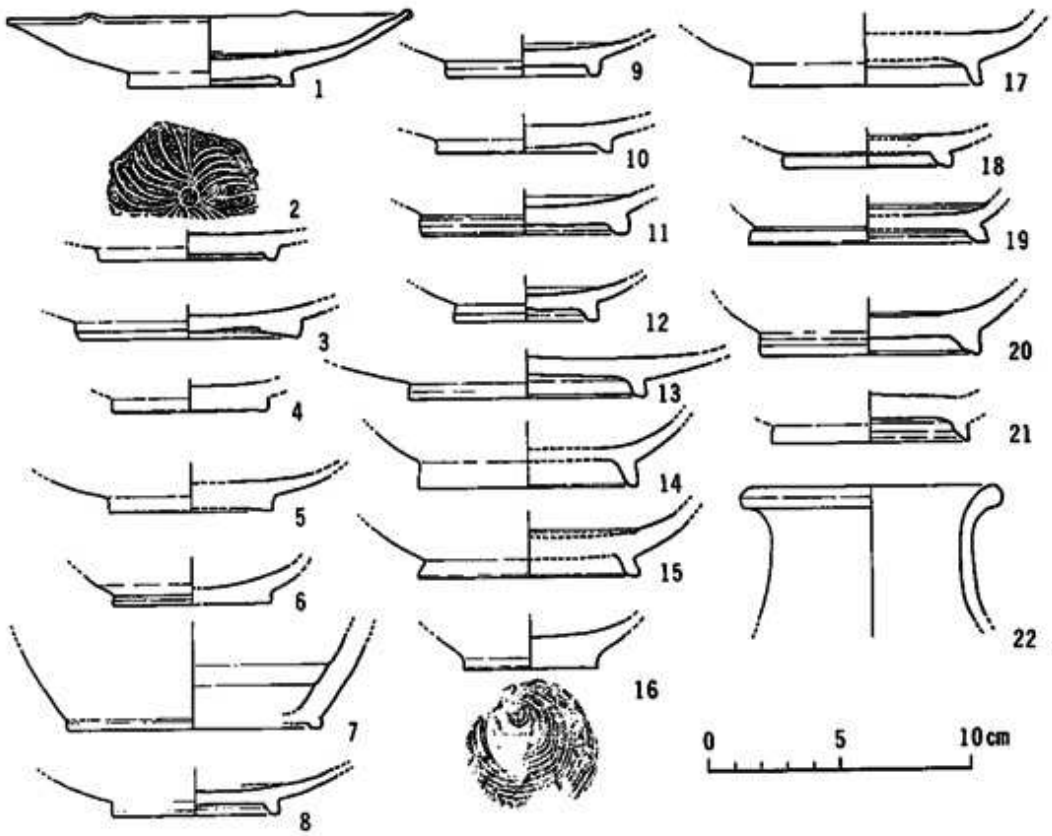
土器類の出土地点・層位は節末尾の一覧表に示した。またこの表で，挿図と図版の番号の対比を行っている。従って本文中の番号は原則として挿図番号を用い，写真図版のみの遺物については図版番号を用いた。

1　緑釉陶器(第32図，図版第43)

緑釉陶器は大別して3種に分類することができる。まず，胎土が白色を呈し軟質のものをあげることができる。これは釉の発色はやや淡いが美しい。また内面に花文を線刻したものもある。内面に重ね焼きの痕跡はなく，トチを利用したものと思われる。いわゆる猿投系の緑釉陶器である(第32図2～5・7・13)。この種の緑釉陶器の高台には，平底・蛇の目・輪状の各種がみられる。第2は京都盆地近辺で焼かれたと思われるもので，焼成は概して堅緻で胎土は灰白色を呈するものが多い。輪状の高台が多く内面には重ね痕が顕著である(第32図1・6・8～12)。16もこの種の陶器であるが，高台底部が糸切りになっており，耳皿であろうと推測される。第3は，近年近江地方での発見例が報告されているもので，時期は平安末期程の一群である(第32図14・15・17～22)。この種の陶器にはまたトチの使用が認められる。また高台は貼りつけたもので，高台の内部には糸切り痕が残る。

2　灰釉陶器・須恵質土器類(第33・34図，図版第44)

①灰釉陶器(第33図1～8・18，第34図4，図版第44の1・2・6・10～13)　器形としては大形の椀(第33図1・2)，鉢(3)，壺類(4～8，第34図4)がある。このうち第33図5は肩につまみの付く3耳壺のようである。いずれも愛知県猿投窯の生産になるものであろう。



第32図　緑釉陶器実測図

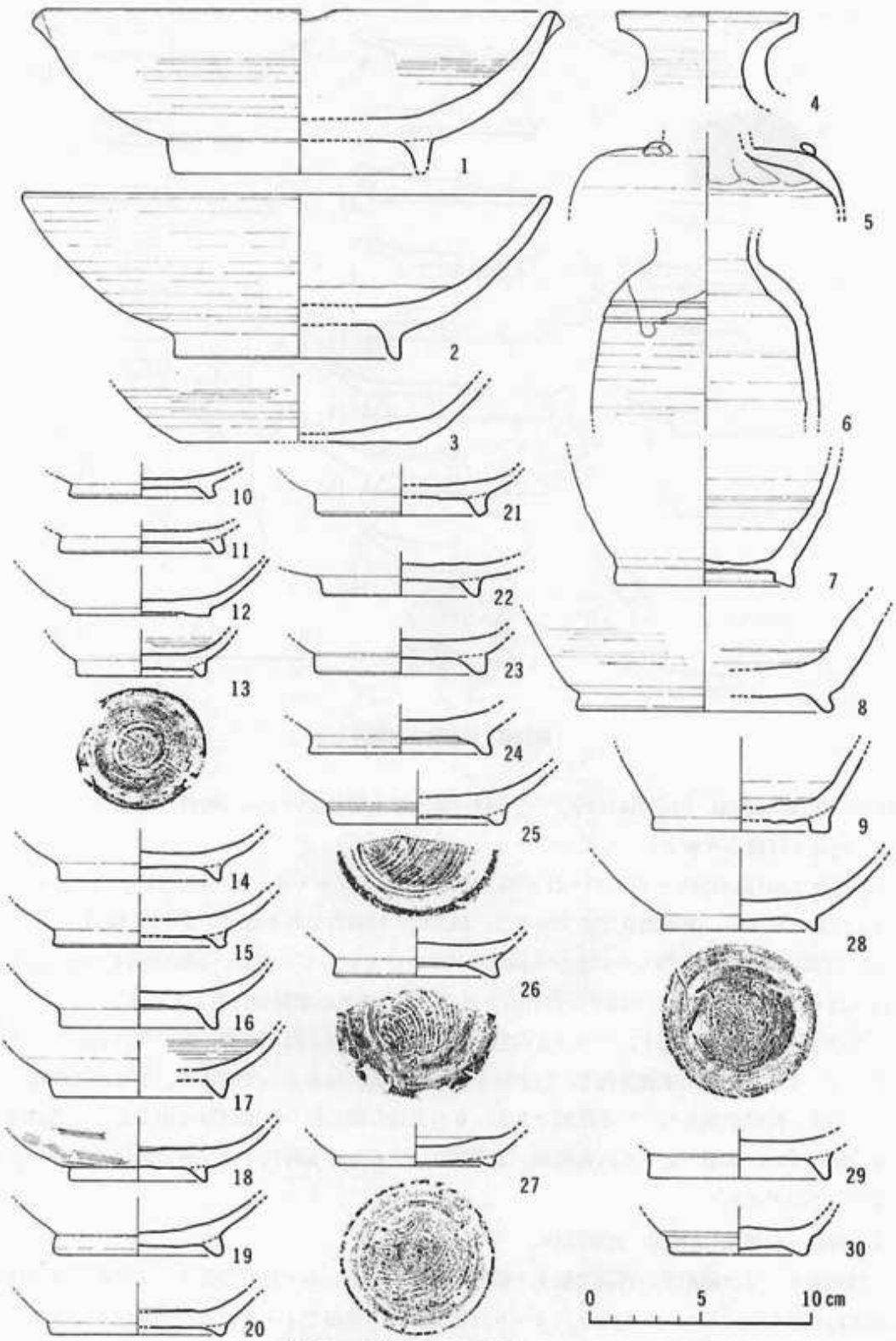
②山茶埦(第33図20，図版第44の7)　ごく粗い胎土で糸切り底の上から高台を貼りつけている。内面には薄く灰釉がかかっている。

③須恵質土器(第33図9～17・19・21～30，図版第44の3～5・8・9・14～17)　ほとんどが埦又は皿になるが，第33図9は盌であろう。12が蛇の目高台である他はいずれも輪状のもので，底部に糸切り痕を残しその上から高台をはりつけているものが多い(第33図11・13～15・19～21・23～29)。このうち13では内外面ともに顕著な赤色の顔料が付着している。

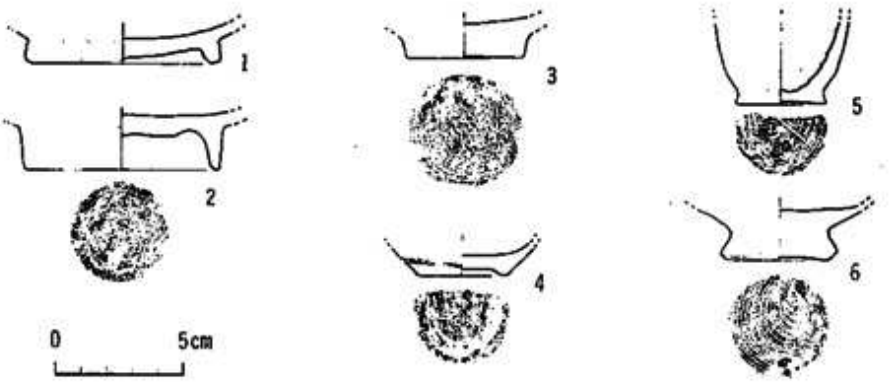
④その他の土器　第34図1はいわゆる白色土器，2は糸切りを行った底に高い高台を貼りつけている。3は糸切りの平底高台で，いずれも埦または皿になるものであろう。5は糸切り底にカマ印状の沈線が施されている花瓶である。6も糸切り底を持つが器形は不明である。第34図6を除いては，本項で述べた灰釉陶器，須器類はいずれも平安時代中期～鎌倉時代初頭には含まれるものである。

3　青磁・白磁類(第35図，図版第45)

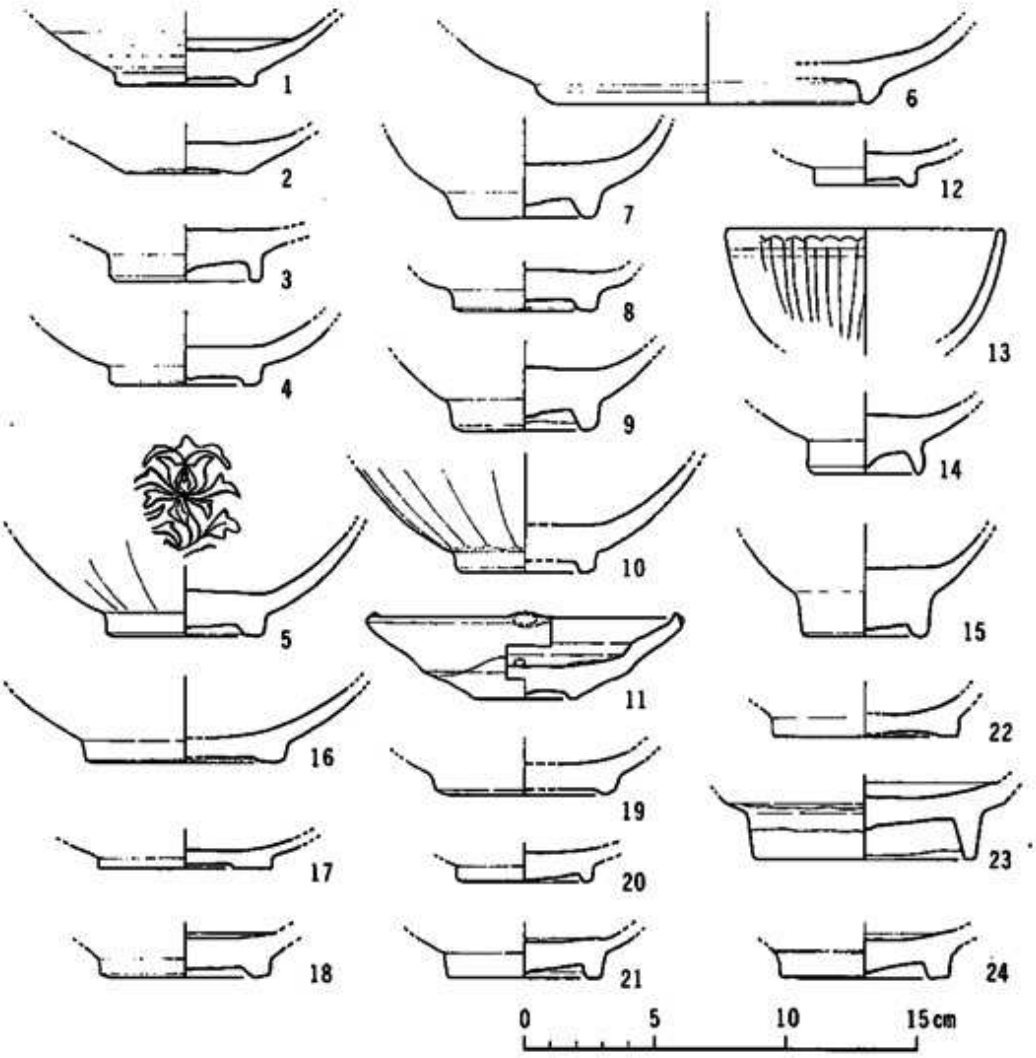
第35図1，2は越州窯の青磁で胎土・整形・焼成ともきわめて良好である。1は埦，2は浅鉢状の器形を呈するものであろう。4～6は竜泉窯系の青磁で1・2よりやや明色を呈する。3・7～31はやや時期の下るもので，国産品も含まれると思われる。11はいわゆる段皿で輪花



第33図　灰釉陶器・須恵質土器実測図(1)



第34図　灰釉陶器・須恵質土器実測図(2)



第35図　青磁・白磁類実測図

が4つ作られている。第35図16・17・19・20・22は定窯産の白磁と推定され，胎土・整形・焼成ともに良好で，やや暖みのある美しい白色を呈している。24は，青磁・白磁ではないが，きわめて硬質の磁器で内面底部はなめらかにみがかれている。微細なものを掻るのに用いたものかとも推定される。

4　土師皿(第36～39図，図版第46～49)

第36図(図版第46)は径14cm以上の大形の皿および，やや特殊な器形の皿を集成した。第36図1はきわめて大形の皿で，口径は24.5cmである。丁寧な作りで，内面及び外面の口縁近くはナデ調整を行っている。胎土は精良で淡褐色を呈し，やや硬質である。2は径約16.5cmで，1に次いで大形である。比較的丁寧な作りであるが口縁部のナデは行われていない。3～17は径14cmをやや超える土師皿でいずれも比較的丁寧な作りである。深さは15が1.8cm，10が2.8cmとかなりの差が認められる。また口縁外面のナデの顕著なもの(15など)からほとんど認められないもの(14など)まで差があるが，いずれも胎土・焼成とも良好で淡褐色から灰白色を呈している。

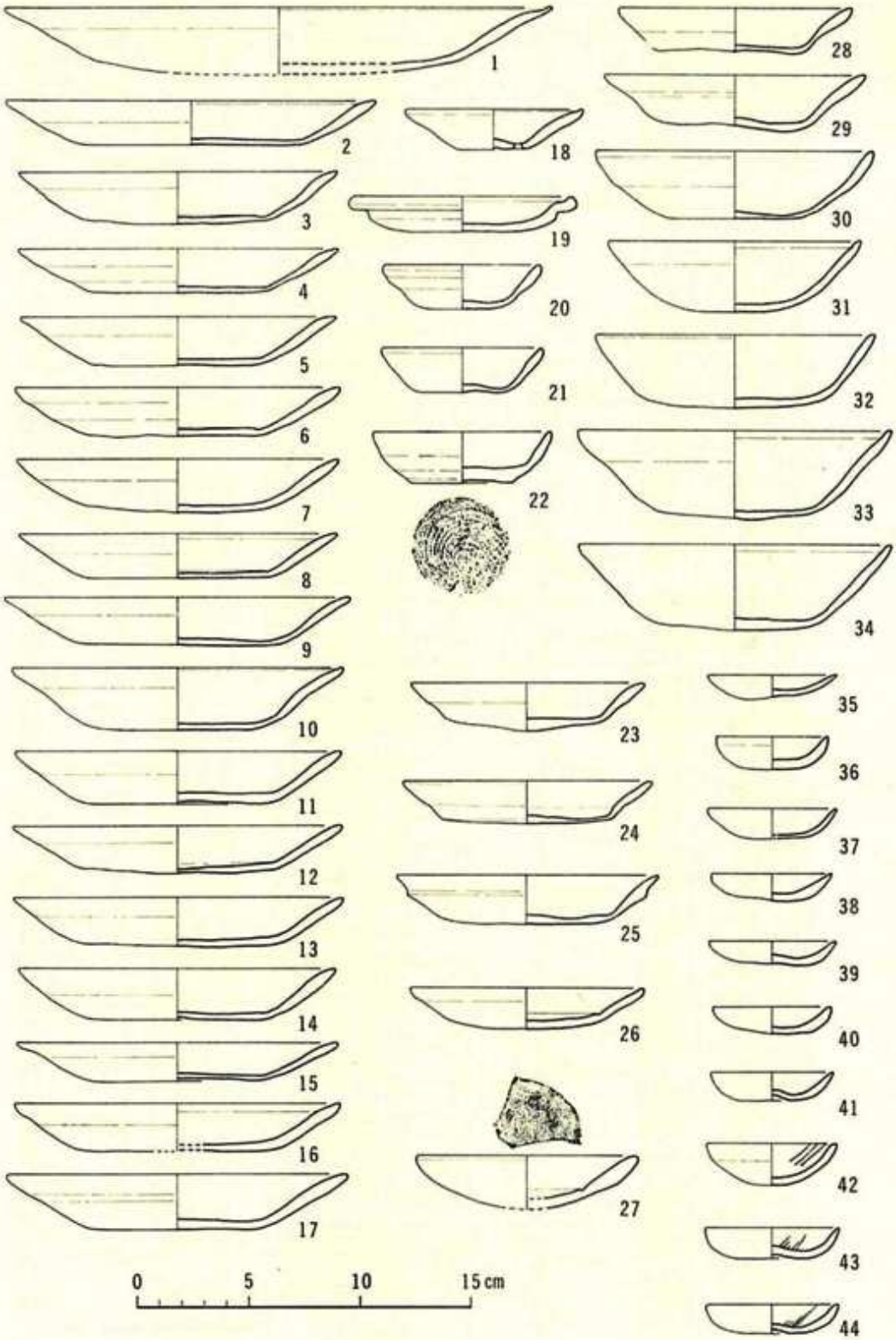
18は小形の皿であるが，底部に径約3cmの穿孔が2つ認められる。胎土には砂をやや混ずる。19は浅い皿で口縁は外反し，口部から若干立ち上る。口縁の外面は強くナデ調整を行っている。20・21も小形の皿であるが径に比してかなり深い。やや褐色味を帯びた白色を呈する。22はいわゆる土師皿と異り糸切り底を有するものである。色調は赤味がかった淡褐色である。23～25・28は他の土師皿に比して，いかにも手づくねという感を強くいだかせるもので，指おさえの痕が顕著に認められる。ただし口縁部のみはナデ調整を行っている。26・27は黒色の皿で，内面底部には沈線が施されている。割れ口は薄く剝離し，粘土を幾度も折り返したものを用いているかのごとくである。尚27の内部底面には布目痕が残っている。

29～34は深い皿である。このうち29はやや粗い作りで口縁外面にはナデが施される。やや硬質で淡灰白を呈する。30～34は径は異るが胎土・焼成・整形などが全く共通している。整形はきわめて丁寧で，口縁部はわずかにナデ調整を行う。胎土は精良で色調はやや褐色味を帯びた白色を呈し，やや軟質である。

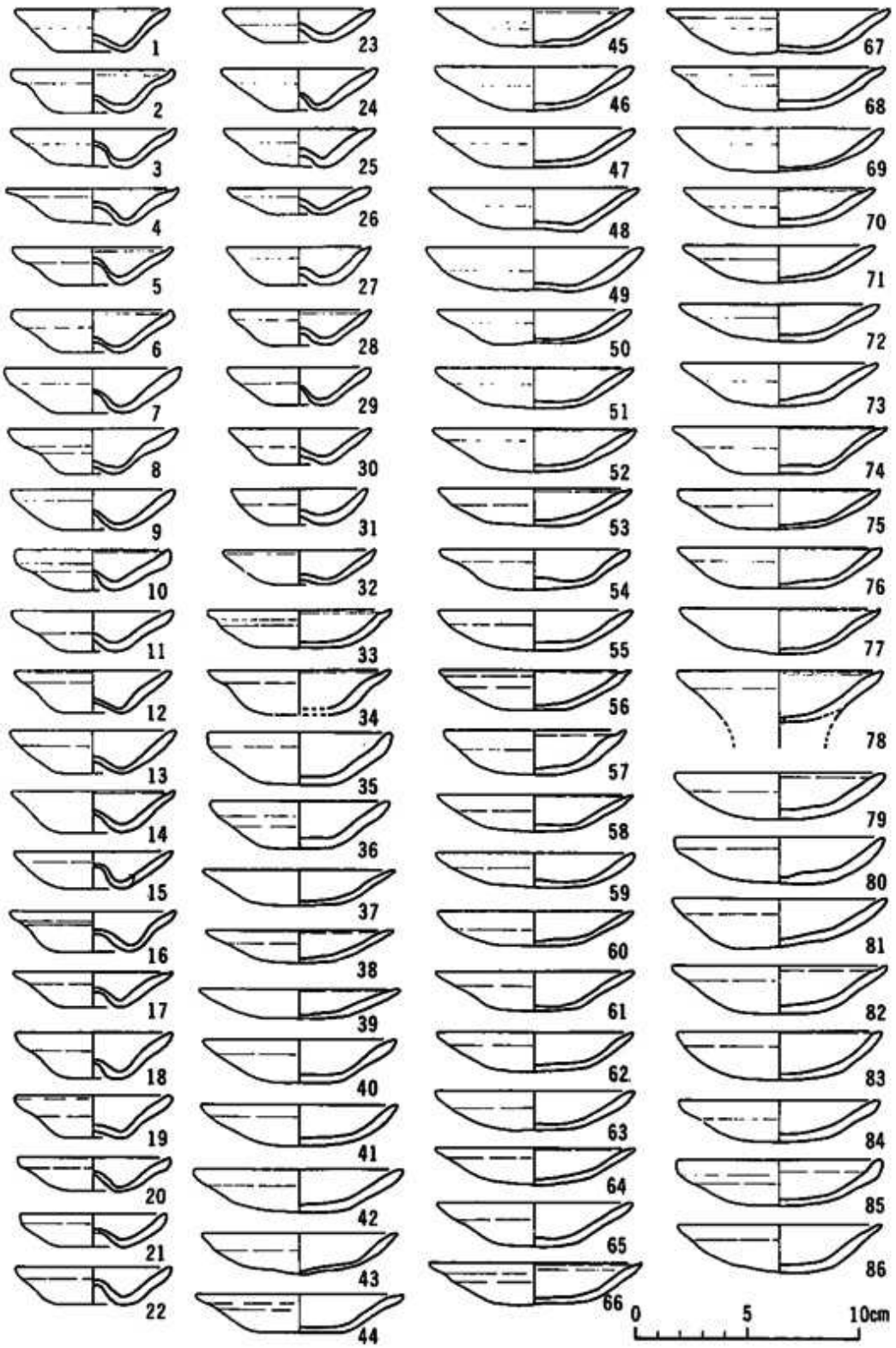
35～44はきわめて小形の皿で，いずれも正円形をなさない粗雑な作りのものである。このうち35～39は口縁の一部に炭化物が付着している。また42～44は内面に3～5本の条線が施されている。

第37図(図版第47)はいわゆるヘソ皿および径10cm以下の比較的小形の皿を集成した。ヘソ皿は径の大きなもので約8cm，小さなもので約6cmとかなりの差が認められる。深さも最も深いもので約2cm，浅いものでは1.2cmと変化がある。器形は底部から持ち上る体部が口縁近くでやや外反するものが多いが，やや内彎しながら口縁まで立ち上るものもある。底部の窪みは深いもので約1cm，浅いものでは約2mmである。いずれも内面はナデ調整を行い，口縁外面も軽くナデを行っている。胎土は概して精良であるがやや砂を混ずるものもある。

33は小形の皿で直径約8.2cmである。淡赤褐色を呈し，内面の口端はやや窪め，外面はナデ調整を行っている。34～36は深みを持つ小形の皿でやや厚く，外面の口縁部をかすかにナデ調



第36図　土師皿実測図(1)

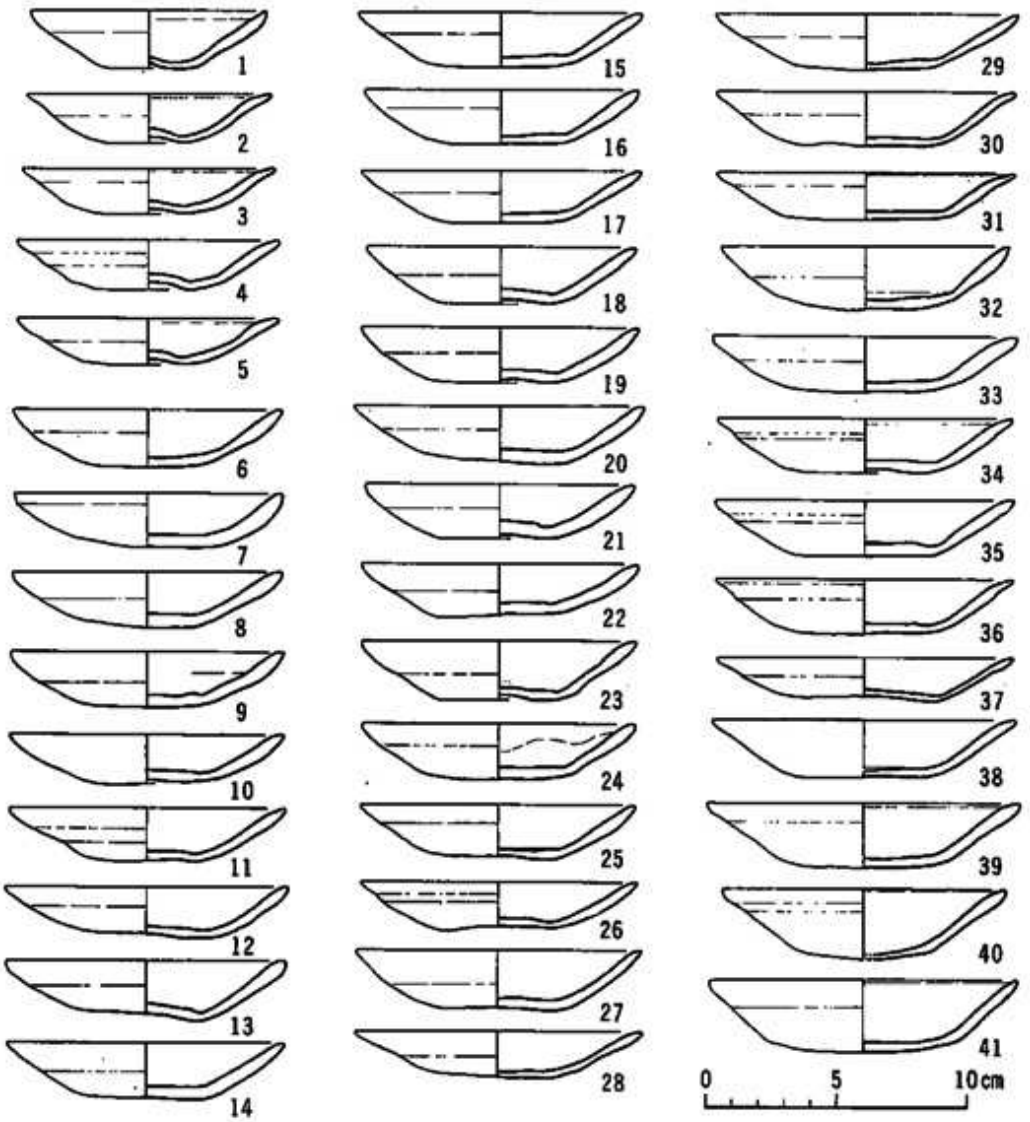


第37図　土師皿実測図(2)

整している。

37～86の皿はいずれも径9cm前後のものであるが大きく2種に分けられる。第1(36～77)はやや褐色味を帯びた白色のもので，器壁は概して薄目で整形も比較的良好である。内面のナデ調整は右まわりに1周して，口縁に引き上げている。このうち70～76は口縁部に炭化物の付着が認められ，灯明皿として用いたものであることがわかる。第2(79～86)は淡赤褐色を呈し器壁は厚い。整形も前者に比較してやや粗い。80・81には口縁に炭化物の付着が認められる。78は前者の土師皿に属するものであるが，底部に穿孔がみられ，外面には粘土が付着している。高杯として作られたものであろう。

第38図(図版第48)は径10cm～12cmの土師皿と，やや小形ではあるが，底部中央が若干窪むも



第38図　土師皿実測図(3)

のを集成した。

1～5は径9～10cmの皿であるが，底部がやや窪むのが特色である。整形法は内面を右まわりに一周ナデ，口縁に引きあげる技法であるが，他のものに比してナデの力が強いためか，外面の底部中央は窪み，反面，内面は径2cmほどの突起ができる。一見ヘソ皿を思わせるものがある。尚，3には口縁に炭化物が付着している。

7・8は径10.2cmで淡い赤褐色の土師皿である。内面および外面の口縁部をわずかにナデ調整している。

8～38は径は10.2cmから11.5m前後までとやや差はあるが，製法は全く共通している。内面の整形は第37図36～77と同様に右まわりにナデを一周施し，口縁に引き上げるものであるが，底部に加わる力が強いため，底部周辺がやや窪み，このため中央がやや突出する。ただし，第38図1～5のように径2cm程の小さな突出ではなく，3.5～4.5cmほどで平面的にかすかに突出するのみである。胎土は精良で焼成は比較的良好，色調は灰白色から赤褐色を呈する。39～41も同様の作りであるがやや深めに作られている。

第39図(図版第49)は径12cm～14cmのものを集成した。製作技法は第37図36～77，第38図8～38と全く同様である。

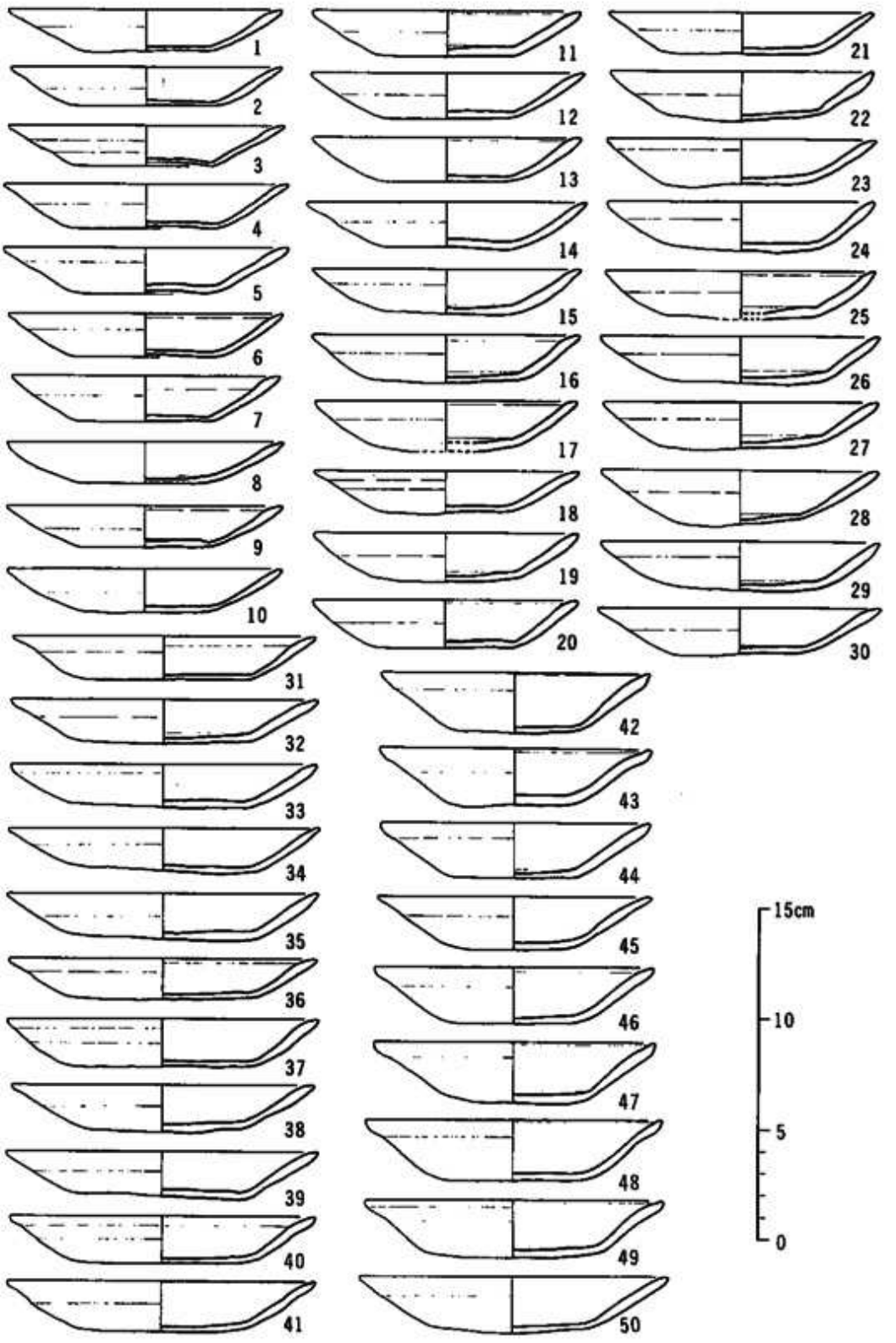
1～30はこの中では小形のもので12cm強の1群を形成する。31～41はこれよりひとまわり大形で13.5cm～14cmの1群を形成する。第38図のものとやや異る点は，内面の口縁部がナデ調整によってほぼ水平に整形されている点である。また特記すべき事項としては，24を除いて口縁に炭化物の付着の全く見られない点をあげられる。おそらく，小形の皿を灯明皿として，その受け皿として用いたものと推測される。

42～50はやや深めの皿で，口端がやや立ち上っているのが特色である。

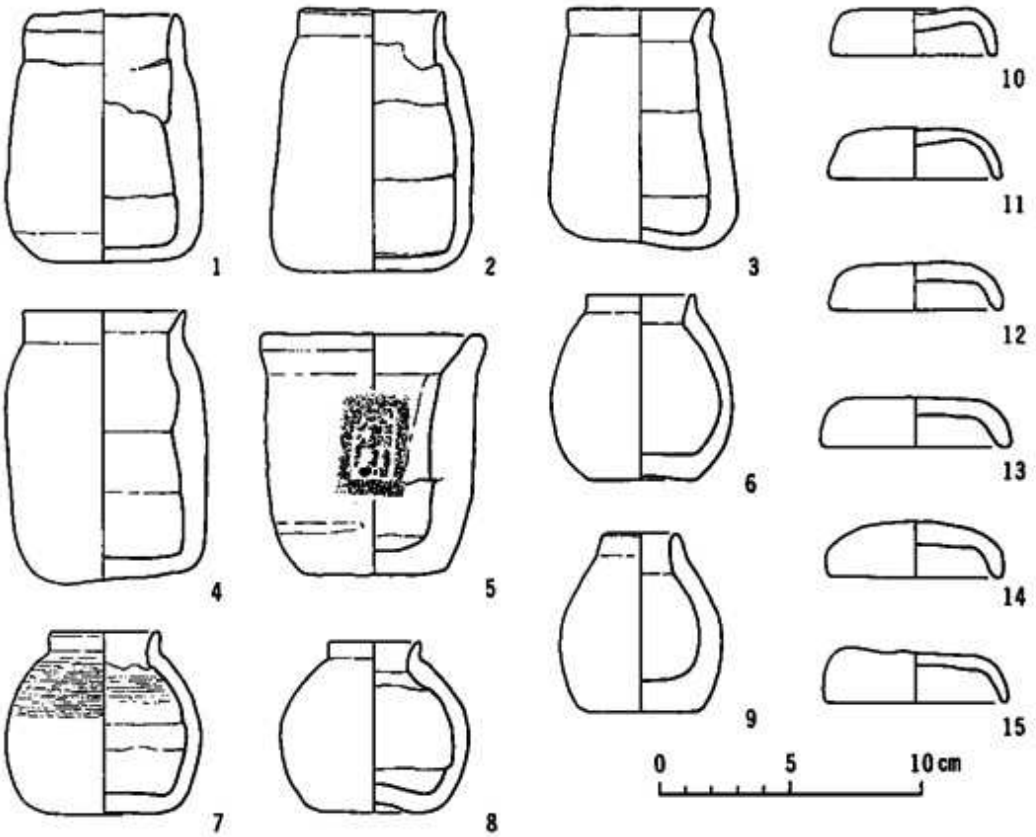
以上述べた土師皿の時期については，決定がきわめて困難である。ただし第36図1～17の大きな皿については整形もきわめて丁寧であり，中世に比定できるかもしれない。他の皿についても主体は近世のものであろうが，例えば，内面を右まわりに一周ナデ調整し口縁に引き上げる技法などがどの時期までさかのぼれるか，今後の研究課題としたい。いわゆるヘソ皿にもこの技法が認められるものが多く，かなり長期間にわたって製作・使用されたと考えられるのである。

5　塩壺(第40図，図版第50)

今回出土した塩壺は大別して3種に分類できる。最も出土量の多いのは，背が高く，口縁はやや狭くなって立ち上っている。いずれも3枚の粘土板を積み上げている(第40図1～4)。次に出土量の多いのはやや小形で丸味を帯びている。口縁は比較的細く作っている。この種の壺はいずれも外面が焼けただれ表面が剝離している。火にあてられたものと思われる(6～9)。第3に1点ではあるが刻印のされたものがある。厚手で口縁はやや外反し，内面の底部には布目痕が残っている。なお刻印の文字は判読できなかった(5)。いずれも江戸時代前半～中期の



第39図　土師皿実測図(4)



第40図　塩壺実測図

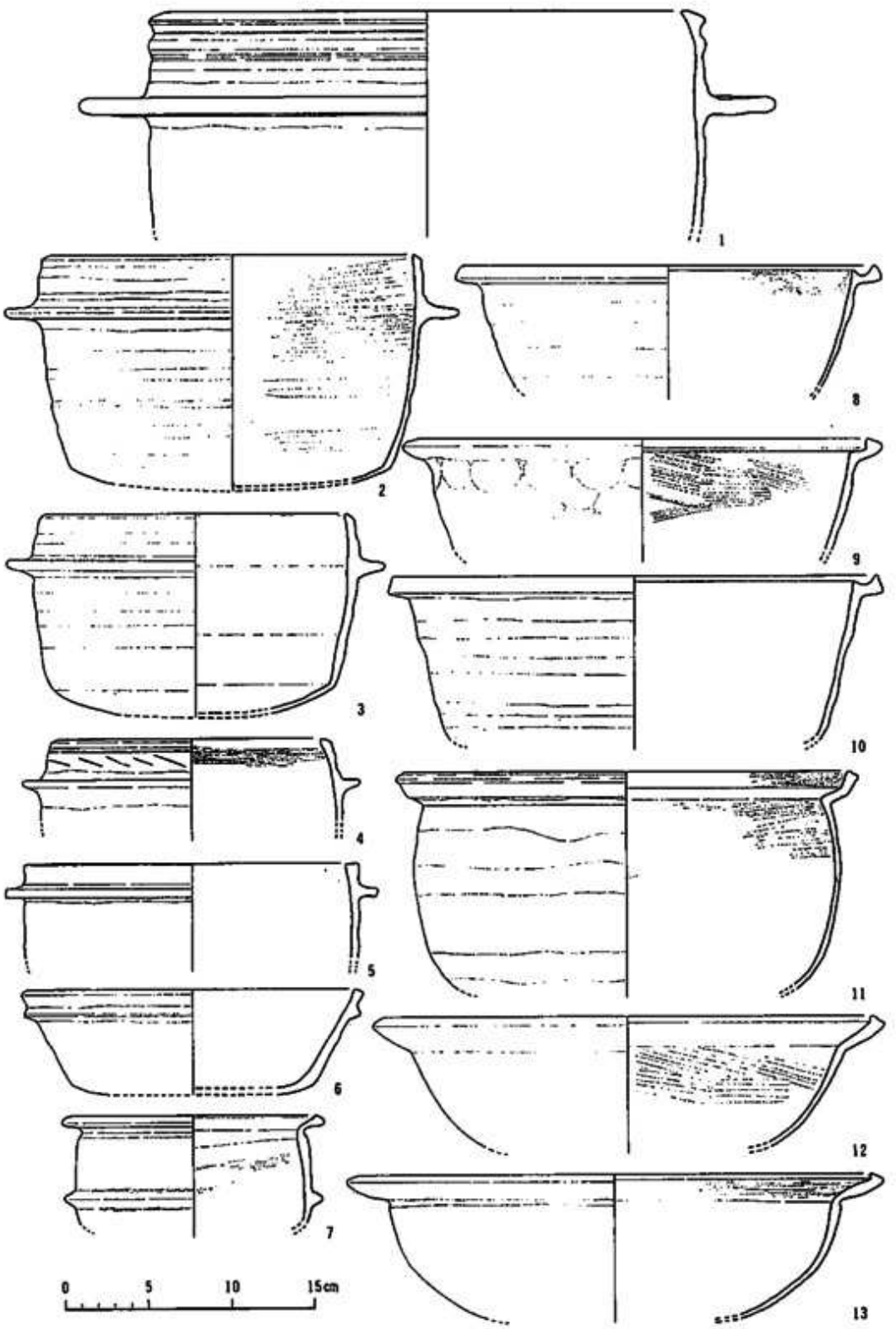
ものであろう。蓋も多く出土しているが，いずれもほぼ同様の作りである(10～15)。口径からみて第1のタイプに対応するものであろう。

6　土釜・土鍋類(第41図，図版第51)

第41図1はきわめて大形の羽釜で，口径約33cmである。口縁はやや内彎し，内外面ともナデ調整を行い，外面には段差をつけている。2・3はこれより小形のもので作りは1とほぼ共通するが，外面の段差が顕著でなく，また内面はハケ目状のナデ調整痕が認められる。4も2・3とほぼ同様の作りであるが，外面に斜方向の沈線が認められる。5は口縁の上端が平面的で，鍔がやや下向きに取りつけられる。以上の羽釜は鍔より下部に炭の付着が顕著である。6は口縁近くに断面三角形の鍔をとりつけたものでやはり内面にはハケ目痕が認められる。7は小形で口縁は強く外反し胴の下部に鍔がつけられる。6・7には炭の付着は認められない。

8～10は口縁部に受けを作っている。作りは2～4とほぼ同様で外面は粗い指おさえまたはナデ調整を行い，内面はハケ目痕が顕著である。11は口縁が外反したのちやや立ち上るもので，作りは前者と共通している。

12・13は浅い器形で口縁部は外反し口端部を内側に折り込んでいる。いずれも口縁部は単なるナデ調整を行うが，体部は内外面とも丁寧なヘラみがきを施す。外面には炭の付着が顕著で

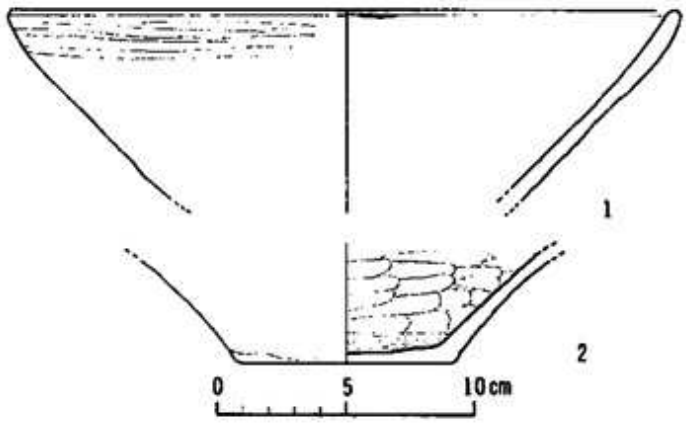


第41図　土釜・土鍋類実測図

ある。1～4，8～11は室町期と推定される。6・7は江戸期のものであろう。

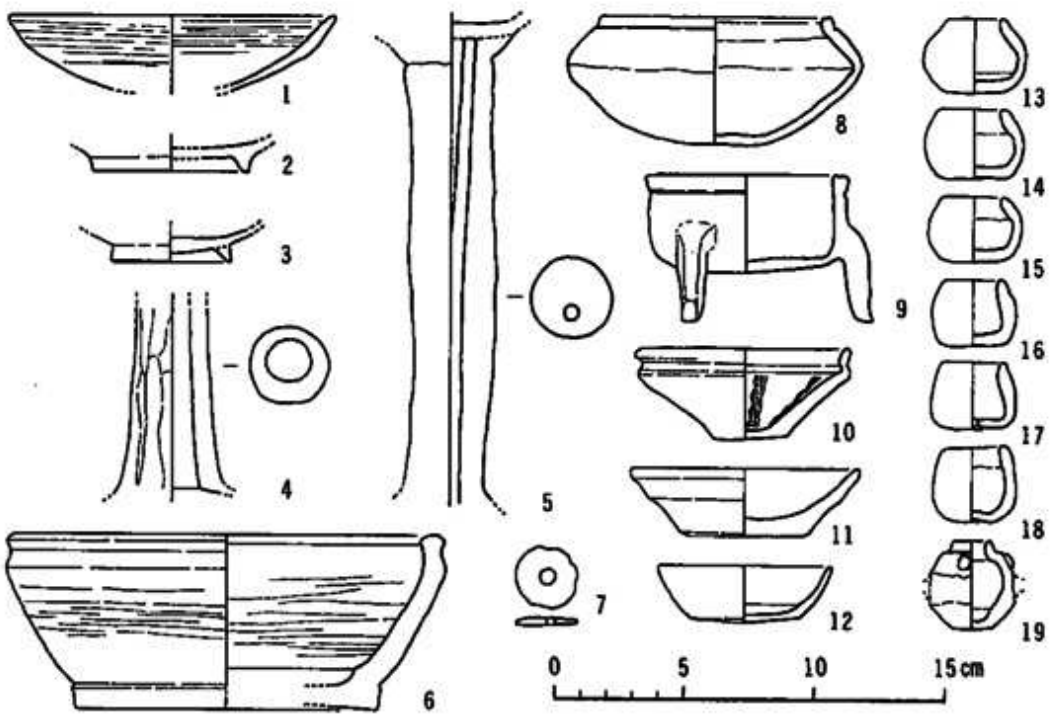
7　各種の土器類(第42・43図，図版第52)

第42図は土師質の鉢で内面を丁寧にヘラみがきしている。外面は口縁付近のみナデ調整を行い下部は指おさえ痕が顕著である。



第42図　鉢実測図

第43図1～3は瓦器で内面には暗文がみられる。ただし3は生焼けで黄褐色を呈する。4・5は高杯の脚で，4は細かく面取りを行っているが，5は全くの手づくねである。6は鉢形の陶器で，赤褐色を呈し，長石の混入が顕著である。7は薄い紡錘車様の模造品で穴の周辺には炭化物の付着が認められる。8・9は灰白色の土師質の土器で，9は三足がつく鼎形になる。10は擂鉢の模造品で全面黒色を呈している。外面にヘラみがきを行ったきわめて丁寧な作りである。11は灰白色を呈する須恵質の土器であるが，胎土には砂粒の混入が多い。12は薄手で丁寧な調整を行った灰白色の陶器で点々と自然釉の付着が認められる。13

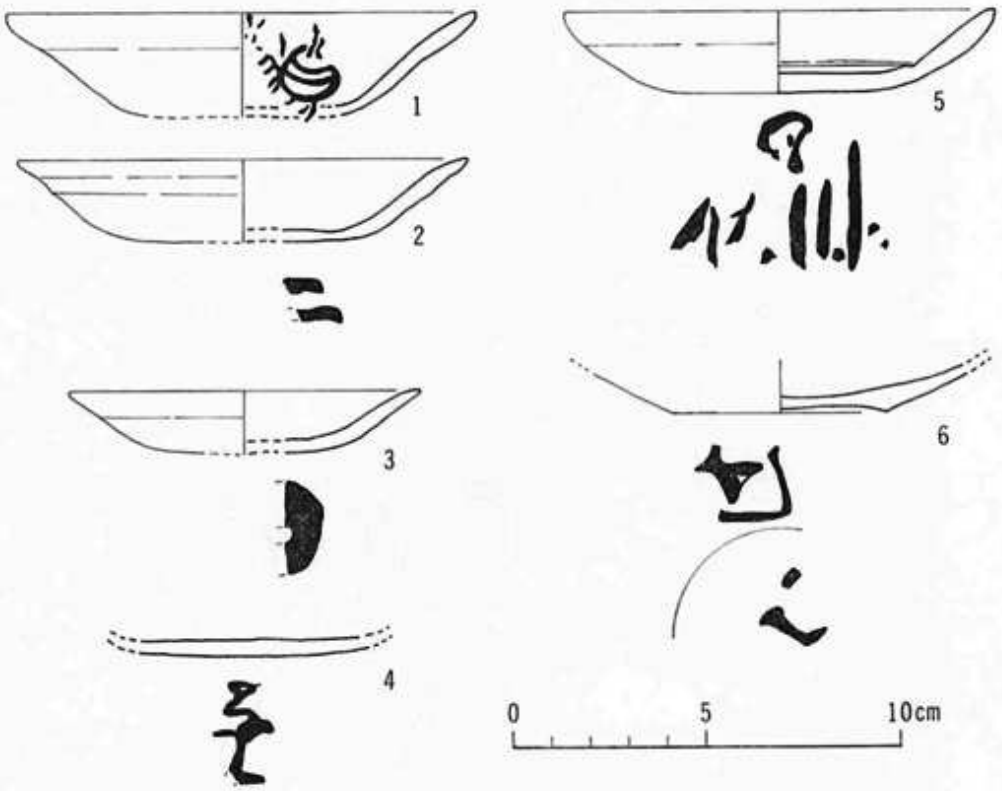


第43図　各種土器類実測図

～18は土師質の小壺でこのうち17では底部に穿孔がなされている。19は体部に鋲の痕跡が残っており，肩には把手が付けられている。羽釜のミニチュアかとも推定される。用途は不明であるが祭祀用のものであろうか。

8　墨書土器(第44図，図版第52)

ほとんどが土師皿に書かれたものであるが，6は陶器に描かれている。第44図1は文様状のものであるが意味は不明である。2は「二」字が見え，3～6は判読できなかった。

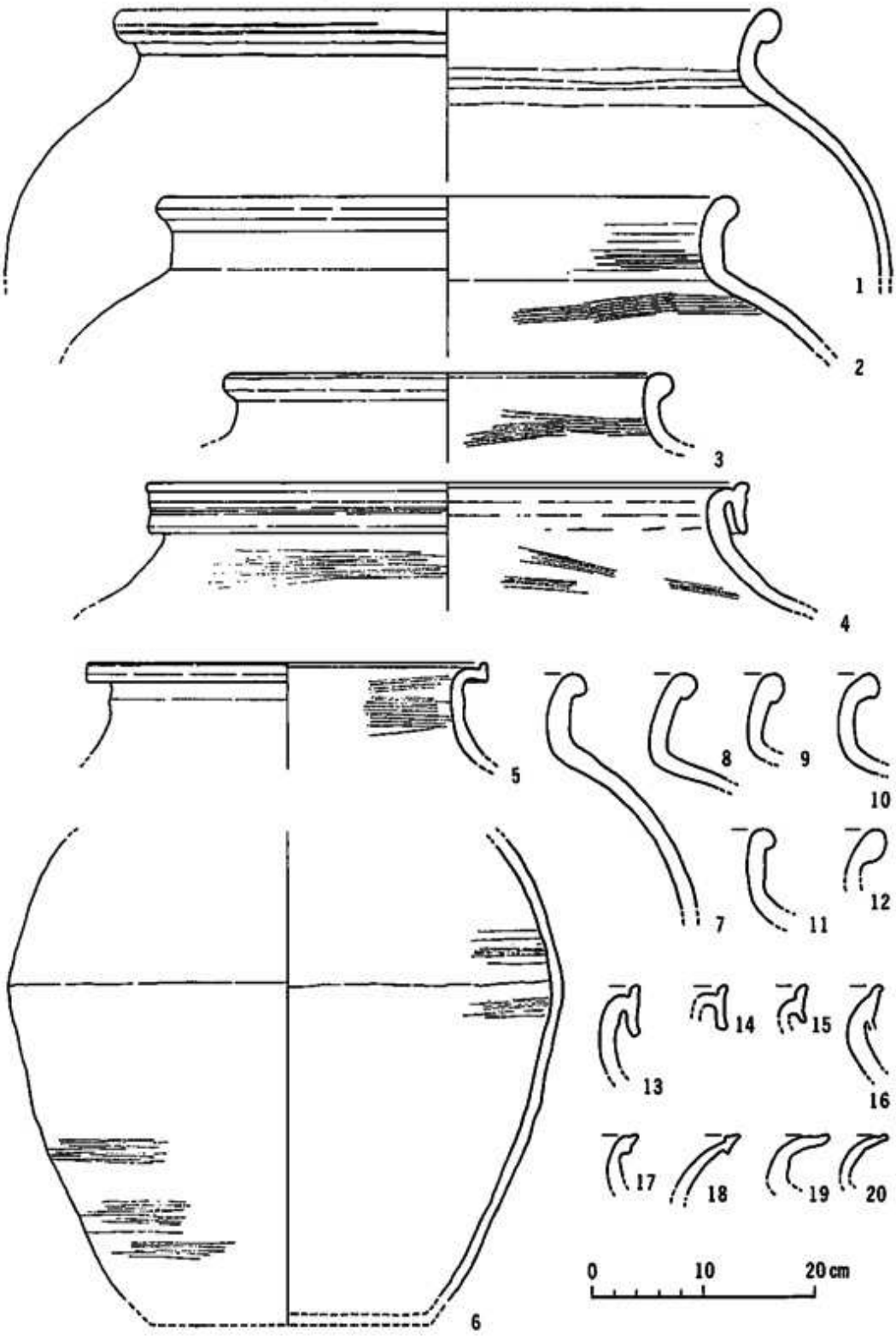


第44図　墨書土器実測図

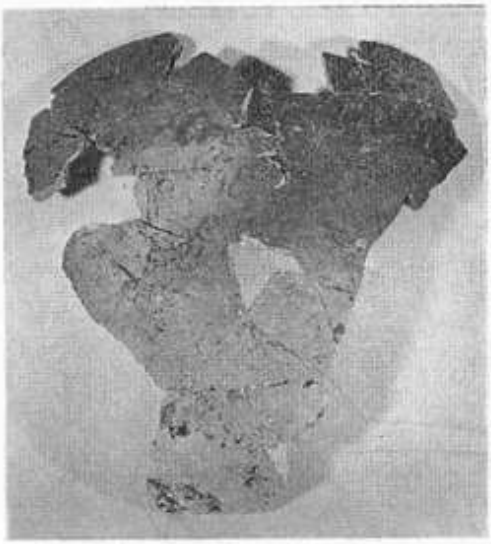
9　大甕類(第45～47図，図版第53)

第45図1は今回出土した大甕中最大のもので口径60cm近くである。表面は緑がかった黝黒色を呈する。口縁は外側に折り返し玉縁状を呈している。内面は丁寧なナデ調整を行う。胎土に長石などの混入がやや目立つ。2も胎土は1に酷似しているが，表面は灰色で一部にウルシによる補修痕が残る。7～11も，頸の立ち上りや口縁の形にやや差が認められるが，胎土・焼成・色調は似通っている。3・12も玉縁状の口縁を持つが，表面は赤褐色を呈し，胎土に砂の混入は少い。

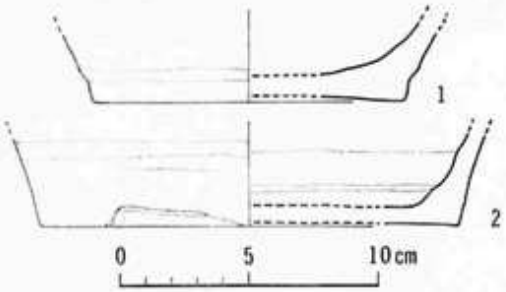
4・13～16は常滑産の大甕で，胎土には長石粒などの混入が比較的目立つ。5は全体に赤褐色を呈し，口縁はほぼ水平に外反し口端部がやや立ち上る。胎土は比較的精良である。6は信楽産の大甕の体部で，茶褐色～黄褐色を呈する。胎土には長石の混入が顕著である。17は，表



第45図　大甕類実測図



第46図　大　甕



第47図　甕底部実測図

面がくすんだ緑色を呈し胎土には砂粒を混じる。18～20は灰白の須恵質の大甕である。

第47図は甕の底部でいずれも須恵質の灰色を呈するものである。1には糸切り痕が残る。

10　擂鉢(第48・49図，図版第54)

第48図1はやや厚手で大形である。口縁近くの内面には一条の凹線が巡っている。内面の条線は4本単位でやや間隔を置いて施される。2は体部から底にかけての破片で，全体に赤褐色を呈する。櫛目は3本単位で，下部では互に接する。底面の櫛目は2本単位で3本が中央で交互している。備前産であろうか。3・4は口縁部に受け状の作りを持つもので，やや薄手・小形である。櫛目は3が5本，4が6本単位で，赤褐色を呈し長石の混入が多い。5は淡い赤褐色を呈した，長石の混入の多い胎土のもので，櫛目は4本単位になっている。信楽産のものと思われる。

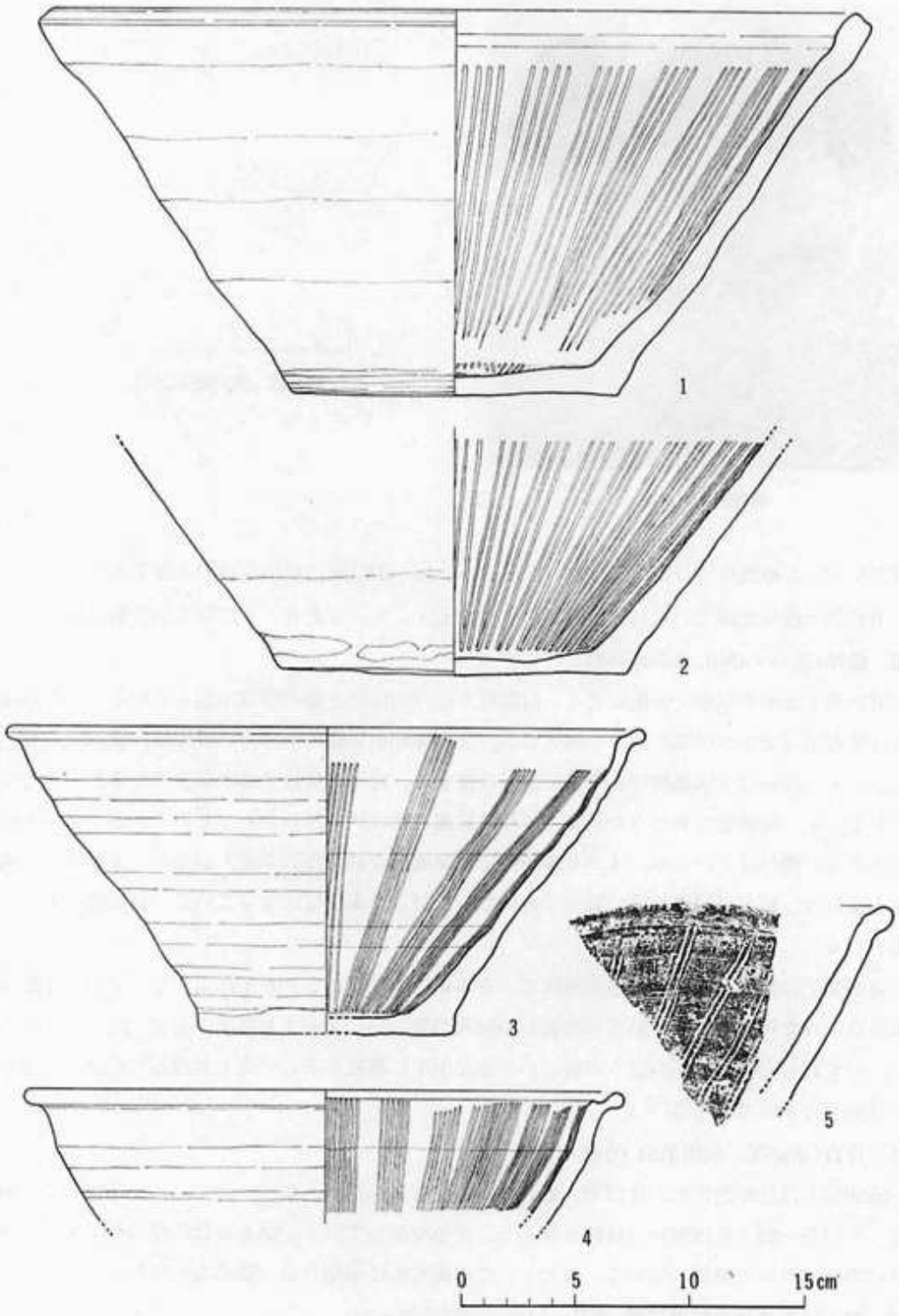
第49図1は注ぎ口を持つ白色の擂鉢で，5本単位の櫛目が5～6条作られる。下部から底面にかけては摩耗が激しい。胎土には長石の混入が著しい。2～4も多小の差異は認められるが，いずれも白色で長石の混入が著しい。また下半の摩耗が著しい点も共通している。いずれも信楽産のものであろう。

11　片口(第50図，図版第54・55)

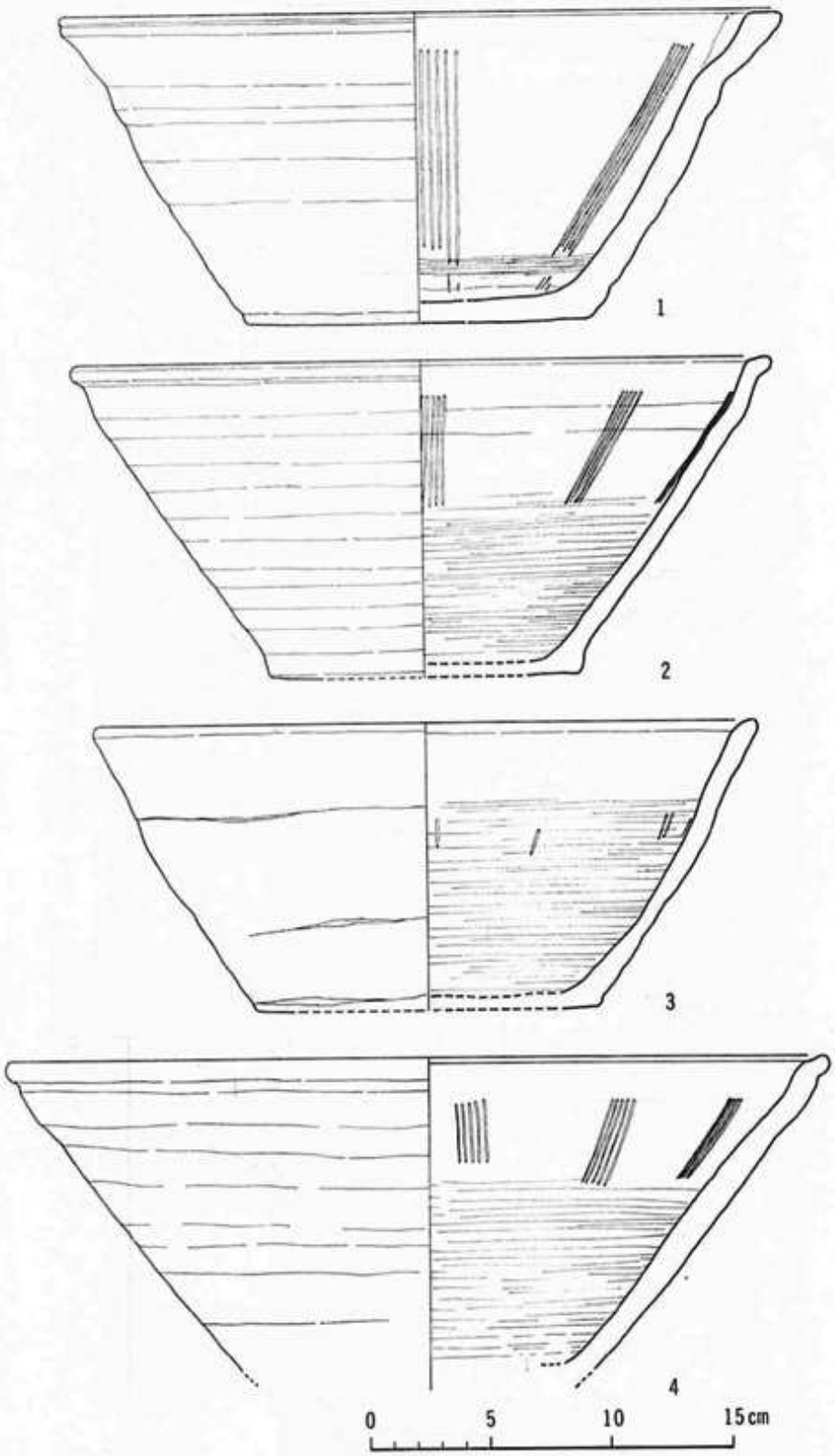
第50図1は比較的大形の片口で，幅約4cmの注ぎ口を持つ。糸切り底で，内面下部はやや摩耗している。胎土には細かな砂粒を混入し，灰色を呈している。他もほぼ同様の作りで，7・8の内面はやはり摩耗している。ただし，この両者には糸切り痕は認められない。

12　皿・塊その他の陶磁器類(第51～54図，図版第56～59)

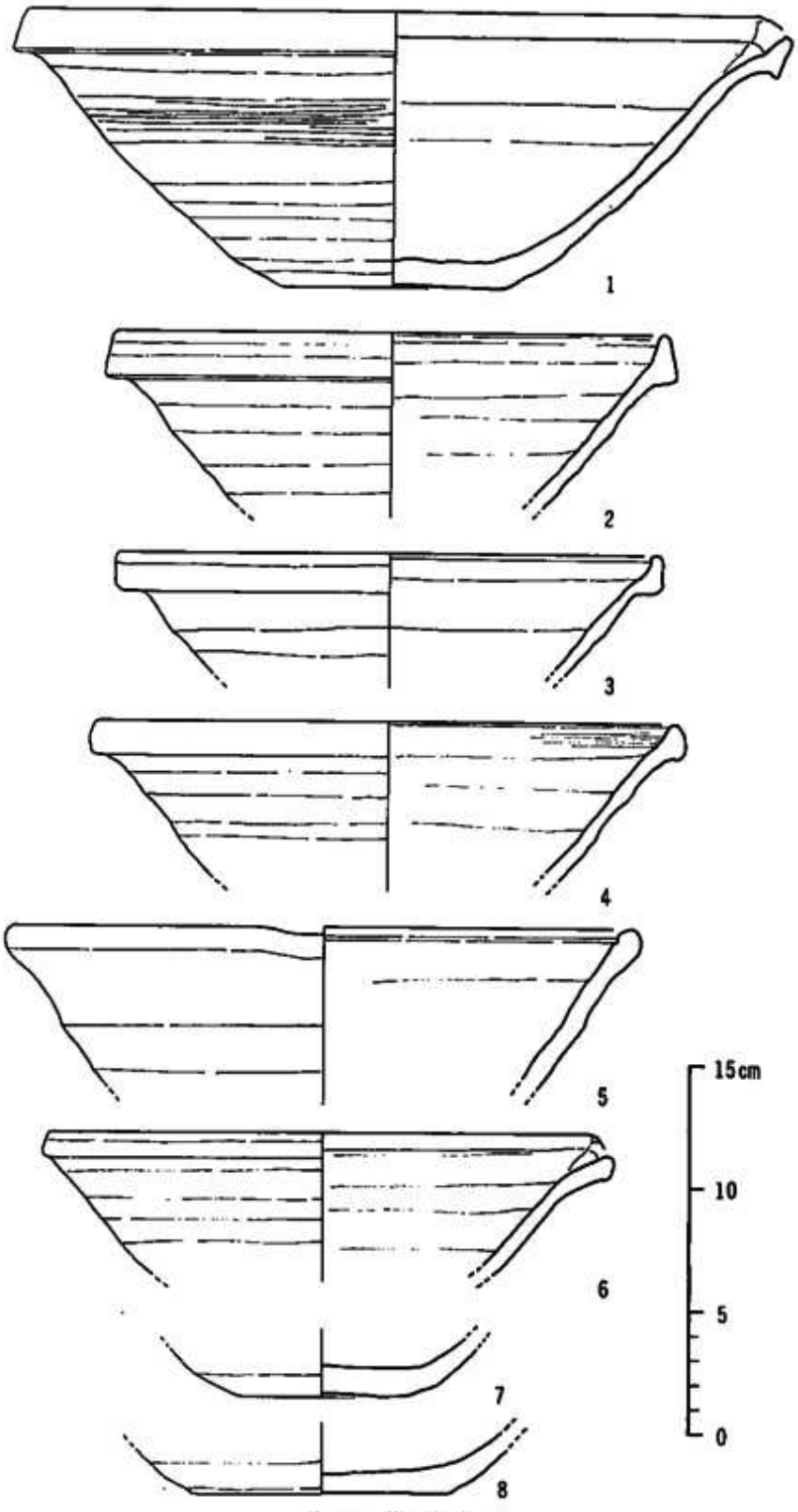
すでに述べた大甕・擂鉢などの他に，皿・塊・花瓶・おろし皿・徳利・急須などの中世～近世の陶磁器類が多量に出土している。この中でも出土量の多いものはやはり瀬戸・美濃系統の



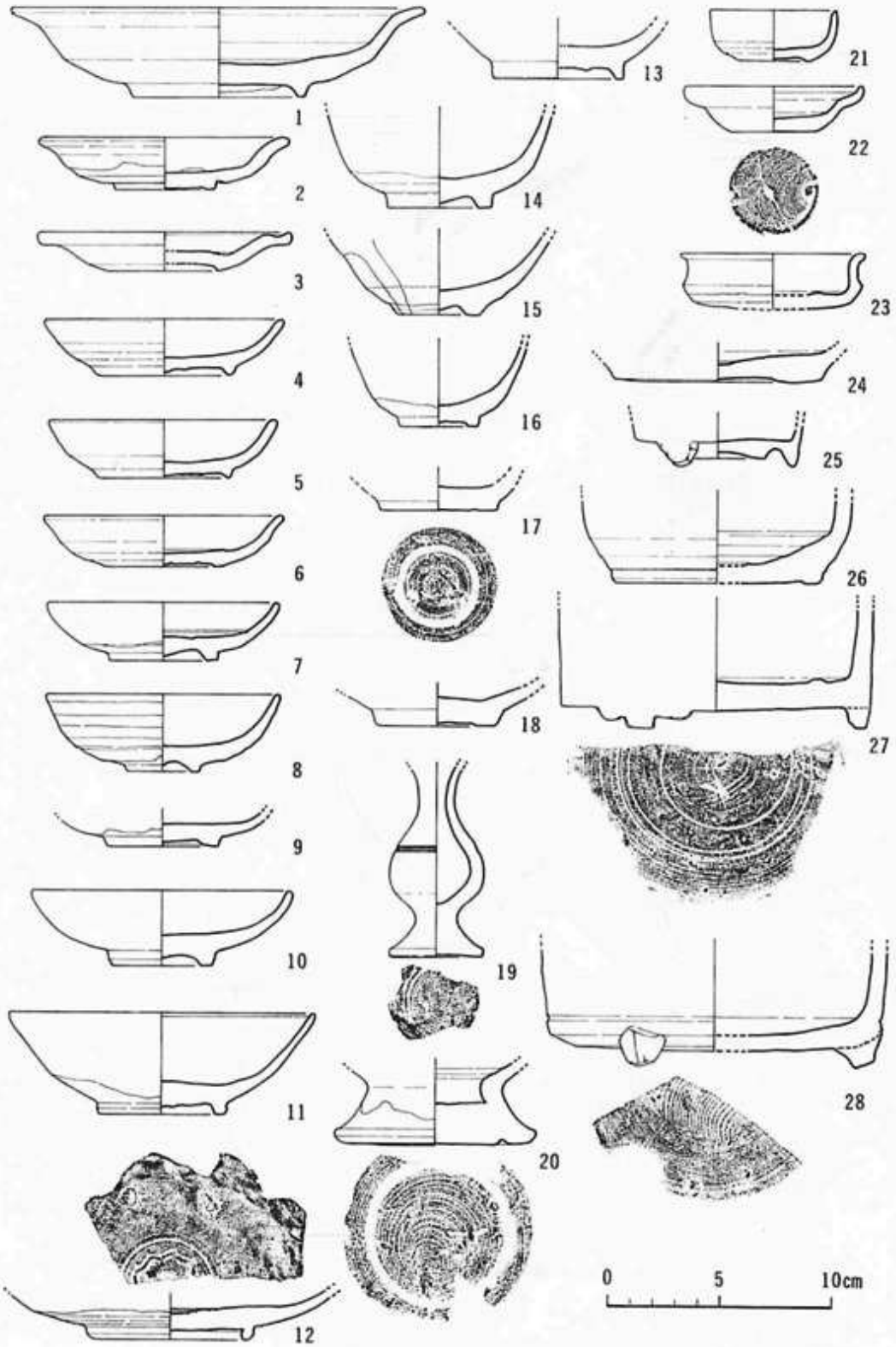
第48図　擂鉢実測図(1)



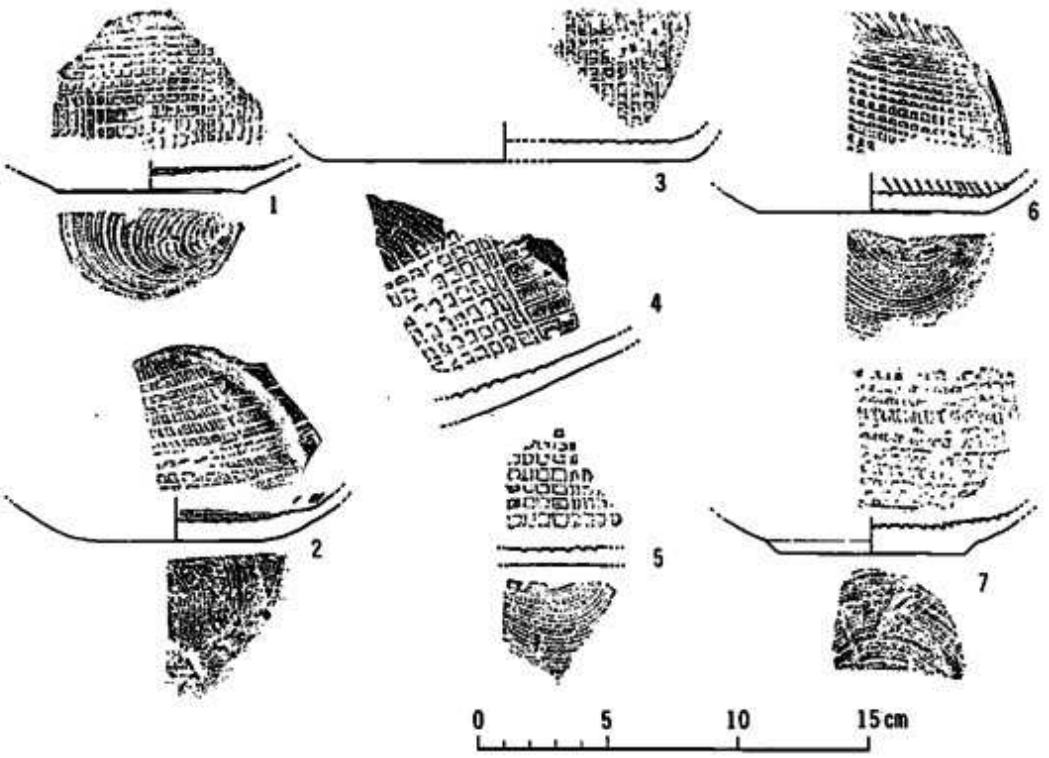
第49図　播鉢実測図(2)



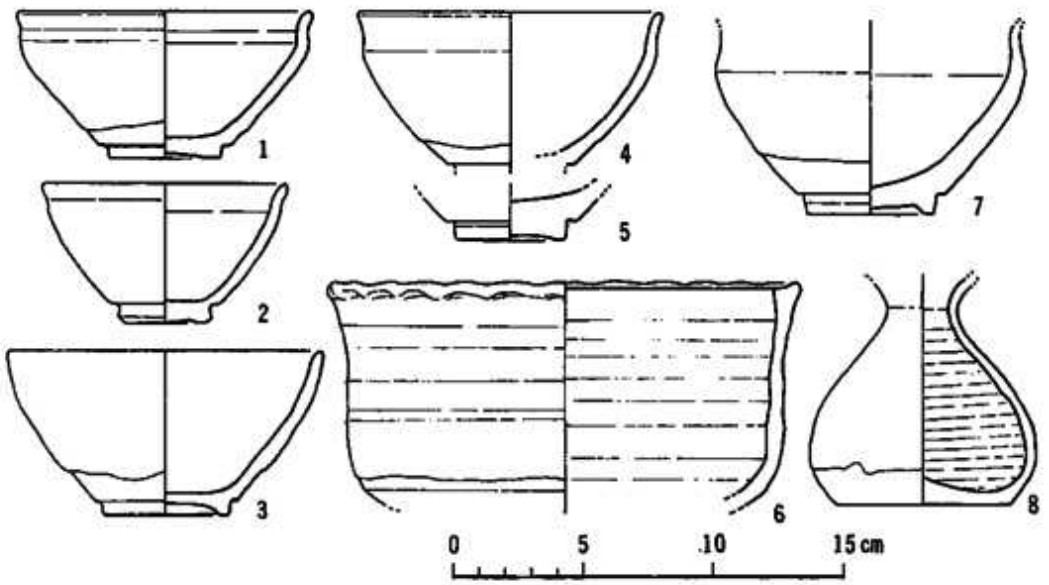
第50図　片口実測図



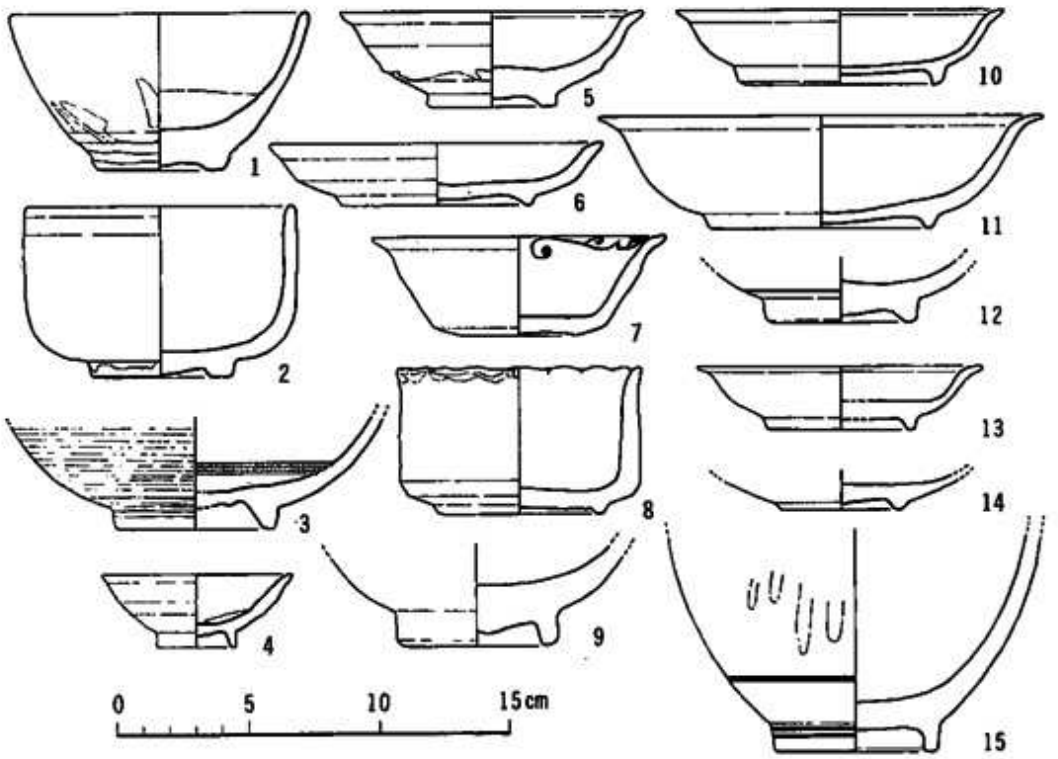
第51図　陶器類実測図(1)



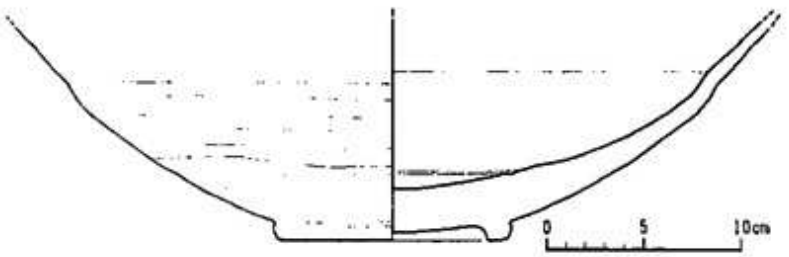
第52図　陶器類実測図(2)



第53図　陶器類実測図(3)



第54図　陶器類実測図(4)



第55図　大皿実測図

ので，他に志野・丹波・唐津・伊万里産のものも多く含まれるようである。

第51・52図(図版第56・57)は灰釉系のもので，ほとんどが瀬戸・美濃の産である。皿などの日常用品が多く，4・5などは美濃の16世紀程のものであろう。また仏具としての花瓶(19)や，花生(27・28)も出土している。第52図(図版第57)はいずれも瀬戸のおろし皿で，底部は糸切り痕を残している。

第53図(図版第58)は鉄釉の陶器で，1～6は15～16世紀程の瀬戸・美濃の天目茶碗である。

他に，志野・丹波・唐津・伊万里産の陶磁器なども多く，第54・55図(図版第50の下，58・59)に図示した。

第1表　土器類出土地点・層位一覧表

挿図	図版	出土地		層位
（緑釉陶器）				
32—1	43—1	A—5	西中央部	灰褐色土
2	2	A—7	東南部ピット	
3	5	A—1		攪乱
4	9	A—2		地山直上
5	3	B—6		地山直上
6	6	A—5		灰褐色土
7	8	A—11	南東部	暗黒青色粘質土
8	7	A—1		攪乱
9	10	A—3	ピット26	
10	4	B—6		地山直上
11	11	A—2	南東部土器溜	
12	15	A—1		攪乱
13	19	A—2		地山直上
14	12	A—3	ピット26	
15	16	A—1		攪乱
16	20	A—1		攪乱
17	13	A—4		
18	17	A—7・8	北部	
19	21	B—1	井戸13	埋土
20	14	A—5		
21	18	A—12		
22	22	B—2	西部	地山直上
（灰釉陶器・須恵質土器）				
33—1	44—1	A—5		攪乱
2		A—10	井戸10	
3	2	B—4	中央部	暗褐色土
4	10	B—2	井戸14	
5	11	B		攪乱
6	12	A—9	中央溝1	暗黒青色粘質土
7	13	A—10	土器溜3	
8		A—5	溝1	上層
9	14	A—11		
10	3	A—3	ピット26	
11		A—1		攪乱
12	4	A—3	井戸3	埋土
13	5	A—10	井戸10	埋土
14		A—8	西北部	暗赤褐色粘質土
15		A—9	北部	
16		A—5	北部	
17		A—9		黒褐色粘質土
18	6	A—7	西部	
19		B—1	北中央部	
20	7	B		攪乱
21		B—1・3		攪乱
33—22		B—5	集石14	
23		B—4	土壙15	
24		B		攪乱
25		A—7	西部	
26		A		表土
27	44—16	A		表土
28		B—1	土壙12	
29	17	A—10	土器溜2	
30	15	B—1・3		攪乱
34—1		A—6	北部	
2		A—7	中央溝1	
3		A—10	土器溜2	
4		A—9	北部	暗赤褐色粘質土
5		B—1	北中央部	暗赤褐色粘質土
6		A—7	溝2	上層
（青磁・白磁類）				
35—1	45—1	A—1		攪乱
2	2	B—1		土壙11
3	3	A—3	溝1	上層
4	4	A—5		攪乱
5	5	B—1	土壙12	
6	6	A		攪乱
7		A—4	中央部	黒褐色土層
8		A—11		地山直上
9		A—6		黒灰色粘質土
10		B—1	北西部	暗赤褐色土
11	7	A—5	西部	灰褐色土
12	8	B—5	集石13	
13		A—1		攪乱
14		A—12		
15		A—10	土器溜1	
16	9	A—10	井戸10	埋土上層
17	10	A—1		暗赤褐色粘質土
18	11	A—9	井戸9	埋土
19	12	B—2	井戸14	
20	13	B—1	北中央部	暗赤褐色粘質土
21	14	A—8		攪乱
22		A		攪乱
23	15	A—10	井戸10	埋土
24	16	B		攪乱
（土師皿1）				
36—1	46—1	B—1	北西部	暗赤褐色土
2	2	A—7	南部溝1	下層一括土器群
3		A—7	南部溝1	下層一括土器群
4		A—7	南部溝1	下層一括土器群
5		A—7	南部溝1	下層一括土器群

36－6		A－7	南部溝1	暗赤褐色粘質土
7		A－7	溝1	上　層
8		A－3	南部溝1西肩	地山直上
9	46－3	A－10	土器溜2	
10		A－10	土器溜2	
11		A－5・6	土壙4	埋　土
12	4	A－1	南東部	暗褐色粘質土
13		A－1	南東部	暗褐色粘質土
14		A－5	東部	灰褐色土
14		A－9	南部	暗赤褐色粘質土
16		A－9		黒褐色粘質土
17		A－6		攪　乱
18	5	A－6		暗赤褐色粘質土
19	6	A－10	井戸10	埋　土
20		A－7	北部溝1	上　層
21	7	A－2		表　土
22	8	A－8		攪　乱
23		A－11	溝1	上層(暗黒青色粘質土)
24		A－5	西部	
24		B－3	土壙17	埋　土
26	9	B－3	土壙16	埋　土
27		A－11	溝2	下層(灰青色砂上面)
28	10	A－2	西南部	暗赤褐色粘質土
29	11	B－3	土壙17	埋　土
30		A－2		表　土
31	12	B－3	土壙17	埋　土
32		B－3	土壙17	埋　土
33	13	A－12	南半中央部	暗黒青色土
34		A－10	土壙9	埋　土
35	14	B－4	土壙15	
36		A－10	土器溜1	
37		A－5	東部	
38		A－12	南半中央部	暗黒青色土
39	15	B－4	土壙15	
40	16	A－4	井戸5	
41		A－10	土器溜2	
42	17	A－10	土器溜2	
43	18	A－10	土器溜2	
44	19	A－10	土器溜2	

（土師皿2）

37－1	47－1	B－3	土壙17	
2		B－2	東北部	暗褐色土
3		A－3	南部溝1	
4	2	A－4	北半部	
5		A－10	西部	
6		A－10	土器溜3	
7		A－10	土器溜2	
8	3	A－5・6	北部	暗赤褐色粘質土
9		A－9		攪　乱
10	47－4	A－10	瓦溜5	
11		A－6		暗赤褐色粘質土
12	5	A－4	北半部	
13		A－10		表　土
14		A－7	南半部	暗赤褐色粘質土
15		A－6		暗赤褐色粘質土
16	6	A－4	北半部	
17		A－5・6	土壙4	暗赤褐色土
18		A－6		暗赤褐色粘質土
19	7	A－4	北半部	
20	8	A－10	西部	
21		A－10	土器溜1	
22		A－8	ピット23	底　面
23		A－9	溝1	黒灰色粘質土
24		A－5	溝1	
25		A－5	東部	灰褐色土
26	9	A－10	瓦溜5	
27	10	A－6・8	土壙6	
28		A－3	土壙2	埋　土
29		A－7	南部溝1	下層一括土器群
30		A－7	溝1	上　層
31		A－7	溝1	上　層
32		A－3		表　土
33	11	A－3	土壙2	埋　土
34		A－10	土器溜2	
35	12	A－3	南部溝1	
36		A－5・6	土壙4	埋　土
37		A－1	南東部	暗褐色粘質土
38	13	A－7	溝1	上　層
39		A－1	南東部	暗褐色粘質土
40	14	A－5	溝1	上　層
41		A－5	溝1	
42		A－5	西部	灰褐色土
43		A－1	南東部	暗褐色粘質土
44	15	A－7	南部溝1	下　層
45		A－7	南部溝1	下　層
46		A－7	溝2	上　層
47		A－5	溝1	
48		A－5	溝1	
49		A－5		攪　乱
50		A－7	中央溝1	上　層
51		A－5		暗赤褐色粘質土
52	16	A－4	ピット24	
53		A－7	中央溝1	
54		A－5	溝1	
55		A－5	溝1	
56		A－7	南部溝1	下層一括土器群
57	17	A－3	東部	暗赤褐色土

挿図	図版	出土地		層位
37—58		A—11	南東部	暗黒青色粘質土
59		A—7	溝2	
60	47—18	A—7	溝2	
61		A—7	中央溝1	
62		A—5	溝1	上層
63		A—5	西部	灰褐色土
64		A—5		暗赤褐色粘質土
65		A—5	溝1	
66	19	A—11	東半部	暗黒青色粘質土
67		A—5	溝1	
68	20	A—4	ピット24	
69		A—7	中央溝1	上層
70	21	A—9	北部溝1	
71		A—1	東部	灰褐色土
72		A—7	溝2	
73	22	A—11	溝1	上層(暗黒青色粘質土)
74	23	A—9	北部溝1	
75		A—1	南東部	暗褐色粘質土
76		A—1	南東部	暗褐色粘質土
77		A—7	南部溝1	暗赤褐色粘質土
78	24	A—7	北部溝1	上層
79		A—5		灰褐色土
80	25	B—1	土壙11	
81		B—4	土壙15	
82		A—10	土器溜1	
83		B—4	土壙15	
84		B—3	西半中央部	黄赤褐色砂層
85		A—8	土壙8	埋土
86		B—1	土壙11	

(土師皿3)

38—1	48—1	A—1	南東部	攪乱(土器溜)
2		A—5	西南部	灰褐色土
3	2	A—1		暗赤褐色粘質土
4		A—7	南部溝1	下層一括土器群
5		A—7	溝2	
6	3	B—3	中央西部	粗砂層
7		B—1	土壙11	
8	4	A—5		攪乱
9		B—4	土壙18	埋土
10		B—4	土壙18	埋土
11		A—7	南部溝1	暗赤褐色粘質土
12		A—7	溝1	上層
13		A—5	西部	
14		A—9	溝1	黒灰色土
15		B—1	土壙11	
16		B—1	土壙11	
38—17		B—1	土壙11	
18		A—5		灰褐色土
19	48—5	A—10	土器溜2	
20		A—10	土器溜1	
21		B—4	土壙15	
22		A—10	土壙9	
23	6	B—4	土壙15	
24	7	B—1	土壙11	
25		A—10	土器溜1	
26		A—9	南部	暗赤褐色粘質土
27		A—5	東部	灰褐色土
28	8	A—5	東部	灰褐色土
29		A—9	南部	暗赤褐色粘質土
30		A—5	溝1	
31		A—5	東部	灰褐色土
32		A—8	土壙8	埋土
33	9	A—9	北部溝1	
34	10	A—9		黒灰色土
35		A—4	北半部	
36		A—4	北半部	
37	11	A—11	東半部	暗黒青色粘質土
38		A—11	溝1	暗黒青色粘質土
39		A—10	土器溜2	
40	12	A—10	土器溜2	下部
41		A—10	土器溜2	

(土師皿4)

39—1	49—1	A—7	南部溝1	暗赤褐色粘質土
2	2	A—7	中央溝1	
3		A—7	南部溝1	下層一括土器群
4		A—7	南部溝1	下層一括土器群
5		A—7	溝2	
6		A—7	中央溝1	
7		A—7	南部溝1	下層一括土器群
8		A—7	南部溝1	暗赤褐色粘質土
9	3	A—7	南部溝1	下層一括土器群
10		A—7	東南部ピット	下部
11	4	A—10		
12		A—7	中央溝1	
13	5	A—1		
14		A—7	溝2	
15		A—7	北部溝1	上層
16		A—10	土器溜2	
17		A—10	土器溜2	
18	6	A—5	東部	灰褐色土
19	7	A—5		灰褐色土
20		A—10		表土
21		B—4	土壙15	
22	8	B—4	土壙19	

39—23		A—10	土器溜2	
24		B—1	土壙11	
25		B—4	土壙15	
26	49—9	B—1	土壙11	
27		B—1	土壙11	
28		A—7	南部溝1	暗赤褐色粘質土
29		B—1	土壙11	
30		A—8		表　土
31	10	A—5	溝1	
32		A—5	溝1	
33		A—10	土器溜2	
34		A—7	南部溝1	暗赤褐色粘質土
35	11	A—1	南東部	暗褐色粘質土
36		A—7	南部溝1	下層一括土器群
37		A—7	南部溝1	下層一括土器群
38	12	A—7	北部溝1	上　層
39		A—5	東部	灰褐色土
40	13	A—9	中央溝1	暗黒青色土
41		A—9	中央部	
42		A—10	土器溜2	
43	14	A—10	土器溜2	
44	15	A—10	土器溜2	下　部
45		B—1	土壙11	
46		A—6		攪乱(地山直上)
47	16	A—10	土器溜2	
48	17	A—10	土器溜2	
49		A—10	土器溜2	下　部
50	18	A—6		攪乱(地山直上)
(塩　壺)				
40—1	50—4	A—10	土器溜1	
2		A—10	土器溜1	
3	6	A—10	土器溜1	
4	5	A—10	土壙9	埋　土
5	7	A—5		表　土
6	8	B—4	土壙15	
7	9	B—4	土壙15	
8		A—10	土器溜2	
9		A—10	瓦溜5	
10	1	B—4	土壙15	
11	2	B—4	土壙15	
12		B—4	土壙15	
13		A—10	土器溜1	
14		B—1	土壙11	
15	3	B—1	土壙11	
(土釜・土鍋類)				
41—1	51—1	B—5	集石13	
2	2	B—5	北部	地山直上
3	51—3	B—1	集石5	
4		A—11		
5		B—1	北中央部	暗赤褐色土
6	4	A—7	南部	暗赤褐色土
7	5	A—10	東部	
8	6	B—5	集石13	
9		B—5	集石13	
10	7	B—5	集石13	
11	8	A—6		暗赤褐色粘質土
12		B		攪　乱
13	9	A—10	土器溜1	
(鉢)				
42—1		B—4	土壙15	
2		A—5	西北部	灰褐色土
(各種土器)				
43—1	52—1	B—1	北中央部	暗赤褐色粘質土
2	2	A—7	溝1	上　層
3	3	A—11	溝1	上　層
4	4	B—5	北中央部	暗赤褐色粘質土
5	5	B—4	土壙15	
6		A—5	西北部	褐色土
7		B—1	土壙11	
8	7	B		攪　乱
9	8	B—4	土壙15	
10	9	B—4	土壙15	
11	6	B—1	土壙12	
12		B—5	集石13	
13	10	B—4	土壙15	
14	11	B—4	土壙15	
15	12	B—4	土壙15	
16		A—5		表　土
17	13	A—4	井戸6	埋土上層
18	14	B—1	土壙11	
19	15	A—7・8		表　土
(墨書土器)				
44—1	52—16	A—5・6	溝状遺構1	
2	17	A—5	井戸4	
3	18	A—5	西中央部	
4	19	A—11	溝1	
5	20	A—5	西部	
6	21	B—1	土壙12	
(大　甕)				
45—1	53—1	A—2	土壙1	
2		A—2	土壙1	
3	3	A—2	南東部土器溜	

挿図	図版	出土地		層位
45－4	53－6	B－2	西中央部	地山直上
5	9	A－2	南東部土器溜	
6	第46図	A－1		攪乱
7		A－8		攪乱
8	53－2	B－1	土壙11	
9		A－2	井戸2	
10		B－1		攪乱
11	4	A－1	井戸1	
12		B－4		攪乱
13	7	A		
14		A－1		攪乱
15		A－1		攪乱
16	8	A－11		
17	10	A－5	井戸4	
18		B－1	北中央部	暗赤褐色粘質土
19	5	A－11	中央溝1	暗黒青色粘質土
20		A－7	北部	
（悪底部）				
47－1		A－5	ピット25	
2		A－1	北部	
（擂鉢1）				
48－1	54－1	A－6		暗褐色土
2	2	A－5		攪乱
3		A－1		攪乱
4		A－10	土器溜1	
5		A－4		表土
（擂鉢2）				
49－1	54－3	A－5	溝1	上層
2		A－7		攪乱
3		A－5	東部	灰褐色土
4	4	A－5		灰褐色土
（片口）				
50－1	54－5	A－8		攪乱
2	55－1	A－9		黒褐色粘質土
3	2	B－1	集石10	
4		A－2	南東部土器溜	
5		B－1	土壙11	
6	3	B－3	北部	攪乱
7	4	A－11	北西部	暗黒褐色土
8	5	B－1	土壙11	
（陶器類1）				
51－1	56－1	A－6		灰褐色粘質土
2	2	A－7	中央部	暗赤褐色土
51－3		A－8	土壙8	埋土
4	56－3	B－4	土壙15	下部
5	4	B－4	土壙15	
6		A－9		攪乱
7	5	A－10	土器溜1	
8	6	A－10	土器溜1	
9		B－4	土壙15	
10	7	B－1	土壙11	
11		B－1	土壙11	
12	8	B－4		攪乱
13		A－9	井戸9	
14	9	A－10	土器溜1	
15	10	A－10	土器溜1	
16	57－1	A－5	東部	
17		A－7・8	中央部	
18		A－10	土器溜1	
19	2	A－6	土壙4	
20	3	A－7	西部	
21	4	A－4	井戸6	埋土
22	5	A－8		攪乱
23		A－9		
24		A－11	溝2	下層（灰青色砂上面）
25		A－4		
26		A－9	南部	暗赤褐色粘質土
27	6	A－5		灰褐色土
28		A－7	溝2	下層
（陶器類2）				
52－1	57－7	A－7		攪乱
2	8	A－9	南部溝1	暗黒青色粘質土
3	10	B－4	土壙20	
4	9	A－9	南部	暗黒青色粘質土
5	11	A－4	北部	暗黒青色土
6	12	B－5	北中央部	暗赤褐色土
7	13	A－6	北東部	暗赤褐色粘質土
（陶器類3）				
53－1	58－1	B－1	土壙11	
2	2	A－1	南東部	攪乱（土器溜）
3	3	A－9	北部	暗赤褐色粘質土
4		A		攪乱
5		A－1		攪乱
6	4	A－1	南東部	攪乱（土器溜）
7	5	A－5	北部	
8		B－5	東北部	暗赤褐色土
（陶器類4）				
54－1	58－6	A－10	土壙9	埋土
2		A－10	土壙9	埋土

54—3		A—1	溝1	上　層
4	58—7	B—1	井戸11	
5	8	B—1	土壙11	
6		A—10	土器溜1	
7	9	A—6		
8	10	A—10	土器溜1	
9		A—9	溝2	上　層
10	59—1	A—7	中央溝1	暗赤褐色粘質土
11	2	A—1	溝1	上　層
12	3	B—5	中央部	砂土層
13	4	A—7	中央部	暗赤褐色粘質土
14	5	A—12		暗黒青色土

15		A—4		攪　乱
（その他の陶器類）				
55		B—4	土壙19	
	59—6	A—1		攪　乱
	7	A		攪　乱
	8	A—10	土器溜1	
	9	A		攪　乱
	10	A		攪　乱
	11	A—5		灰褐色土
	12	A—1		攪　乱

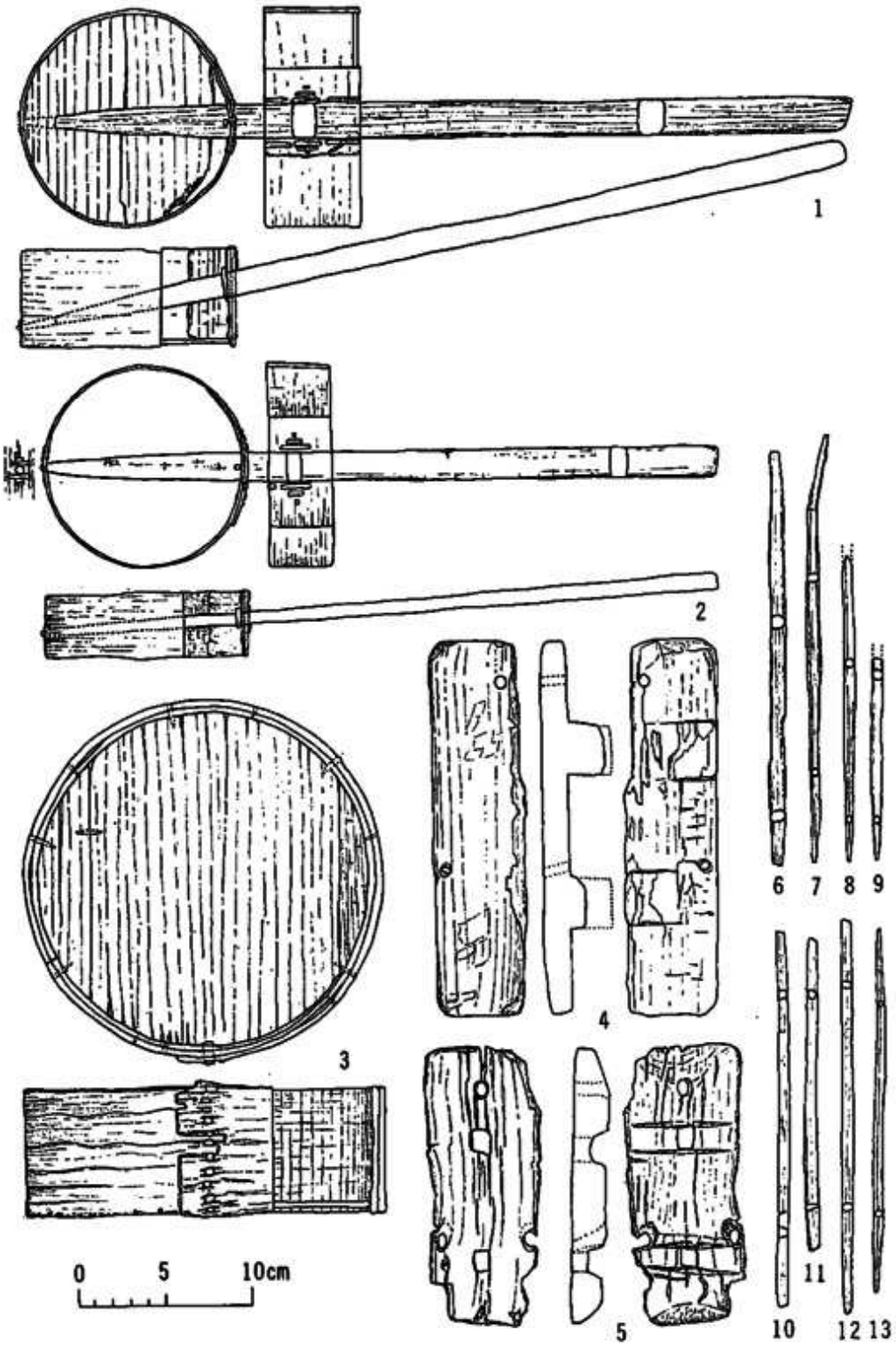
第3節　木　製　品

1　柄杓（第56図1・2，図版第60の1）

井戸11からは曲物製の柄杓が2点出土している。いずれも破損が著しいが，曲物の杓に木製の柄が着き，十分に従来の姿を知ることができる。第56図1の杓は直径約12.5cm，高さ5.5cmで，内側底板までの深さは5.2cmである。杓部の側板は厚さ2mmほどの薄いヒノキの柾板である。重ね部分は約7cmほどあり，柄の左右で樺皮を用いてとじあわせている。樺皮の幅は3mmほどである。側板の綴合わせ部分の内側には，幅約5mmの間隔で縦に鋭い鉋引を施して曲げている。杓の底板には，厚さ3mmほどのヒノキの柾目板を用い，細い鉄釘で側板に固定している。釘穴は2個所が残っている。側板の重ねあわせ部分に幅21cm，高さ1.5cmの矩形の孔を穿ち，ここに柄を挿入し，側板内側において柄に栓をさし込んで，柄を固定している。柄は反対側の側板まで延び，柄の先端は側板にさし込まれる。柄は先端が欠けるが，残存する長さは46cm，幅約2.1cm，厚さ1.5cmである。第56図2（図版第60の1）の柄杓は，側板と柄のみで底部を欠く。杓の直径は11.5cm，高さ3.7cmである。側板はヒノキ柾目の薄板を円形に曲げている。重ね合わせ部分は8.5cmほどで，幅4mmの樺皮を用いて，柄の左右で縫い合わせている。柄の先端部分の側板も，樺皮による補強が見られる。柄の長さ39cmで，幅1.8cm，厚さ1cmほどである。側板の重ね合わせ部分に幅1.8cm，高さ1cmの矩形の孔を穿ち，柄を挿入し，側板の内側に栓をして固定する。底板は失なわれていたが，側板の下端に底板を固定した釘穴が認められる。

2　曲物容器（第56図3，図版第60の2）

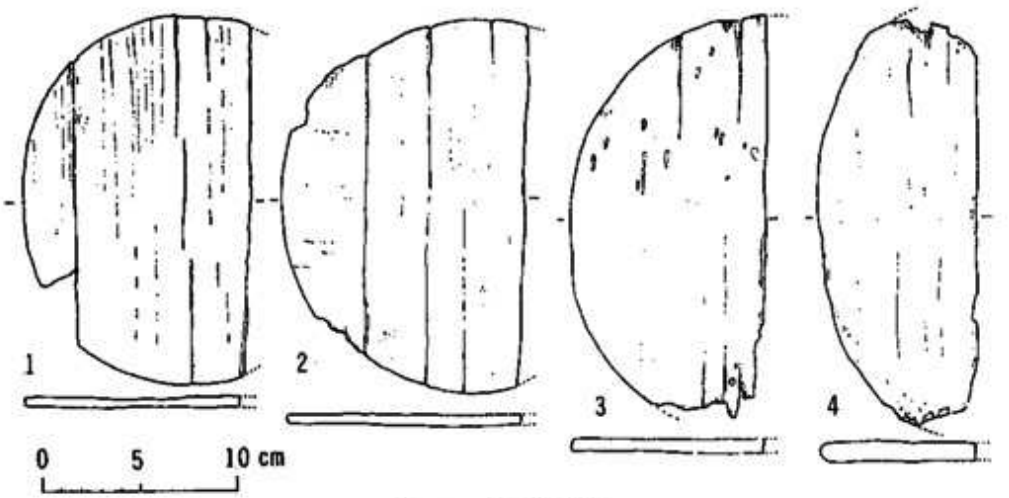
第56図3は井戸9から出土したもので，外径20.8cm，内径19cm，高さ7.3cm，深さ6.6cmが計測される。側板には厚さ2～4mm，幅7.3cm以上，長さ約138cmのヒノキの柾目の薄板を用いている。薄板に間隔6mmほどで縦方向に鉋引を入れたものを2重に巻き込んで，容器としている。重なり部分は約12.5cmで，3重に重なり，幅5mmの樺皮を用いて11段に縫い合わせている。底板は厚さ5mmで，幅16cmと幅3cmの2枚の板を木釘で横につなぎ，底板の直径に必要な



第56図　木器実測図(1)

幅をつくりあげている。底板は６本の木釘によって側板に固定されるが，６本の木釘の中間には短い木釘が打たれている。短い木釘は側板に底板を固定させるためのものではなく，側板の外側下端に沿ってはめた箍を固定する目的で打たれたものではないかと推定されるが，箍はすでに失なわれていた。

第57図(図版第60の３～６)は曲物の底板である。１・２は井戸９からの出土で，また３・４は井戸11からの出土である。１・２・３はヒノキの柾目板で，４も柾目板であるが木質は不明である。



第57図　木器実測図(2)

3　下駄(第56図４・５，図版第62の３・４)

この２点の下駄は井戸９から出土したものである。４は半分に割れているが，形状を知るのには差支えない。台と歯は一本の柾目材でつくられ，台は隅丸の長方形である。台の長さ21.7cm，厚さ1.5cmで，残存幅は5.4cmであるが幅は8.2cmであったと推定される。歯の厚さは2.9cmで，高さは2.5cmほどでなかったかと思われる。鼻緒孔として前方に１孔，後方左側に１孔が残るが，後方右側にも１孔が存在したと推定される。

５は下駄の台で，歯は残らない。台の長さ16cm，幅6.5cm，厚さ(最大)2.2cmが計測される。鼻緒孔は前方に１個所，後方の左右に１個所ずつ，合計３個所が認められる。歯は差込みで残らないが，裏面に歯差込みの溝が２本存在する。２本とも長さ5.9cm，幅1.8cmほどで，溝の中心に歯を固定する栓を差込む方形孔が存在する。この方形孔は表面から裏面に抜け，１辺1.2cmほどである。

4　箸(第56図６～13)

６～13はいずれも木製の箸で，太さと長さによって各種がある。６は太い丸箸で，長さ23.5cm，７はやや細い角箸で長さ24cmほどである。８・９は丸箸であるが頭部を欠く。10・11・12も箸の類と考えられるが，やや扁平で両端が折れている。12は形のよい角箸で，完全に残り，

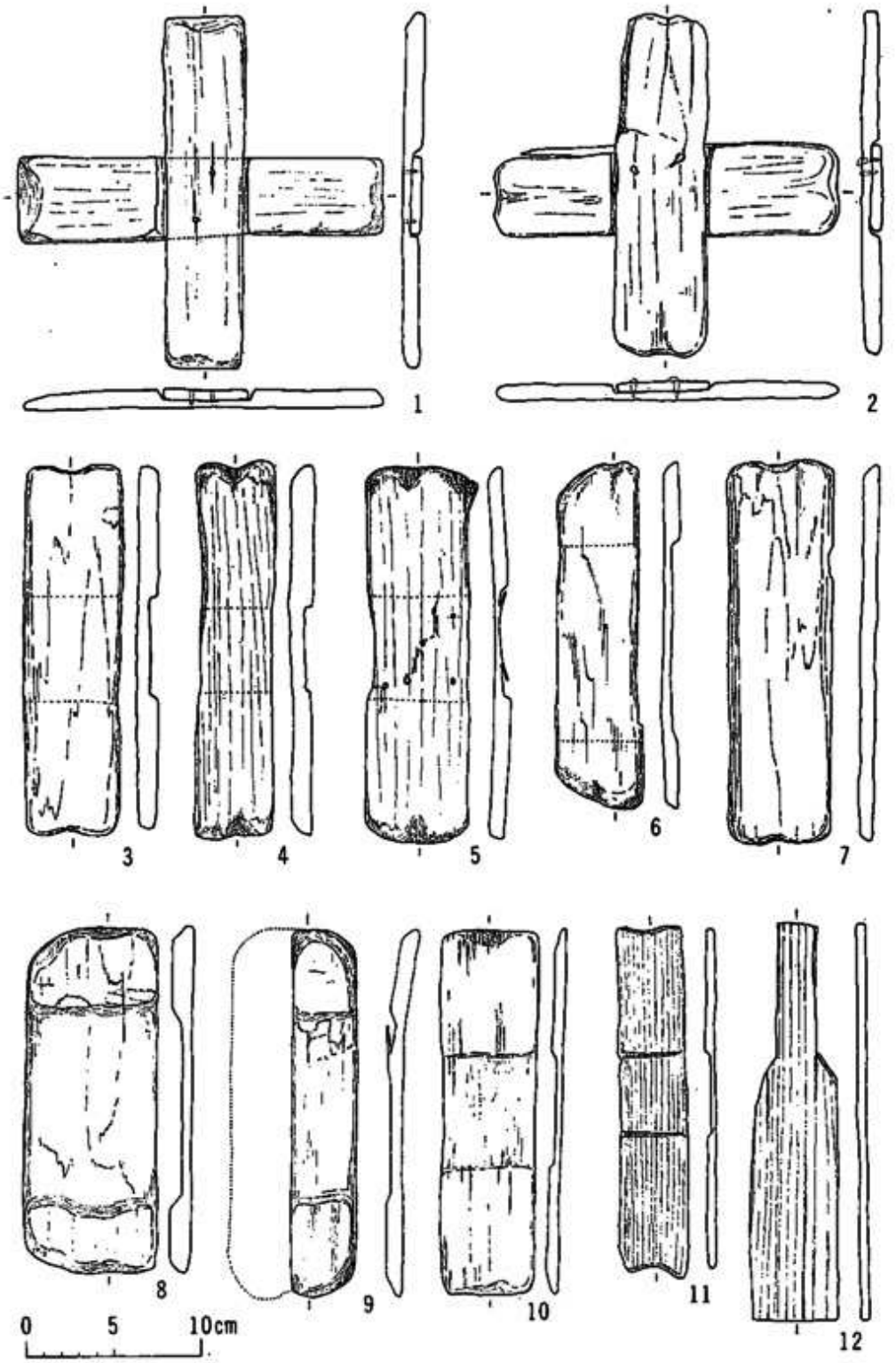
長さ21cmである。

5　台木(第58図1～11，図版第61・62の1・2)

1～11はすべて井戸9から出土した木器である。1は長さ20.5cm，幅4.5～5cm，厚さ0.8cmほどの長方形の2枚の板を十字形に釘づけしている。縦板(下板)は裏に幅5.5cm，深さ0.4cmの溝があり，上端と下端に紐掛のU字形の凹みが存在する。横板(上板)の表には幅5.5cm，深さ0.4cmの溝があり，縦板と十字形に重なっている。横板の左右両端には紐掛の「U」字形の凹みが存在する。2も1と形状はほぼ同じである。縦板と横板は扁平な鉄釘で固定されている。

3～6は台木の下板である。3は長さ21cm，幅5.3cm，厚さ1.3cmの板目材で，上端・下端に紐掛の凹みがあり，裏に幅6cm，深さ0.7cmほどの重ね用の溝が存在する。4は長さ21.5cm，幅4.3cm，厚さ1.2cmの柾目材で，上端・下端に紐掛の凹みがあり，裏に幅5cm，深さ0.6cmほどの重ね用の溝が存在する。5は長さ21.5cm，幅6cm，厚さ1cmのヒノキの柾目材で，上端・下端に紐掛の凹みがあり，裏に幅6.5cm，深さ0.5cmの溝が存在し，溝部分に6個所の釘穴が残っている。6は曲物の底板を利用した台木で，長さ20cm，幅8.5cm，厚さ0.8cmである。上端には紐掛の凹みがあり，下端に凹みは認められないが，紐ずれによると思われる磨耗が認められる。裏には幅11.5cm，深さ4cmの幅広で浅い溝が存在がる。7は長さ21.8cm，幅5.9cm，厚さ0.8cmの長方形の板目材である。表面・裏面とも平らで，表は丸味を有し，上端・下端には紐掛の凹みがある。8～11は台木の上板で，重ね合わせの溝はすべて表につく。8は長さ20cm，幅7.5cm，厚さ1.3cmの板で曲物の底を利用している。上端・下端に紐掛用の凹みがあり，表には幅約22cm，深さ0.6cmの浅い溝が存在する。9も曲物の底と思われる板を利用したもので，長さ21.5cm，厚さ1cmで，板は中央より縦方向に割れている。残る板の幅は3.6cmであるが，紐掛の凹みの中央で割れているため，幅は3.6cmの倍の7.2cmほどであったと考えられる。表には幅11cm，深さ0.5cmの溝がある。10は長さ21cm，幅5.7cm，厚さ0.8cmの板で，上端・下端に紐掛用の凹みがある。表には重ね合わせの幅6.5cm，深さ0.4cmの溝がある。11は長さ20cm，幅3.8cm，厚さ0.7cmの柾目材を用いたもので，上端・下端に凹みがあり，表には幅4.8cm，深さ0.3cmほどの重ね溝がある。12は羽子板状の木器である。長さ23cm，上端幅2.2cm，下端幅5cmで，厚さは0.6cmほどである。

1～11はすべて曲物の台木であると思われる。十字形の台木は曲物を吊す場合に用いられた。台木上に曲物をのせ，台木に十字形に紐を掛けて吊したと思われる。曲物を釣瓶井戸の桶に利用する場合や曲物を天秤から吊す場合に十字形の台木を利用して，台木に紐を掛けている。このような例には，『信貴山縁起絵巻』の門や井戸の場面に描かれた釣瓶の桶の台木が知られる[1]。また『法然上人絵伝』には十字形に紐をかけた釣瓶桶や天秤から台木に紐を掛け，曲物を運ぶ図が描かれている[2]。また『融通念仏縁起絵巻』中にも水くみの図があり，台木を用いて曲物を天秤からさげている[3]。これらの絵巻は12世紀前半から15世紀前半に描かれたもので，井戸9とは年代が一致しないが，井戸9から出土した台木は，これらの絵巻に描かれた十字形の台木と同じように用いられたと考えられる。第58図の台木は井戸から出土したという

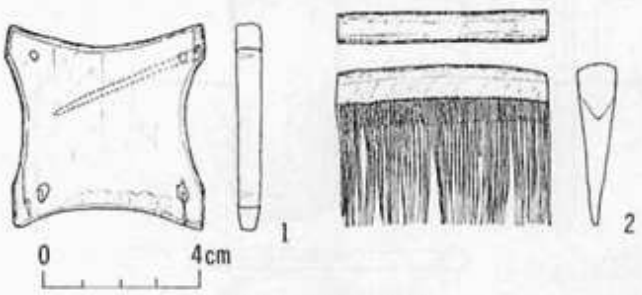


第58図　木器実測図(3)

点を考慮すると，すべて釣瓶桶の台木であったと考えられる。12に関しては，何に使用されたか不明である。

6　櫛(第59図2，図版第62の5)

井戸9から出土した櫛である。両端が折れているので，幅は不明であるが，現存する幅5.5cm，高さ4.2cm，厚さ0.8cmである。背は丸味を有し，ゆるやかに彎曲する。歯は長さ3.2cmで，平均して2cmあたり，22枚ある。



第59図　木器実測図(4)

7　糸巻(第59図1，図版第62の6)

A—11区東部の暗黒青色粘質土層から出土したもので，各辺が内彎した方形の木器である。角から角への直線幅は約5cmで，厚さ0.6cmである。表・裏とも黒漆が塗られている。四角に小孔があり，その性格は不明である。右上方側から左下方に向う深い孔があるが，この孔の性格も不明である。形状から考え糸巻ではないかと推定されるが，確定はできない。

以上の木器類の年代は，木器が沈んでいた井戸9，井戸11の年代から近世初頭から近世後半期のものと限定されるが，細かい年代決定はなかなか困難である。しかし，木器類はすべて江戸時代に属するものとして間違いはないものと思われる。

註

1）『信貴山縁起絵巻』(『日本常民生活絵引』第1巻70)，東京，昭和39年。
2）『法然上人絵伝』(『日本常民生活絵引』第5巻716，731)，東京，昭和43年。
3）『融通念仏縁起絵巻』(『日本常民生活絵引』第5巻816)，東京，昭和43年。

第4節　石　製　品(図版第55の6～9)

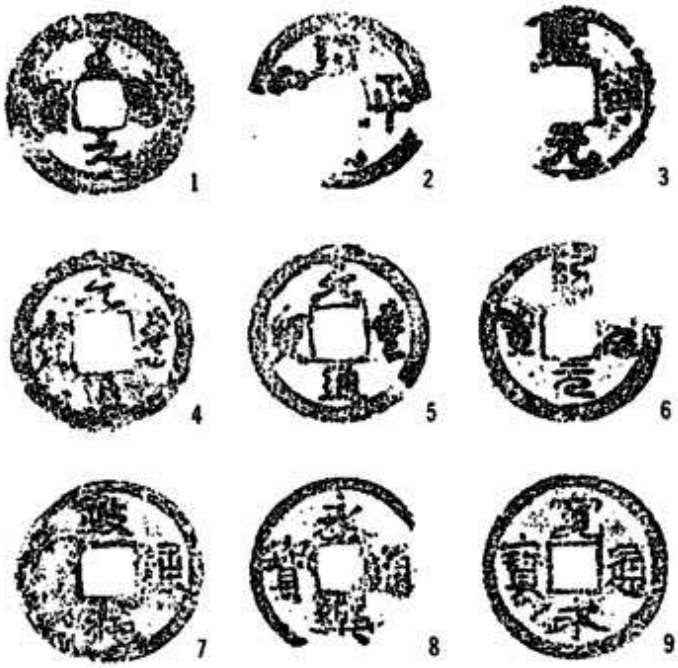
6は五輪石の火・水輪でそれぞれに『蓮』『華』の文字が刻まれている。現高は約11.5cmである。形態から見て中世までさかのぼるものであろう。A—10区瓦溜4から出土している。

7は何らかの建造物のコーナーに用いた石材で，花崗岩を丁寧に加工している。現存幅約11cmで，A—2区砂層上面より出土している。

8・9は臼の断片で8が現存幅約25cm，9が約24cmである。8はA—6区北壁より，9はA—8区黒褐色粘質土層より出土している。

第5節　貨　　幣(第60図)

全部で13枚出土してあり，判読可能なものは図示した9枚であった。このうち8の永楽通宝は2枚がさびついて重なっている。宋銭を主として至道元宝(至道元年初鋳)から政和通宝(政和元年)までのものがみられた。他にB—5区集石12からも判読不能のものが2枚出土している。



1	至道元宝	北宋	至道元年(995)初鋳	A－9	攪乱
2	治平元宝	北宋	治平元年(1064)初鋳	B－4	土壙15
3	熙寧元宝	北宋	熙寧元年(1068)初鋳	A－2	南壁崩土
4	元豊通宝	北宋	元豊元年(1078)初鋳	A－9	黒褐色粘質土
5	元豊通宝	北宋	元豊元年(1078)初鋳	A	攪乱
6	紹聖元宝	北宋	紹聖元年(1094)初鋳	A－10	土器溜1
7	政和通宝	北宋	政和元年(1111)初鋳	A－10	土器溜1
8	永楽通宝	明	永楽6年(1408)初鋳	B－4	土壙15
9	寛永通宝	江戸	寛文8年(1668)以後	A－5	表土

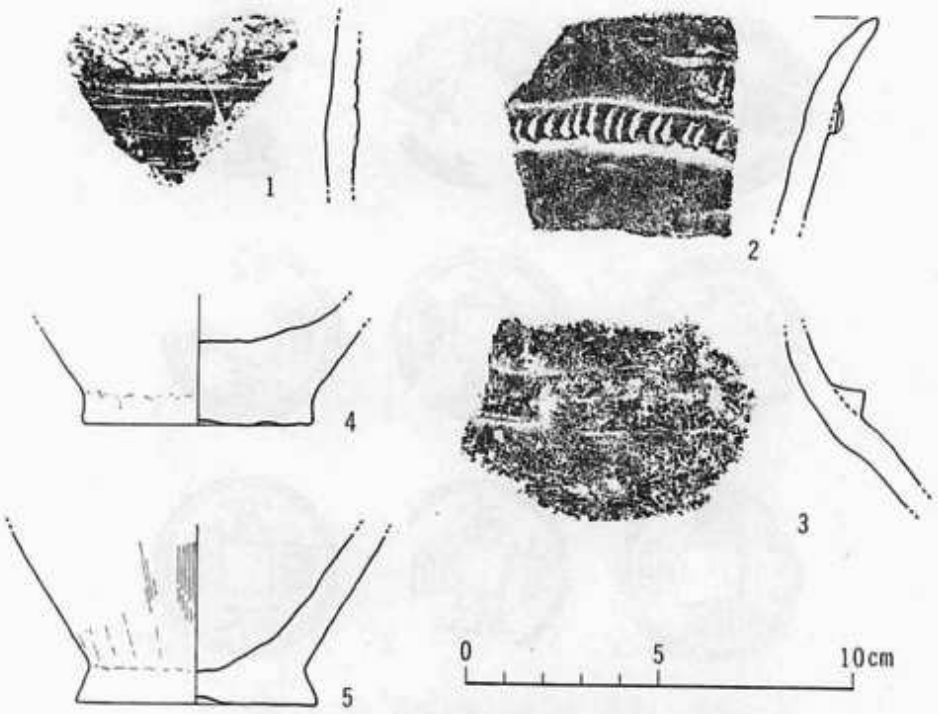
第60図　貨幣拓影（実大）

第6節　平安京造営以前の土器

今回の調査では，B－2区南端からB－4区をへて，B－5・6区中央部を屈曲点とし，B－3区南西隅からさらにA－2区へつづく，平安京造営以前の自然の流路が確認された。以下の土器(第61図)は，その流路内堆積層中より検出されたものである。

1は，条痕調整の施された縄文後期末と推定される鉢形土器である。B－4区砂礫層Ⅰ出土。2は，貼り付け突帯に爪形の刻み目を施した土器で，縄文土器であろうかと推測される。B－4区砂礫層出土。3は，断面三角形の貼り付け突帯をもつ弥生前期末の壺形土器である。A－2区砂礫層出土。4は，胎土に砂粒を多く含んだ部厚い底部で，弥生前期にさかのぼると推定される壺形土器である。B－4区暗青褐色砂質土層Ⅱ出土。5は，胎土に砂粒を多く含み，外面に刷毛目と煤の付着の認められる甕形土器の底部で，弥生中期のものかとみられる。B－4区暗青褐色砂質土層Ⅰ出土。

これらの土器の磨滅は顕著ではなく，遠隔地より流れてきて堆積したものとは考え難い。恐



第61図　平安京造営以前の土器

らくこの遺跡の周辺部に生活遺構の存在した可能性が強いとみられる。従来，京域内における平安京造営以前の時期の遺物の出土は数少なく，詳細を論じられる段階ではない。今回出土した土器は，今後面的な広がりをさらに確認する上で，新たな資料をつけ加えることとなった。

第4章　調査地の沿革

第 1 節

この中京郵便局を含む1区画は，明治初年まで禅宗(臨済宗)天龍寺派の尼門跡寺院瑞雲山通玄寺曇華院が営まれていたところで，現在もその名残を町名(曇華院前町)に留めている。さらに古くは，治承四年(1180)に反平家を旗印に源三位頼政の力を借りて挙兵した高倉宮以仁王が，住まいしていた三条高倉御所の営まれていたところでもある。

この地を平安京造営以前に遡ると，調査地と至近距離にある六角堂の縁起に，この付近を折田郷土車里とする古郷名がみえている。六角堂が現在地をほとんど動いていないといわれていることに従うならば[1]，この地も折田郷土車里の一部であったのかもしれないという推測が成り立つ。しかしそれは飽くまでこの地が折田郷の一部であった可能性があるというだけのことで，三条東洞院として意味をもつようになるには，平安京の造営をまたなければならなかっ

た。

延暦十三年(794)桓武天皇は，わずか10年間で造営半ばの長岡京を離れ，新たに唐の長安を範とした新都を山背国の葛野郡と愛宕郡に跨がる現在の京都盆地に造営し，遷都を敢行した。現在の市街中心部はおおむねこの平安京の都市計画に規制されており，碁盤目状に地割された各々の区画は，当時条坊制によって表示されていた。造営当初平安京は大きく左右両京にわけられていたが，自然条件の好悪によって相方が対照的な変化を示し，右京が多く水田畠と化したのに対し，左京は居住地として多くの貴族・官人層が屋敷を構え，市街地は次第に東へと発展していった。

調査地は，この左京中央部のやや北東に位置し，条坊制を用いて表わすと左京三条四坊二保四町の西側に該当する。

この地を史料の上で跡付けようとすると，その変遷は容易につかみ難く，構築物においては構造・配置はもちろんのこと，その有無さえ定かではない。また土地の所有者の変遷をたどるにしても，得られる史料は単発的なものが多く，それを一つの流れの中に語ることは極めて困難な状況にある。

この地に関する史料の初見は，10世紀半ばのもので『朝野群載』に収められている応和元年(961)八月十五日付の『京都左京三条四坊売買家地券文』と題された土地売券である。これをみてみると，

三条令解　申立売買家地券文事

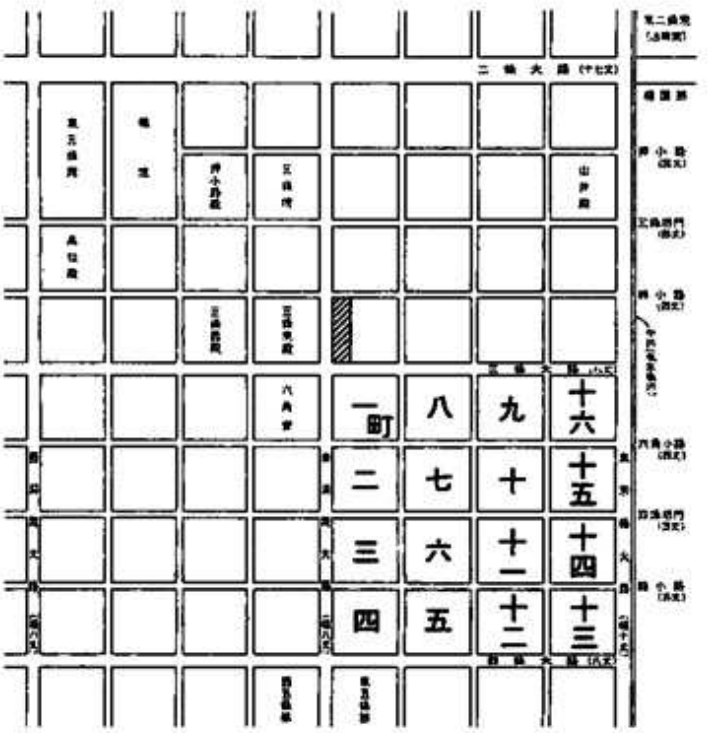
合地捌戸主　在左京三條四坊四町西一行

三間檜皮葺屋壱宇

三間車宿屋壱宇　門屋壱宇

（以下略）

と記されていて，売買の対象となった土地が『三條四坊四町西一行』とあって明確にその所在を知ることができる。これを平安博物館作製の左京図(第62図)を用いてみてみると，東洞院大路に面して三条大路一姉小路間の一行分八戸主全部が該当し，一町四方の区画内における四分の一の面積を



第62図　左京条坊概念図

もつ屋敷地であることがわかる。『海直延根後家辞状[2]』によれば，この屋敷地は天慶八年(946)七月十一日に前上野介従五位下藤原朝臣尚範女より延根後家が買得したもので，それを応和元年に延喜銭百九十貫文をもって散位従四位下藤原朝臣守義女に売与したものとなっている。この売券によって少なくとも天慶八年から応和元年までの持主がわかるが，散位藤原守義女の手に渡ってからの経緯がはっきりしない。これ以後の史料では，この売券のように調査地を明確にオーバーラップするといえるものがなく，以仁王の三条高倉御所の一部になるまでの経緯は今一つ判然としない。

この売券にみえる敷地内には，当時間口三間の檜皮葺の屋敷と同間口の車宿一宇があり，『門屋壱宇』とあるのを門と考えるならば，それに付属して築地塀かそれに類するものがあったものと思われる。

平安京における宅地配分は，一般に難波宮における配分規定を踏襲したものであろうといわれており[3]，その規定をみてみると，

班二給難波京宅地一，三位以上一町以下，五位以上半町以下，六位以下四分一町之一以下[4]

となっていて，平安京でも同程度のものが基準となっていたようである。

この規定をある程度裏付けるものとして，少々時期は下るが『日本紀略』長元三年(1030)四月廿三日条の記事があげられる。

仗議，諸国吏居處不レ可レ過二文四分一宅一，近来多造二営一町家一，不レ済二公事一，又六位以下築垣，并檜皮葺宅可二停止一者

この記事を先の売券と比較してみると，応和元年売却以前の持主は正六位上海直延根後家で，自身は正文上であるから宅地の面積としては合致するのだが，構築物については禁止されてしかるべきものが存在していたことになる。この『日本紀略』の記事と売券との間には70年ほどのひらきがあり，応和元年当時と同じような状況下にあったとは一概にいえないが，官位に関係なく一町四方の屋敷を構える富豪層はいなくても，その兆しはすでに現われていたようである。

この禁制が現実にどれ程の効果を持ったものか知る由もないが，このような宅地配分規定が崩壊していくのと歩調を合わせるようにして，街路名によって宅地の所在を示す方法がとられるようになってくる。平安京を縦横に走る街路に固有の名称が付けられるのは，9世紀後半から10世紀にかけてであるといわれている[5]。それが宅地の所在を表わすのに用いられるようになるのは10世紀後半からで，表現方法に若干変遷がみられるが，一般化するのは比較的早かったようである。

街路名による宅地表示を用いた場合，その示す範囲は大まかなものとなり，一定の場所を限定しきれないという難点をもっている。例えば第63図に示した調査地を含むA区を示す場合，『三条・東洞院』でもよく『三条・高倉』でもいいことになる。逆に考えれば，前者の表わす区画はA・D・E・Fの4区画の何れをも示すことになり，後者の場合も三条大路と高倉小路の交差点を中心にA・B・C・Dの4区画が該当することになる。これを以仁王の三条高倉御

第63図　三条大路・東洞院大路街路図

所の場合を例にとって検討してみると，『平家物語』にみえる三条高倉御所は

三條面の惣門をも，高倉面の小門をも，ともにひらいて[6]……

と表現されており，三条大路に惣門，高倉小路に小門のある一角が想定できるわけであるが，この場合だとA・B・C・Dの4画すべてがこの表示地に該当してしまう。これを4区画の何れかに限定するためには，もう少し正確な記述をもった史料が必要なわけであるが，『山槐記』治承四年五月十五日条をみてみると，

亥剋自レ京下人走来云，高倉宮一院御子，故高倉三位親，新院御兄也，有二配流事一，只今検非違使兼綱大夫尉，光長向二三條北高倉西亭一

と記されていて，三条高倉御所がA区に該当することがはっきりする。もっともこれだけではA区全体が三条高倉御所であったのかどうか明瞭ではないが，『山槐記』治承二年正月四日条に『三條東洞院依二高倉三位事一有レ憚』とみえており，以仁王の母である高倉三位の事が三条東洞院を通行することと関係することからみれば，A区全体を三条高倉御所と限定してもいいのではないだろうか。

このように街路名を用いて比較的明瞭に所在地を限定できる場合はそれほど数があるわけではなく，以仁王の三条高倉御所の場合も人々の聞目を驚かすような大事件を起したことによって，比較的正確に記録されたものと思われる。

宅地が特記される今一つの場合として，火災によるものがあげられる。この種の史料は比較的多くあるのだが，それでも正確な記載のあるものは極めてまれである。因に『水左記』の承保四年(1077)九月十六日条をみてみると，

子剋許當二南方一有二焼亡一，不レ知二何處一，予以爲二條邊馳向之間，木工允俊章来遇二于路一云，陽明門院三條東洞院御在所也者，仍歸レ自レ路了

とみえていて，陽明門院の三条東洞院御所が火災にあっているのであるが，この陽明門院御所の所在地はA区であると考えられている[7]ものの，それを断定するだけの決め手を欠いており，さらに寛治六年(1092)三月六日に京中が大火災にあったときも，『中右記』に，

未時許京中大焼亡，自二五條坊門一，萬利小路，三條東洞院，京極，四條坊門宅，皆悉二爲煨燼一，比中関白殿御所三條殿焼了

とみえていて，A区にあった屋敷は焼亡したであろうことは想像に難くないが，関白殿の御所三条殿がどこに該当するものか定かではない。

このように街路名による宅地の表示は，特筆される場合においても常に曖昧さを残しながら一般化していく。

ここで再び三条高倉によって表示される宅地の例に目を向けると，

①天養二年(久安元年　1145)八月廿二日，待賢門院崩三条高倉第　（台記）

②永暦元年(1160)七月九日，乙酉，内大臣公教薨云々，(中略)　於二三條高倉亭一薨，女御被レ坐二此所一也　（山槐記）

③治承三年(1179)十一月四日，今夜故前左衛門督公光薨，後家三条高倉，強盗入云々　（同　上）

④寿永元年(1182)二月廿一日，今夜女御殿御所三條高倉焼亡，放火云々，京中尋常家所残纔兩三之内也，可惜々々　（吉記）

以上のような記事が目につく。

まず①は，待賢門院璋子が45年の波瀾にとんだ生涯を三条高倉第に終えたときの記事である。女院が三条高倉第に入ったのは，保延四年(1138)二月の四条西洞第の焼亡によるもので，女院の御所となる前は権大納言藤原実行の屋敷であったといわれ[8]，その所在は三条大路の北，高倉小路の東(C区)といわれている。この御所では女院の崩後も関係者が出入りしているが，久安二年(1146)八月に待賢門院の一周忌を行ったあと記録から消えていく。

次に②の内大臣藤原公教が住んでいた三条高倉亭であるが，ここにみえる女御は，④にみえる女御殿と同一人物で，公教の娘琮子であるから②と④の所在地は同じ所とみて差し支えない。問題はこれがどこに該当するかであるが，A区はすでに以仁王の三条高倉御所となっていると考えると，該当するのはA区を除いた3区画である。近世に出版された『山城名勝志』をみてみると，公教の屋敷は『或京程図在三條北高倉東』と記されていて，B区を想定している。今はこれに従うとして残るはC・Dの2区画であるが，D区の場合，保元三年(1158)七月に焼亡しており[9]，その時の持主は故右衛門大夫光忠後家であった。③の記事とは20年ほどの開きがあるが，③はC区に該当するものと考えて差し支えないものと思われる。

さてここで少し系図をみてみると，②④にみえる女御殿が公教と父子の関係にあることは先に述べたが，③の前左衛門督公光も公教とは従兄弟の関係にある。さらに公光の父季成は以仁王の母高倉三位の父であり，公光と以仁王とは従兄弟の関係にある。これらの人々は，同じ藤原閑院流に属する一族で，季成の父で公教の祖にあたる公実も三条高倉で表わされる屋敷を構えていた[10]。そして先の待賢門院璋子は白河院の養女となるが，実父はこの公実である。そうなると，①と③の関係も待賢門院が崩じて後，しばらくして一族の公光が住いするようになったと考えても不自然ではなくなる。少し話はそれるが，公教の屋敷(B区)の北東にあたる姉屋小路北・万里小路東には，従兄弟の公能が屋敷を構えており，『平家物語』の伝えるところによれば，以仁王が15才の時，元服式

をあげたのは近衛河原の大宮御所で，近衛院の后である公能の娘太皇后宮多子の力添えで行われたという[11]。ここでも一族がつながっているのである。

以上のように藤原実行を祖とする三条家と閑院流の一族が，三条高倉周辺に集住しており，代々一族で伝領されていたものと思われるが，この後鎌倉期を通してみるべき史料が乏しくなり，約200年間程は空白状態になってしまうのである。

第 2 節

南北朝期に入ると，この地には曇華院が営まれていたことはすでに述べたが，その草創期は必ずしも判然としているとはいい難い。寺伝によれば，順徳天皇の孫にあたる四辻宮尊雅王の娘智泉聖通が足利直義の館を直義の没後寺院としたのが通玄寺であるとしている[12]。

曇華院は智泉尼が至徳二年(1385)の春に病を理由に東庵に隠居し，その庵室を曇華と号したことに端を発し，後に通玄寺そのものを曇華と呼ぶようになったものと伝えている。この時期に智泉尼開祖の寺院で通玄寺と号するものがあることは確実なことであるが，それがこの三条高倉の地に該当するものかどうか，確実な史料が比較的少い。それだけに，寺伝にいう直義の館跡を寺院としたという説もでてくるのであろう。

五山禅僧の一人で当時等持寺にいた義堂周信の日記『空華日工集』をみてみると，

> 赴二通玄寺一佛殿経始之會，僧録引二小師十人一，余引二等持僧十人一而諷経，命レ工賦斧，點心罷レ歸等持一，佛成道諷経，又就二通玄寺一打齋，寺乃今府君外祖母比丘尼聖通所レ建也，

と記されていて，康暦二年(1380)十二月八日に通玄寺の仏殿の起工式を行っており，寺院そのものがこのころに営まれはじめたことを知るのであるが，これだけでは三条高倉の地を寺地とするわけにはいかない。しかし，等持寺からは，直義が屋敷を構えていたところも比較的近距離にあったものと思われ，充分可能性はあるのだが，三条坊門万里小路である以上，どちらにも該当するわけである。

三条万里小路の直義の館は，後に義詮が入り直義は堀川錦小路の細川顕氏の屋敷に移ってしまう。そうなると，直義の屋敷跡に寺院を営んだとする寺伝は根拠がうすれてしまう。

そこで三条高倉の地が通玄寺に該当するかどうかであるが，『教言卿記』に『三条東洞院通玄寺西頬扇屋[13]』という記事がみえている。これは大永十四年(1407)の記事であるから，智泉尼開祖にかかる通玄寺は三条高倉の地にあったとみて，まずまちがいはない。ただ一説には，元近衛河原にあったものが，寛正六年(1465)に当地に移転したとするものもある[14]が，これは先に述べた以仁王と太皇太后宮多子との密接な関係から生まれた伝承である可能性が強いものと思う。

ここで寺地にも関係するので少し開祖智泉尼について述べてみたい。智泉尼は順徳天皇の皇孫尊雅王を父に持つ人であるが，その兄妹の中には夢窓国師の弟子となり天龍寺第二世となった無極志玄がいる。智泉尼からは兄にあたる人であるが，智泉尼が禅門に入るに際しては少な

からず影響を与えたものと思われる。寺伝によれば智泉尼も夢窓国師に師事して禅の修業をしていたことが記されているが，はじめから出家修業の生活をおくっていたわけではなく，当初は石清水八幡宮の神官善法寺了清[15]のもとに嫁しており，この間に数人の子供を儲けていたようである。その中の一人が後に二代将軍足利義詮のもとに嫁し，三代将軍足利義満の母となる紀良子である。康暦二年の仏殿起工式にも紀良子・足利義満が参列しており，当然その間には室町幕府との親密な関係が予想されるのである。おそらく通玄寺建立に際してもかなりの財政援助を受けていたものと思われるが，『蔭涼軒日録』等をみてみると，代々の将軍が度々通玄寺に立寄っていることがわかる。さらに通玄寺の周辺には幕府の要人も宿所を構えていたことが公家の日記に散見される。そのような環境が足利直義の館跡を寺地としたという伝承を生んだのであろう。

智泉尼の没年は『広照国師蒐墾稿』嘉慶二年(1388)十一月廿五日条に

先妣大苾芻尼智泉禅師示二寂通玄寺之東菴一

とみえていて，自らの隠居菴である盤華菴において寿八十才で没している。この時すでに夫善法寺了清はこの世になく，智泉尼に先立つこと四年の至徳元年(1384)十月廿五日に没している[16]。その年の十一月十一日智泉尼は通玄寺において夫了清の三七忌の法要を営んでいる[17]。了清については今一つはっきりとしないが，智泉尼が出家してのちも相互に交渉はあったのであろう。その子孫も多く石清水八幡宮の神官を務めていることからみれば，通玄寺と石清水の間にも何らかの交渉があったものと思われる。そこで考えられることは，夫善法寺了清を通して石清水八幡宮との間に何らかの関係をもっていた場合，通玄寺建立に際してもそれなりの援助が期待できたであろうことは当然考えられてしかるべきものと思う。

先に鎌倉期に入ると見るべき史料がないといったが，通玄寺と石清水八幡宮との関係を前提にみていくならば，強ち無意味なものばかりではないことがわかる。もちろんそれを端的に示すものではなく，ある程度有効性をもつのではないかという程度のものであるが，それは，承久二年(1200)十二月十日付の『大善法寺祐清譲状』[18]の中に

京

三條高倉屋地

但，女子綾御前福王子姫等可レ許レ居レ地

とみえているもので，祐清からその子宝清に譲渡された所領の一部である。この『三條高倉屋地』というのがどこに相当するのか知るよしもないが，宝清から子の宮清に譲渡された所領の中にも『三條高倉敷地具屋等』[19]と記されてみえており，さらに大長元年(1311)十二月十五日付の『尚清處分状』[20]にも『三条高倉屋敷地』とみえていて代々伝領されていることがわかるが，室町期に入ると石清水八幡宮の文書からの地が姿を消してしまうのである。この『三条高倉屋地』が通玄寺の敷地として智泉尼に提供された為に石清水の文書から姿を消したのではないだろうか。智泉尼の置文[21]をみてみると，了清が通玄寺に対のて播磨国福田保西條方の年貢を永代寄進する等色々と通玄寺に寄せていることがわかるが，これらのことからみても寺地を

石清水八幡宮が提供するということがあっても強ち不自然とは思われない。さらに，この置文をみてみると，法金剛院の仏事用途料として毎年五十石を寄せることがみえているが，この間には待賢門院との関係を想起させるものがある。

足利義満の時代に将軍家及び石清水八幡宮の協力によって出来た通玄寺は，その後尼五山の一つにも数えられ[22]，盛行をみたが，十五世紀の半ばに起った応仁・文明の乱をのがれることは出来なかった。『後法興院政家記』(二)をみてみると，

> 正月八日乙亥，夜来雨，午刻以後止，去夜乾方有二火事一云々一條西洞院，酉刻終，巽方有二火事一，三條高倉邊云々，

とみえていて，応仁元年(1467)の正月七日に起った畠山政長の管領罷免事件によって政長派の兵士が京中にくり出して三条高倉・正親町京極あたりに火をかけ酒屋・土倉を中心に掠奪を行った時の記事である。通玄寺そのものが焼亡したという記事は今のところみあたらないが，おそらくこの時に焼亡をまぬがれることはなかったものと思われる。

通玄寺の再建は文明年間に入って乱も一応終息した段階で行われたものと思われるが，正確な年次は明らかではない。ただ『蔭涼軒日録』をみてみると，文明十七年(1485)の暮から翌年にかけて曇華院修造の儀が具体化している様子がわかる。

> 十二月廿二日，自二曇花院一有二御使一曰，昨日被レ謁二千東府一，則相公日，曇花院修造事，依二蔭涼一披露，堅被二仰付一之由，有二臺言一，爲二其禮謝一，賜二御使一也，
>
> 同月廿四日，慈泉庵来謝日，曇花院修理料，今日自二伊勢守方一贈二五千疋一，寺家歡喜

この修造というのは築地塀を修理することを指しているもので，決して寺院全体の修造を意味しているわけではない。しかしこの時期にはすでに堂宇の方は再建し終っていたものと思われる。ただ再建されたとはいえその規模を知るすべもないが，比較的安普請だったかもしれない。この時期築地を築くだけの費用が出せなくて，伊勢守貞守より五千疋の寄進をうけて『寺家歡喜』したというのであるからよほど乱後の生活はきびしかったのだろう。文明十九年(1487)に通玄寺で開祖智泉尼の百年遠忌法要を営んだ時も，

> 於レ爰愚謹白，通玄寺開山智泉和尚，當年十一月廿五日一百年忌也，来十月廿五日可レ探二支之一，於二寺家一一向無力之故，佛事之儀不レ可レ叶，爲二公方一被二仰付一者爲二素望一由[23]，

といわれ，自力で開祖智泉尼の百年忌を営むことすら困難な状態におちいっているのである。応仁・文明の乱後の京都五山をはじめとする禅宗寺院は概ね同じような経営危機に立至っていた。しかし幕府と密接な関係を保持しつづけている曇華院は，その都度財政援助を受けていたものと考えられ，通玄寺の寺院機構が財政難に直面している中で通玄寺そのものが塔頭である曇華院に吸収されて通玄寺を曇華院と呼ぶようになるのもこのころからである。しかし幕府自身の力も弱くなっている時期では応仁・文明の乱以前のような盛行はもはや望めず，逆に政治的権力闘争にまきこまれることも間々あったようである。

第 3 節

天正初年(1573～4)織田信長が上杉謙信に贈ったと伝えられている上杉家所蔵『洛中洛外図屏風』右隻のほぼ中央部をよくみると，東洞院通りの賑わいの中に『どんけいとの』と曇華院の静閑なたたずまいが描かれている。一般に上杉本の景観年代は天文の末から永禄前期のものであろうといわれており[24]，そこに描かれている曇華院は概ねその当時の姿であると考えられる。それは三条通りに面して惣門を開け，東洞院通りに面して西門を開けており，境内は築地塀によって囲まれている。境内には仏殿と何らかの建物がみえている他は木立が多く，全体にこの映像からは意外に手狭な印象をうける。

周囲を巡る築地塀や境内の建物の屋根は瓦葺ではなく，桧皮葺かむしろ板葺のようにみえる。描かれている季節は真夏に入ろうとする五月五日の節句ごろであろうか。東洞院の町屋では屋根に菖蒲を掛け，曇華院の前では印地打を行っている様子が生々と描かれている。しかしここに描かれている風景がそのまま当時の社会を写しているものかどうかについては問題の多いところであるが，すでに指摘されているように，通りに沿って並び建っているはずの町屋が史料のうえから推量されるそれと，大きな食い違いをみせている点は飽くまで『洛中洛外図屏風』という，いわば観賞を目的として描かれたものであることを念頭におかなければならない[25]。

ところで，築地塀に囲まれた境内であるが，一町四方の敷地は当時の禅宗寺院の境内としてはさして広いものではないが，惣門・山門・仏殿・方丈の主要建造物は南から北に並ぶ一般的な禅宗寺院の伽藍形式をもっていたようである。塔頭は東西の端に集まるのが普通であるが，史料のうえでは智泉尼の隠居庵が曇華院となった他はみあたらないので，境内の東側に曇華院が一塔頭として形成されていたのみかもしれない。

もちろんこれは上杉本の景観とは相違するもので，応仁・文明の乱以前の姿を述べたものである。乱後再建された通玄寺は，以前のような伽藍を営むことは出来なかったものと考えられるが，大永七年(1527)三月三日に再び火災に会い[26]，天文廿一年(1552)に後奈良院の皇女聖秀尼が入寺するにあたって再興されているが，上杉本に描かれた曇華院はおそらくこの時のものであろう。

曇華院のある三条高倉一帯は，現在でも商業地区の中心的な位置を占める所であるが，その原型は中世後期の室町期に成立していたものといわれている。当然通玄寺界隈もかなりの賑わいをみていたであろうことが想像出来るのだが，『洛中洛外図屏風』では東洞院通りに町屋が描かれているものの，曇華院の周囲には町屋が描かれていない。この点は作者の作製意図による省略と考えなければならないが，先にあげた『教言卿記』にみえていた扇屋は通玄寺の西側に位置していなくてはならない商家であるし，その他に木工寮配下にある扇座のうち中座に属する『三条高倉女』も曇華院界隈に居住して扇販売を生業としていた商人の一人である等，多くの人々が居住していたようである[27]。

これらの人々が生活する場として町屋が形成されてくるのだが，それらは概ね間口二三間奥行二間ほどの極めて小さな面積をもったもので，独立性に乏しく簡単な造りで，多くは片土間式住居だったが，中に中土間式の住居もあり，それらが軒をつらね町並を形成していた。応永八年(1401)五月廿八日に六角堂法師等が，北野社経堂において如法経供養を行うにあたって幡等を調進した恩賞として，足利義満から『三條面惣町町』の知行を許されている[28]が，この時すでに農村部における惣村に匹敵する自治的な共同体組織としての『惣町』が成立していることがわかる。

この『三條面惣四町町』は，三条通りをはさんで両側の町並を西は室町通りを限り，東は万里小路を限る範囲をしめており，両側町の原則にしたがえば曇華院の南側には町屋が形成されていたことになる。この辺りには承徳二年(1098)ごろから小屋[29]が各所に形成されていたようであるが，正治元年(1199)四月に焼亡した『三条北高倉東』にあった小屋は，下人の集住する住居であった[30]。それらが直接町屋につながるものかどうか問題として残るところであるが，彼ら商人達が住んだ初期の町屋の居住空間も小屋といわれるように極めて小さな空間であった。これは平安京造営当時三条通りや東洞院通りは幅八丈(24m)の大路として造営されていたものが，平安京そのものの機能が変質してくるにつれて，道路としての機能を失った部分を田畠・宅地として利用するという巷所といわれる部分が発生してくる。すでに鎌倉初期には存在しており，室町期の中頃には一般化していたといわれている[31]が，三条通りをはさんだ両側町も，すべてとはいえないまでも三条大路の巷所を基盤として形成されたものと思われる。それだけに奥行はおのずから限られたものとならざるをえなかったのである。『教言卿記』にみえる扇屋もおそらく東洞院通りの巷所の一間に店を構えていたものと思われる。そして『三条高倉女』などと共に三条惣町を構成する構成員の一人であったのだろう。

近世に入って頻繁に刊行されるようになる洛中絵図をみてみると，多少物によって食い違いをみせてはいるものの三条通りと東洞院通りに面した部分は町屋が立て込んでいる。ここで気になるのは『寛永平安町古図』[32](第64図)をみてみると，東洞院通りに面した部分が姉小路を断ち切って三条坊門通り(御池通り)まで続いていることである。貞享三年(1686)三月に刊行された『京大絵図』[33]をみてみると，北にのびた部分をも含んでL字形に描かれ，それ一つで『どんけいん』と記されている。これは天

第64図　寛永平安町古図

文ごろに高倉通りをへだてた所に曇華院が所領をもっていたことと共通するものと思われ[34]，姉小路以北も曇華院の所領だったものの，そこには町屋が立て込んでおり，豊臣秀吉が天正十九年(1591)九月に洛中の地子銭を永代免除にするまでは地子銭をとっていたのであろう。ところが絵図では18世紀に入ると姉小路が東西に走っており，断ち切られていた部分が切れなくなって現在のようになっている。これはおそらく宝永五年(1708)三月八日に起った大火災でこの付近も類焼したものと思われ，曇華院もこの時に焼亡したようである。その後，復興期に現在のような町割りにしたものであろう。宝永六年(1709)に刊行された『京絵図』には切断された部分に『新つじ』と記されていて新たに区画されたことがわかる。このように江戸期の半ば近くまで変則的な町割が残っていたのは，天正十八年(1590)に秀吉が京都の改革に乗り出し，洛内寺院を寺町・寺之内に集め，洛中全体の区画整理をした時にこの区画整理の対象からはずされた地域が存在したが[35]，この曇華院界隈はその中に含まれており，宝永五年の火災によって再整理されるまで前時代の町割が残ったものである。

第 4 節

江戸時代に入り，門跡寺院としての格式をもっていた曇華院は，幕府から六百八拾壱石三斗の寺領を与えられたが，その後も度々火災にあって焼失している。

天文廿一年に再興された殿舎は慶長八年(1603)十二月十九日に火災にあって焼失しており，その後，寛文年間(1661～1673)に後西院の皇子聖安尼が入寺して再建されるまで衰退していたようである。寺伝ではこの再興をとげた聖安尼を中興としている。この聖安尼は学問的にもすぐれていた人で，多くの著作・編纂物を残している。宝永五年に焼亡した曇華院は，第25世聖祝尼の入寺に際して再建されているが，これも天明八年(1788)正月に付近の火災から類焼してしまっている。その後，再建されたようであるが，文化四年(1807)に『竹ノ御所』号を勅許されてはいるものの，文政十年(1827)八月十九日に第27世秀峰尼が3才で示寂してしまった後は，久しく無住となり，元治元年(1864)七月十九日に維新前夜の兵火にかかって焼失するに及んで，一時城南大住村法華寺に仮殿を営んだ。しかし復興できず，明治六年(1873)に46年間無住であった住職に清山慈康尼が入り，第28世となったが，朝命によって現在地嵯峨野の旧鹿王院の子院瑞応院跡に移転し，現在に至っている。

註

1）京都市編『京都の歴史』1，東京，昭和49年。
2）『朝野群載』巻廿一。
3）秋山國三『平安京における宅地配分と班田制』(『京都「町」の研究』所収) 東京，昭和50年，67頁。
4）『続日本紀』天平六年九月辛未条。
5）秋山國三『条坊制の「町」の変容過程』(前掲書所収) 104頁。
6）覚一本巻四には『軍兵を引率して三條高倉へ参て』と記されているだけである。
7）角田文衛『文章博士家経の邸宅』(『古代文化』第28巻7号掲載) 京都，昭和51年，50頁。
8）角田文衛『椒庭秘抄—待賢門院璋子の生涯』東京・名古屋・大阪・北九州，昭和50年，243頁。
9）『山槐記』保元三年七月廿一日条。
10）『中右記』承徳二年三月廿七日条。
11）『平家物語』巻四（源氏揃）。
12）曇華院所蔵『通玄寺志』。以後寺伝とする場

合は同書によるものである。
13) 同書，大永十四年五月廿七日条。
14) 『都名所図会拾遺』巻一。
15) 了清は，『通玄寺志』によれば，通清を改名したものとなっている。通清は石清水の検校別当を務めた人。
16) 『空華日工集』至徳元年十月廿九日条。
17) 同上，至徳元年十一月十一日条。
18) 菊大路家文書。
19) 同上『家田宝消處分状』仁治三年九月廿五日。
20) 同上。
21) 京都府編『曇華院志稿』(『京都府寺誌稿』第44編) 京都，明治26年。
22) 『康富記』宝徳三年十一月十九日条。
23) 『蔭涼軒日録』文明十九年八月十三日条。
24) 京都市編『京都の歴史』3，東京，昭和43年，636頁。
25) 横井　清『室町時代の京都における町屋支配について』(『中世民衆の生活文化』所収) 東京，昭和50年，136～140頁。
26) 『二水記』大永七年三月三日条。
27) 京都市編『京都の歴史』3，194～195頁。
28) 『康富記』応永八年五月廿八日条。
29) 『中右記』承徳二年三月廿七日条。
30) 『猪熊関白記』正治元年四月廿五日条。
31) 京都市編『京都の歴史』3，72～73頁。
32) 京都市編『京都市史』地図編。京都，昭和22年。
33) 同上。
34) 内閣文庫所蔵『曇華院殿文書』
35) 京都市編『京都の歴史』4，東京，昭和48年299頁。

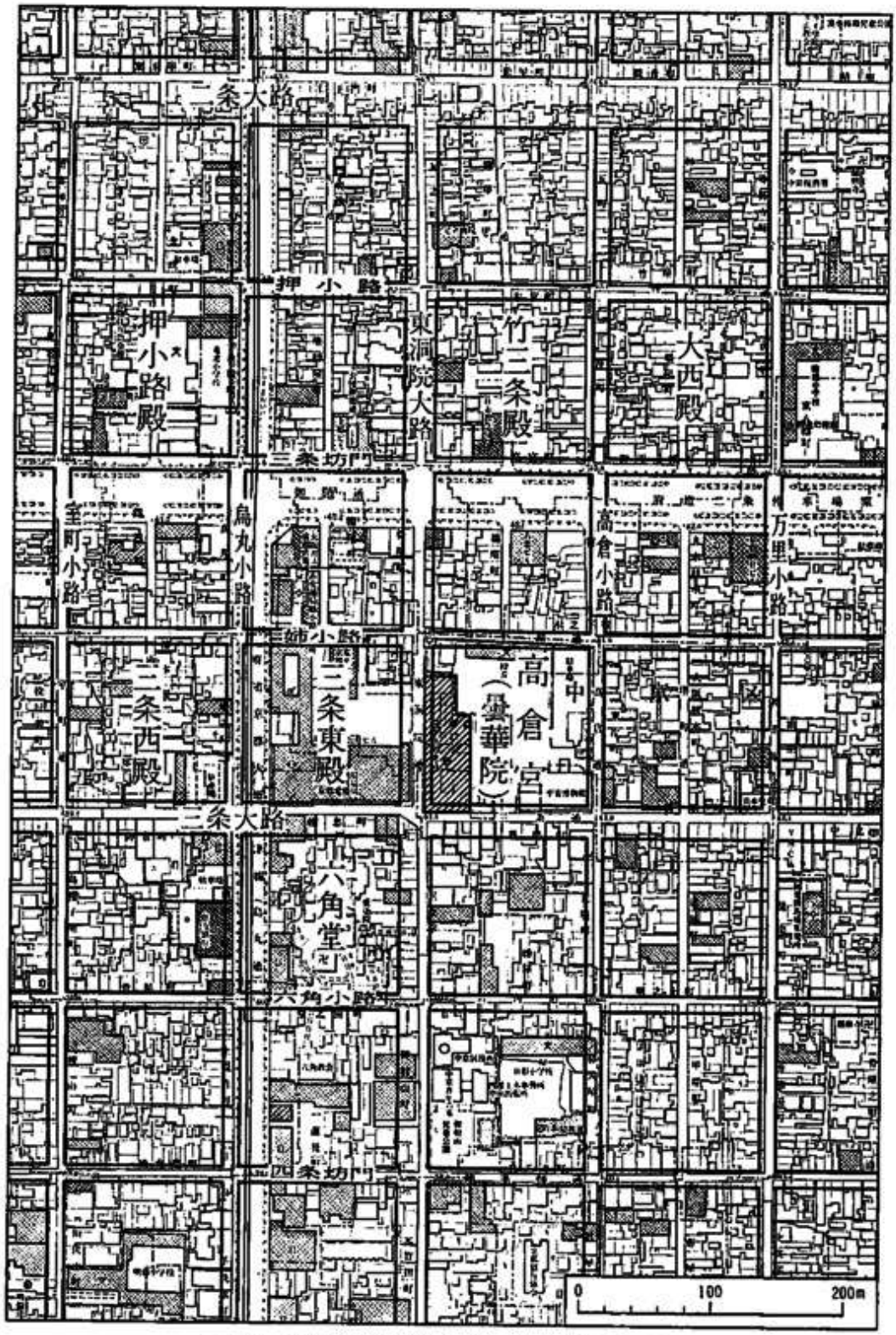
本章をまとめるにあたって，平安博物館助教授 龍谷 寿氏，大谷大学大学院の青磁透氏に多くの御教示を賜わった。末筆ながら謝意を表する次第である。

おわりに

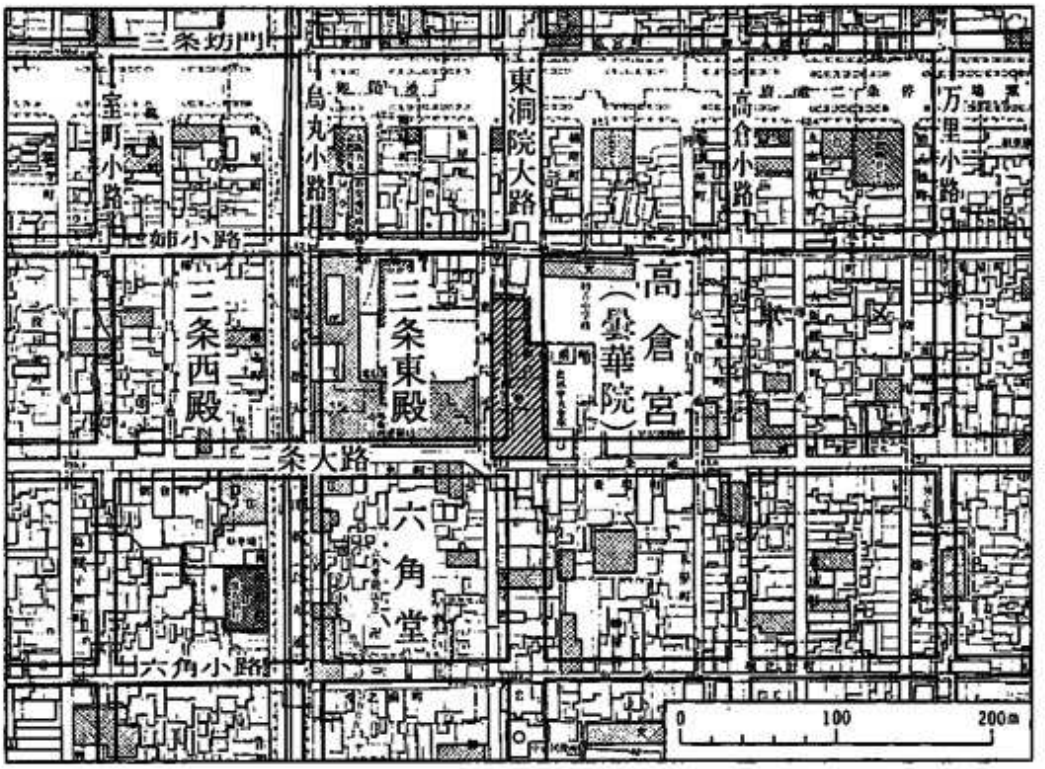
今回の調査における最大の収穫は，言うまでもなく，長さ約47mにも及ぶ長い距離にわたって東洞院大路の側溝が確認されたことである。平安京の発掘調査は，近年ますますさかんに行われるようになり，大路・小路の側溝の検出例も増加している。しかし，ほとんどの場合が，溝のごく一部の検出にとどまり，また，時期にもかなりの差があって，これまでに平安京の条坊のプランは確定されていないのが現状であった。

この意味において，今回の調査で東洞院大路の側溝が長い距離にわたり検出され，しかも時期的な変化をおさえられたことは条坊のプラン決定に際して大きな意味を持つものであろう。

第65図は，今回の調査で検出された溝のうち最も古い溝1を基準に，調査地付近の条坊を復原したものである[1]。これによれば条坊のプランは現在の街わりと極めて良く一致していることが理解される。従来発掘調査で検出された溝などで条坊を復原したものはいくつか提出されているが，その1例として第66図を掲げた[2]。これによれば条坊の大路・小路は，現在の道路に比較して随分東に偏している。今回の調査でも，この様な復原例を考慮して，検出された溝が東洞院大路の西側のものである可能性も検討した。しかし，すでに第2章で述べているように，溝に付随する各種の遺構のあり方や，この溝を西側のものとした場合に，当然大路幅八丈(約24m)東に検出されるべき東側溝の全く痕跡の無い点から，今回検出された溝は東側のものであると断定した。さらに言えば，第66図の復元が，現在の市街と大きくかけ離れている点



第65図　調査地付近条坊復原図(1)　中央斜線部が調査地



第66図　調査地付近条坊復原図(2)

も，その必然性を認め難いのである。

以上に述べたことからみて，調査地付近の条坊復原が，第65図のものより大きく変りうる可能性は無いであろう。ただし，第66図の復原も，確実な調査例から導いてきたものであって，この大きなくいちがいをどう克服するかが今後の課題であろう。

その他の遺構・遺物については各々の項で述べたのでここではふれない。

最後に，今回の調査の問題点について述べてみたい。

平安京を調査する場合，平安宮の一部を除いて，遺構の面がきわめて深いのが通常で，時には3m程にまで及ぶこともある。このような深い遺跡で，しかも今回のように広面積に及ぶ調査を，限られた期間内に行う必要が有る場合，どうしても機械力にたよらざるを得なくなる。今回の調査も，最初数ケ所を手掘りで地山まで掘り下げ層序を確認した後，ユンボで約1m掘った後に手掘りの調査を行った。また，全面調査に切り換えた時点で別館の基礎を全て取り除く作業を機械で行ったため地山に食い込んだ基礎を外す際にも遺構面はかなりいたまざるを得なかった。

いうまでもなく，発掘調査は一種の破壊であり，発掘を行うからには，十分な調査・記録を行う必要がある。この意味において，調査地の上層の遺構・遺物についても，十分に考慮をはらう必要があり，まして，中世・近世の遺構・遺物が注目されだしてきている現在，全て手掘りで行う調査が必要であることはいうまでもない。

しかし，今回の調査に限らず，広面積のしかもある程度深くまで掘り下げる必要のある調査は，機械力を用いざるをえないのが通例になっている。この問題をどう考え，どう解決してゆくかは今後の大きな課題であろう。

さらに，今回検出された遺構が，平安京研究の上できわめて重要なものであったにもかかわらず，協議の結果その大半が破壊のやむなきに至った点をあげなければならない。本来どのような遺跡でも，それ自体かけがえのない遺産であるが，平安京のように，全体が現在の市街地と重なって，日々その破壊が進んでいる中で，このように条坊のプラン決定のための重要な遺構が残っていたことは特筆されねばならないことであろう。しかし，密集した市街地の中では，適当な代替地もなく，しかも有効な土地利用のために，遺跡はやむを得ず破壊されざるを得なくなってしまう。これは単に土地の所有者だけの問題としてかたづけられることではなく，広く文化財行政の立場から考える必要があろう。平城京などのように広く面として整然と残っているものとは異り，平安京は，点あるいはわずかな線が残されているにすぎない。しかし千年の都として栄えた平安京の重要性を考えるならば，その残された点や線の価値を十分に認識することが必要なのではないであろうか。

註

1）この条坊図は，かつて白石太一郎氏が三条西殿跡の発掘調査をもとに復原されたものを基準にし，南北の線を今回の溝の位置にあわせて若干西へずらしたものである。白石太一郎・伊藤玄三・近藤喬一『平安京三条西殿跡発掘調査報告』（『平安博物館研究紀要』第3輯）京都，昭和46年。

2）この図は，平安博物館が過去に実施した平安宮の調査（内裏内郭回廊・民部省跡など）および一条大路の調査にもとづいて，平安博物館・平安京調査本部が作成した条坊復原図の一部である。

第 2 部

はじめに

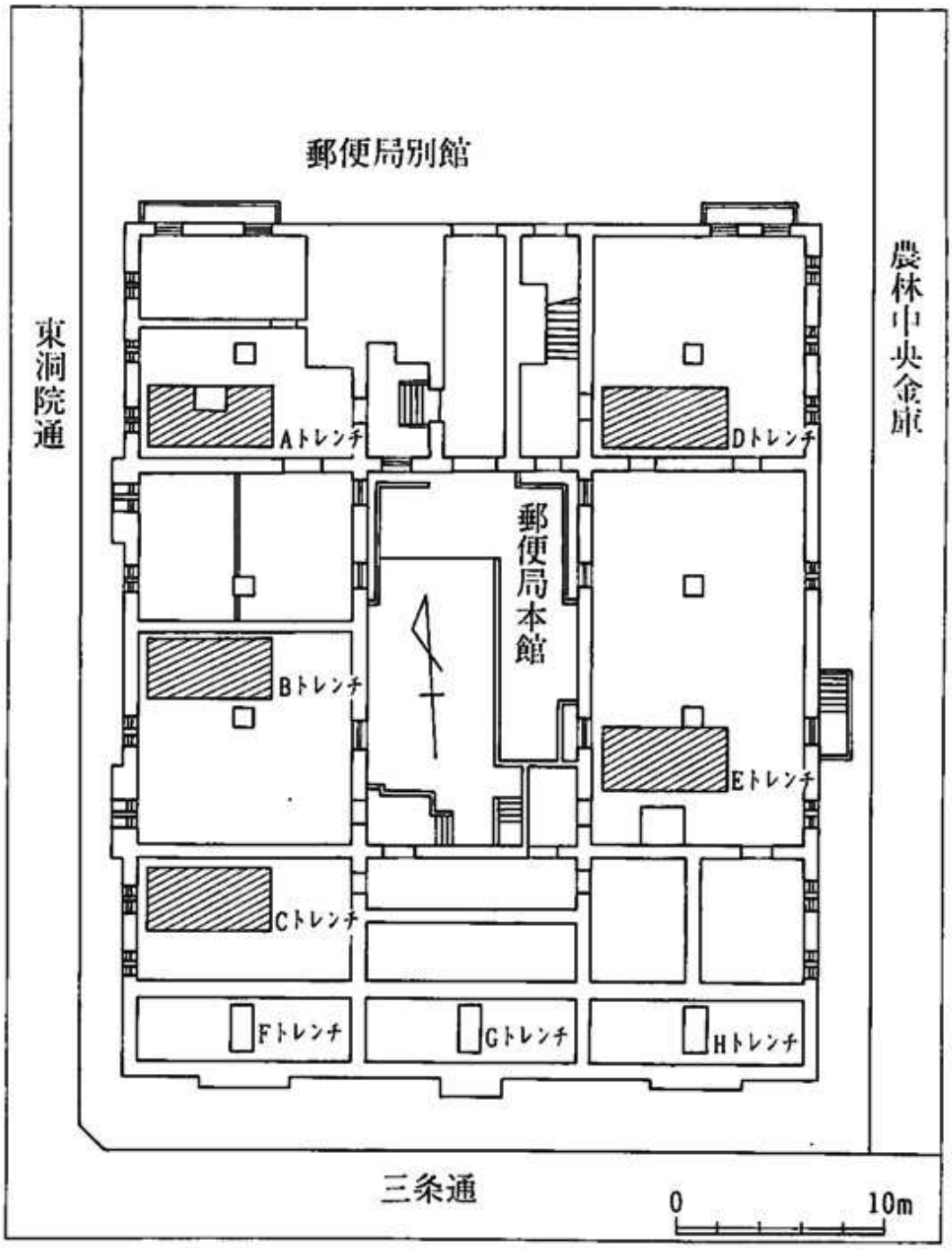
中京郵便局の改築工事に伴う発掘調査で，別館に続いて本館も調査の対象になった。ところが本館は，明治の建築として記念物的性格をもつため，現状を保存することとなり，工法上やむなく建物をそのままに，その地下室内での発掘調査を行わざるをえなくなった。地下室は大きな基礎が深く入り込んでいて，かつ各室の間仕切が小さいために，発掘場所の選定がむづかしかったが，とりあえず，別館跡の調査で発見された溝上遺構の性格把握のために，５ケ所のトレンチを設定した。すなわち，溝上遺構の延長線上に，東西に長く３m×６mのトレンチ３本と，またそこから16m東へ離れて同じく３m×６mのトレンチ２本である。最初の計画では，三条大路の北側溝を確認するために１m×2.4mの南北に長いトレンチを予定していたが，その対象地点は両壁３m以上もあるレンガ造りに狭まれた谷間であり，しかもそのレンガに亀裂が生じているなど，危険度が頗る高いことから，近畿郵政局との交渉をやり直して，この三条大路北側溝の発掘は除外することにした(以上第67図)。以上本館の調査に至るまでの近畿郵政局との交渉は，近藤喬一・寺島孝一の両名があたった。

地下室は暗闇で通風が悪く，また室内が狭いために排土する場所も限られており，偖害と隣りあわせという極めて悪い条件の下での調査を余儀なくされたのである。このため別館跡で発見された溝が，東洞院大路の東西いずれの側の溝であるかを含めて，いかなるものかを把握することに目的を絞った。別館跡の調査では，地山近くまでユンボで掘削したため，層序や遺構の年代等の調査が不十分な所もあり，今回は可能な限り層位的発掘を行うことに務めたが，螢光灯という人工光線の下では，それは大変むづかしい作業であった。

こうした悪条件の下で，上記した２点を目的とし，昭和51年２月17日から３月20日まで発掘調査を行った。調査団の編成は次の通りである。

調査団長　角田　文衛
調査主任　甲元　真之
調　査　員　松井　忠春・佐々木英夫
調査補助員　赤井隆夫・朝比奈覚順・河村正史・北山友昭・鈴木弘市・鈴木俊則・田中勝之・原田雅裕・古田典之・三宅憲明・芳村高史
作　業　員　大根清一・木村栄三郎・永原寛三・橋本俊夫・吉田辰次郎・吉田藤三郎

発掘はＡ・Ｂ・Ｃの３本のトレンチから開始した。Ａトレンチでは，中央部に大きく金庫の基礎があり，この掘り方のために大部分攪乱をうけていた。トレンチの南端は，わずかにそれよりの破壊をまぬがれていたが，他の新しい時期の掘込みのために，側溝推定線上は壊されていた。トレンチ東側の粘質土層中から，桃山時代よりやや古い時期に属する大盤の土師質の皿



第67図　発掘区位置図

に混って，平安時代の軒平瓦が採集されている。

Bトレンチでは，西端近くが郵便局本館の基礎とその掘方のために破壊されており，また中央より西も，江戸時代後期の井戸等の遺構が地山まで及んでいた。しかしトレンチの東半部は

比較的よく保存されていて，上位には江戸時代の整地層がみられたが，それ以下には，層状的に上下に並ぶ4枚の溝が検出された。最上層の溝は幅90cmであるが，最下層のそれは，幅160cmと広い。その溝中には，最上層で桃山時代の土師皿が，最下層で鎌倉時代の土師器・青磁・須恵器等が採集されていて，溝の使用年代の幅を確認しえたのである。

Cトレンチでも西端近くは破壊されていたが，東側の部分は比較的よく残っていた。トレンチ全面に，元治元年に焼亡した折の瓦溜や焼土層がある。この焼土層の下は，トレンチの北側では撹乱されていたが，南半分では焼土層と整地層が互層となって続いている。そしてこの焼土層の下位には礎石のみられる所もあった。4番目の焼土層の下位に至るとトレンチの西半分では遺構の錯綜が多かったが，東半分ではBトレンチと同様に4枚の溝が発見され，またその最下層の溝の西に，それよりも古い時期の溝が一条検出されたのである。

A・B・C各トレンチは発掘作業が終ると順次写真撮影と実測にあたった。それと平行して，各トレンチ間の測量を行い，かつD・Eトレンチの発掘に及んだ。

DトレンチではA～Cトレンチとは様相を異にし，地山と考えられる黄褐色の粘土層が浅く，これに江戸時代以降の掘込みなどが検出されたにすぎない。

Eトレンチでは礫層の地山に掘込まれた井戸2件と深い縦坑が1件検出されたのみであった。この礫層の一部を50cmほどさらに掘り進めてみたが，二次的な堆積を推定させるものはなにも検出されなかった。

D・Eトレンチともに地山面が，A～Cトレンチとは異って高所に撹乱されずに残っていた。このために側溝があったとすれば当然検出できる状況にあった。

発掘調査終了後ただちに遺物整理にとりかかったが，この期間次の諸氏に補助していただいた。

大槻真純・奥野都・北山友昭・古城博子・鈴木弘市・鈴木俊則・原田雅裕・三宅憲明・山下武久

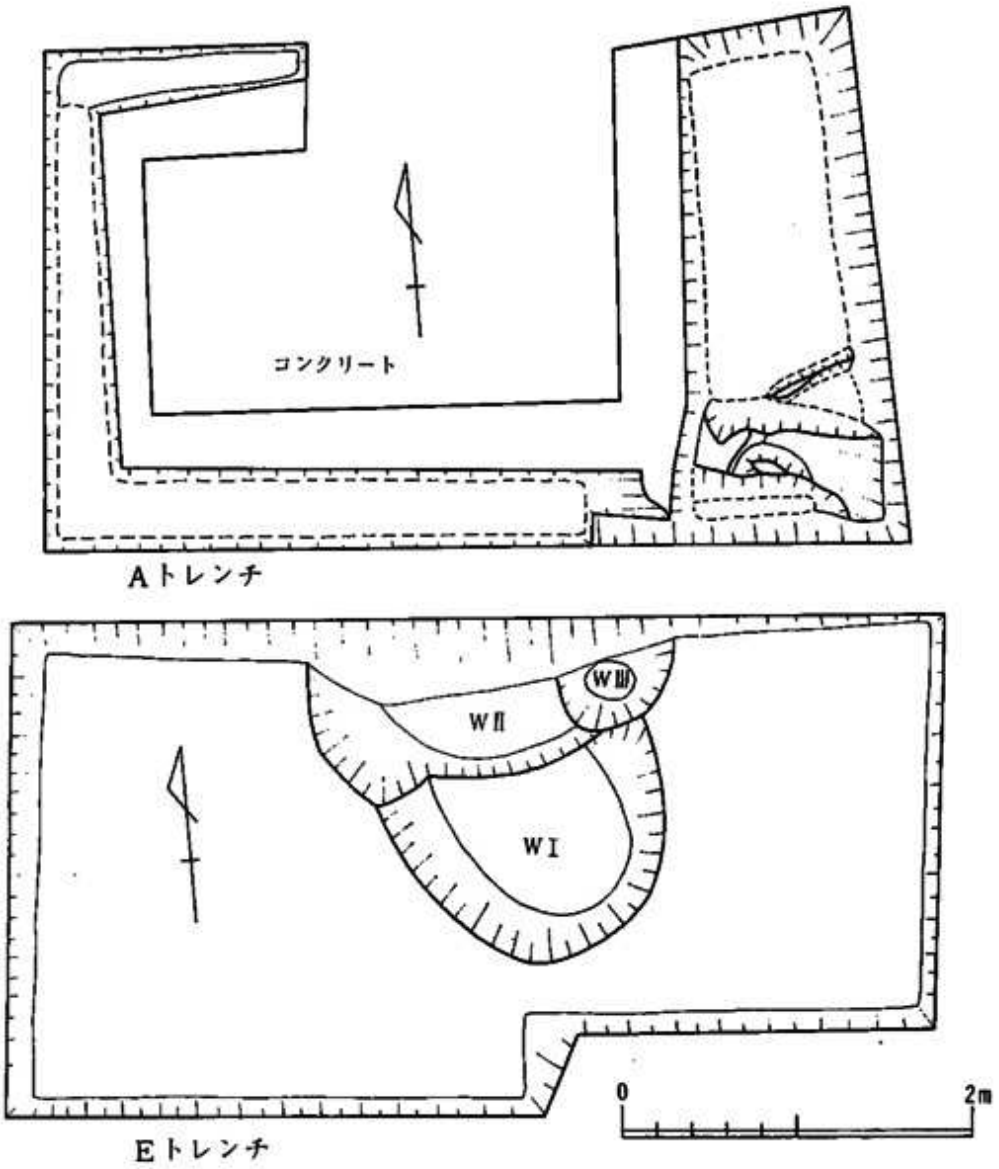
なお出土遺物のうち陶器類は江崎武氏に鑑定をお願いし，自然遺物の同定は渡辺誠氏に依頼した。記して謝意を表する。　（甲元真之）

第一章　遺　　構

五本のトレンチを中京郵便局本館地下室に設定して発掘調査を行った結果，B・Cトレンチで東洞院大路の側溝が確認された。以下各トレンチごとに検出遺構の状況を記すことにしよう。

Aトレンチ（第68・70図，図版第63）

トレンチ中央部に金庫の大きなコンクリート製の基礎が二段にわたって横たわっていた。そのためにトレンチ中央部の発掘は断念せざるを得ず，設定トレンチ内で，金庫の基礎に沿って



第68図　A・Eトレンチ平面図

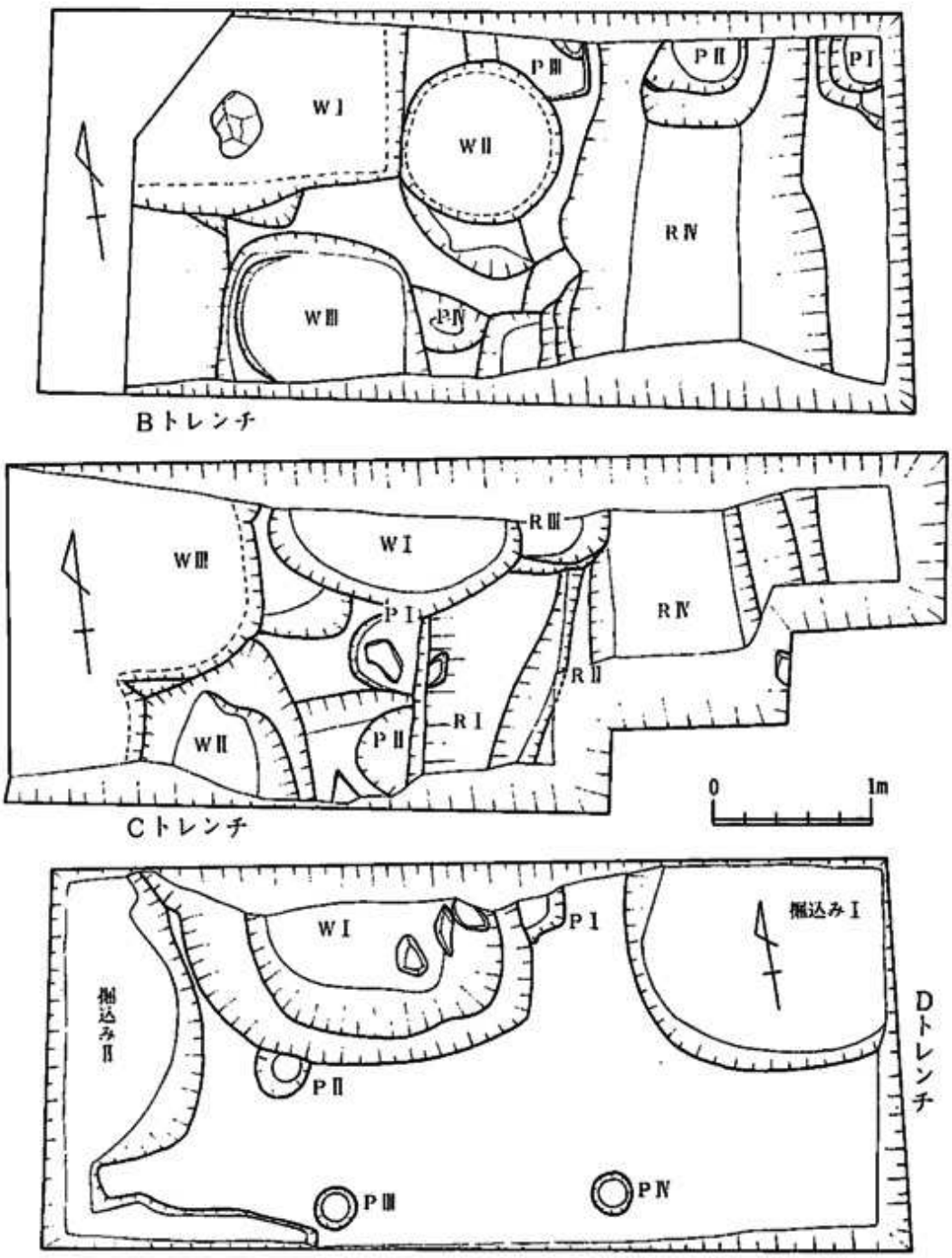
東側で1m，西側及び南側で30～40cmの幅で発掘を行った。これは，当初からこの部屋が金庫室であって，そこにトレンチを設定したと言う交渉段階での不手際によるものである。

床面である厚さ約10cmのコンクリートを剝がすと，白色粘土層が厚さ約25cmをもって貼り付けられていた。これは本館を建築する際に下面からの湿気を防ぐためにベタに粘土を貼りコンクリートを床張りしたためである。この粘土層を除去すると暗褐色粘質土層が所々に掘り込みをもって拡がっていた。この層は，出土遺物からして，中・近世時の堆積層で，約120cmの厚さで地山の砂礫土層となる。この間全く遺構は検出されなかった。しかも東洞院大路の側溝推定線あたりは，甚しい攪乱により壊され存在しなかった。ただし，この層からは多量の遺物

が出土した。室町～桃山時代の土師質の皿に混って，龍泉窯青磁椀，白磁椀，備前焼大甕，擂鉢，常滑の大甕や信楽焼擂鉢等である。その中でも土師質の皿はトレンチ東側に集中していた。尚，北西隅は地山まで掘り下げたが，東側並びに南側は湧水やトレンチの幅の狭さから，上面より約150cm以上の深さの発掘は不可能であった。（松井忠春）

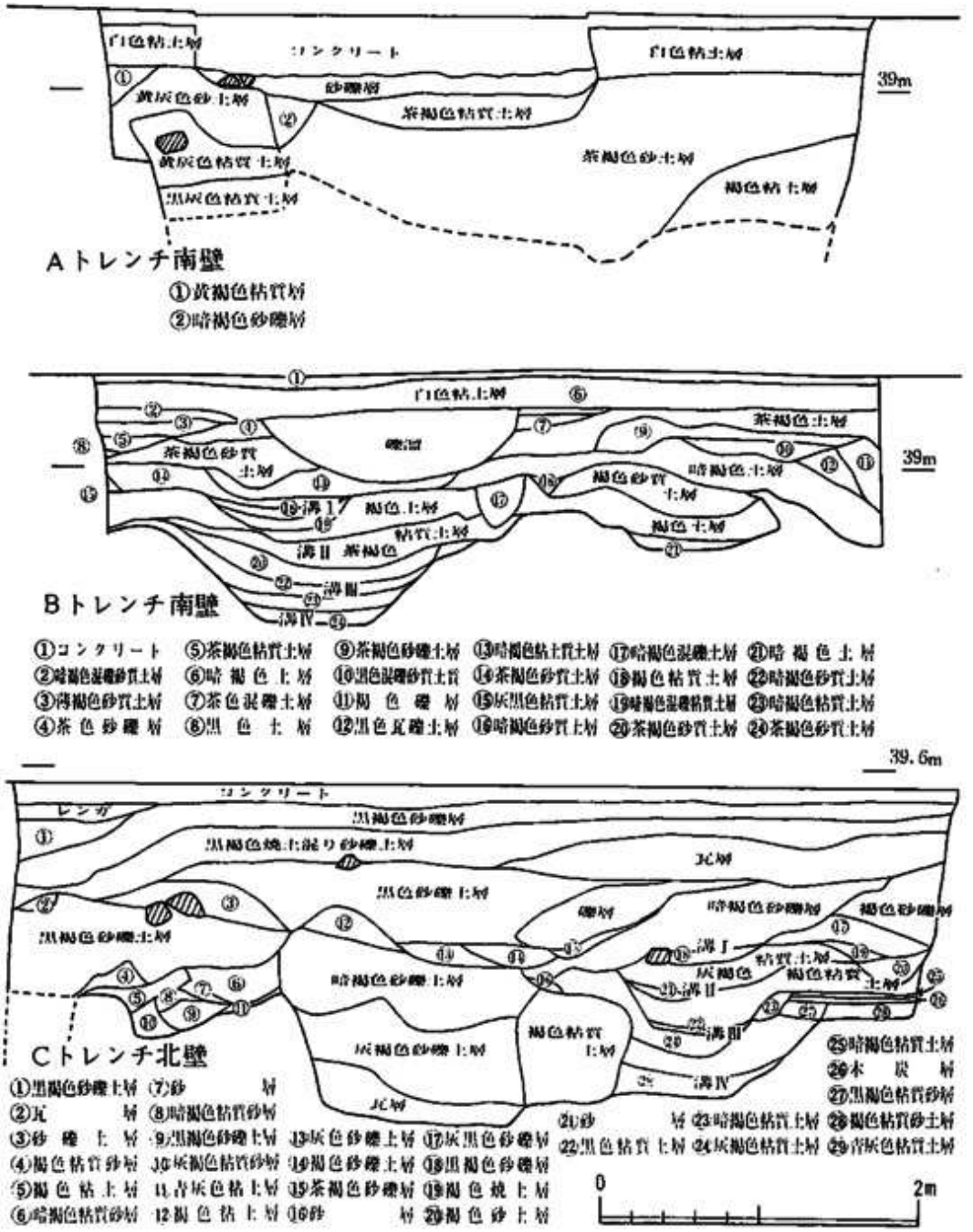
Bトレンチ（第69・70図，図版第64～68）

床面のコンクリートを約10cm剝すと，Aトレンチで認られた同格の白色粘土層がトレンチ全面に拡がっていた。この粘土層下に砂礫層があり，トレンチ中央やや東よりに大きな円形の掘り込みがありその中に礫が充満していた。トレンチ東側では焼土と思われる褐色砂質土層がみられた。これは後述するCトレンチで確認された数枚の焼土層の内の一枚に対比するものであるが，どの焼土層と同一であるかは判然としないが，出土遺物から江戸時代中期以降であることは明白である。一方トレンチ北側では，赤褐色混瓦礫土層が漆喰を含んで拡がっていた。江戸時代末期の諸遺物を包含しており，その内に繊部系の向付がある。さらに掘り下げると，茶褐色砂質土層が礫を混えて約20cm堆積していた。この層中からは伊万里系染付，美濃系天目茶椀や胴衣壺等が出土した。北側では，トレンチ中央から西側に方形の井戸状遺構（WⅠ）と円形井戸状遺構（WⅡ）が本層を切って穿たれていた。この井戸状遺構内から漆喰をはじめとして，伊万里系染付，香炉の蓋，京焼椀等が大きい礫と共に出土した。本層上面ではこれらの井戸状遺構以外は何らの遺構も認められなかった。これを掘り下げると暗褐色土層が20cm程度堆積して拡がっていたが，その上面には，溝らしき遺構もあったが発掘当時は不明確であって，溝が存在していたことが南壁断面で認められたに過ぎなかった。この溝状遺構は残存幅で160cm，深さ20cmである。この暗褐色土層下に褐色砂質土層が横たわり，トレンチ東側で一条の南北に走る溝Ⅰを確認し得た。この溝Ⅰは幅90cm，深さ約25cmを測り，溝内は二枚の堆積層よりなり，小拳大の川原石が多く包含されていた。溝の両肩では，叩きしめられた形跡を見い出せなかった。この溝Ⅰ上部の暗褐色土層や溝内から美濃系天目茶椀，土師質の皿，須恵質甕，青磁と共に16世紀後半の黄瀬戸向付や志野系茶椀が出土し，溝の埋没時期を室町～桃山時代に比定されよう。トレンチ西側では，一辺約120cmの隅丸方形井戸状遺構（WⅢ）が検出され，これより西側では，地山の多少小礫を混じえた黄色粘土層が斜状に深まり西壁コンクリートの基礎下に続いていた。この上面から信楽系擂鉢が出土した。この暗褐色土層を除去すると，トレンチ中央から東側にかけて，幅約210cmの大きな溝状遺構（溝Ⅱ）が南北に一条走っていた。トレンチ東隅では若干の堆積層を切って，西側では地山面をきって溝Ⅱは構築されている。深さは最深部で25cmを測る。この溝Ⅱ内堆積層中から，瓦片，土師器片，古丹波壺片，高坏の脚部片，龍泉窯系青磁など古い時期の遺物をも包含していた。この文化面ではその他に顕著な遺構は見られなかった。さらにトレンチ東側を約20cm掘り下げると，今後は溝幅を狭くした，幅180cmの溝Ⅲが溝Ⅱと上下重復するような恰好で，溝Ⅱの直下に在存していた。溝内より，平安時代の瓦片，須恵質鉢片や，須恵質片口鉢と共に室町時代前半期の土師質の皿や埦等の時期の下る遺



第69図　B・C・Dトレンチ平面図

物も出土した。この壙は，一次調査の際にも多く出土し，その出土状況から中世墳墓と考えられた。今回出土の壙も中世墳墓に使用されていたが，その後破壊され，壙が溝内に流れ込んだものと推定される。またトレンチ西側の隅丸方形井戸状遺構(WⅢ)では底面上に薄く固く叩き



第70図　A・B・Cトレンチ断面図

しめられた暗褐色土層があり，平安時代の遺物が小破片と化して包含されていた。さらに溝Ⅲを約20cm掘り下げると溝底部が現れた。この地山の黄色混礫粘土層を深く切り込んで溝Ⅳが構築されており，その規模は，幅160cm，深さ約50cmである。溝Ⅳの東側は，地山上面を固く叩きしめられ，これが犬行に相当するものと考えられた。この犬行のトレンチ北端部に，二～三

重のピット(ＰⅠ)が検出された。このピットと溝を挟んで西側に約一辺70cmの方形ピット(ＰⅢ)が確認された。これを一直線で結ぐ，ほぼ中央の溝内底部に二重のピット(ＰⅡ)があり，ピットⅡ内は青灰色粘土が充塡されていたが，トレンチ北壁ぎわに大形礫が小礫に支えられた状況がみられた。これは偶然に礫が埋没したとは言えず，寧ろ，溝Ⅳが幅広である為に，小さな橋を建造する際に使用されたものであり，このピットⅠ・Ⅱ・Ⅲが一直線に並ぶことも小橋の存在より肯定されるべきであろう。仮りにこの推測が許されるならば，本トレンチ付近に門か木戸等の出入口が存在した可能性があるが，トレンチ内ではこれを十分証明し得る材料は見当らなかった。溝Ⅳ内からは，小破片と化した須恵器片や土師器片・青磁片等がみられ，時期的には鎌倉時代に埋没したと考えられる。

このように本トレンチでは溝Ⅳを踏襲して暫時上下の堆積層を切り込んでⅢ・Ⅱ・Ⅰの順で構築されて行った。また，後記するＣトレンチでの溝の交叉は本トレンチでは上・下を重復しているがＣトレンチで確認された溝の推定延長線が本トレンチで重復することからも，本トレンチでの溝のあり方は正しいと言える。しかもこれらの溝は，鎌倉時代から室町～桃山時代までの間に少くとも4回に亘り構築，使用されたのであり，東禅院大路の変遷を考える上で貴重な資料を提供したものと言えよう。

本トレンチは，他のトレンチに比べ，最も光源力が弱く，土層の色別等の区別に困難を極めたが上記の成果が生じたことは幸いであった。　(松井忠春)

Ｃトレンチ（第69・70図，図版第69～73）

Ｃトレンチでは厚さ10cmほどのコンクリートとその根石の下に，焼土を混じえた黒褐色の砂礫層がみられ，このトレンチの西寄りと東拡張部では瓦溜へ至る。この瓦溜の中には多量の江戸時代末期の瓦とともに，伊万里焼の染付が少なからずあり，中には火災の折の高熱で融解しているものもみられた(第1焼土層)。この焼土層の下位には，灰褐色の砂礫層を挟んで，木炭や焼土を含む暗褐色の砂層があり，この層中には花崗岩の礎石が一ケ据えられている（第2焼土層)。但しこの焼土層はトレンチの南側半分でのみ確認されたのであり，北と西端は掘込みとコンクリートの掘り方のために破壊されていた。第2焼土層の下には固くしめられた暗褐色の砂土が堆積しており，この下位には同様に木炭を含む焼土が一定の面をなして存在している(第3焼土層)。そしてこの焼土層は固い砂礫土を間に置いて，厚さ15～20cmの焼土層(第4焼土層)に続く。この第4焼土層には2個の礎石がみられ，また焼土に混って多くの土器や陶器，磁器がみられる。遺物の中には瀬戸や美濃の天目をはじめ，丹波焼の甕・擂鉢・塩壺などみられた。この第4焼土層の下位は，トレンチの北半や西端と同様に掘込みが錯綜していたが，遺構相互の切合関係は，暗いために必ずしも十分に把握することができなかった。

一方トレンチの東側は，比較的よく層序が保たれている。すなわち，第4焼土層と同位の層より以下は，4枚の溝が上下に並んで検出された。溝Ⅰは浅くまた肩幅は狭い。そして西肩近くには一ケ所第4焼土層に伴う礎石が入り込んでいる。溝中には黒褐色～褐色の砂が堆積し，

砂に混って桃山時代の陶器や土師皿等が発見されている。そして褐色砂土を挟んで下には暗褐色粘土に掘込まれた肩幅1.1m，深さ20cmの溝Ⅱがあり，溝中には砂が分布してその下位は水が流れた形跡をとどめていた。溝Ⅲは肩幅については溝Ⅱと同じくらいであるが，深さ40～50cmもあり，溝中の堆積は上下2層に分けられる。第4番目の溝は地山の褐色粘土層に掘られ，西側は他の掘込みによって切られてはいるが，北肩幅が1.5m以上もある大きなもので(溝Ⅳ)，深さは50cmばかりある。溝の東側はゆるやかに上りながら発掘区外へ続く犬行と考えられる。この溝も上下2層に区分でき，上層の暗褐色粘質砂層中には，須恵器とともに土師器の坏があり，下層の青灰色粘質土層中には，龍泉窯系の青磁，須恵器大甕，片口鉢，瓦器，土師器の皿などが多く含まれていた。従ってこれら溝は鎌倉時代から室町～桃山時代にかけて，継続されて使用された一連のものであると考えることができる。

地山の褐色粘質土中に掘られた遺構としては，井戸3件，柱穴2個，溝3件，その他である。井戸Ⅰは北壁に大半を隠される大形の素掘りのもので，中に江戸時代の瓦類が多数含まれていた。井戸Ⅱはこれと反対にトレンチの南側にかかる不整円形をした素掘りで，近世初の陶器，すなわち志野や織部の皿，丹波の擂鉢などを出土するが，比較的新しい京焼の灯明皿を伴うことから，井戸Ⅰよりも新しい時期のものと思われる。井戸Ⅱはトレンチの西端近くにある大形素掘りで，その西側は郵便局の基礎掘り方で破壊され，北は発掘区外へ続く。遺物は余りないが，近世の終り頃のものが少々混っている。

柱穴2個のうち一つには，花崗岩の礎石を配しており，レヴェルからして，桃山期の溝を埋めてつくられた礎石と対となる。一方トレンチの中央やや東寄りの地点には，南北に走る一条の溝がある(R－1)。西側の肩は隣接する遺構に掘り切られており，また東側は溝Ⅳ(R－4)に切断されてその大きさは不明である。そして北は井戸ⅠとR－3にはばまれ，溝の中央は斜位に小さな溝(R－1)が走っている。溝底には一面に木炭が付着しており，溝の西壁と西壁近くの溝底には支え棒の炭化したものがつきささっていた。すなわち，溝を木板で蓋をしたものの焼け落ちた姿を想定しうる。木炭層の上には，茶褐色の粘質土があって，この中に多量の木炭と遺物を含んでいる。遺物には土師の皿，青磁椀などがあり，これらから平安時代終りから鎌倉時代にかけて使用された溝であることが知られる。

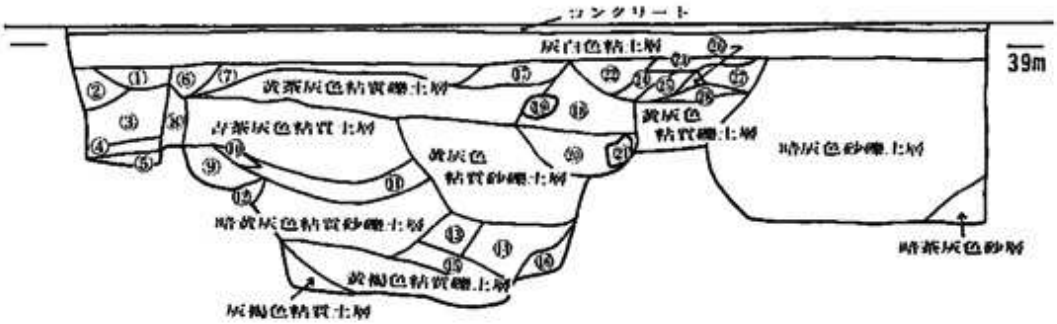
東洞院大路の側溝はまずR－1がつくられた。これは別館跡やBトレンチで検出された溝よりやや西に偏じているが，ここは三条大路の北側溝との交点に近いための所作とも考えられる。その後鎌倉時代に至って，Bトレンチの溝に真直ぐに通ずる溝Ⅰ(R－4)がつくられ，この後は桃山時代に至るまでその位置は踏襲されていった。そして江戸時代のある段階で，曇華院の敷地が西に延び，従来からすれば溝の外に建物の礎石がみられ，かつ井戸までつくられるようになってくる。こうした歴史的変遷をこのCトレンチで検出した遺構は物語っている。

(甲元真之)

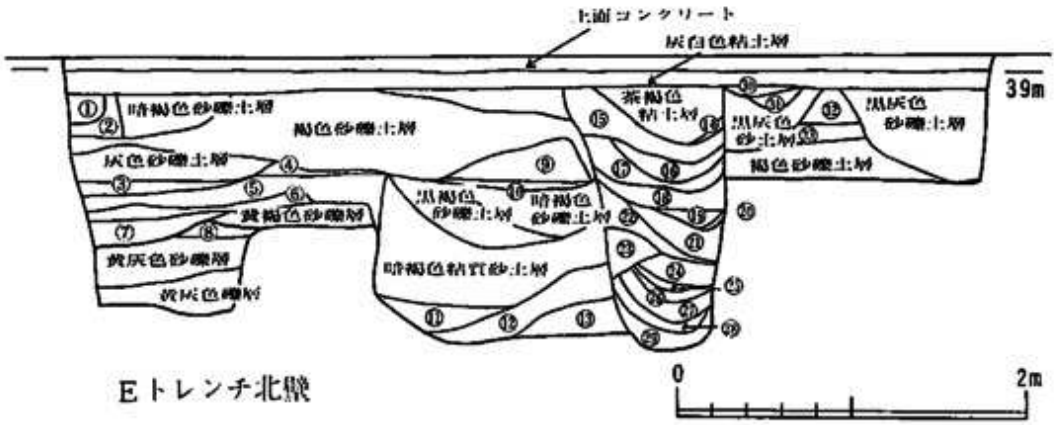
Dトレンチ（第69・71図，図版第74）

このトレンチは地山面まで比較的浅く，中世以前に構築されたとおぼしき側溝その他の舗設等の遺構は検出されなかった。

最上面のコンクリート床の下位には，厚さ18～20cmの叩きしめた灰白色の粘土が敷かれており，その下層では砂礫土を主体とする第2層，粘質土の第3層と続く。コンクリート上面から



Dトレンチ北壁



Eトレンチ北壁

Dトレンチ北壁
①暗灰色粘質土層
②黄灰色粘質土層
③黄灰色砂層
④青灰色砂層
⑤暗青灰色砂礫層
⑥暗黄灰色粘質礫土層
⑦暗灰色粘質礫土層
⑧茶褐色粘質土層
⑨灰褐色粘質土層
⑩茶褐色粘土層
⑪黒色焼土層
⑫黄褐色粘土層
⑬暗褐色粘質礫土層
⑭黄灰色粘質砂礫土層
⑮黄褐色粘質礫土層
⑯黄灰色粘質礫土層
⑰瓦溜
⑱黄灰色粘質礫土層
⑲黄褐色粘土
⑳黄灰色粘質礫土層
㉑黄褐色粘土
㉒灰褐色粘質礫土層
㉓茶褐色粘質砂土層
㉔灰褐色粘質土層
㉕黄灰色粘質土層
㉖茶褐色粘土層
㉗灰褐色粘質土層
㉘青灰色粘質礫土層

Eトレンチ北壁
①黒褐色礫土層
②褐色砂礫土層
③砂土層
④褐色粘質砂土層
⑤褐色砂礫土層
⑥砂土層
⑦黄灰色砂礫層
⑧褐色砂礫層
⑨褐色砂礫土層
⑩褐色粘土層
⑪褐色砂礫土層
⑫黄褐色砂礫土層
⑬褐色砂礫土層
⑭暗褐色砂礫土層
⑮黒褐色砂礫土層
⑯茶褐色粘質礫層
⑰黄褐色砂礫土層
⑱黒褐色砂土層
⑲黄褐色粘質砂土層
⑳灰層
㉑黒灰色土層
㉒灰褐色砂礫土層
㉓褐色砂礫土層
㉔黒褐色砂礫土層
㉕灰層
㉖褐色砂礫土層
㉗黄褐色粘質砂土層
㉘褐色砂礫土層
㉙黒褐色粘質砂土層
㉚黄褐色砂礫土層
㉛褐色砂礫土層
㉜黄褐色砂礫土層
㉝黄褐色砂土層

第71図　D・Eトレンチ断面図

深さ約70cmほど，すなわち海抜38m60cmあたりで，地山の黄褐色粘質土層に達する。この地山はトレンチの北側では遺構により削られているが，南半分はほぼ平坦になっている。第2層及び第3層には常滑の大甕，丹波焼の擂鉢，伊万里の染付，京焼の灯明皿，塩壺，火車など各種の遺物が散見されたが，それらの製作年代にはかなりの幅が見込まれるのが注目される。

このトレンチで検出された遺構は，掘込み2件，井戸1件，柱穴4で，掘込みはどちらも第2層を切断する形で造られ，伴出した遺物も江戸時代末期のものと比定される。井戸は第3層を掘込んで築かれた素掘り，有段式のものである。4つの柱穴は総て第3層からの掘込みで，遺物の出土はなかった。

近世の構築に伴う掘込みを除いて，ほぼ平坦な地山面に南北方向その他に走る遺構は検出されず，かつ残存地山面のレベルから見ても，中世以前の遺構は存在していなかったと結論される。（佐々木英夫）

Eトレンチ（第68・71図，図版第75）

コンクリートと粘土で固めた旧中京郵便局地下室の床の下は，砂礫層を主体とする堆積がトレンチ全体に分布し，地山である黄灰色砂礫層に至る約80cmの間も大きな変化は認められなかった。コンクリートと粘土の下の第2層は，褐色ないし黄褐色の砂礫土を中心とする層がかなり厚く堆積する。この層中には江戸時代前半期の遺物が多く出土している。第3層は黄褐色ないし灰褐色の砂礫土層の堆積があったが，この層は全体には広がらず，部分的に上位の砂礫土層がくい込んで切断されている箇所も多い。この第3層では遺物は多くないが，出土するものの多くは土師器の小片で他に美濃製の天目がみられる。第4層は黄褐色の砂礫土を中心とする層状であるが，地山の黄灰色砂礫土層との間隔は全体に狭く，また部分的には厚薄もみられる。出土遺物は桃山時代ないし江戸時代初期の土師器等を含むもので，その量はさほど多くはない。トレンチの西北隅を，1m×1mほど50cm掘り下げて地山の確認を行ったが，灰色の強い黄色砂礫層が下位まで続くことが判明した。

明確な遺構と考えられるのは，2件の井戸と1件の縦坑である（第68図）。これら3件の遺構は切合をみせWⅠ→WⅡ→WⅢと順次新しくなる。WⅠは第4層を，WⅡは第3層を掘り込んでつくられ，WⅢは恐らく地下室をつくる際に上面を整地されたものと推測される。このうちWⅡからは江戸時代初めの土師器や塩壺等が出土している。

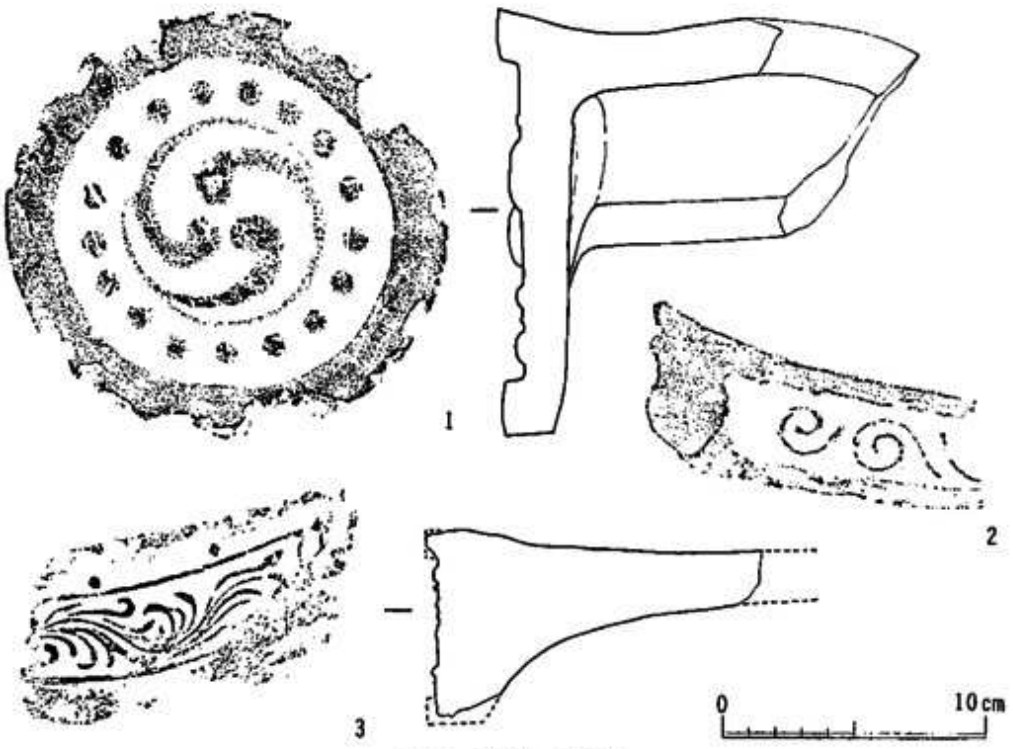
このようにEトレンチでは地山の部分が撹乱されずにほぼ原状をとどめていた。レヴェル的にもB，Cトレンチで検出された溝よりも高位にあり，本来溝があったとすれば当然検出しうる状態にあった。（佐々木英夫）

第2章　出　土　遺　物

今回の発掘調査で採集した遺物は石炭箱にして9箱分にあたる。このうち最も多いのは土師質の皿であり，他に陶磁器類もかなりの割合に達する。そしてこれら遺物の大多数は室町時代後半以降のもので占められている。

瓦類（第72図，図版第76の1・2）

瓦類は比較的多く出土したが，特にCトレンチで近世瓦が多くみられた。軒丸瓦・軒平瓦・桟瓦・丸瓦・平瓦・塼等に分類される。軒丸瓦は，巴文軒丸瓦で，大小様々の大きさのものがあり，室町～桃山時代から江戸時代末期までのものである。内区に大形の三巴文を配し，その周りを大形の珠文が取り囲み，幅広い外縁に続く。丸瓦部凸面は縦ヘラナデで調整され，凹面は横ヘラナデ痕が数条の細い凹線が横走する。青灰色が主で，焼成堅緻で，胎土はやや砂っぽいものが多い。江戸末期ごろになると桟瓦として小形巴文軒丸瓦が軒平瓦と接合させて使用している。軒平瓦には，平安時代中期の均整唐草文軒平瓦があり（第72図3），文様は『大伴』瓦の流れをくむものである。未だ出土例を知られない。垂下顎で，焼成かたく，胎土は緻密であ



第72図　瓦拓本・実測図

る。また江戸時代になると黒瓦ではあるが，古式な唐草文を配し，脇幅が広くなるもの(第72図2)が現われる。江戸時代末期では赤瓦が主になり，軒平瓦も軒丸瓦接合の桟瓦となる。内区の均整唐草文が小振りで肉厚となり，脇幅も一段と広くなる。丸瓦は大形の近世瓦が多く，平安時代後期のものもあり，緻密な胎土で焼成もかたい。凹面には布目痕・凸面には縄目痕がみられる。平瓦に於いても同様である。埦は厚さ約3cmのものが主で，Bトレンチ溝内より特に多く出土した。完形品はなく殆んどが破片で，後世壊されたことが明白である。これは別館の調査でも明らかなように，中世墳墓に用いられたもので，多くは室町時代に比定さる。この他に特異なものとしては，側面に右から左に延びる波状唐草文を太い凹線で描いた埦状の平瓦があり，これはあるいは飾り埦として用いたものかも知れない。江戸時代末期のものであろう。

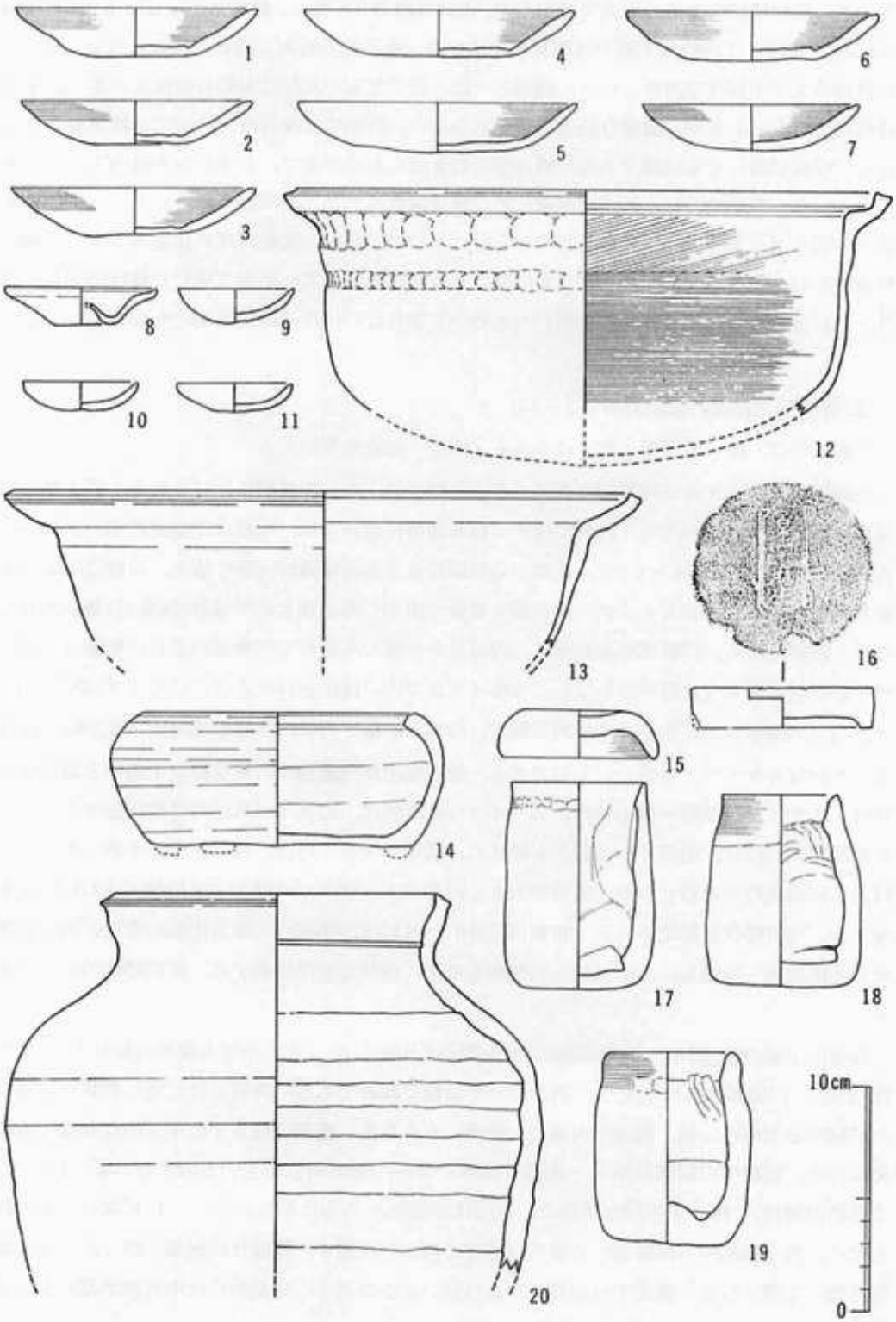
土師器（第73図，図版第76の3～15)

土師器には，皿・羽釜形土器・ほうろく・塩壺・胞衣壺等がある。

土師質皿は，大きさや時期的差異により三分類され，さらにⅢ類に分けられる。第Ⅰ類は，径10～12cm位のものが主で，内外に横ナデ痕が顕著に認められ，本類は三型式に細分される。Aタイプ(第73図1～4・6)は，底部から口縁に立上る所に溝が凹形を描き，口縁は中太りするを特色とする。このAタイプの皿が最も多量に出土した。Bタイプ(第73図5)は径が大きくなり，器壁は薄く，口縁は中太りせず，内面はナデ痕がみられるが外面のそれは判断とせず，ナデとの境は目立った段がつかない。Aタイプより古い技法と言えよう。Cタイプ(第73図7)は，内面に溝がなく，器壁は全体的に厚く，内外面を横ナデし，口縁端部内側に低い段を設ける。これはAタイプより新しいものである。他の出土伴出遺物や六角堂跡出土遺物と対比させれば，Aタイプは室町～桃山時代，Bタイプは室町時代，Cタイプは江戸時代に比定される。Ⅱ類(第73図8)は，所謂『へそ皿』と呼ばれ，底面が大きく内面に食い込んだ小形のもので，灯心に使用されたと言われる。底面が大きく内面に入り込み，口縁は二重口縁の如き形状を呈する。室町時代と推定される。Ⅲ類(第73図9～11)は，手捏ねによる小形の皿で，内面は指ナデを縦位に一回施し，外面は何らの調整もせず，指紋などが付着する。江戸時代のものである。

羽釜形土器(第73図12，図版第76の12)も数多く出土した。その中でも復元可能なもの(第73図12)は，口縁が二重に立上り，内面はハケ目痕が顕著である。外面には二条の鎖状の押捺痕が口縁部と胴部との境，胴部中央部の二箇所にみられる。底部は恐らくは平面的な丸底であったようだ。器壁は口縁部が厚く，胴部では薄くなる。鎌倉時代のものと考えられる。『ほうろく』(第73図13)は極めて堅緻な焼成で，内面は赤褐色，外面は黒色を呈し，口縁部は二重口縁となり，外面胴部から口縁部への境には横位の指ナデを施す。器壁は口縁部が厚く，徐々に底部に向って薄くなる。復元では器高はかなり高いようである。時期的には中世前半期のものであろう。

胞衣壺(第73図14)はほぼ完形で出土した。口縁部が胴部より大きく半月形に内彎し，器壁は



第73図　土師器及陶器実測図

口縁部に向って，太く，細くなり，口縁部で再び厚くなる。表面は研磨され，内面はナデ調整される。底部には低い脚を設けていたらしい。黒色を呈し，焼成良好で，胎土は緻密である。江戸時代のものである。

塩壺(第73図15～19)の身は口縁部をしぼり上げて作り出し，その外面をナデ調整し，内面をヘラケズリ調整する。古式タイプのものが圧倒的で，それと時期的に並行する，内面をナデ調整した，上面頂部が凹む蓋(第73図15)があり，一方蓋上面中央に『泉州麻生』の二重方格印を刻し，口縁部は角ばり，裏面には布目痕がみられる新しい時期のものもある。　(松井忠春)

陶器（第74図，図版第77・78)

採集された陶器は，量的にはさほど多くはない。そしてその殆んどは室町時代の後半から江戸時代にかけてのものである。施釉陶器はいずれも小破片であり，全形を窺えるものはなにもなかった。

天目には美濃系のものと瀬戸系のものがある。美濃天目(第74図１～３)は焼成が比較的軟らかく，厚い黄褐色～黒褐色の釉薬をもち，縞状の黒斑がみられるものもある。これらは，室町時代後半のもの(第74図１)と桃山～江戸時代のものとに分けることができる。また美濃系のものに白天目と思われるのが２個出土している。一方瀬戸系の天目(第74図４～６)は硬質の焼成をなし，深い黒褐色の釉薬で内外面をおおわれる。瀬戸天目は室町時代後半のものが殆んどである。皿は大部分美濃系の陶器で占められ，その中でも志野が多い。そしてこの手の焼物は桃山時代に属するのが殆んどである。黄瀬戸向付(第74図７・８)は２個体出土している。志野の代表的なものは内面にぼかしの草花文をもつ浅い高付皿があり(第74図９)。坏の出土も小量認められる。この他に織部の皿もみられるが，小破片のため図化するに至らない。皿の中で卸し目をもつものは数点あり，いずれも古瀬戸である(第74図12)。

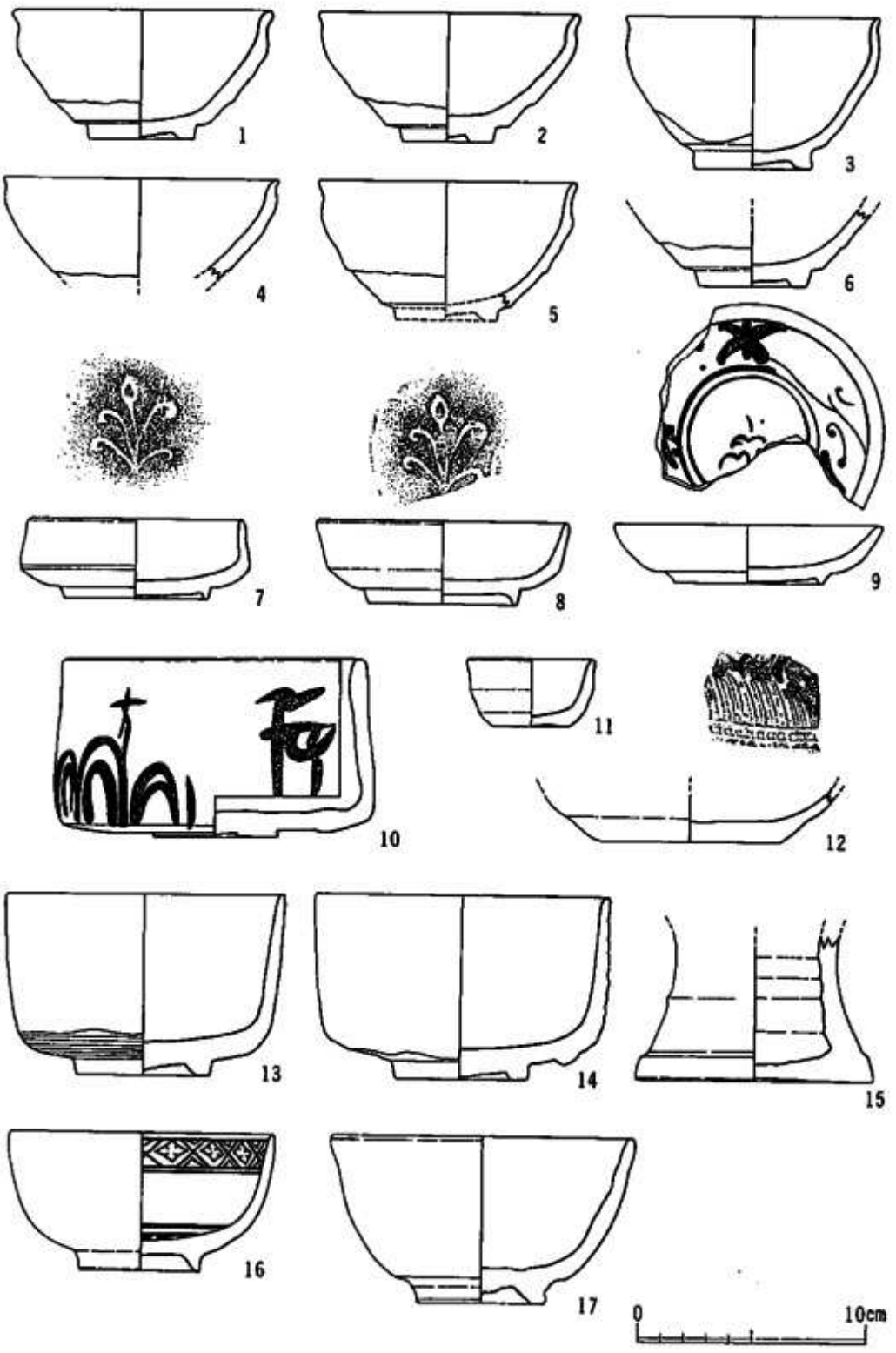
椀には美濃系のものと唐津系のものがある。美濃系の椀には，外面に文様をもつ志野(第74図10)と，瀬戸黒(第74図13・14)があり，いずれも室町時代後半の製作品と考えられる。この他にも美濃系の椀が出土しているが，量的には多くない。一方唐津系の椀は美濃系のものよりはやや時期が新しく，江戸時代の中頃までみることができる。これらは灰色がかった白色の釉薬をもって，胎土は美濃系のものに比べてやや硬いが，製形は少々粗い(第74図17)。

以上の外に少数ではあるが瀬戸系の瓶の破片も見出される(第74図15)。

摺鉢や大甕の類には，常滑，信楽，丹波，備前のものがある。うち備前や常滑のものは鎌倉時代から室町時代にかけての製品であり，信楽や丹波の製品が多くなるのは桃山時代以降のことである。こうした傾向は近接する六角堂でのあり方と相似ている。　(甲元真之)

磁器（第74図，図版第77)

磁器には中国製のものと伊万里焼のものがみられる。前者は平安時代から室町時代にかけて認めることができ，一方後者は江戸時代以降の磁器の殆んどを占める。中国製の磁器には，灰



第74図　陶器及磁器実測図

白磁，白磁，青磁，青白磁がみられる。灰白磁は玉縁状の口縁をもつ台付の椀と口禿を有する皿があり，白磁は皿のみである。青磁は，椀型のものはすべて鎬連弁を外面にもち，内面には流雲文を片彫りする龍泉窯系のもので占められ，出土量が少数の小皿には同安窯系のものもみられる。

伊万里系の磁器は大多数が青染付をもつ茶椀で，時代が下るにつれて多様な器形のものが出現する。赤絵も少量ながら採集されている。青磁の出土量は染付に比べて殆んどわずかで，内面に染付するものも出土している(第74図16)。　（甲元真之）

金属製品

今回の発掘で検出した金属製品は，五枚の古銭と煙管の雁首である。前者は四枚の渡来銭と一枚の古寛永通宝で，渡来銭は総て北宋銭で，時代順に，元豊通宝(第75図1，初鋳1078年，Cトレンチ出土)，紹聖元宝(第75図2，初鋳1094年，Cトレンチ出土)，政和通宝(第75図3，初鋳1111年，Cトレンチ出土)，宣和通宝(第75図4，初鋳1119年，Cトレンチ出土)である。

第75図　銅銭拓本（縮尺½）

元豊通宝は腐蝕が甚しく，銘もかろうじて判読できるほどで，或いは日本鋳の私鋳銭の疑いもある。紹聖元宝は銘もしっかりしており，出土例の多いことは近隣の六角堂調査の際でも確認されている。政和通宝と宣和通宝はともに残りが良いが，殊に後者は背面まで明瞭な切れ味を示す。他に，寛永通宝(第75図5，Bトレンチ出土)が一枚検出されているが，銘字の形から一見して古寛永通宝と知れる。詳細に観察してゆくと，古寛永通宝のうちでも近江国坂本で鋳造された所謂坂本銭(1636年初鋳)と思われる。背面は特記すべき点は認められない。

金属製品としては，他に煙管の雁首がある。個体は真鍮製かと思われるが全体に腐蝕が激しく，かろうじて原型を止めているだけで，特記すべき事項は見当らない。　（佐々木英夫）

自然遺物

検出された自然遺物は貝殻と魚類の骨である。

貝殻の認められた貝類は，

アカガイ　*Scapharca broughtonii*

アカニシ　*Rapana thomasiana*

サザエ　*Batillus cornutus*

ハマグリ　*Meretrix lusoria*

の四種で，いずれもCトレンチから出土した。

魚類は，Cトレンチで三節分の脊椎骨が検出されており，形状から見てブリ *Seriola quinqueradiata* のものと考えられる。これらの自然遺物は食用に供された残滓であろう。

自然遺物の同定は，平安博物館 渡辺 誠助教授の御教示を得た。末尾ながら謝意を表するものである。

（佐々木英夫）

ま　と　め

第2次調査では3m×6mという小さなトレンチ5本を発掘したにとどまった。しかも初期の目的が東洞院大路の側溝を確認し，平安京条坊復元の基礎資料を得るために限られていたので，高倉宮や蜜華院関係の遺構を把握するには不十分であった。しかし調査した箇所では，それなりに重要な知見を得ることができた。

Bトレンチの一部とCトレンチでみられた江戸時代の焼土層は，蜜華院に関する焼失である。第1焼土層は瓦や伊万里焼，京焼の陶磁器から江戸時代末期のものと考えられ，一方第4焼土層は，土師器の皿や伊万里焼のありかたから，江戸時代の初め頃の火災で生じたものと想定しうる。桃山時代以降，蜜華院は4回焼失していることが，文献で窺われる。従って文献で知られる焼亡の年代と焼土層は，次のように比定しうる。

第1焼土層 — 元治元年(1864)
第2焼土層 — 天明8年(1788)
第3焼土層 — 宝永5年(1708)
第4焼土層 — 慶長8年(1603)

このうち第1～第3焼土層までは，蜜華院に近接する六角堂と同一であり，出土遺物の面でも大差はない点でこの年代比定は肯首しえよう。

B・Cトレンチで確認された一条の溝は，幅約160cm，深さ50cmを測る。そしてこの溝に東接して犬行がみられることから，東洞院大路の側溝であることはまちがいない。5尺以上の幅については延喜式の『式京程』に記載された大路の側溝幅とは異って大きすぎるが，三条東洞院あたりでは，東洞院川が流れていたことが知られているので，溝幅が広がることは十分にありうることである。D・E両トレンチでは，溝が存在していたとすれば十分に確認しうる状態にあったが，そこでは溝はまったく検出されなかったこと，そして，B・Cトレンチで溝に続いて犬行が確認できたことなどから，B・Cトレンチで検出した溝は，東洞院大路の東側溝であると認定できる。

さてこの東洞院大路東側溝は，規模を縮少しながらも，桃山時代までは同じ位置で継続使用されていたことが判る。そしてこれ以後は寺域がさらに西に延びて，今日の東洞院大路に近い位置にまで広がってゆく。上杉家本や町田家本の『洛中洛外図』にみられる天文21年(1552)に建てられた蜜華院が，慶長8年(1603)12月19日に焼亡していることから，桃山期の遺物を含む

溝Ⅰは，慶長8年まで使用されていたものとなしうる。そして，慶長8年焼亡の後，寛文年間(1661～1672)に曇華院が再建された際，秀吉が天正18・19年(1590・91)に修復した街路にあわせて寺域を西に延ばした事情をこれらは物語っている。寛文年間に再建されて以降は，ここに建物が建てられたことは礎石の存在で知られるが，礎石はさほど大きくはなく，塔頭ぐらいの規模にすぎなかったと思われる。この曇華院は，元治元年(1864)に焼亡し，下鴨蓼の地に移り，この地は明治35年に中京郵便局が建築され，現在に至るのである。(甲元真之・松井忠春)

EXCAVATION AT THE SITES OF THE OLD HIGASHINOTOIN AVENUE AND DONGE-IN TEMPLE IN THE CAPITAL HEIAN

Recently Kinki Regional Post Service Bureau has make a plan of rebuilding of Nakagyo Post Office, Hishiya-machi of Sanjo Higashinotoin, Nakagyo Ward, because of deterioration of the building. This area is widely known as the "Takakuranomiya (高倉宮) Mantion" of Prince MOCHIHITO-OH (似仁王) in the late Heian Period, and from the Muromachi Period onward, Tsugenji-Dongein (通玄寺曇華院) Temple was on the same area. Further more, the results of the past excavation excuted near this area indicates the large probability that the side ditch of the old Higashinotoin (東洞院) Avenue and the Sanjo (三条) Avenue would be found.

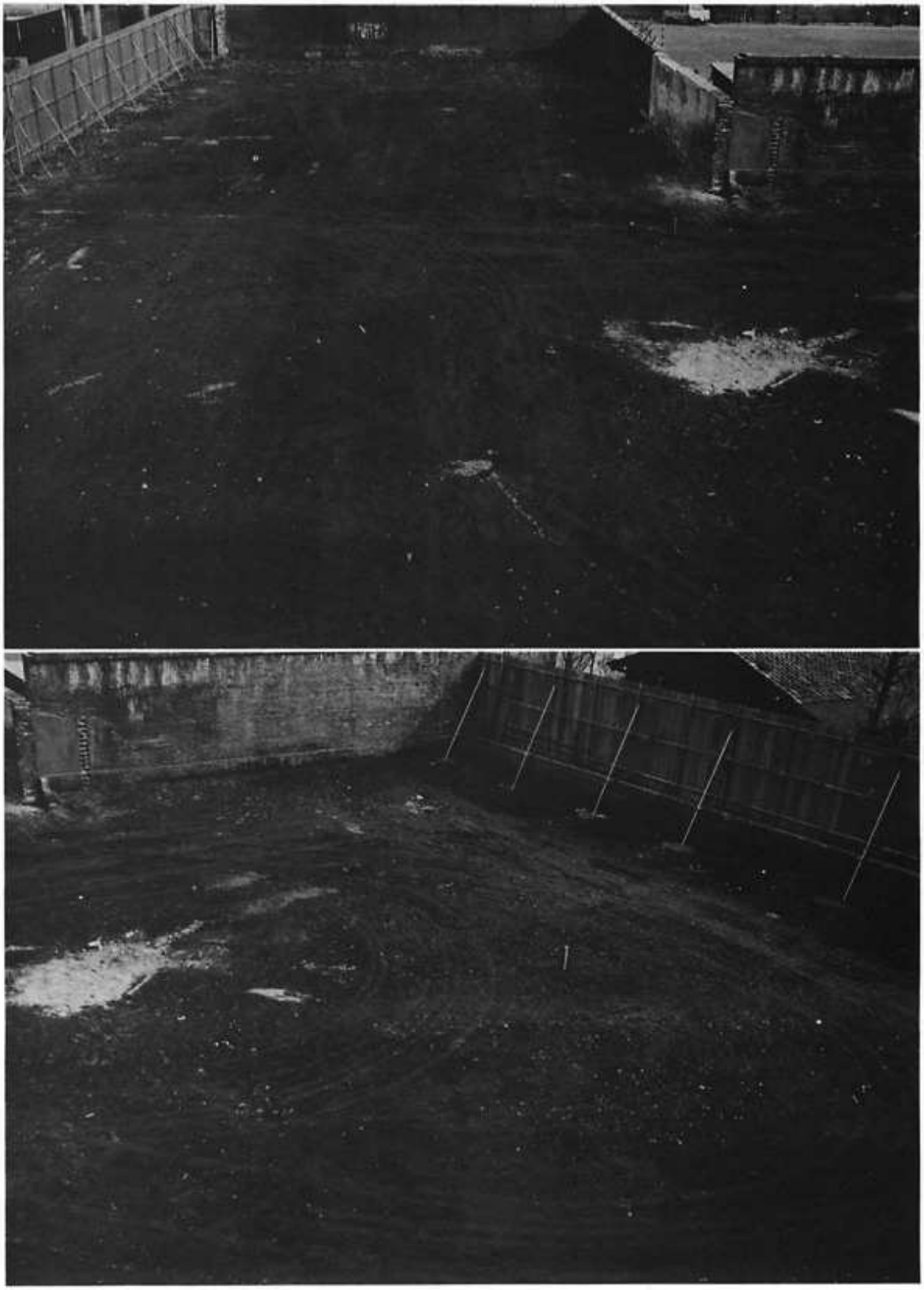
Thus, Kinki Regional Post Service Bureau gave a commission to the Heian Museum of Ancient History to excavate the site of Nakagyo Post Office. The excavation was placticed from march, 1975 to march, 1976.

As the result of the excavation, three ditches running parallel with present Higashinotoin Stseet were found, and these ditches were confirmed as the side ditch of the old Higashinotoin Avenue. The inner ditch seems to be older, and it goes at least back to the early Middle Age. The ditch near Higashinotoin Street seems to be in the later Middle Age.

It indicates the extention of Machiya (町屋, Urban House) from the early Middle Age to the later Middle Age, and the width of the Avenue gradually decreased.

When we restore the Jô-Bô (条坊) Grid Sistem of the Capital Heian by the oldest ditch found in this site and the side ditches of the old Sanjo Avenue and the Karasuma (烏丸) Street found by past excavations, it can be recognized the Jô-Bô Grid Sistem extremely overlaps present day streets.

Excepting it, many pillar holes of the Dongein Temple were found. But, because of the disturbance in later ages, notable sites of buildings were not recognized. Many wells and gathered stones' sites were also found. They offer good data of life and burial system from the early to the later Middle Age.

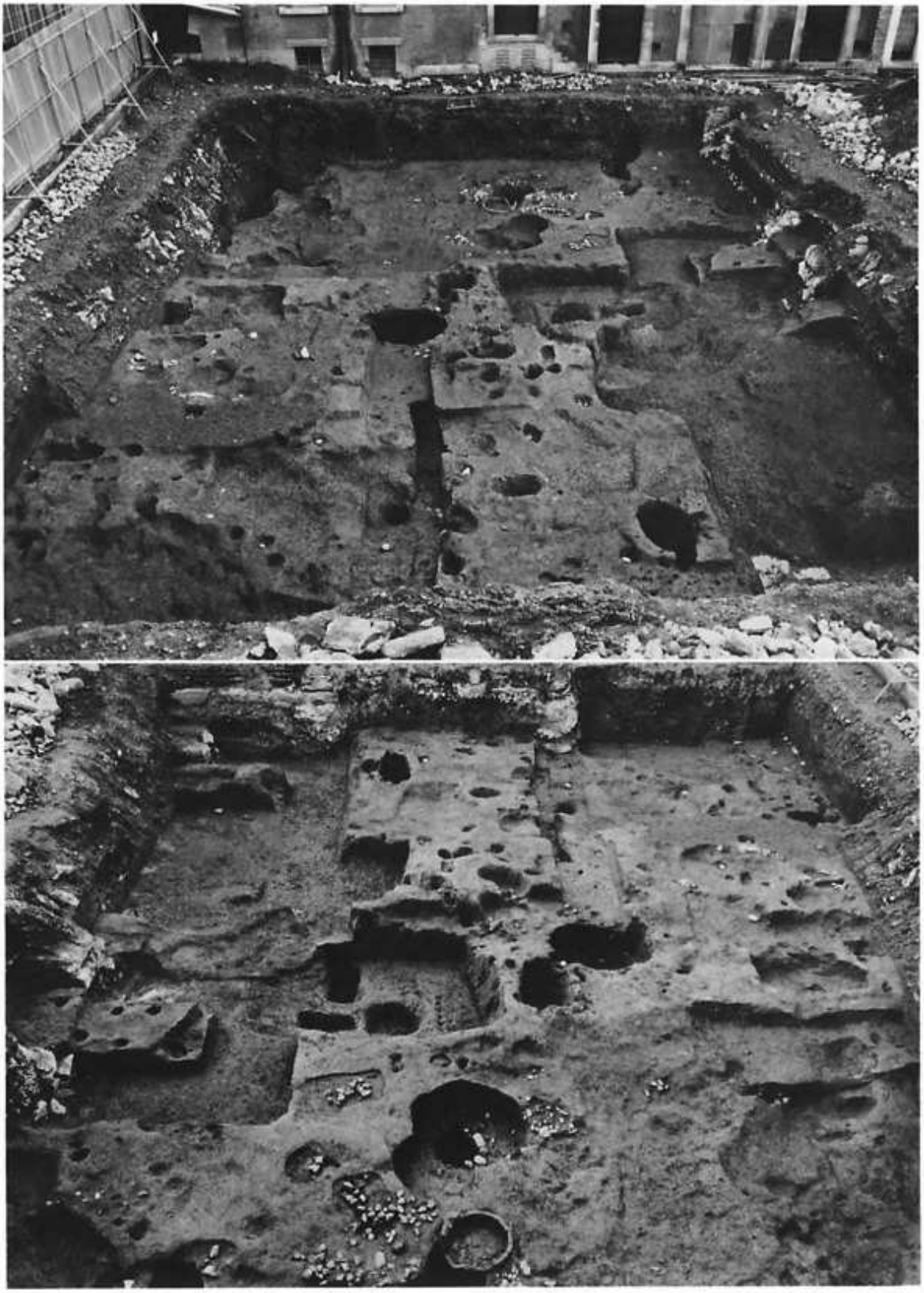


上：A区調査前全景，下：B区調査前全景

左：当初調査第２トレンチ調査後全景，右：当初調査第１トレンチ調査後全景

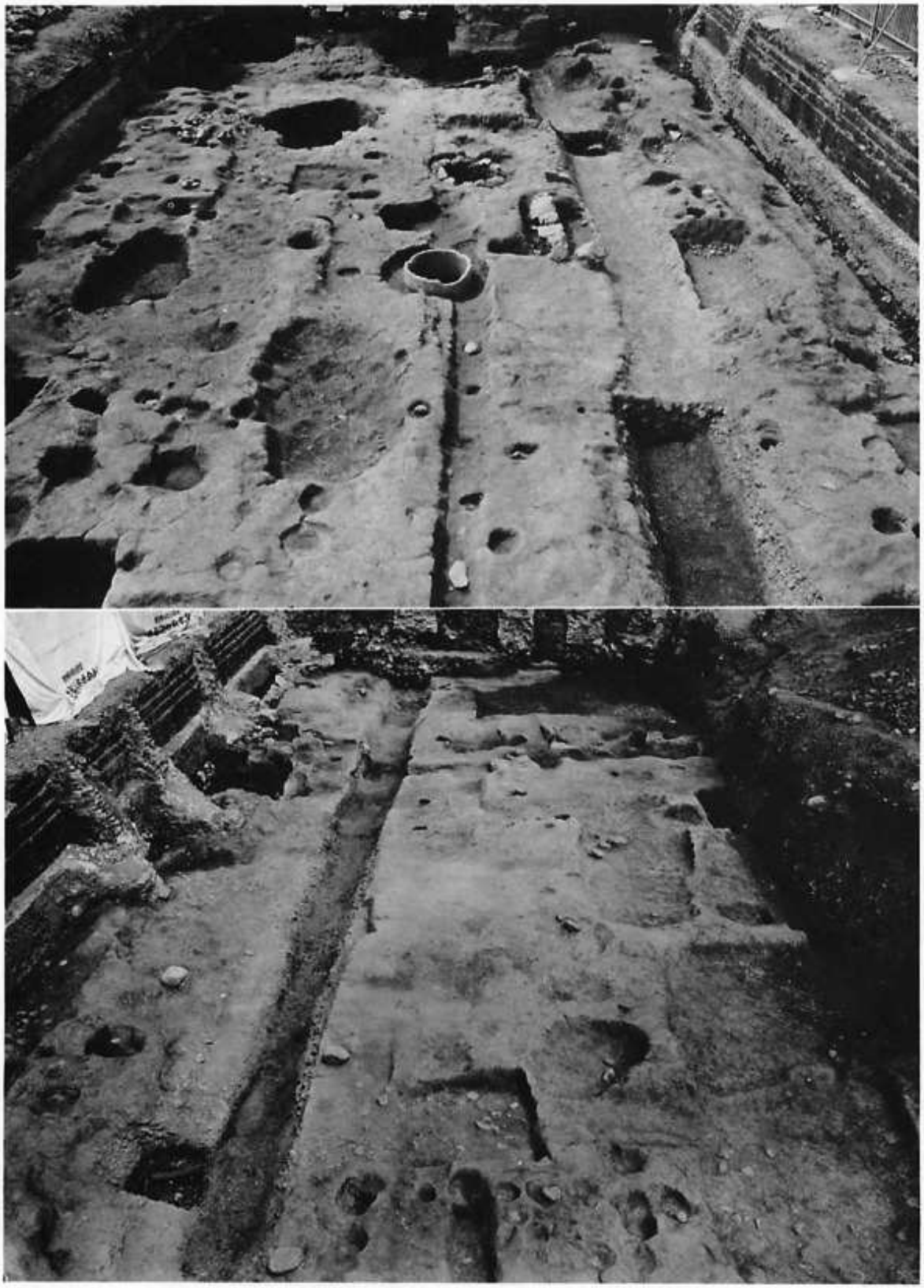
左：当初調査第3トレンチ調査後全景，右：当初調査第4トレンチ調査後全景

左：A区遺構全景(北から)，右：A区遺構全景(南から)

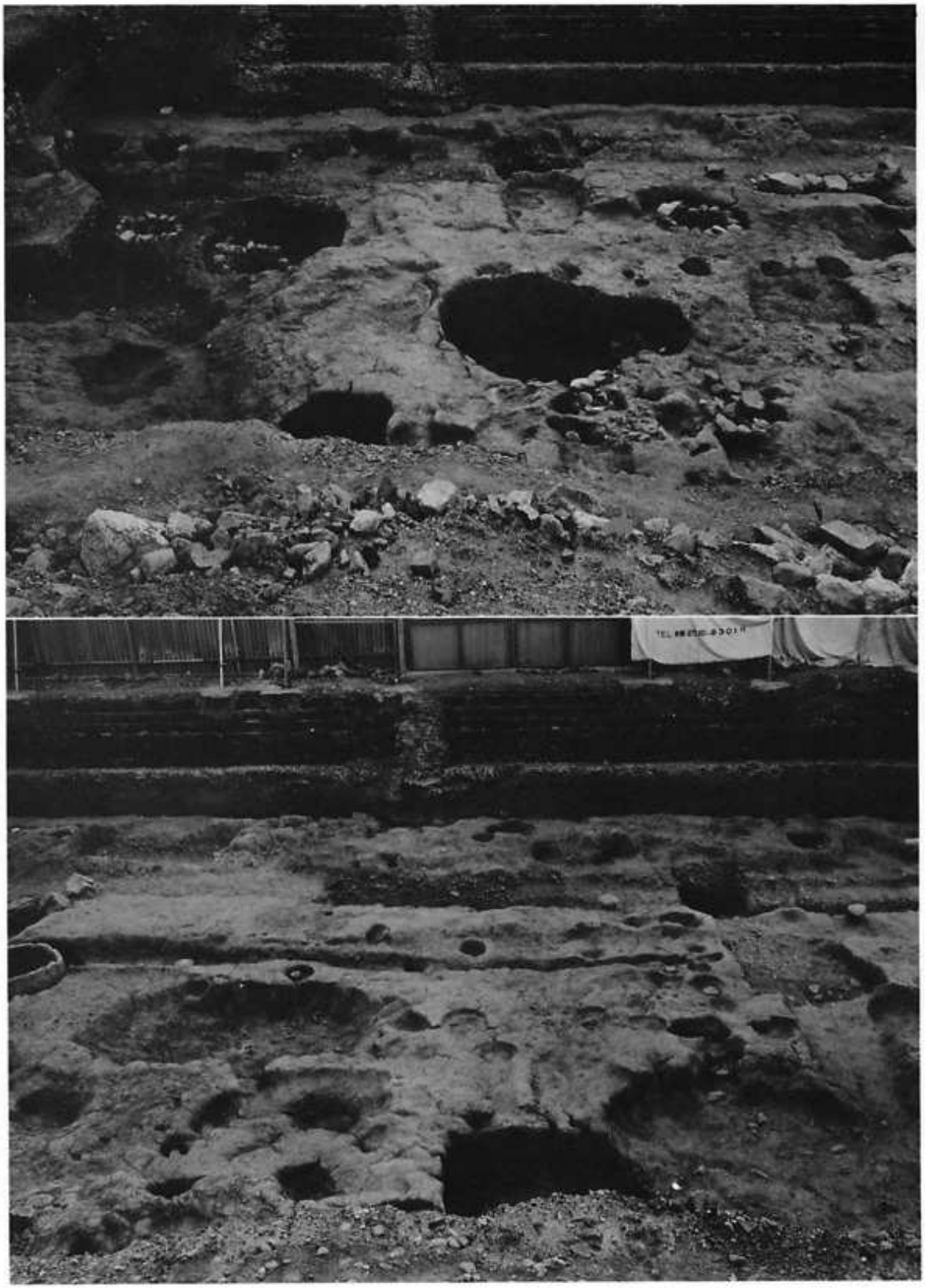


上：B区遺構全景(北から)，下：B区遺構全景(南から)

図版第 6



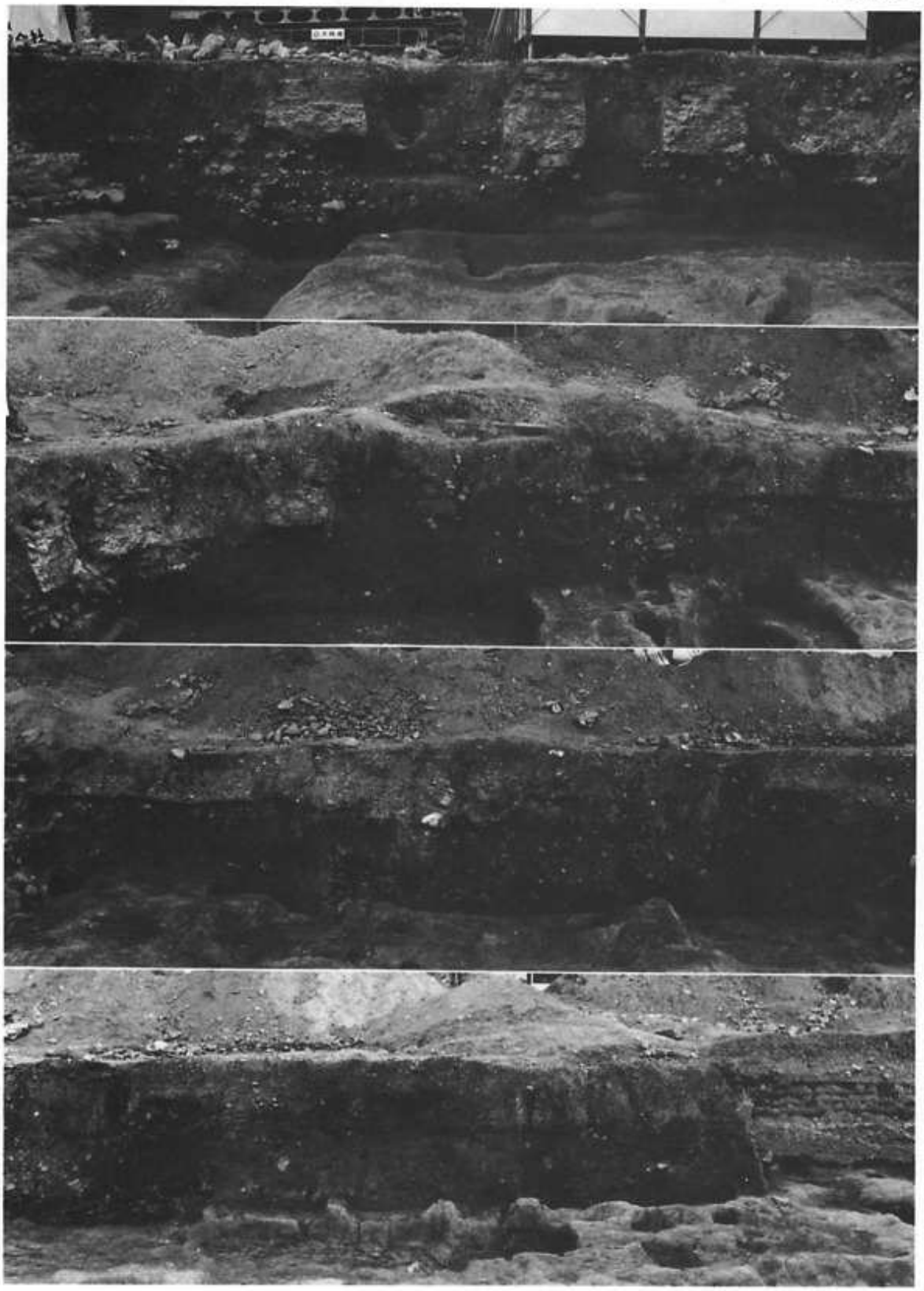
上：A区遺構南半部全景(北から)，下：A区遺構北半部全景(南から)



上：A－1～4区遺構(東から)，下：A－5～8区遺構(東から)

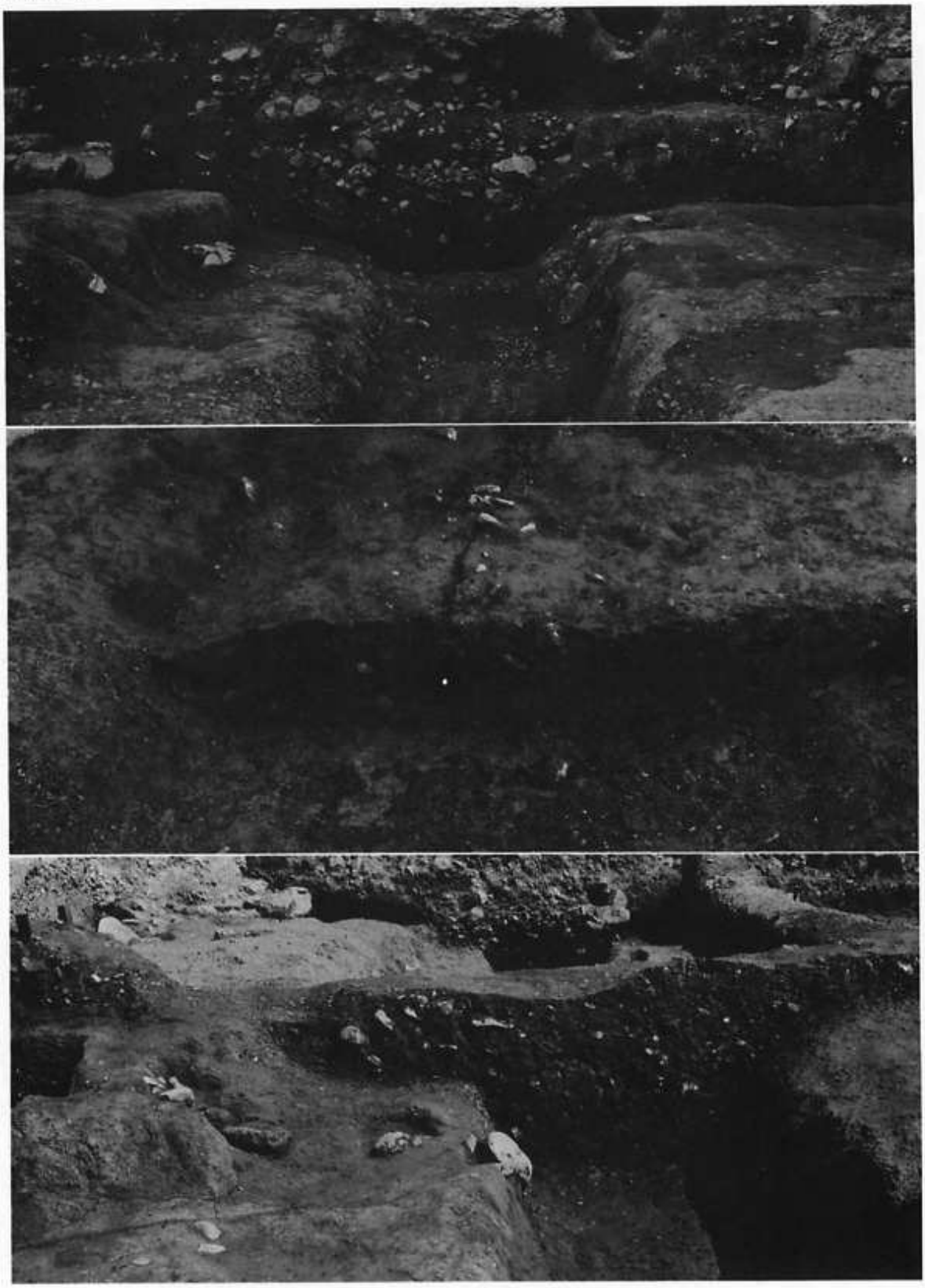
図版第 8

上：A－9・10区遺構（東から），下：A－11・12区遺構（東から）

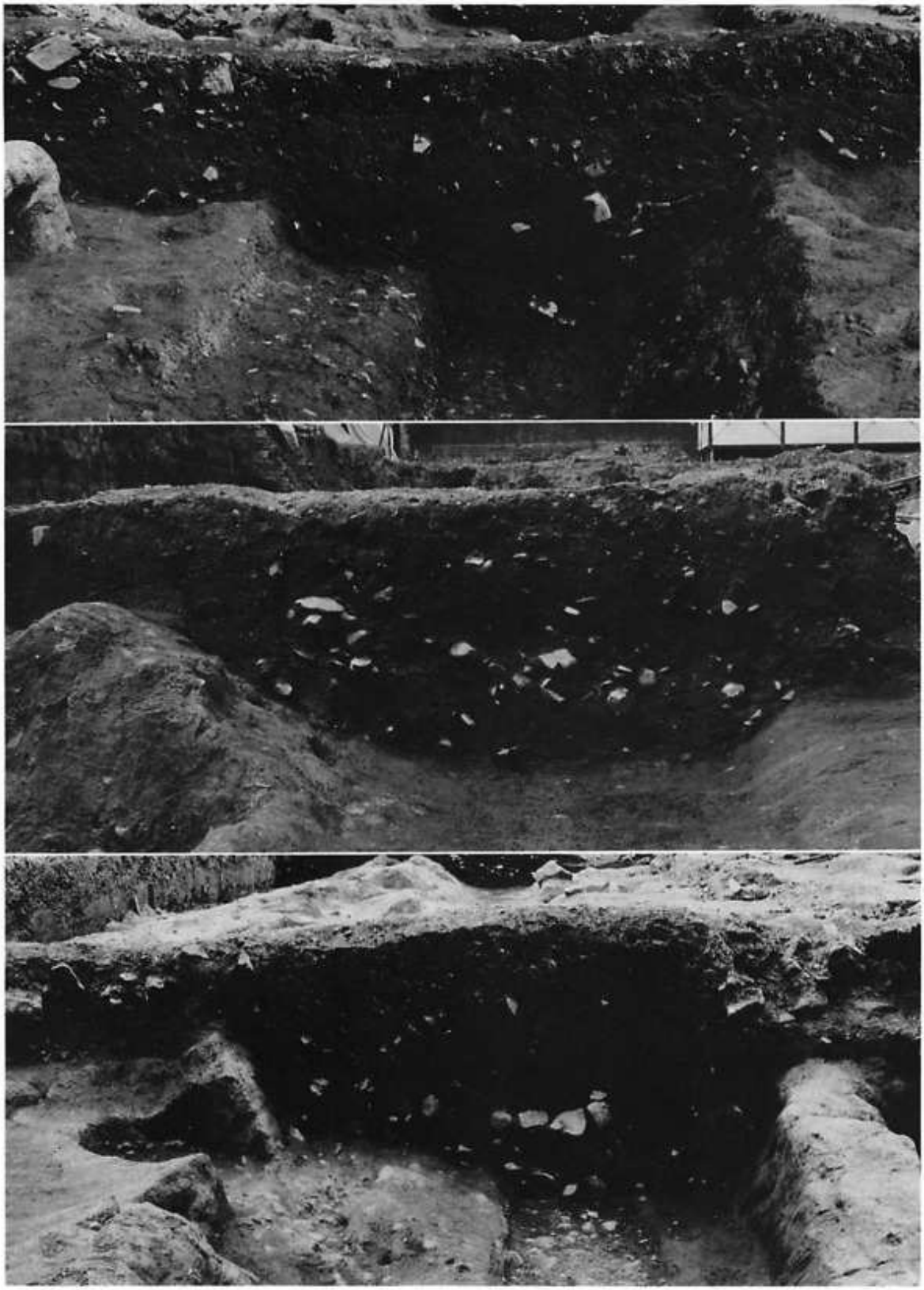


上：A区北壁断面，中上：A－12·10区東壁断面，
中下：A－10·8区東壁断面，下：A－8区東壁断面

図版第10

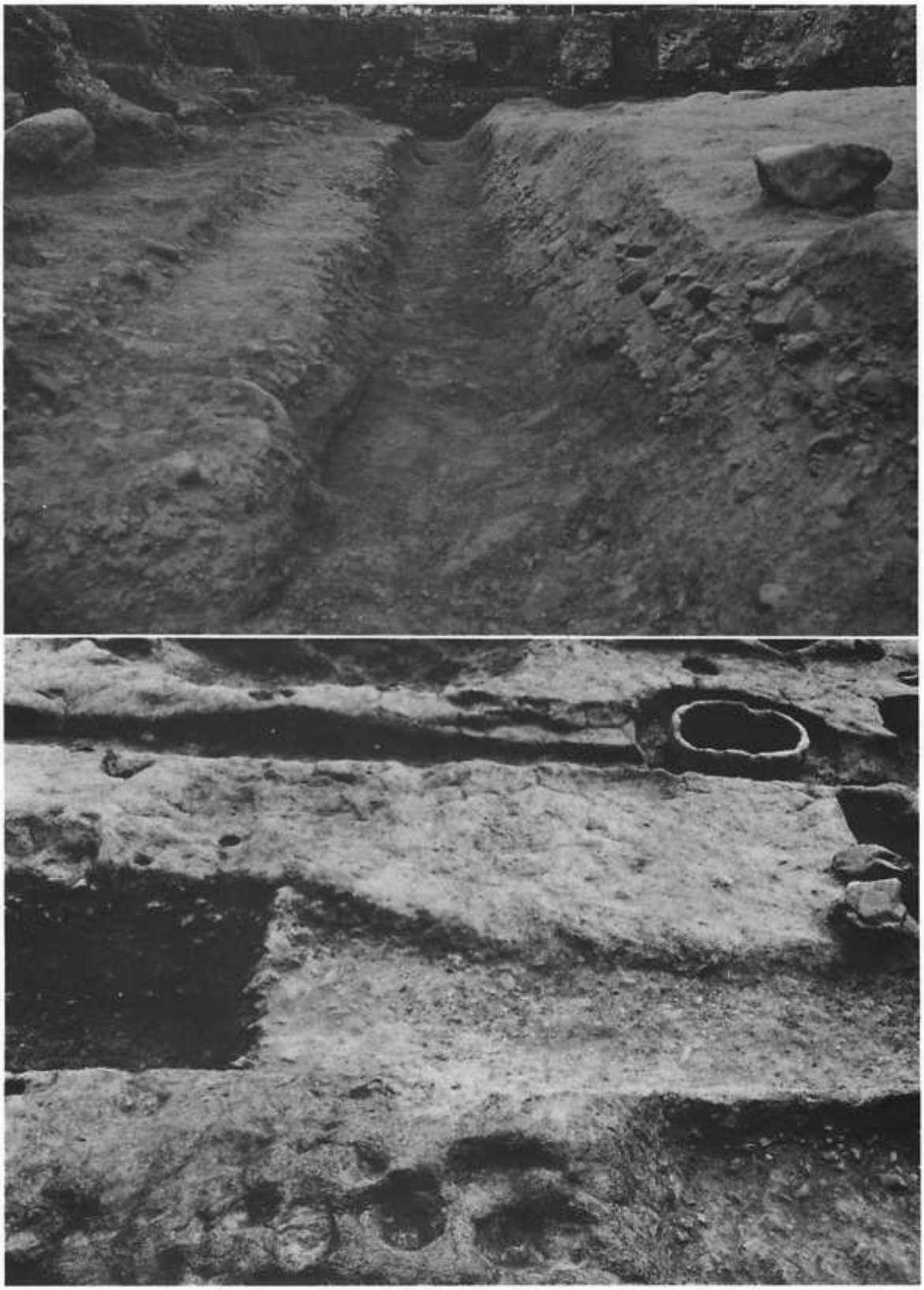


上：A区北壁溝1・2断面，中：A－11区溝1・2断面，下：A－9区北壁溝1・2断面



上：A－7区北壁溝1・2断面，中：A－5区北壁溝1断面，下：A－1区北壁溝1断面

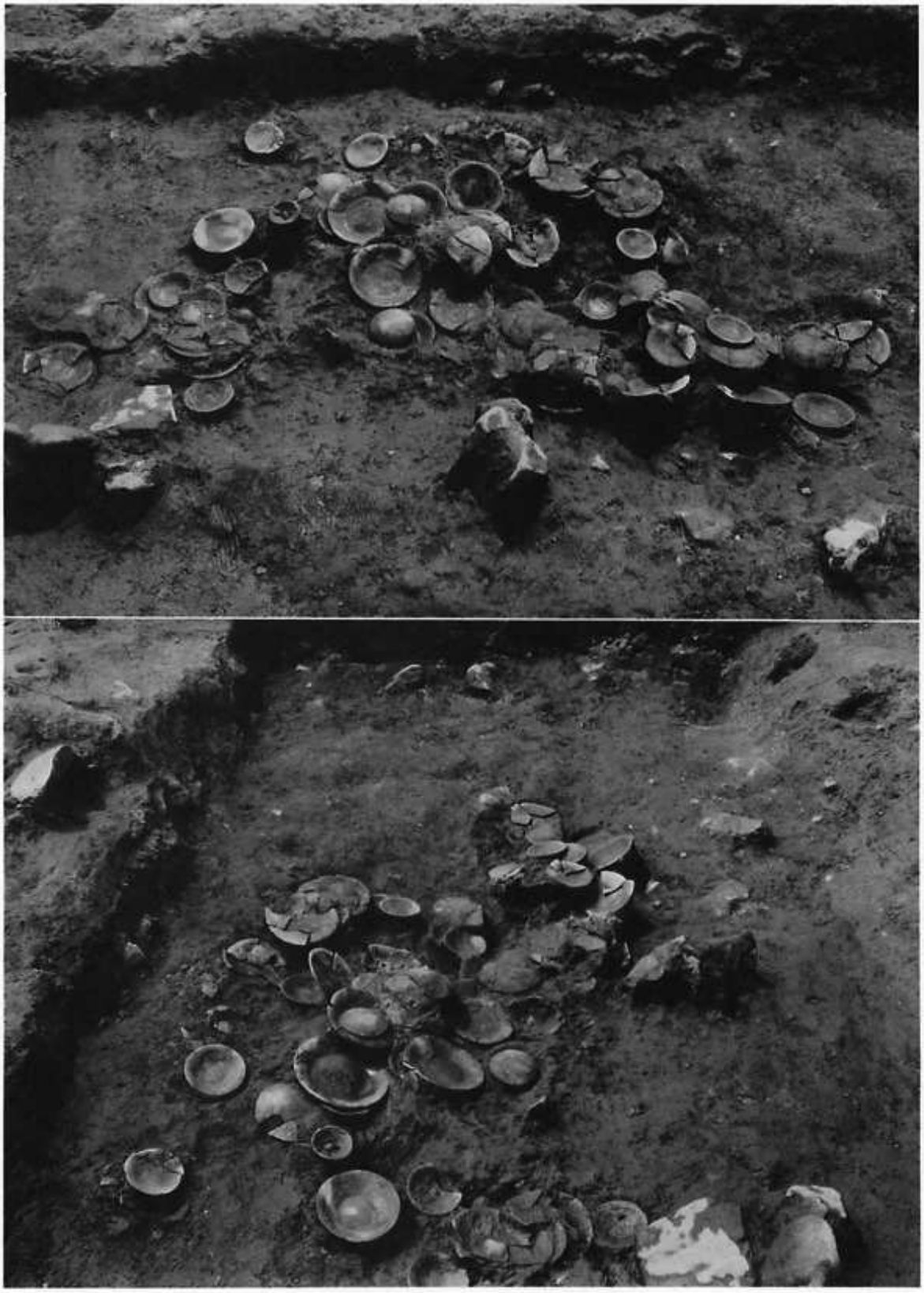
図版第12



上：溝1・2（北から），下：A－7区南部溝1の段差（西から）

上：A－7区溝1 上層土器出土状態(西から)，下：A－7区溝1 上層土器出土状態(北から)

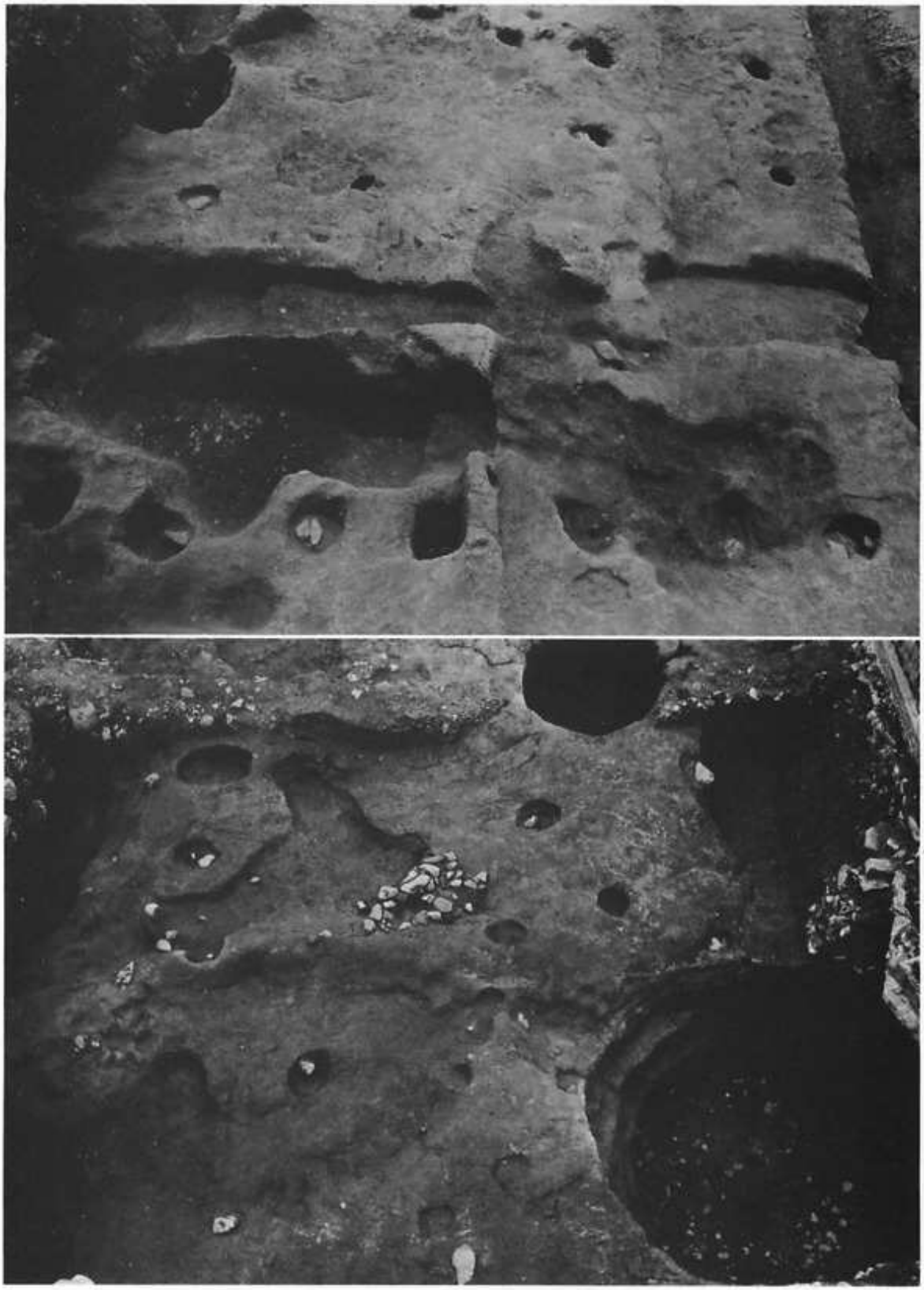
図版第14



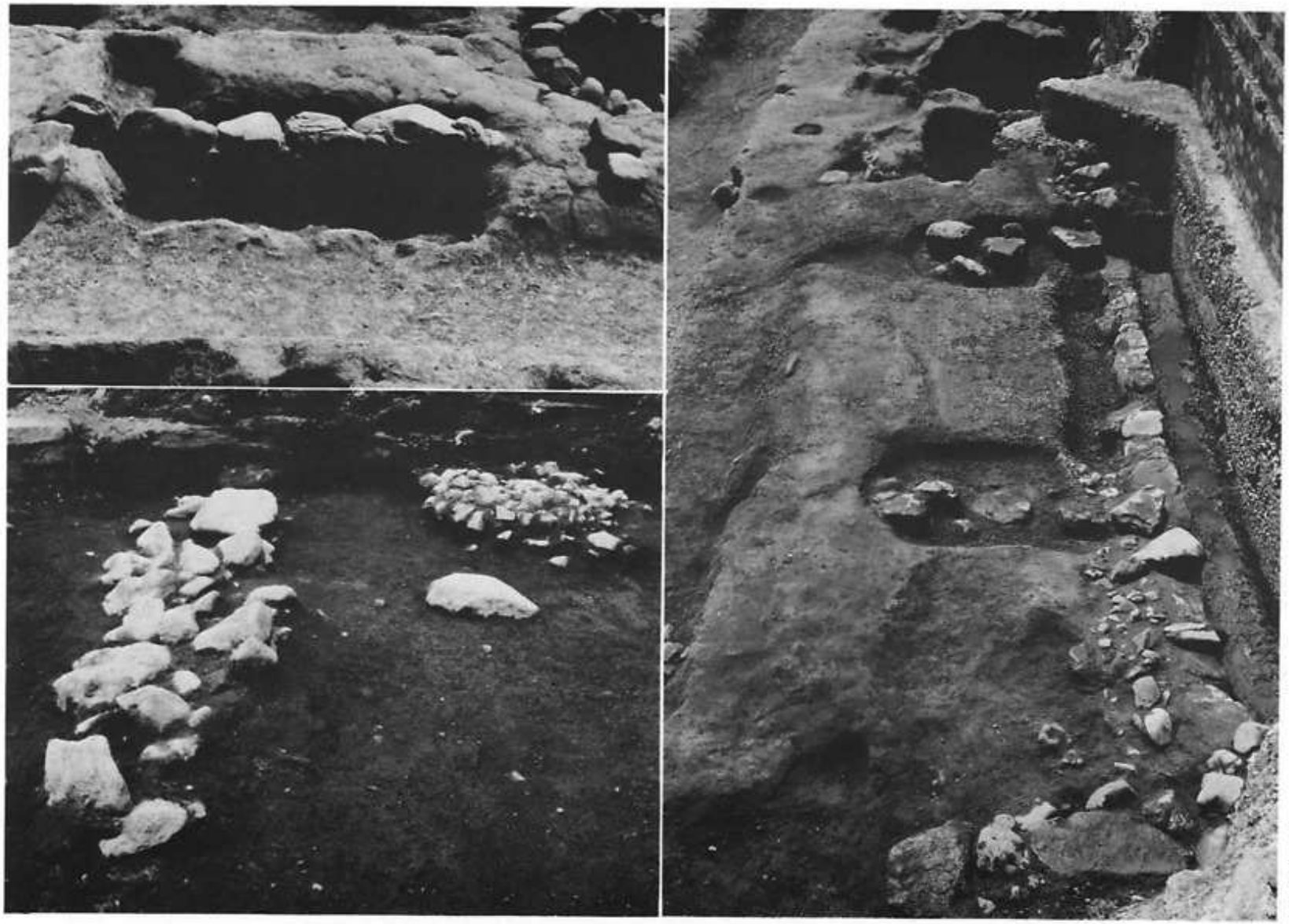
上：A－7区溝1上層下半土器出土状態(西から)，下：A－7区溝1上層下半土器出土状態(北から)

左：溝状遺構1・2（南から），右：溝状遺構1・2（北から）

図版第16

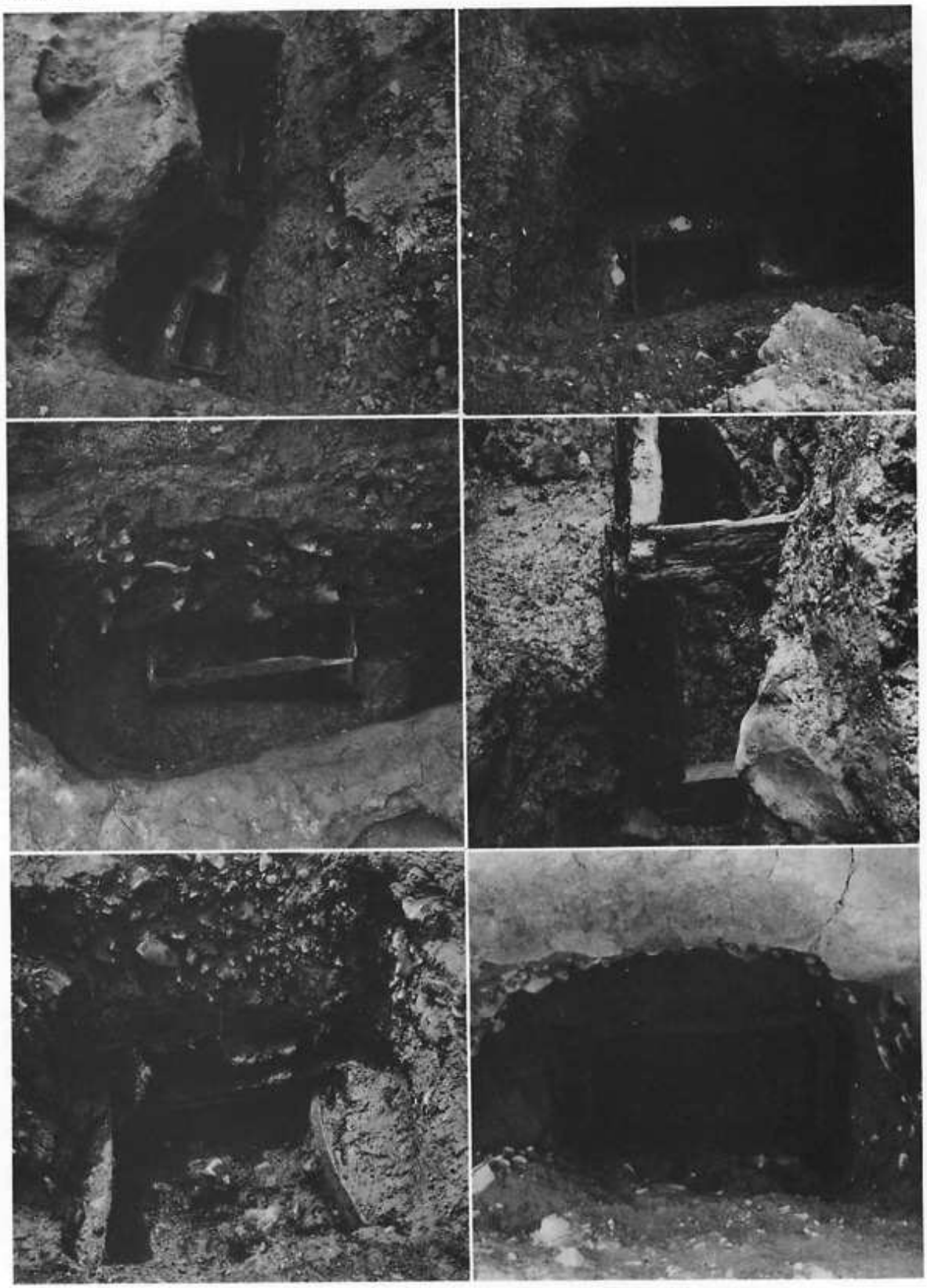


上：A－9・10区建築遺構3・4（北から）
下：A－2区砂層および上面集石遺構1・ピット（南から）

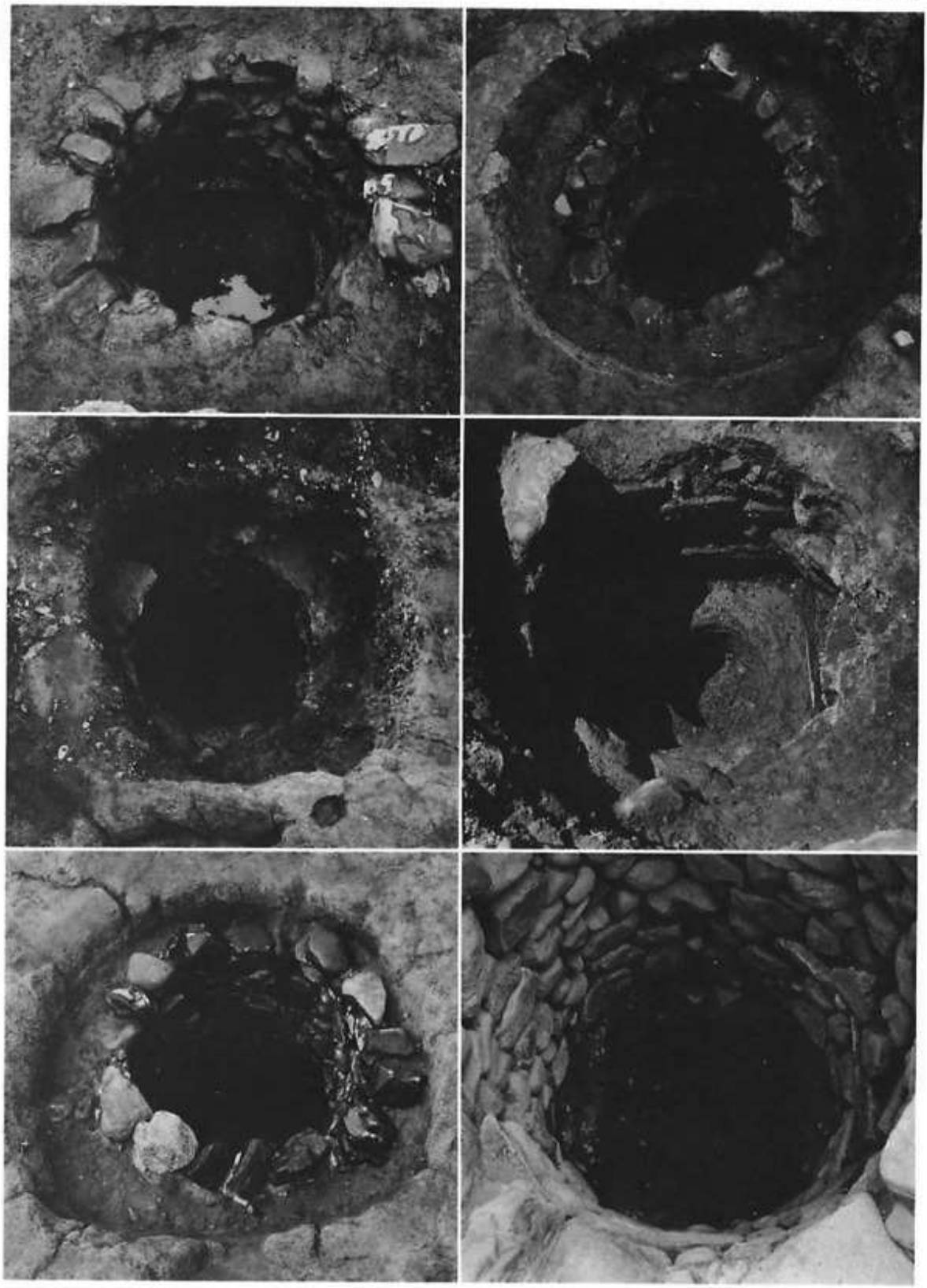


上左：A－5区列石遺構2（西から），下左：A－1区列石遺構1と石敷遺構（北から），
右：A－11区列石遺構3（北から）

図版第18

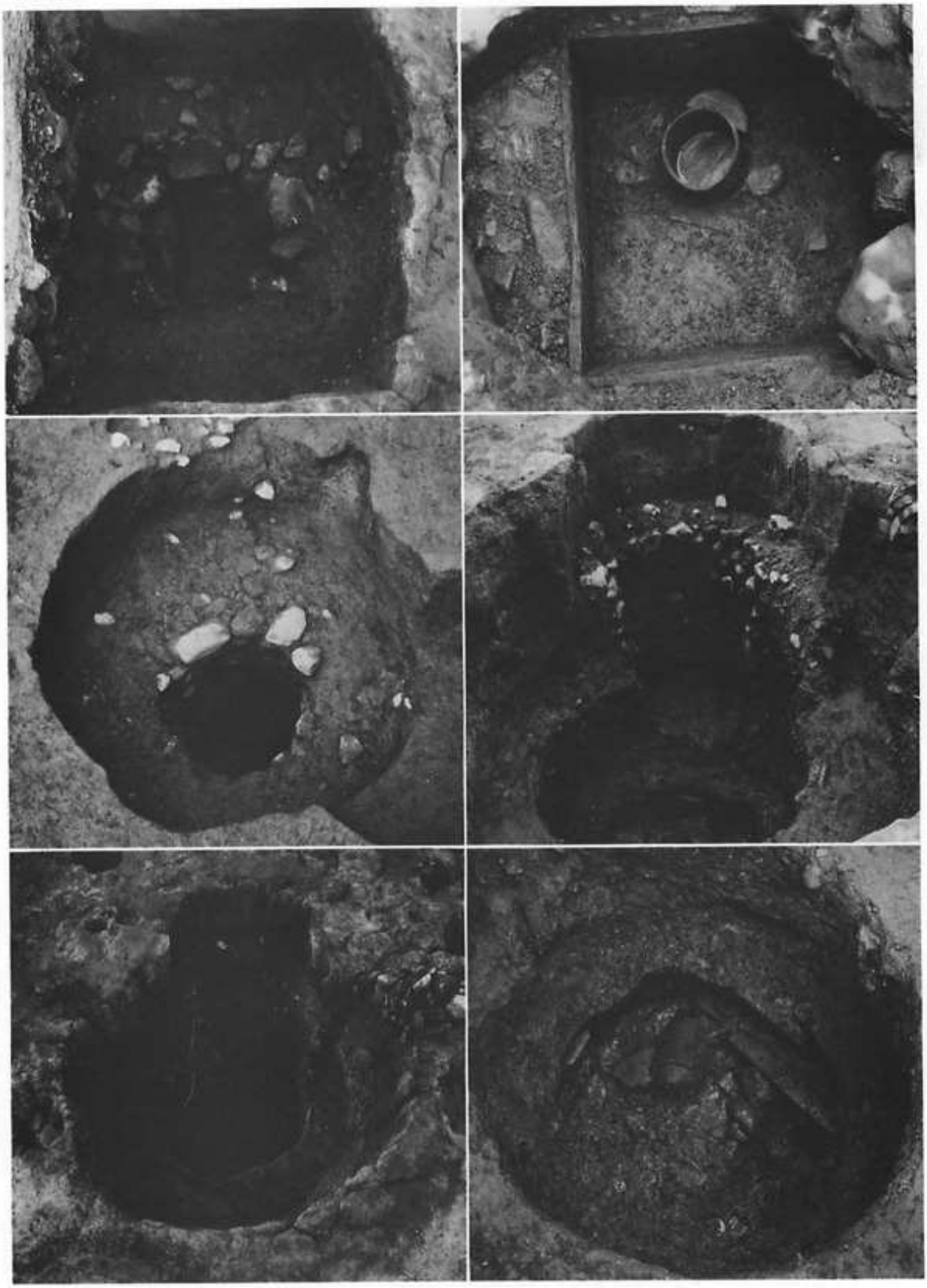


上左：井戸14･15，上右：井戸15，中左：井戸14，中右：井戸14細部，下左：井戸８，下右：井戸10

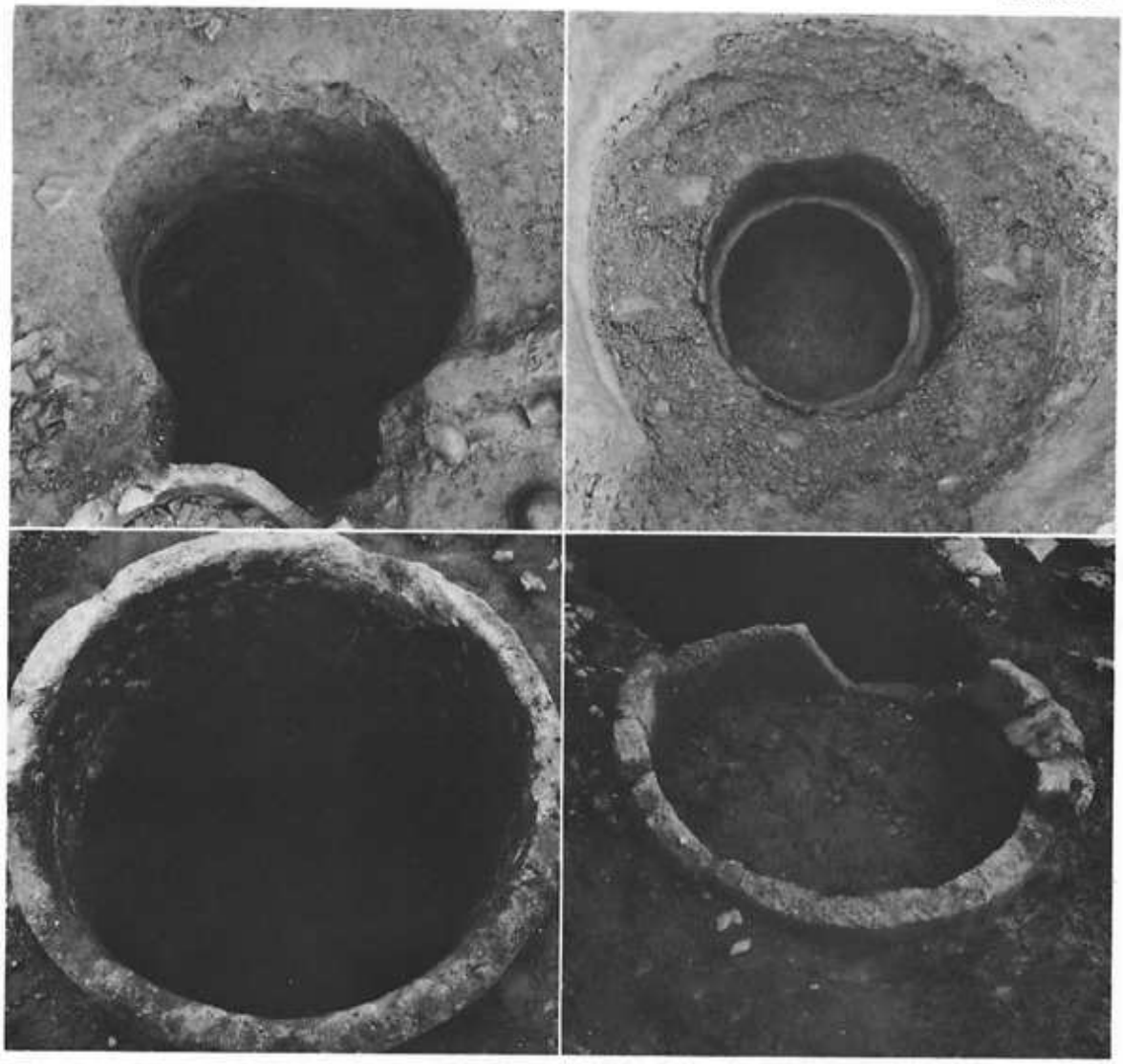


上左：井戸1，上右：井戸2，中左：井戸3，中右：井戸3内部，下左：井戸4，下右：井戸4内部

図版第20

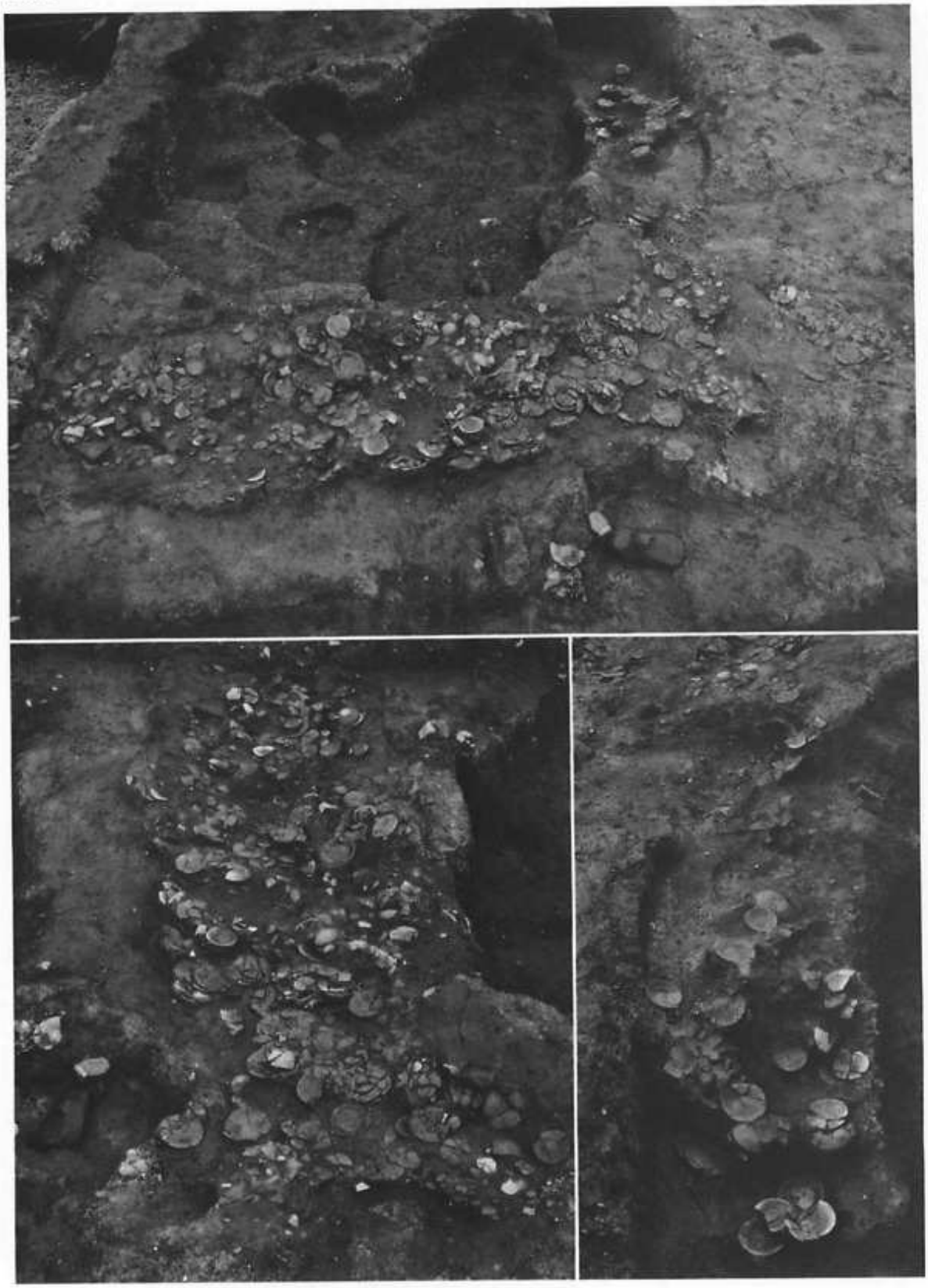


上左：井戸9，上右：井戸9内部，中左：井戸13，中右：井戸5，下左：井戸6，下右：井戸6内部

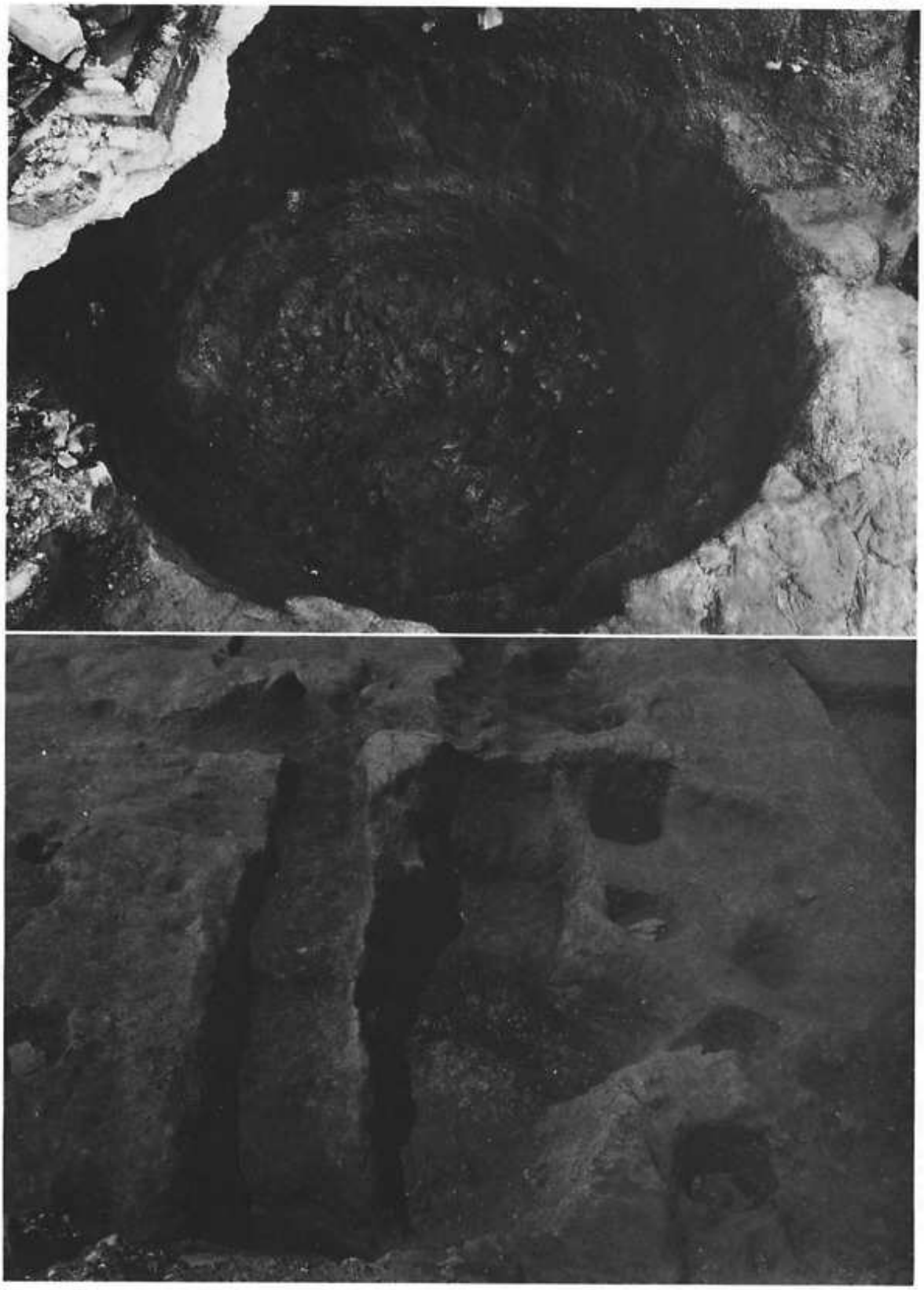


上左：井戸11，上右：井戸11内部，下左：井戸7，下右：井戸12

図版第22



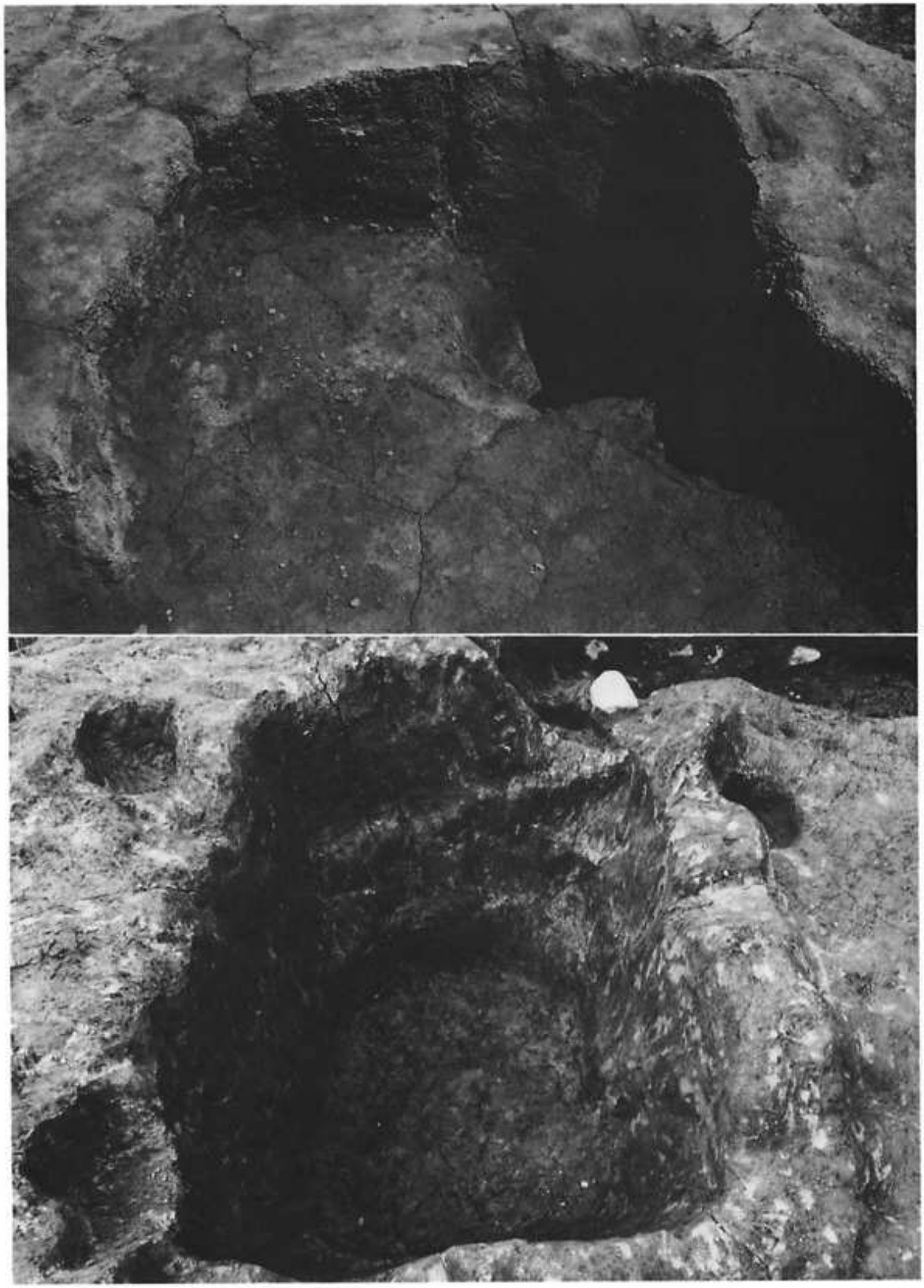
上：A－10区土器溜２・３（西から），
下左：A－10区土器溜２（南から），下右：A－10区土器溜３（東から）



上：A－1区土壙1，下：A－10区土壙9

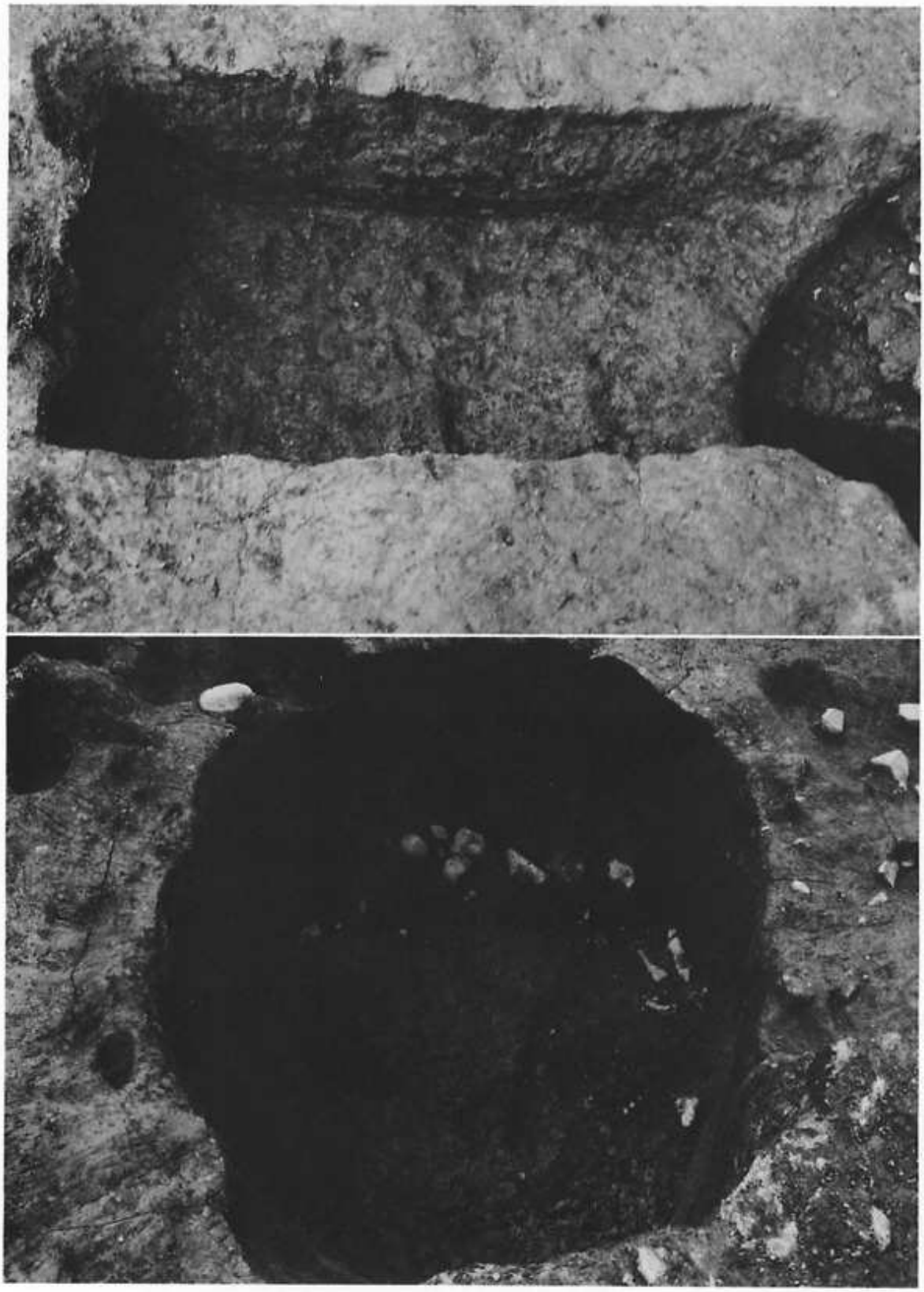
図版第24

上：A－3・4区土壙2，下：A－6・8区土壙6

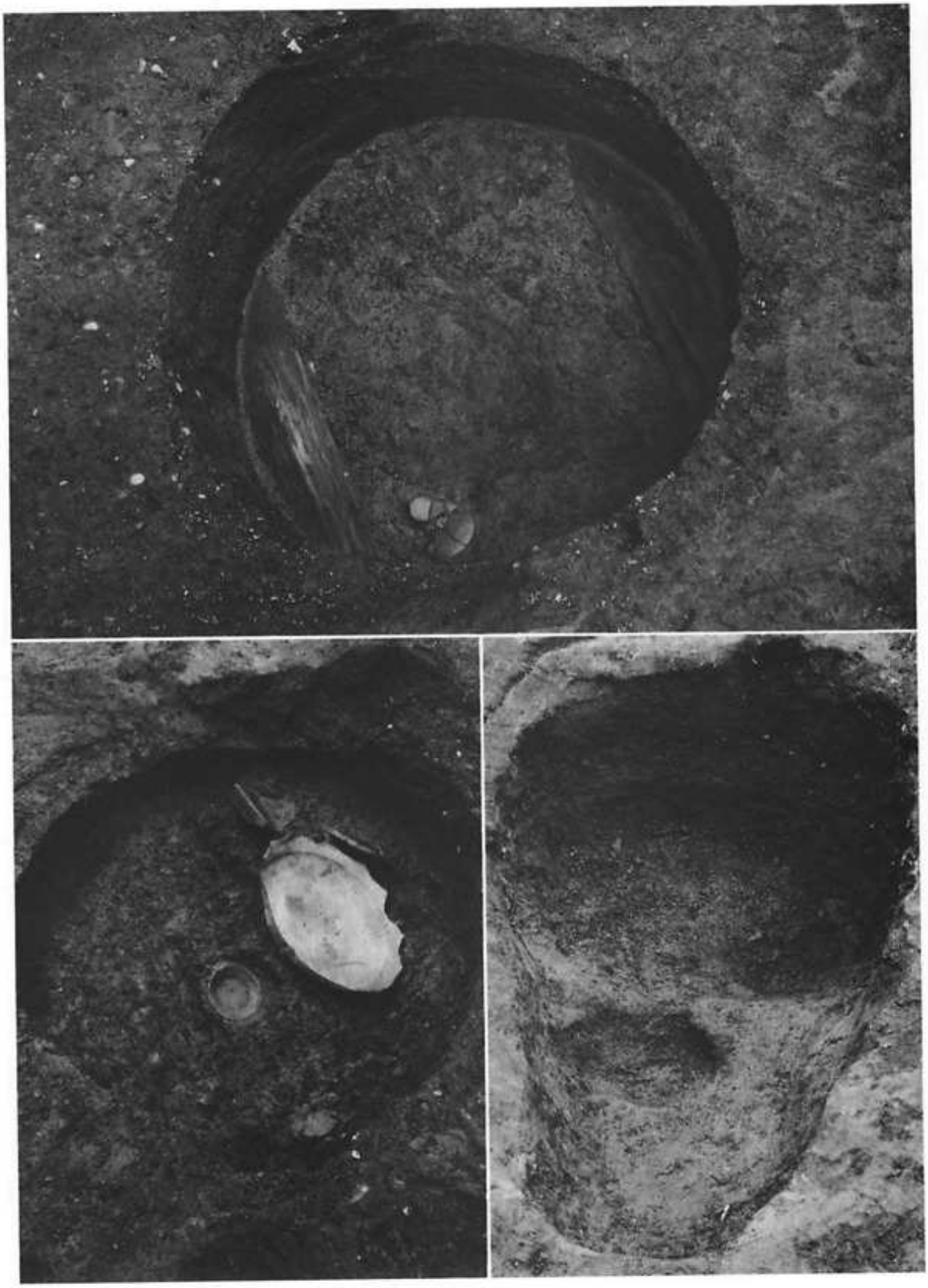


上：A－6区土壙4，下：B－3区土壙14

図版第26



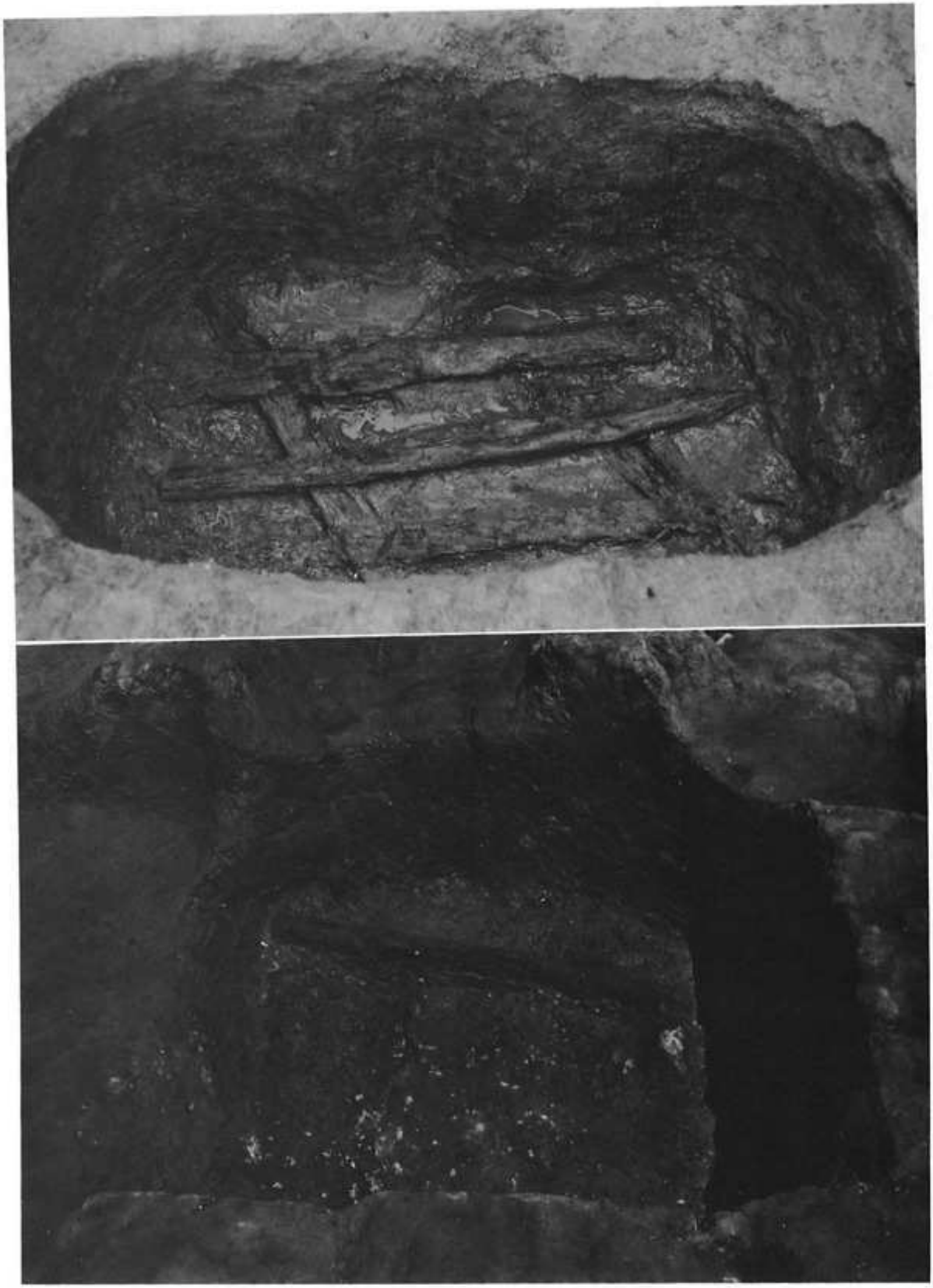
上：B－1区土壙11，下：B－4区土壙15



上：B－4区土壙19，下左：土壙19埋土遺物出土状態，下右：土壙19掘り方

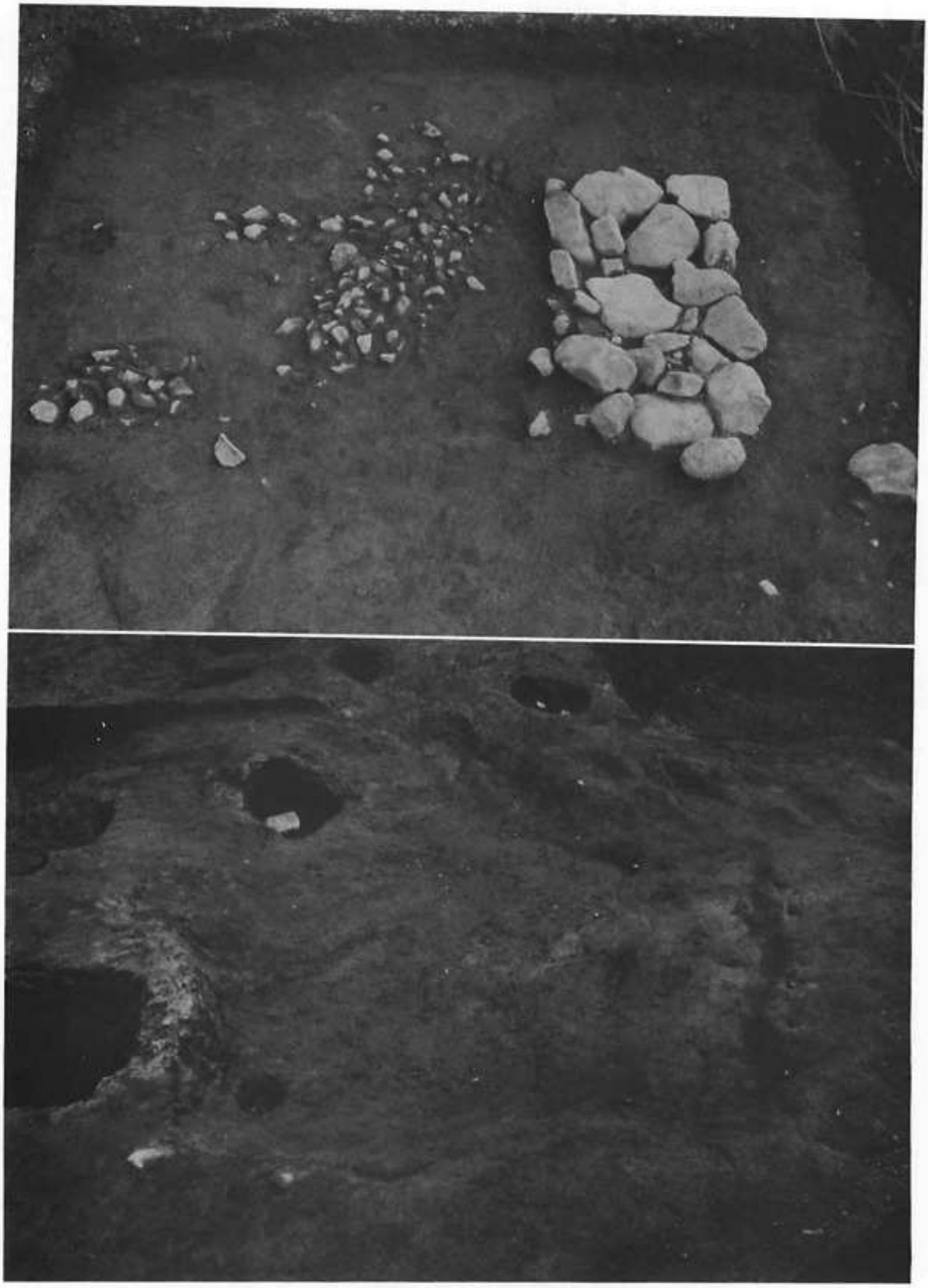
図版第28

上：B－4区土壙20埼出土状態，下：土壙20埼除去後の状態

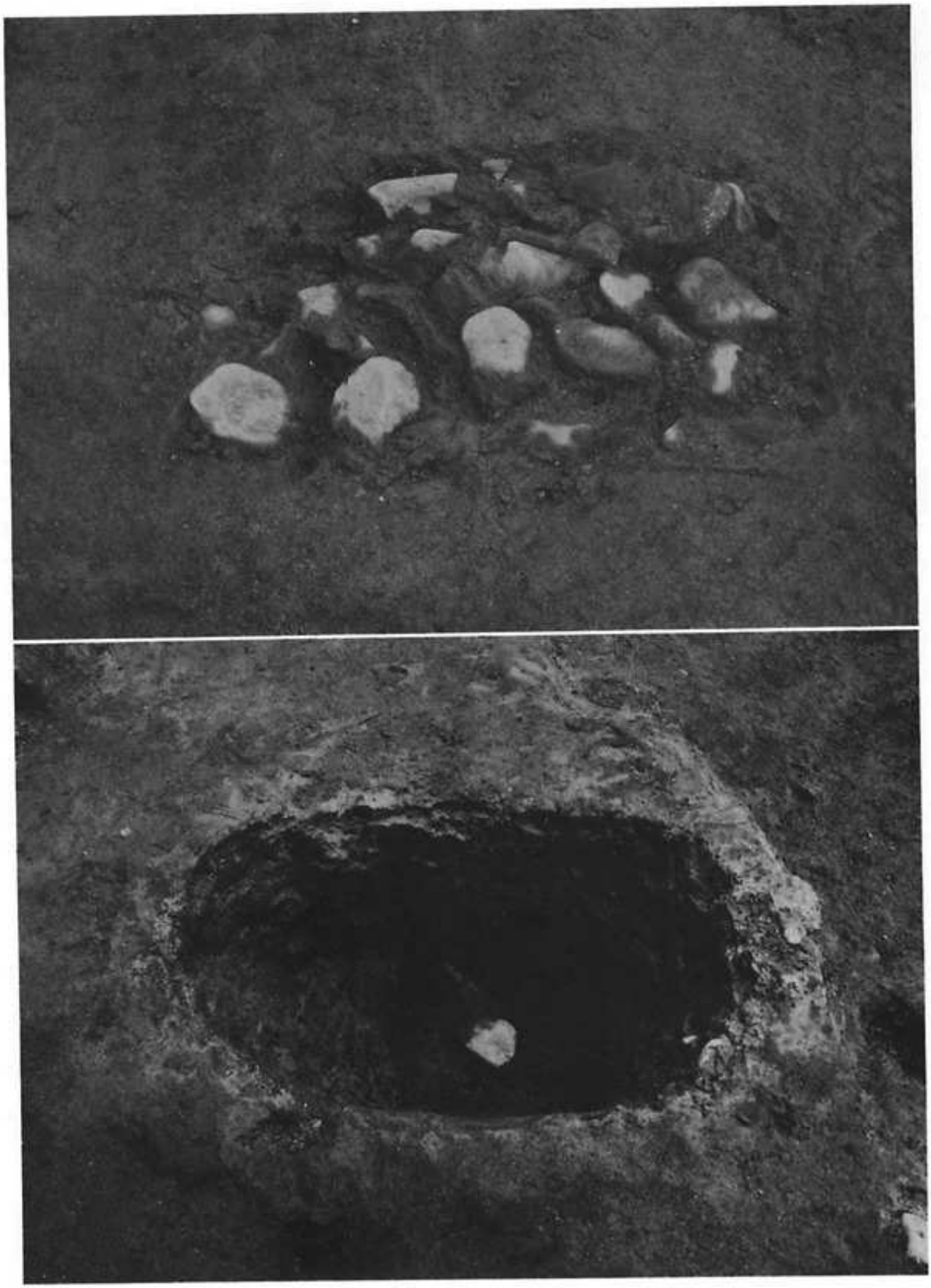


上：B－5区土壙22(木組み出土状態)，下：A－8区土壙7(自然木出土状態)

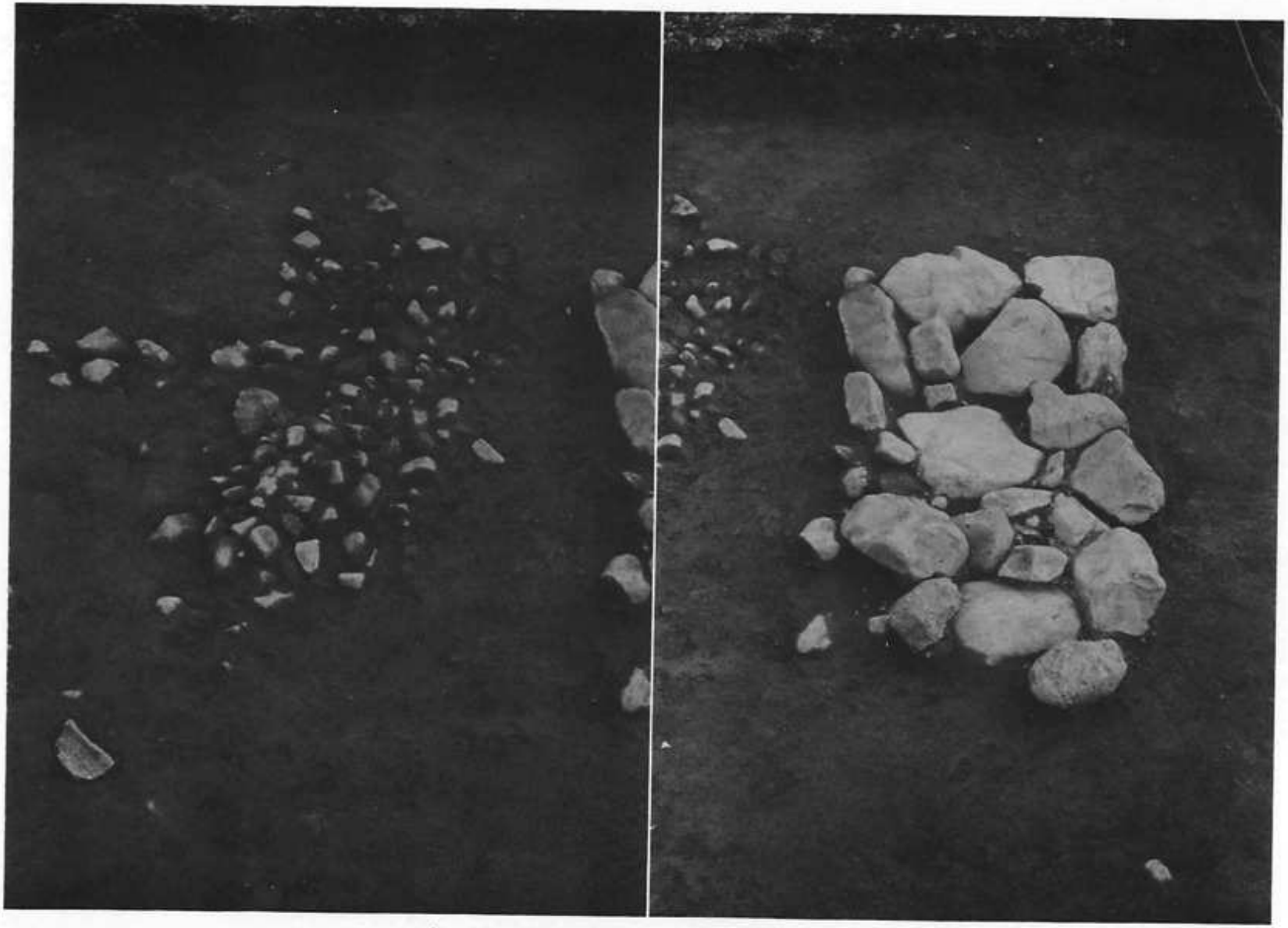
図版第30



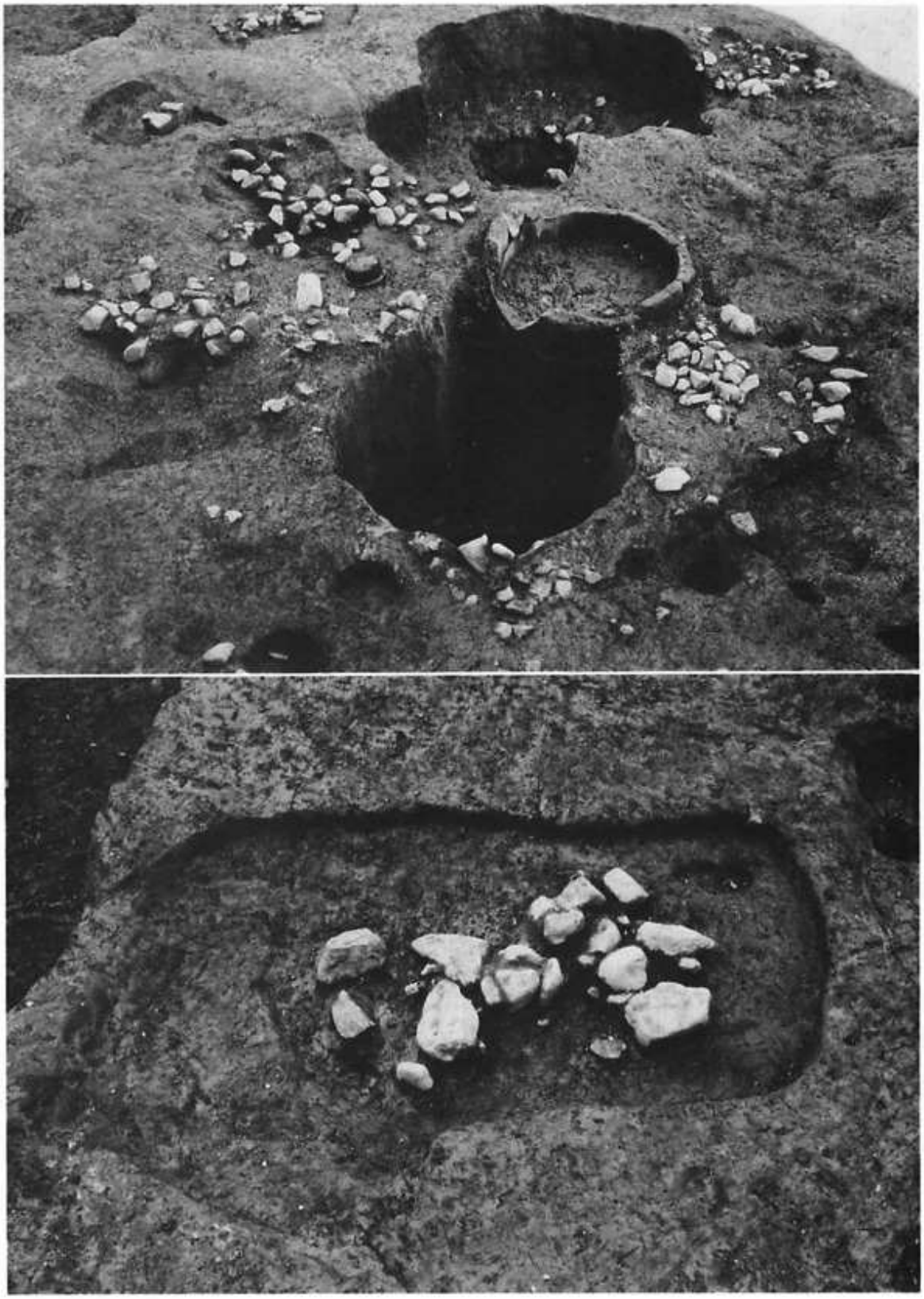
上：B－5区集石遺構12·13·14全景(北から)，下：集石遺構12·13·14(集石部除去後の状態)



上：B－5区集石遺構12，下：集石遺構12(集石部除去後の状態)

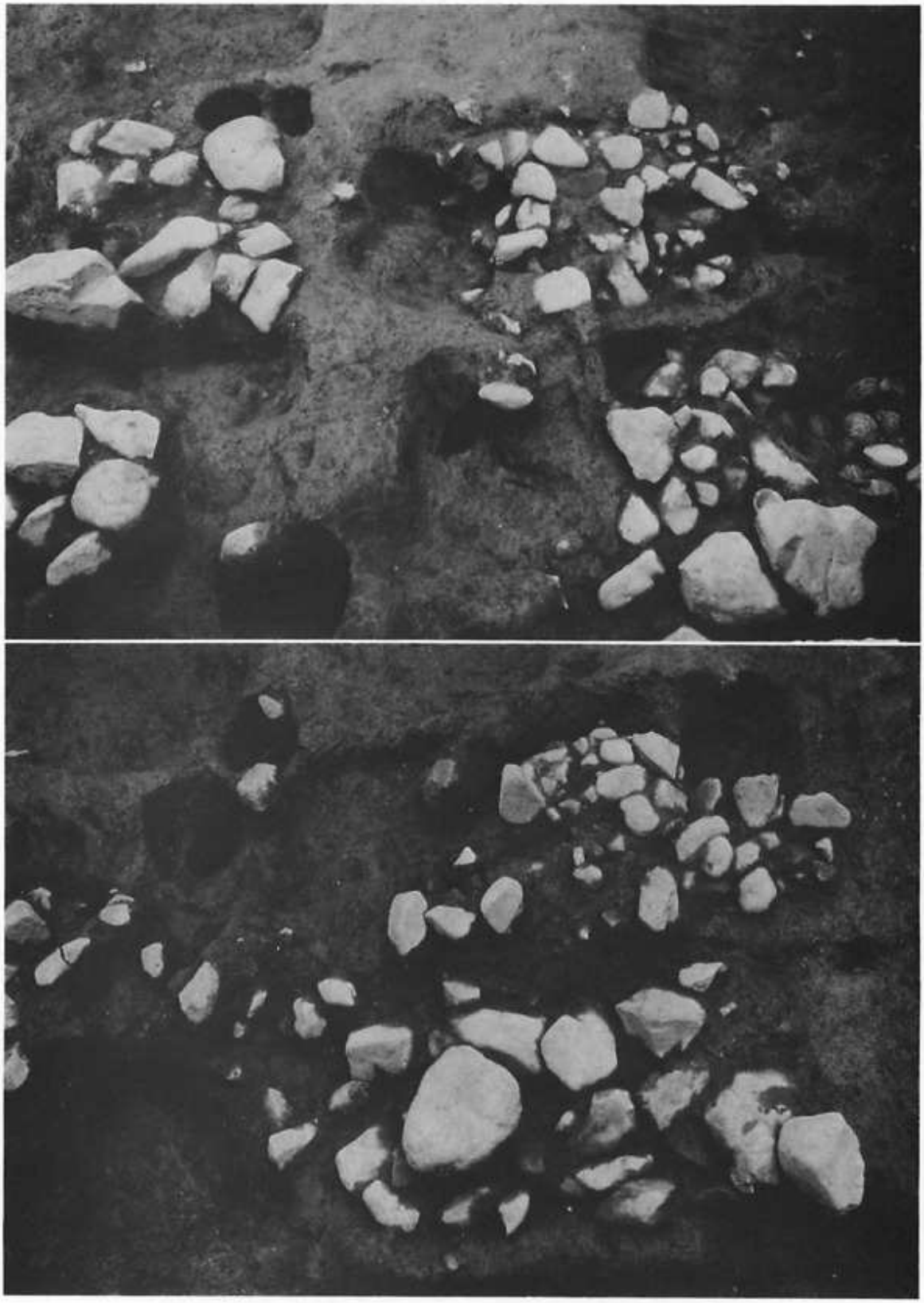


左：B－5区集石遺構13，右：B－5区集石遺構14

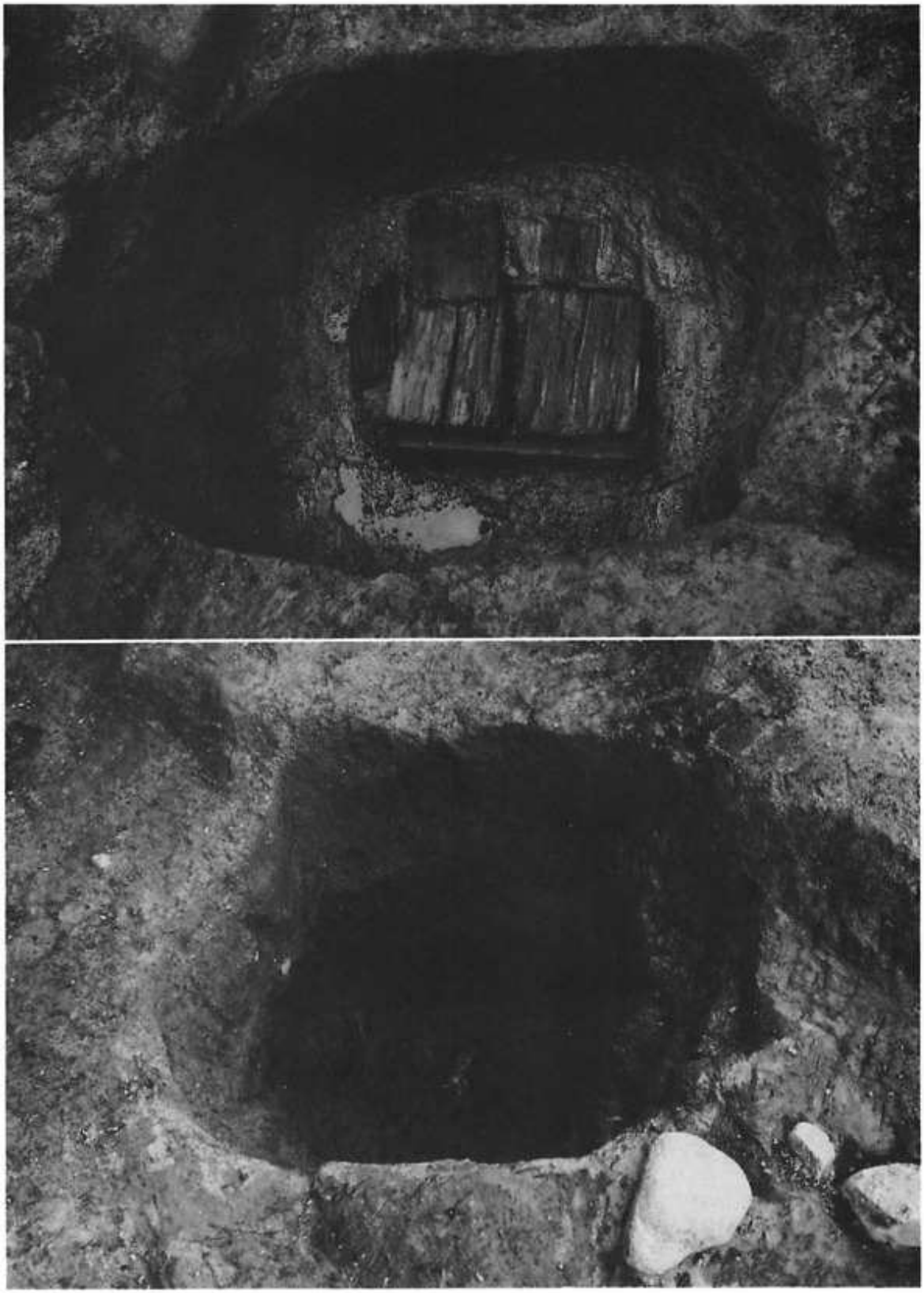


上：B－1区集石遺構5・6・7・8・9・10・11分布状態，下：B－1区集石遺構8

図版第34

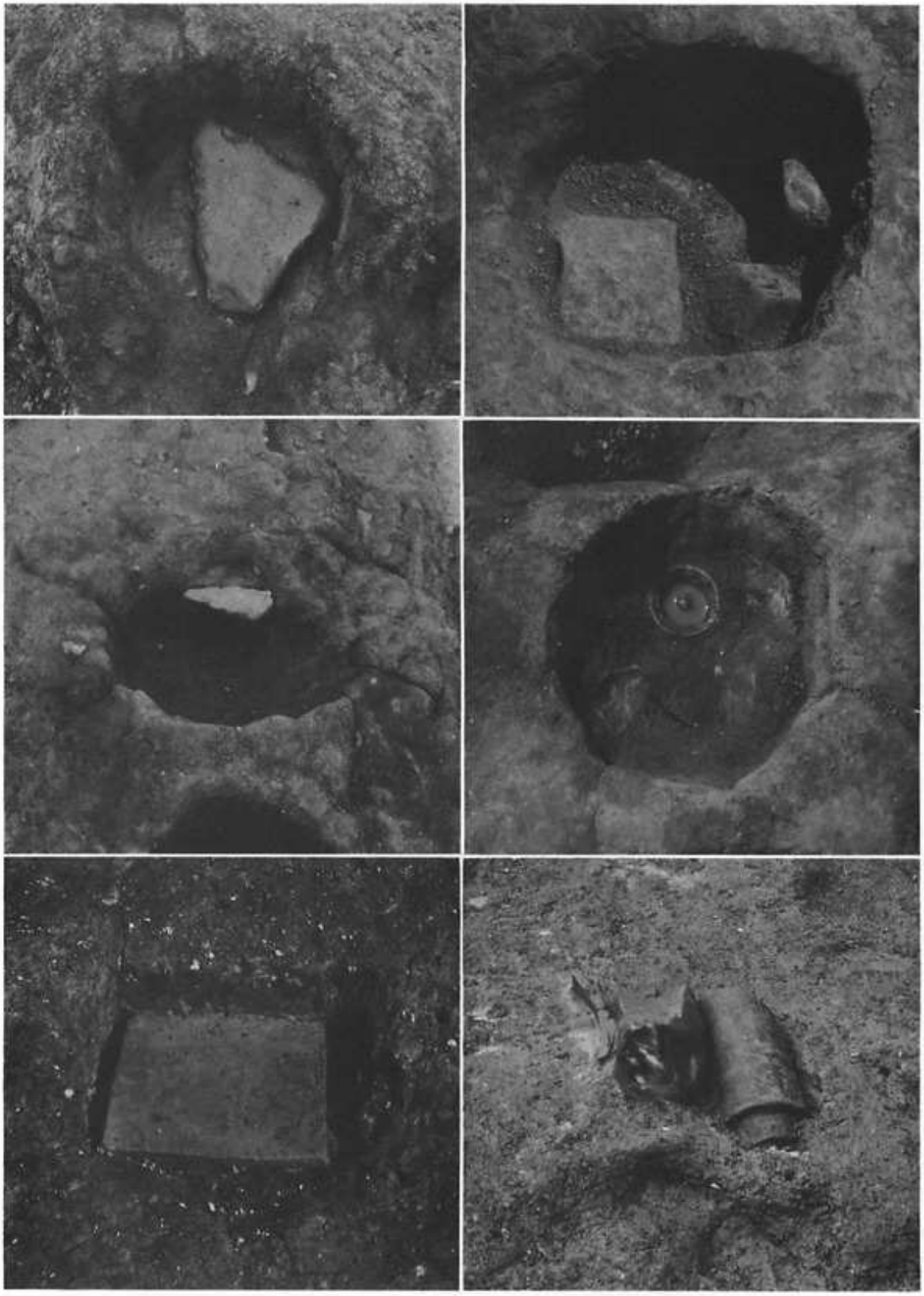


上：A－4区集石遺構2・3，下：A－6区集石遺構

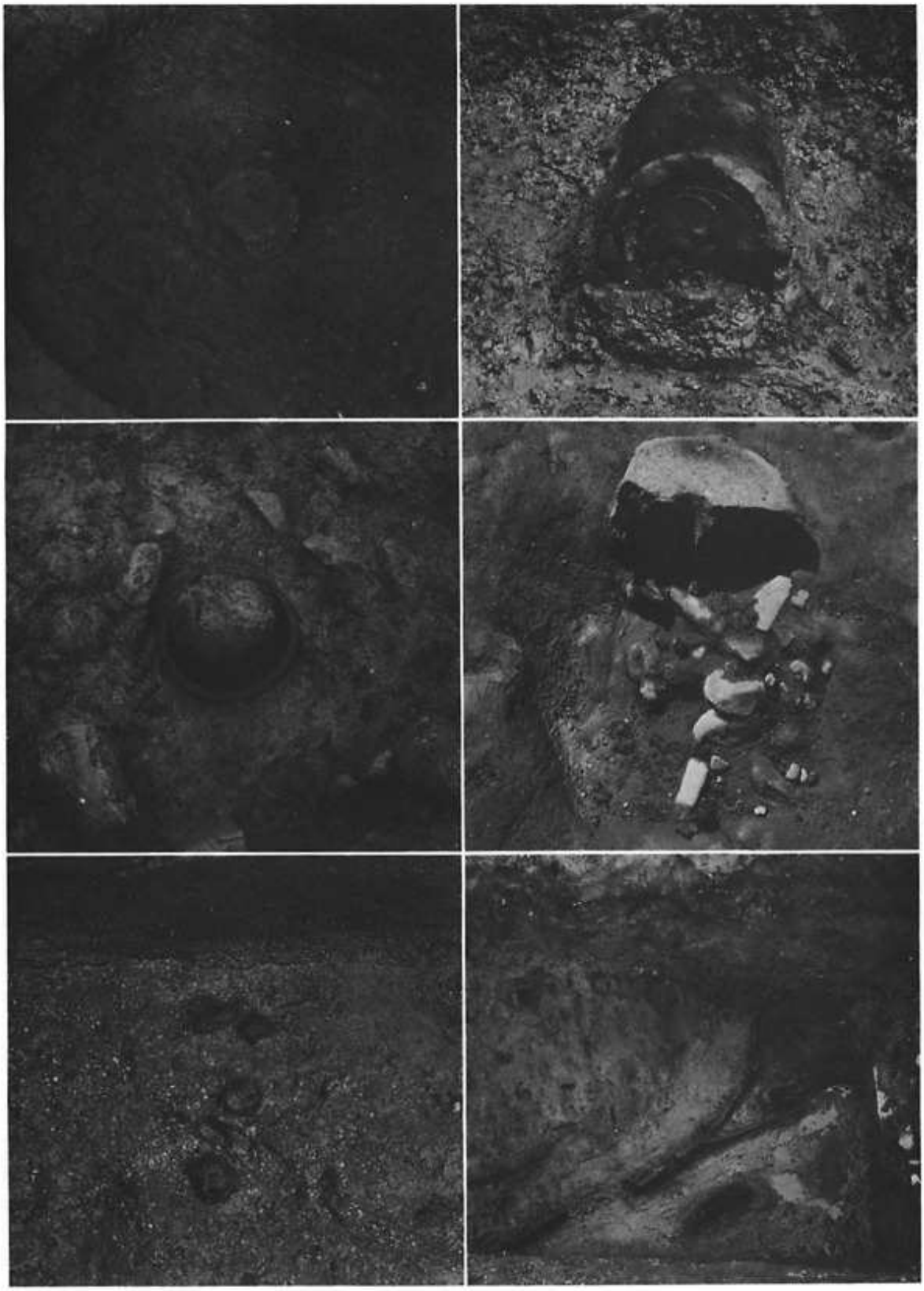


上：B－1区ピット20礎板出土状態，下：ピット20掘り方

図版第36

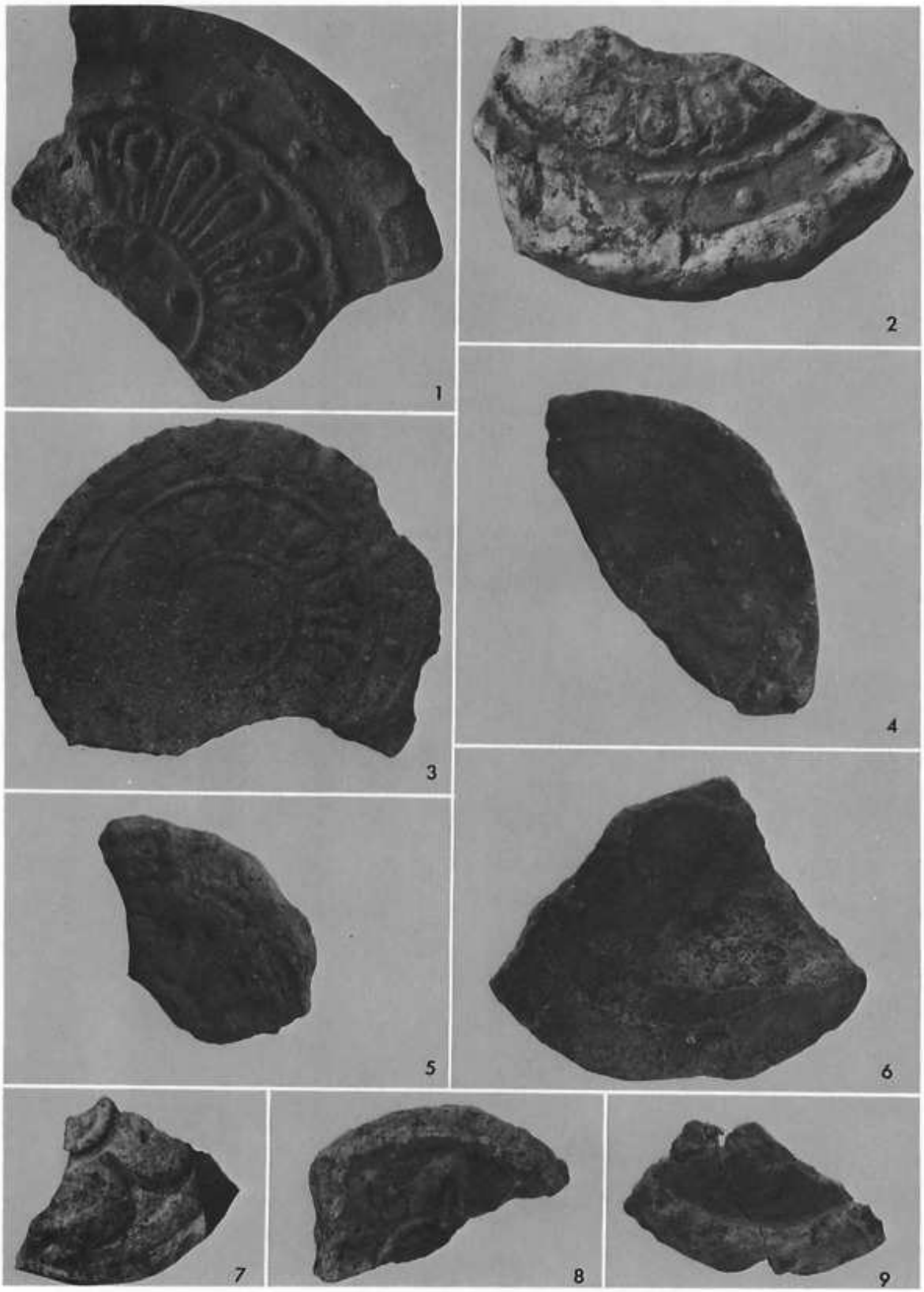


上・中：各種ピット，下左：B－6区土壙21，下右：B－4区丸瓦・平瓦出土状態

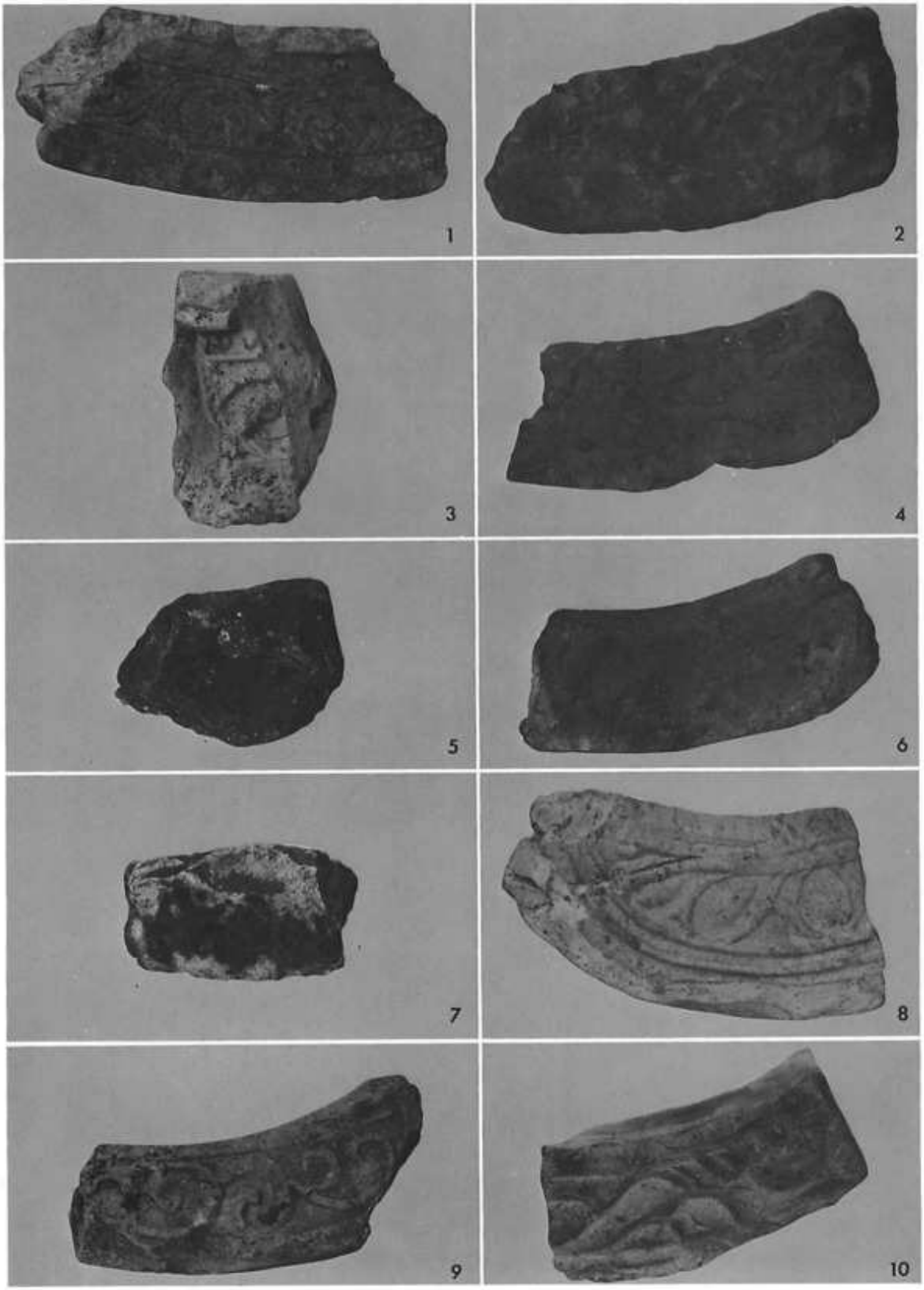


上左：A－10区井戸10上層軒丸瓦出土状態，　上右：A－6区軒丸瓦出土状態，
中左：B－1区集石遺構5羽釜出土状態，　中右：A－6区石臼出土状態，
下左：B－6区砂層木の実出土状態，　下右：B－3区砂層流木出土状態

図版第38

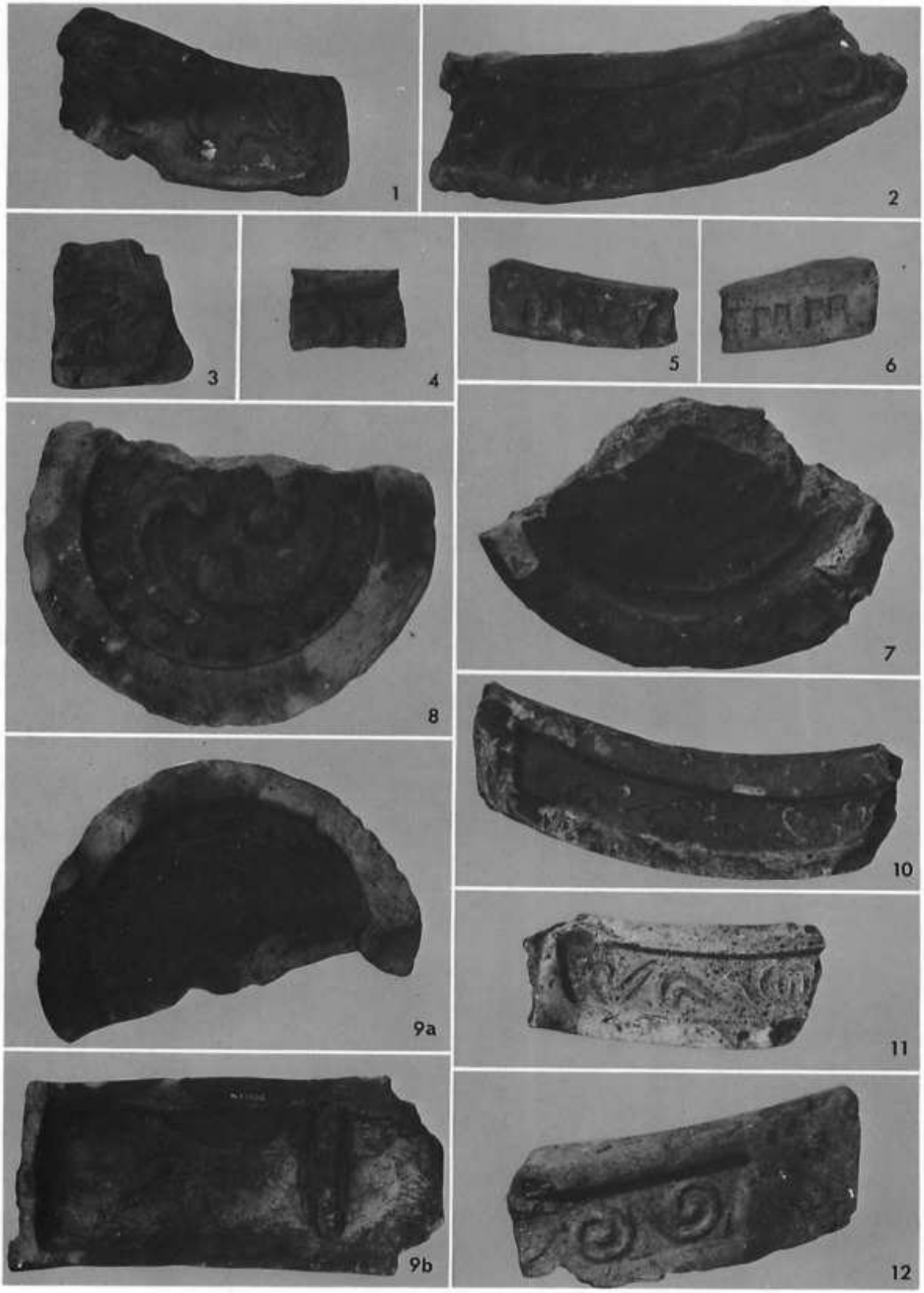


軒　瓦 (1)



軒　瓦 (2)

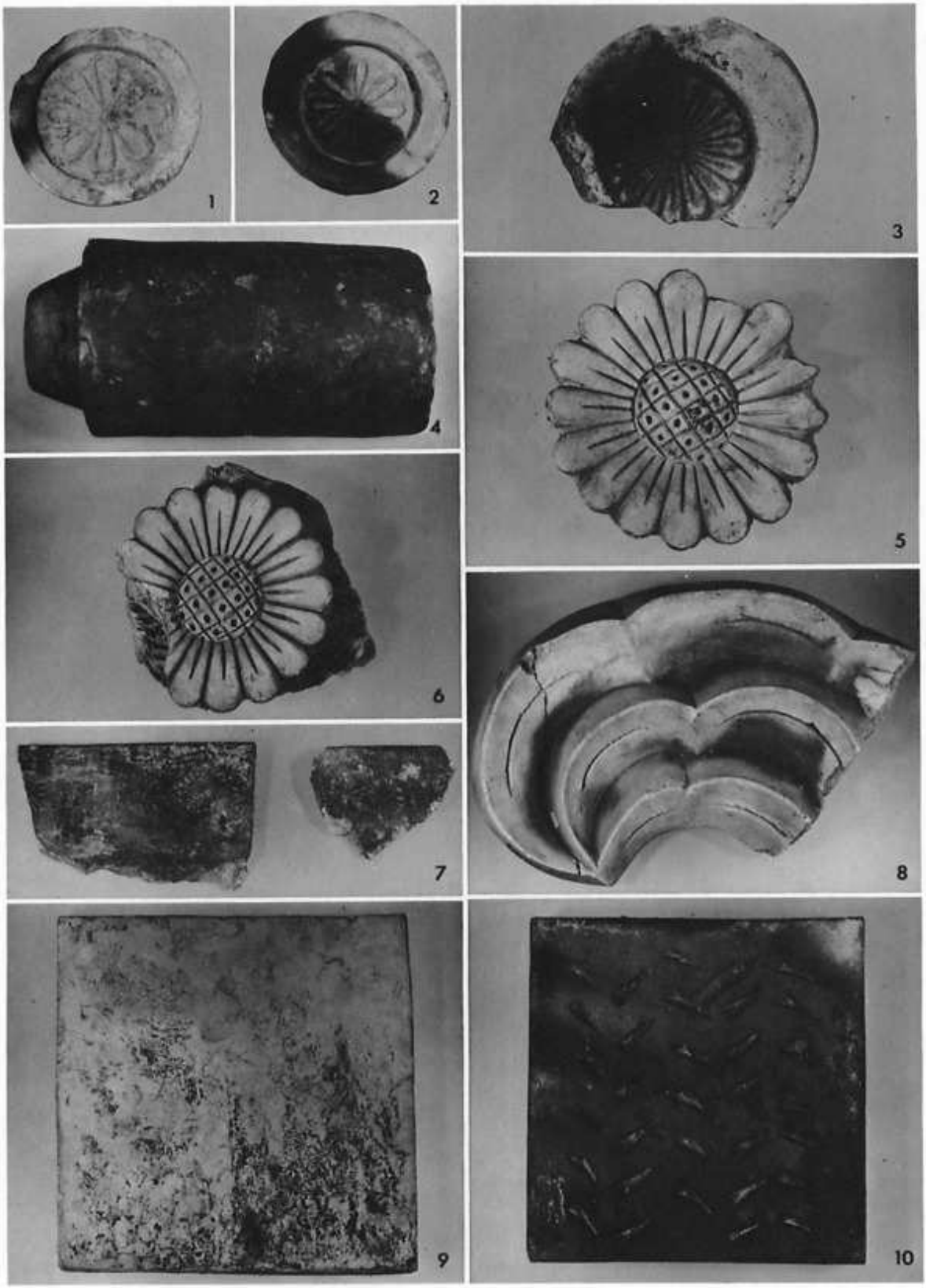
図版第40



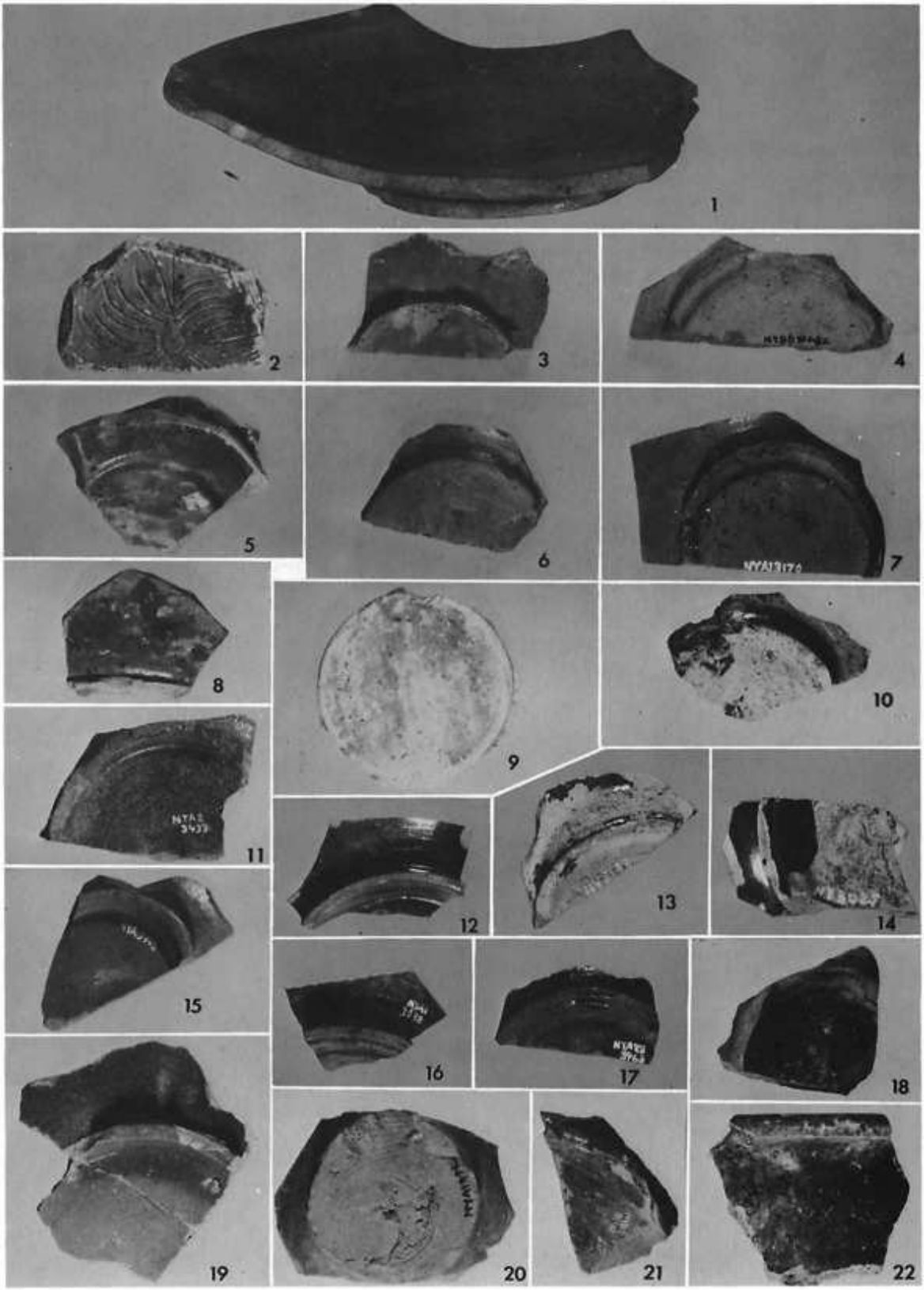
軒　瓦 (3)

軒　瓦 (4)

図版第42

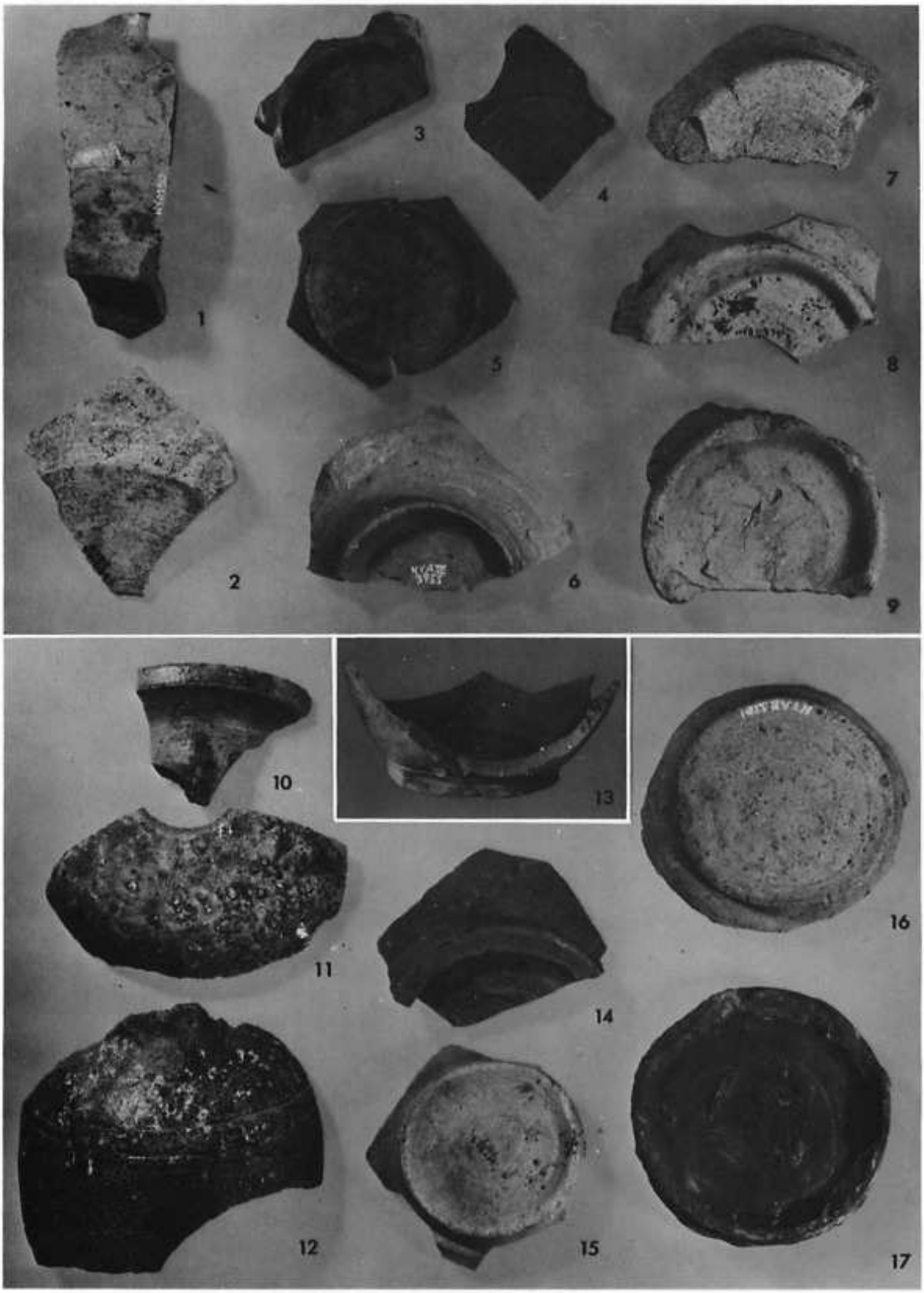


特殊瓦・塼・火鉢

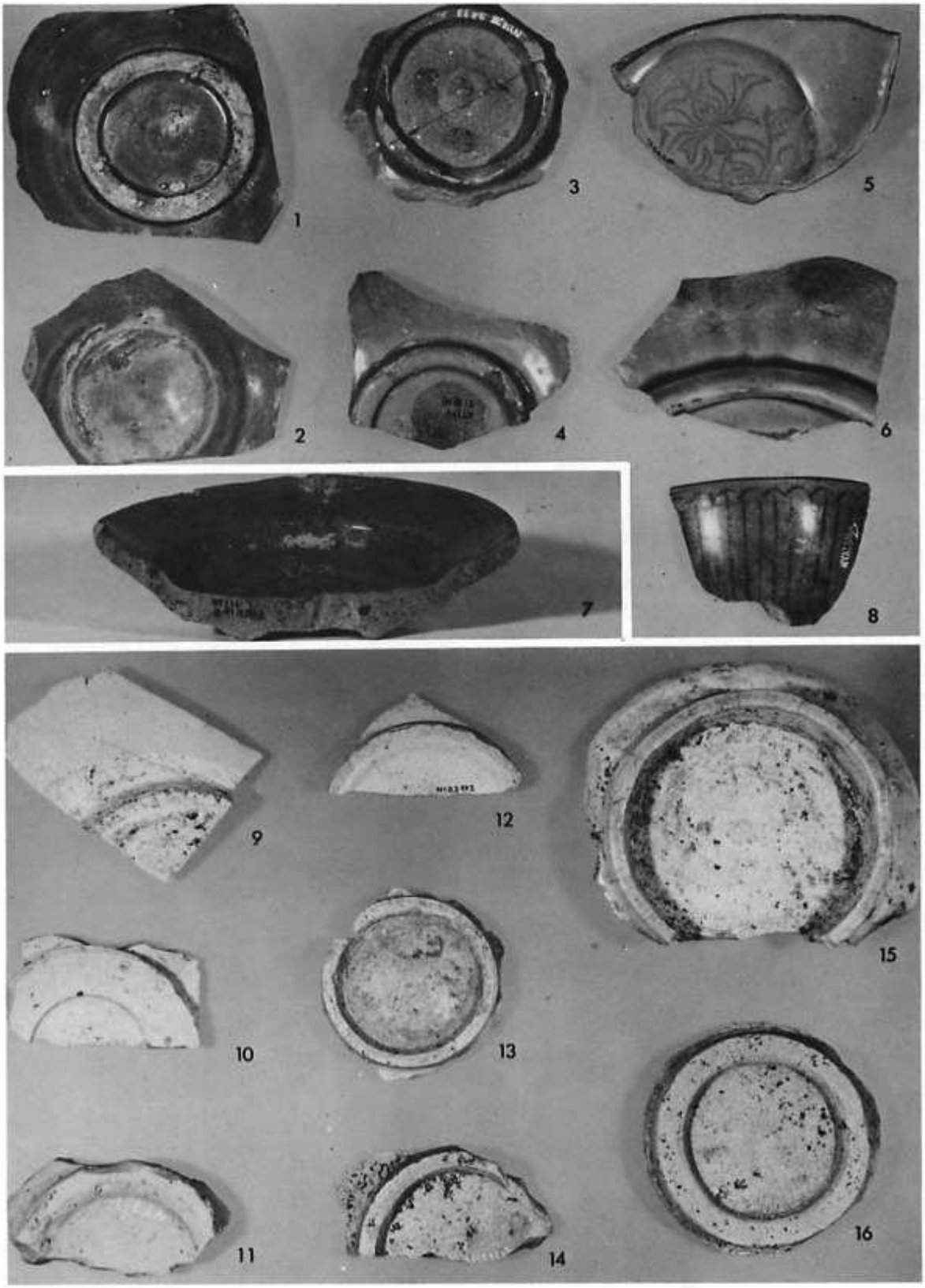


緑釉陶器

図版第44

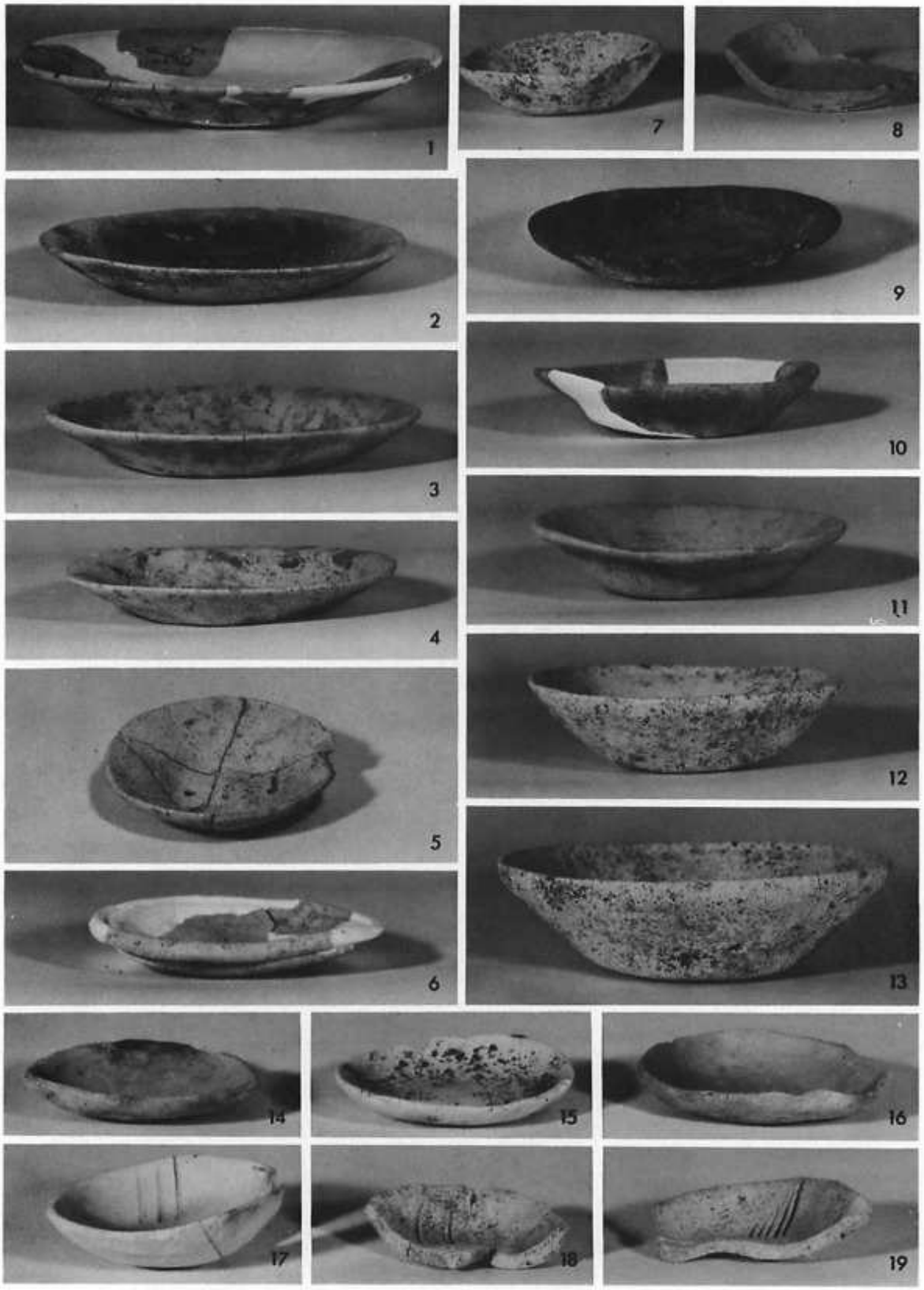


灰釉陶器・須恵質土器

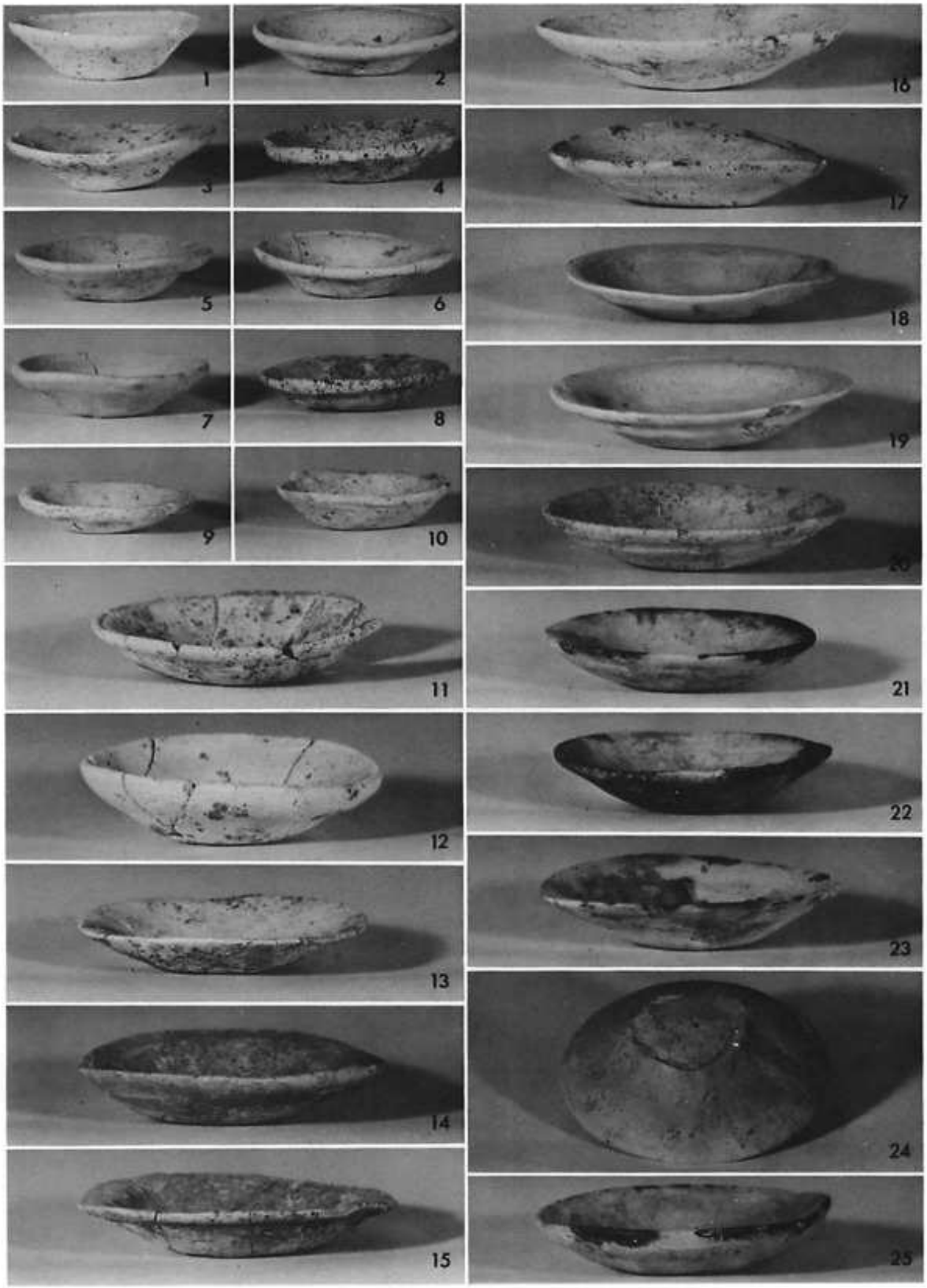


青　磁・白　磁　類

図版第46

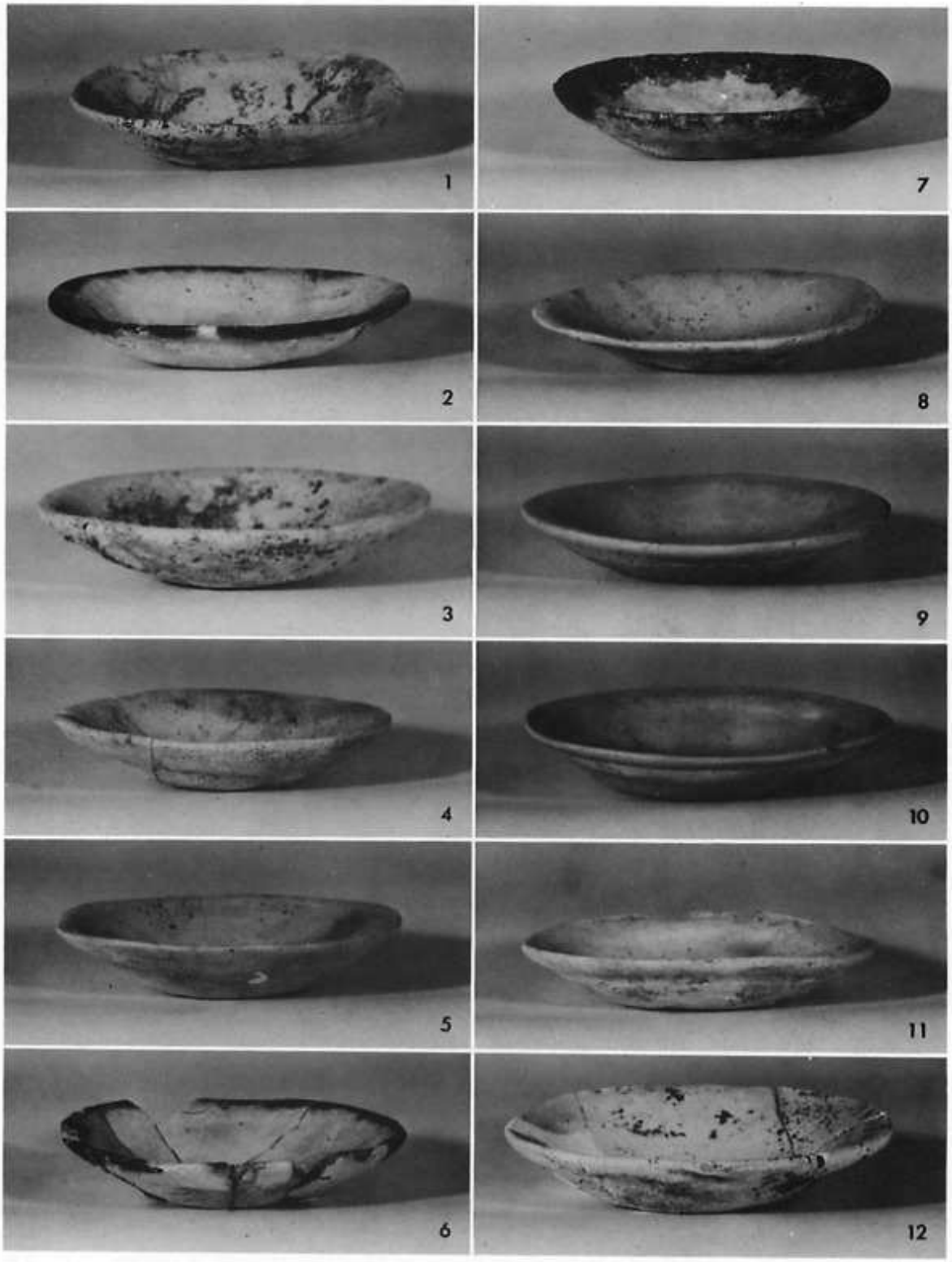


土師器皿(1)

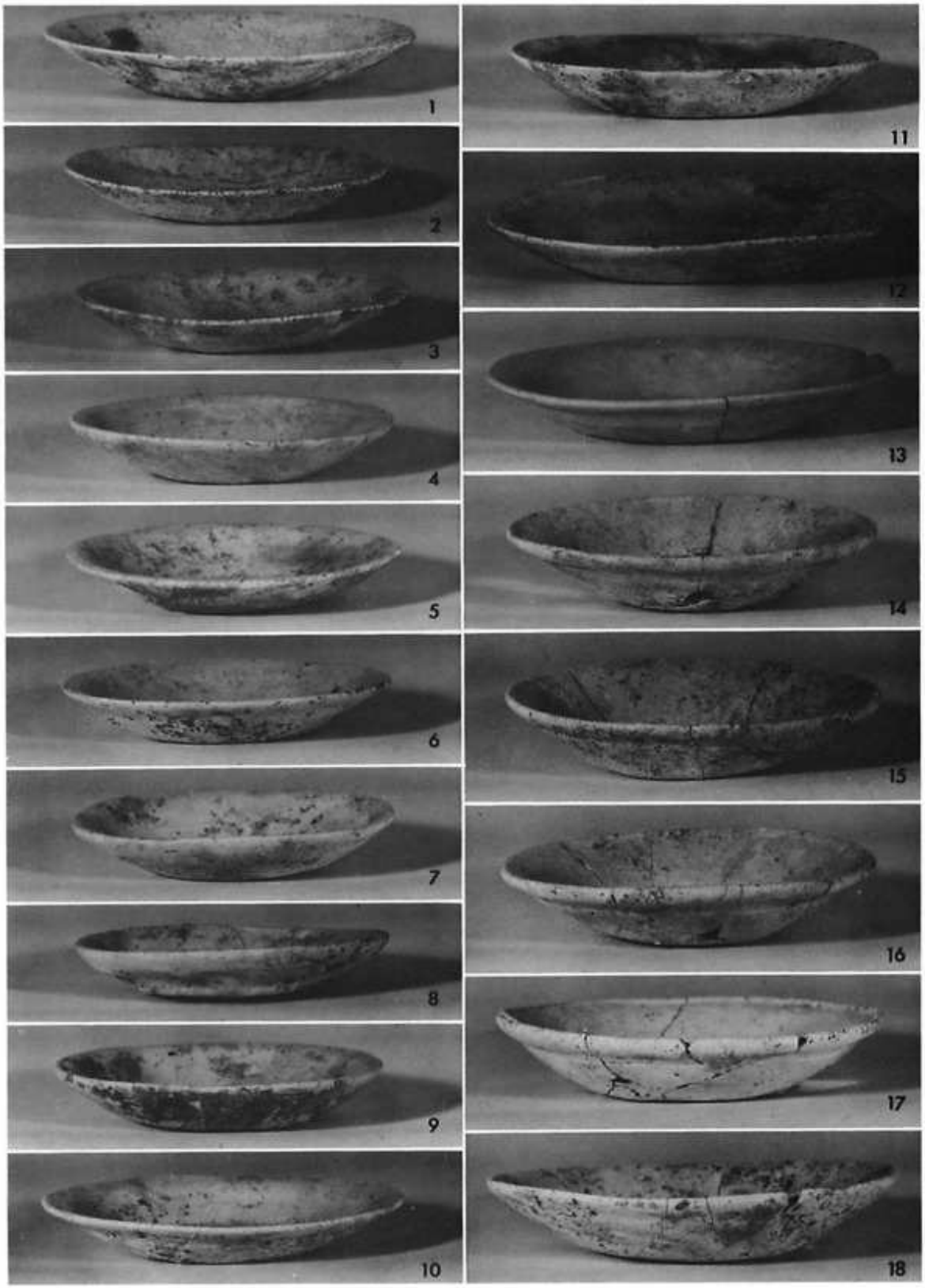


土師器皿(2)

図版第48

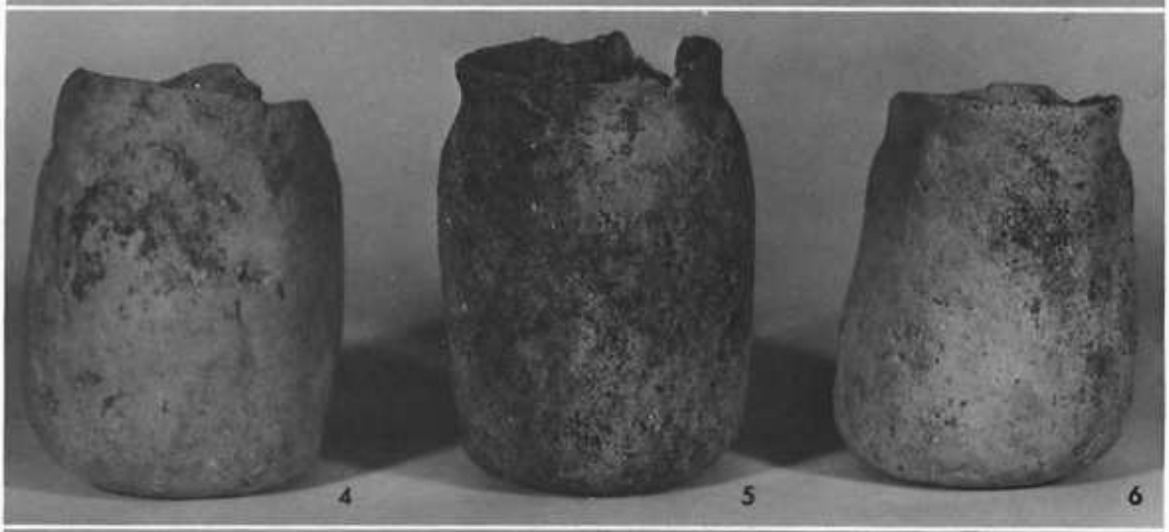


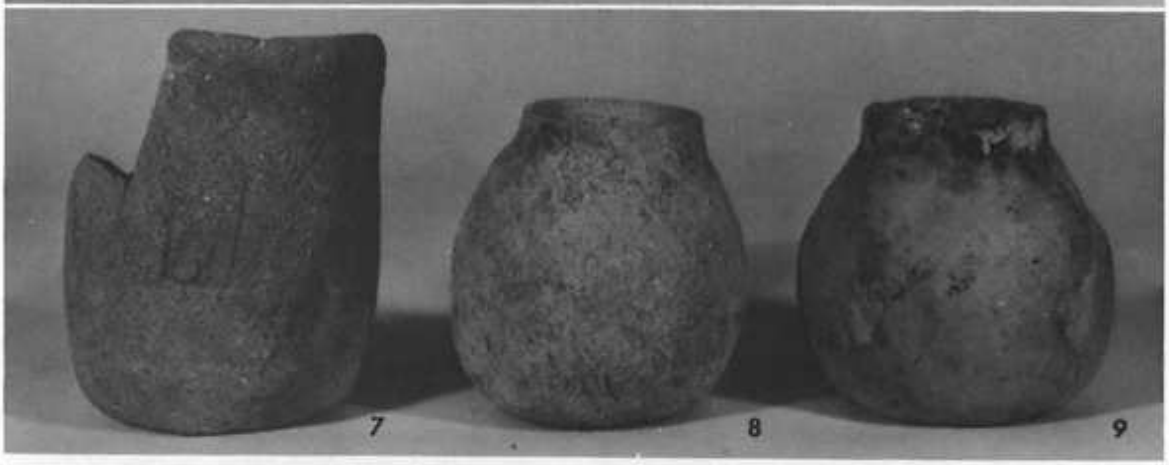
土師器 皿(3)

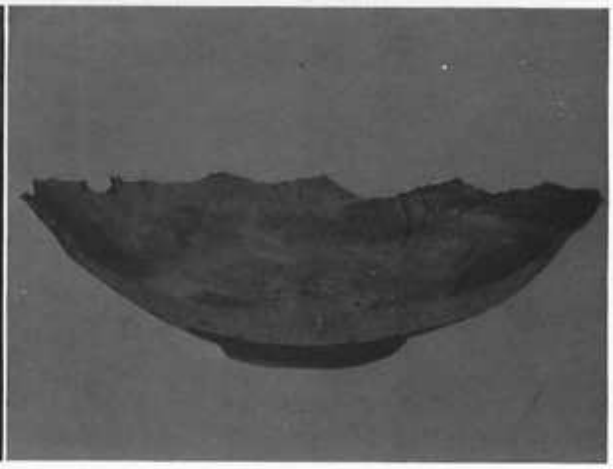


土師器皿(4)

図版第50



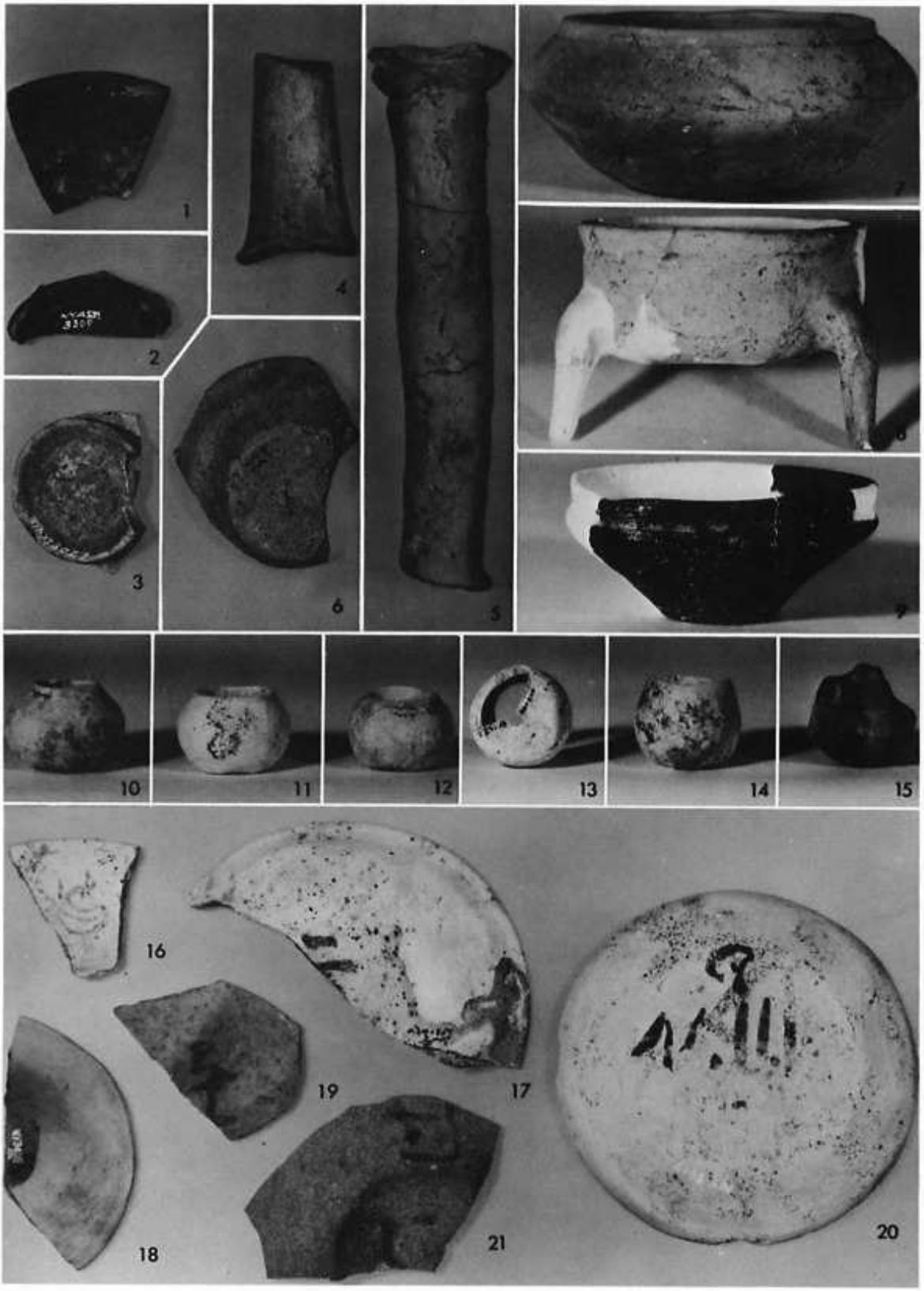




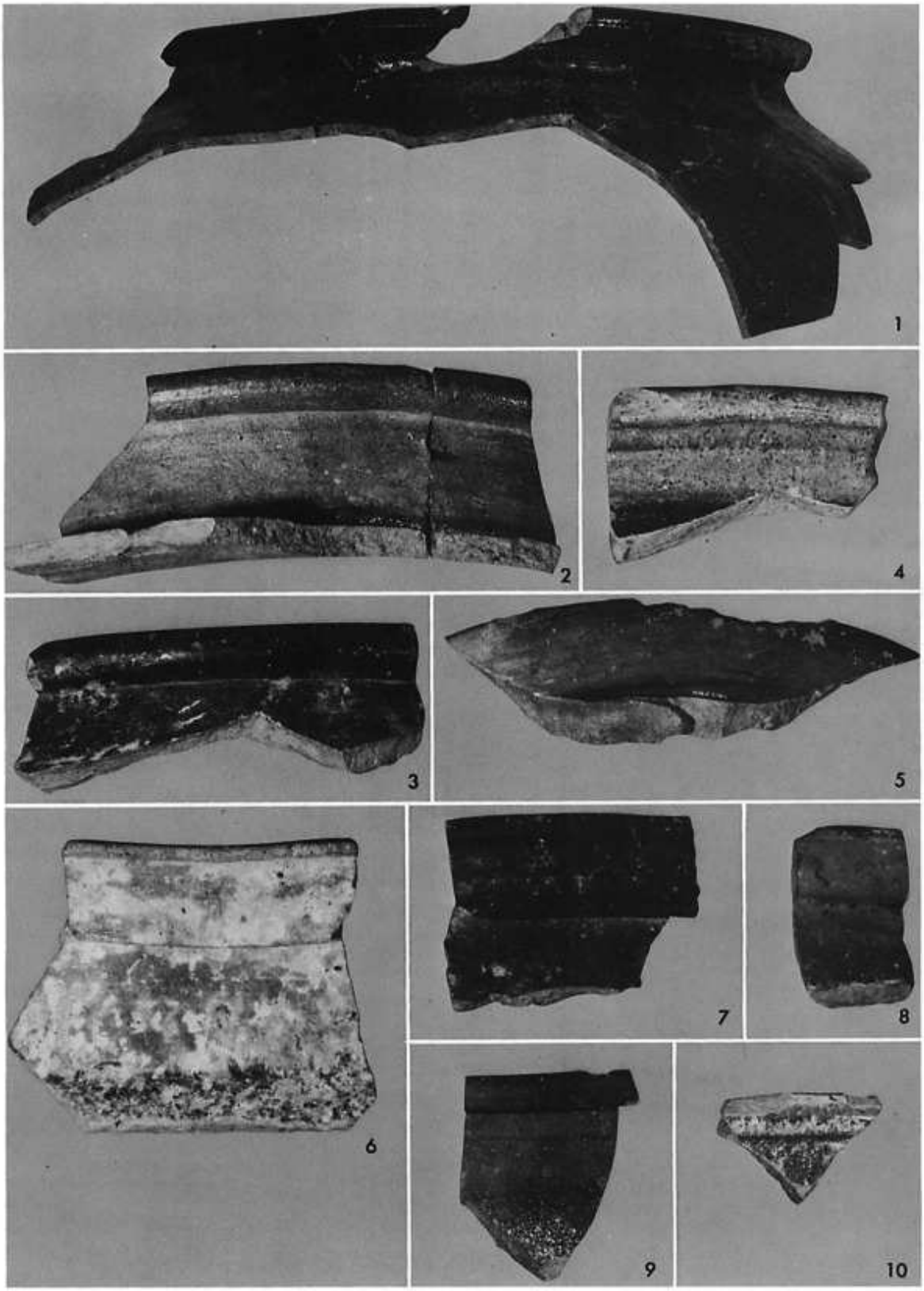
塩　壺・大　皿

土　釜・土鍋類

図版第52

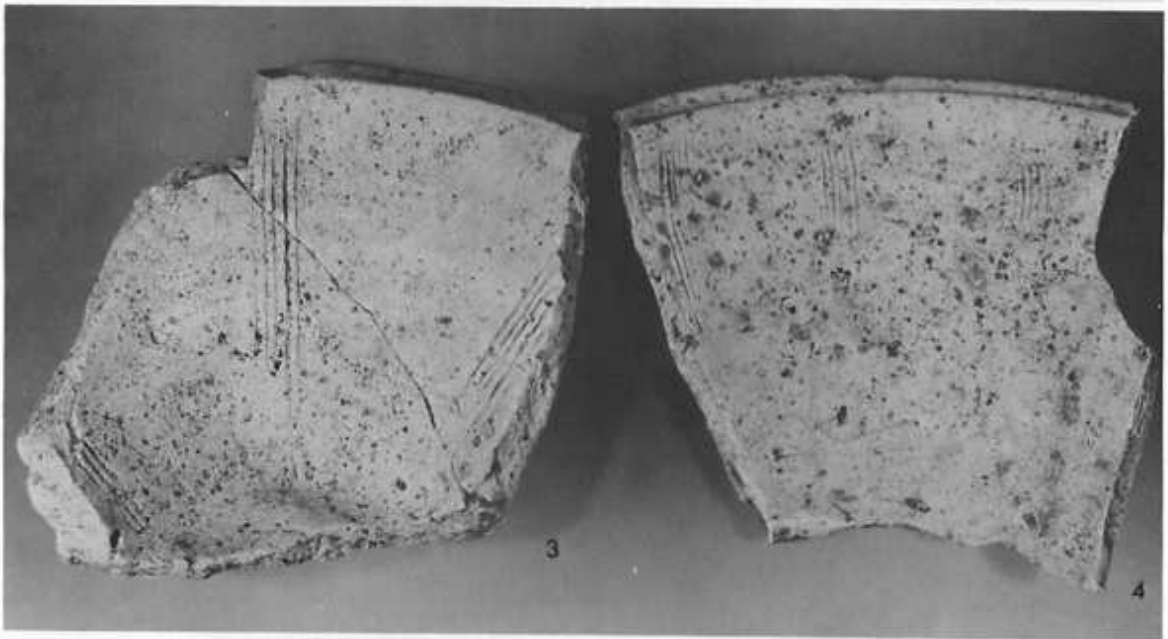


各種土器・墨書土器

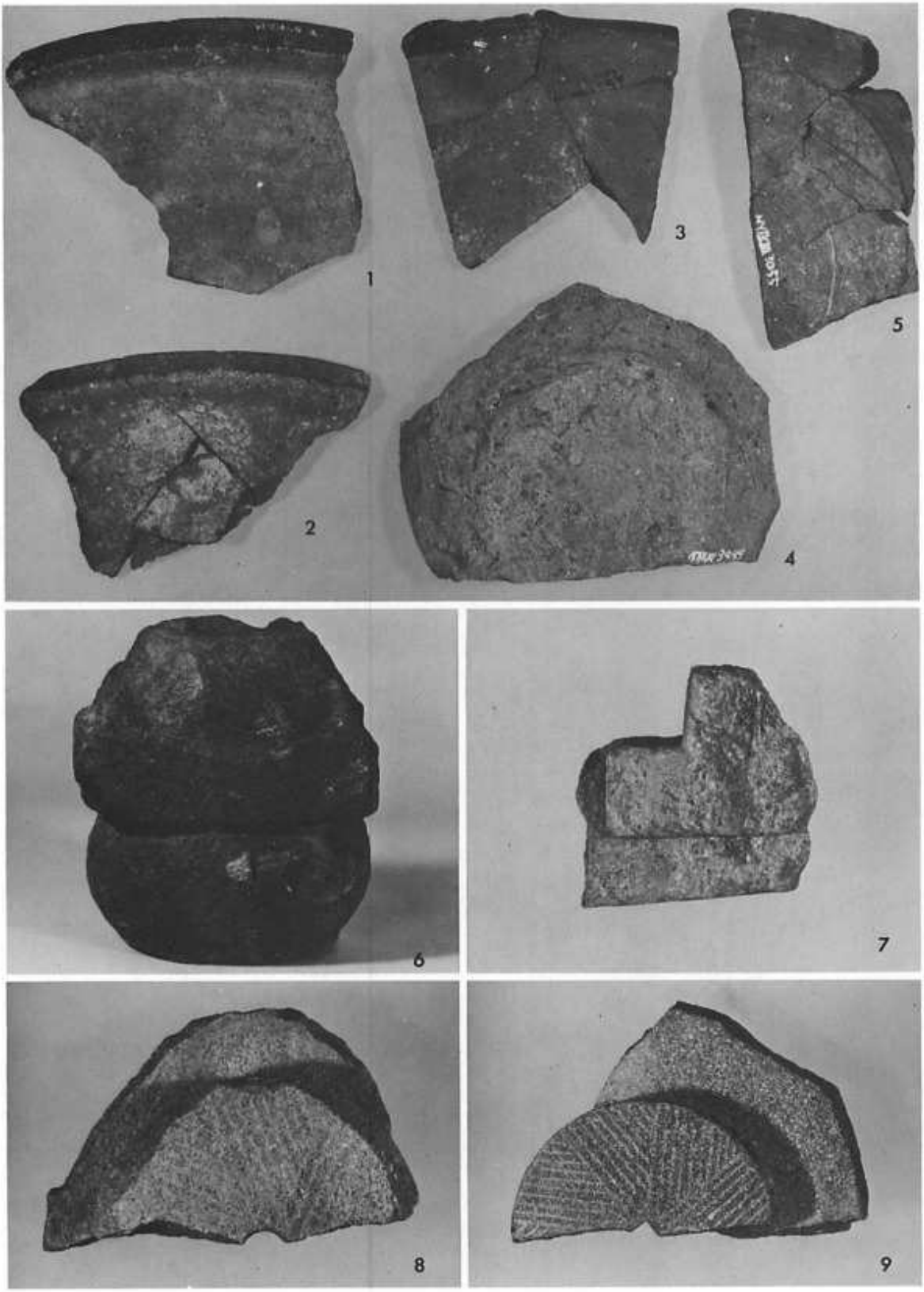


大 甕

図版第54

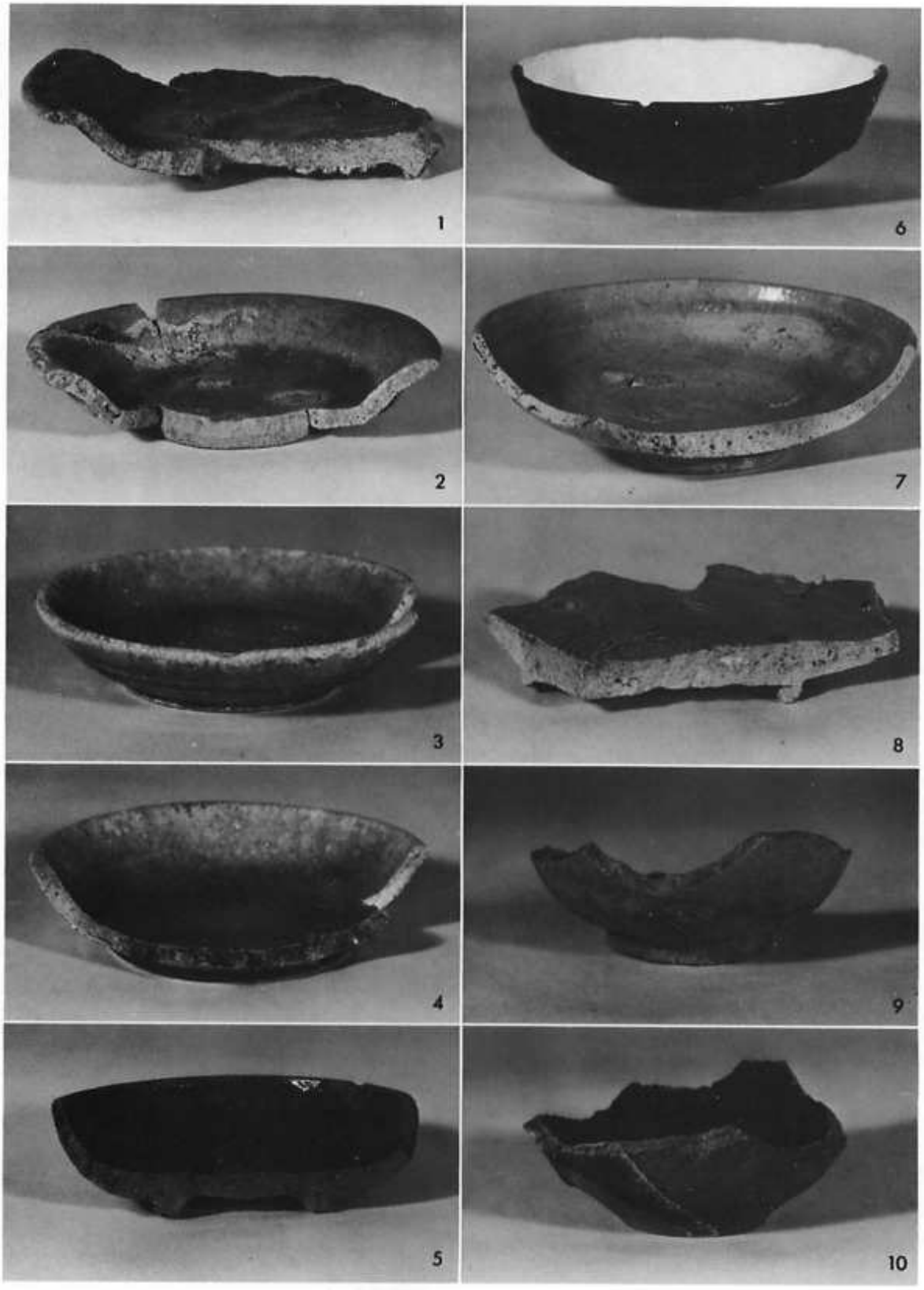


播 鉢・片 口

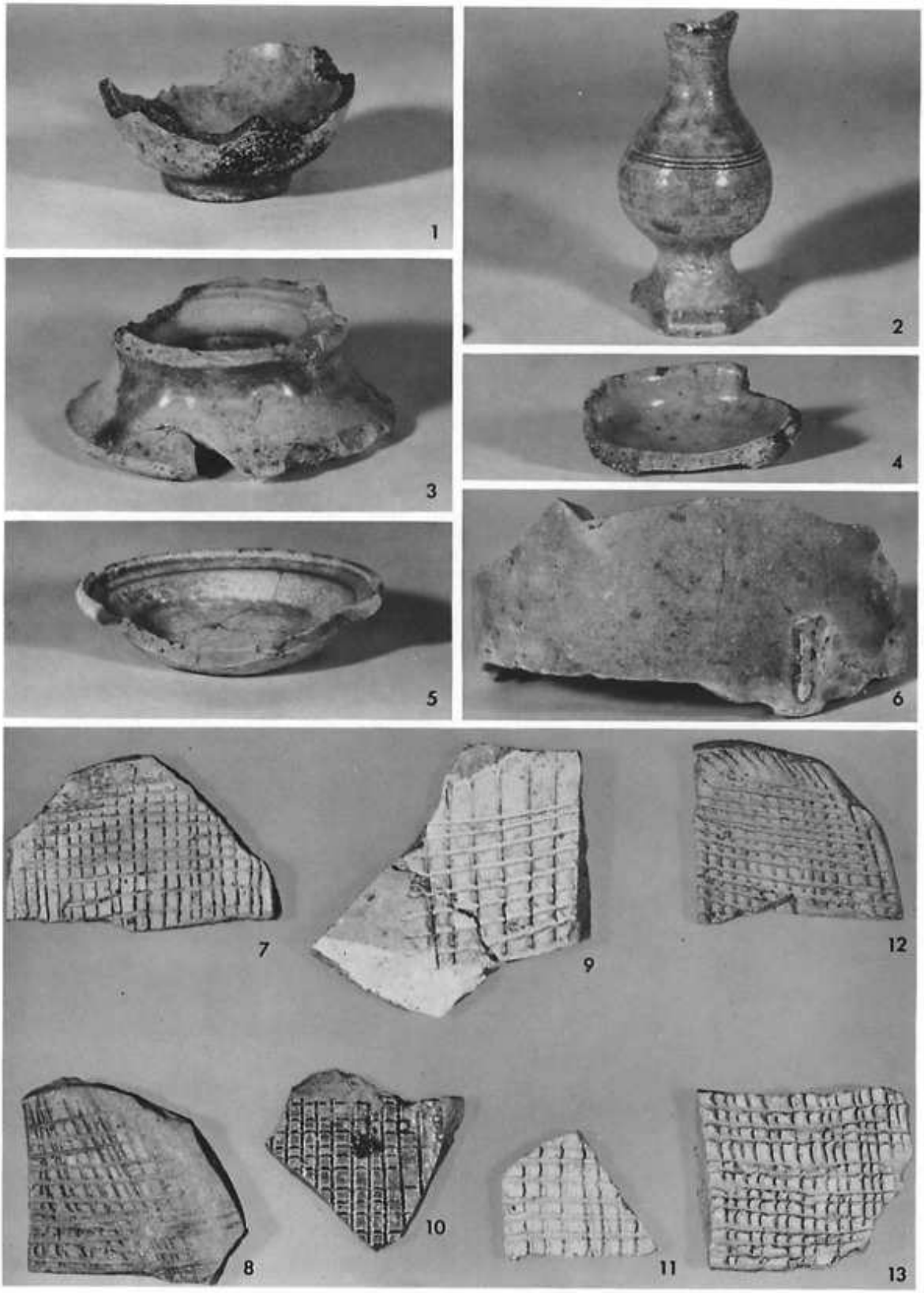


片　口·石 製 品

図版第56

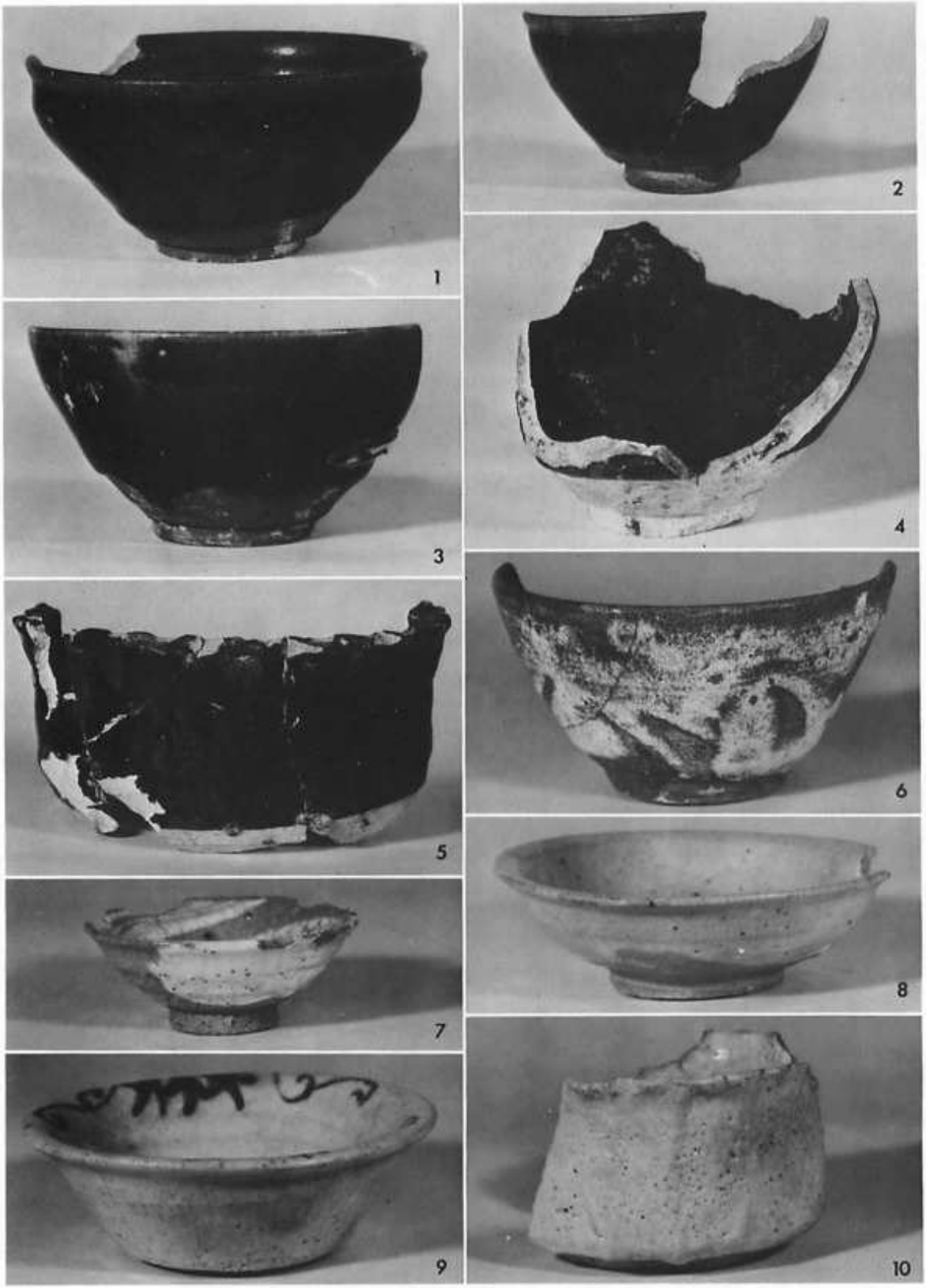


陶　器　類(1)

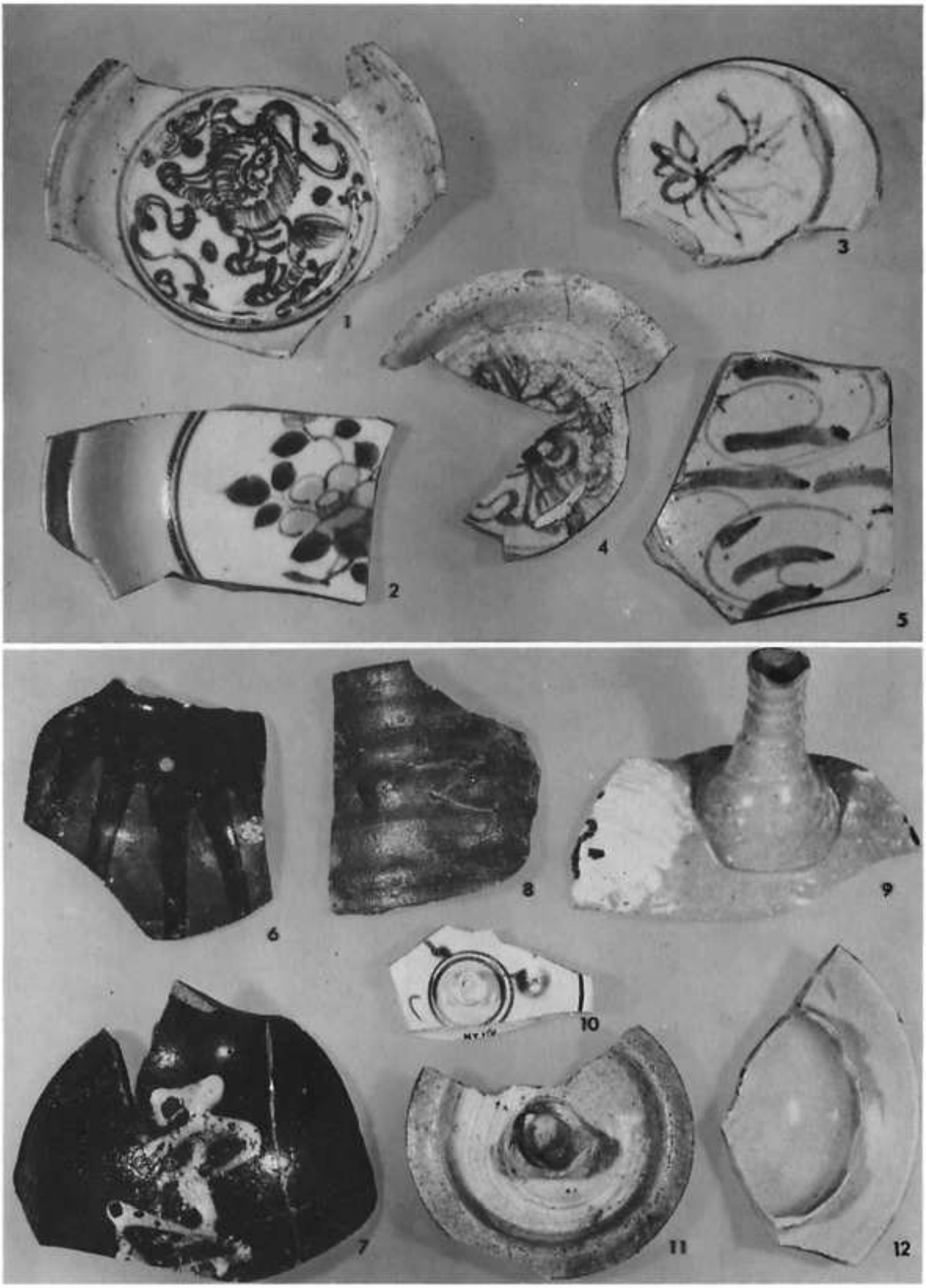


陶　器　類(2)

図版第58

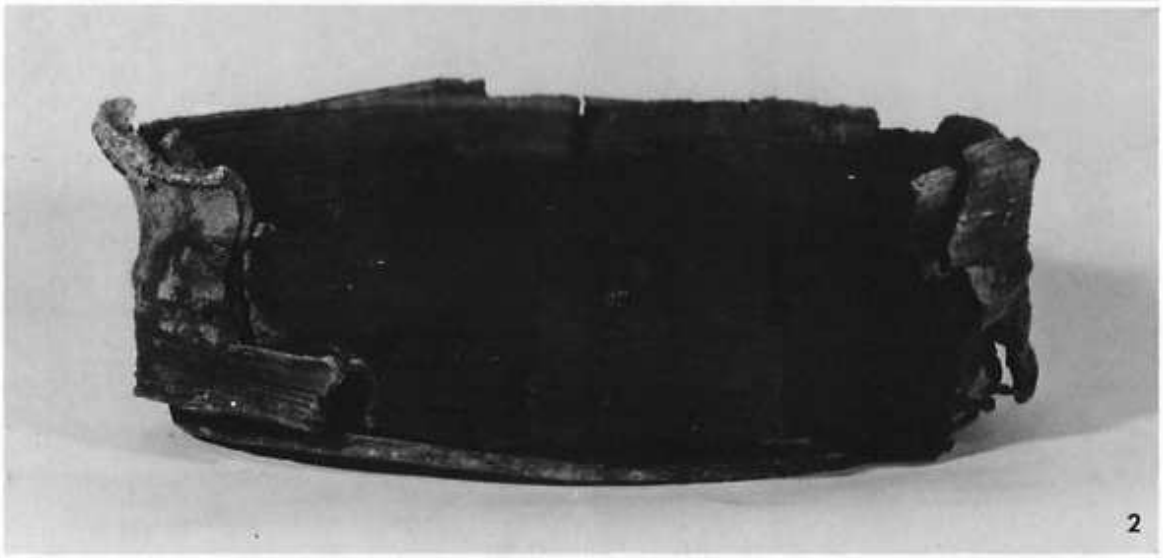


陶　器　類(3)

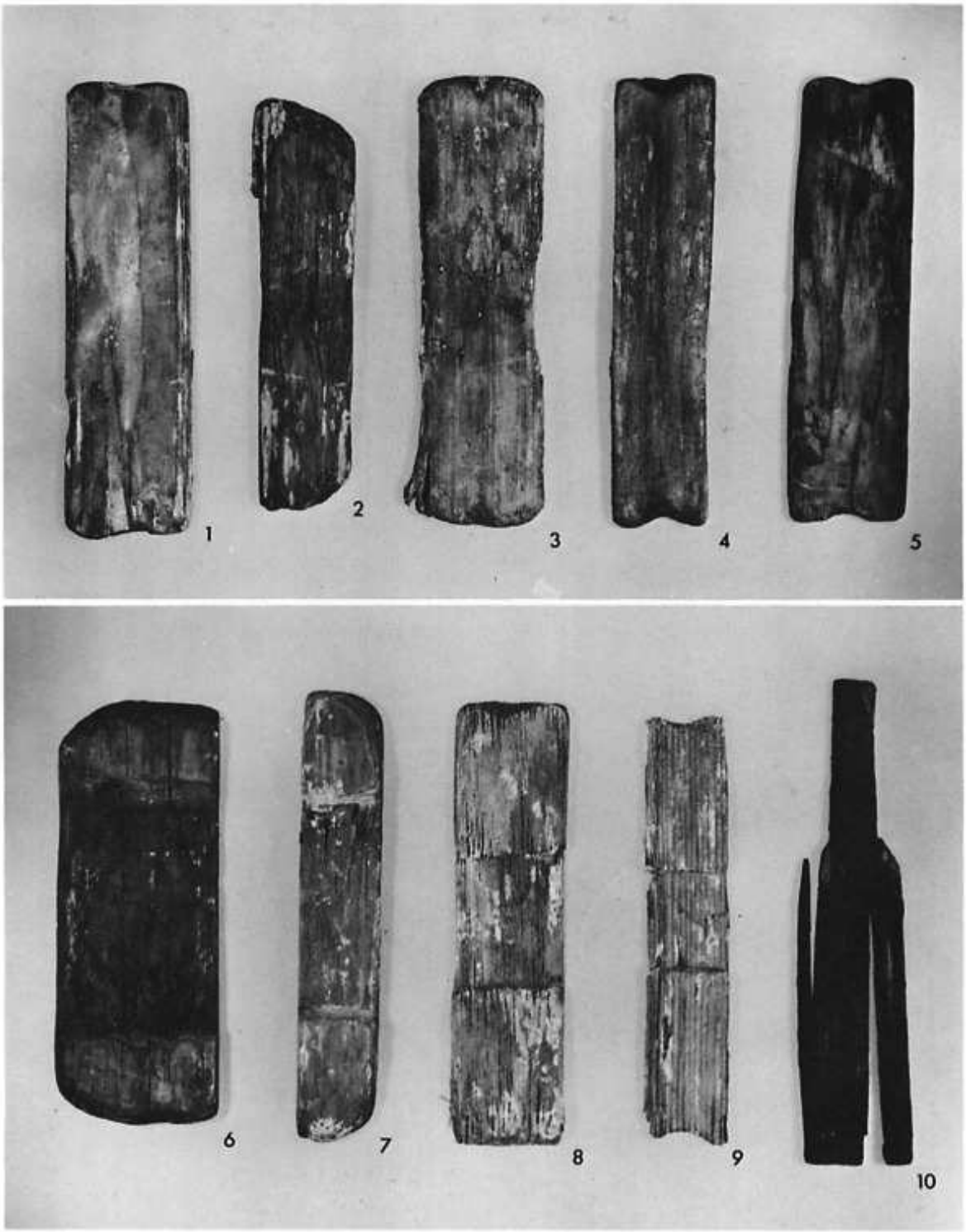


陶　器　類(4)

図版第60

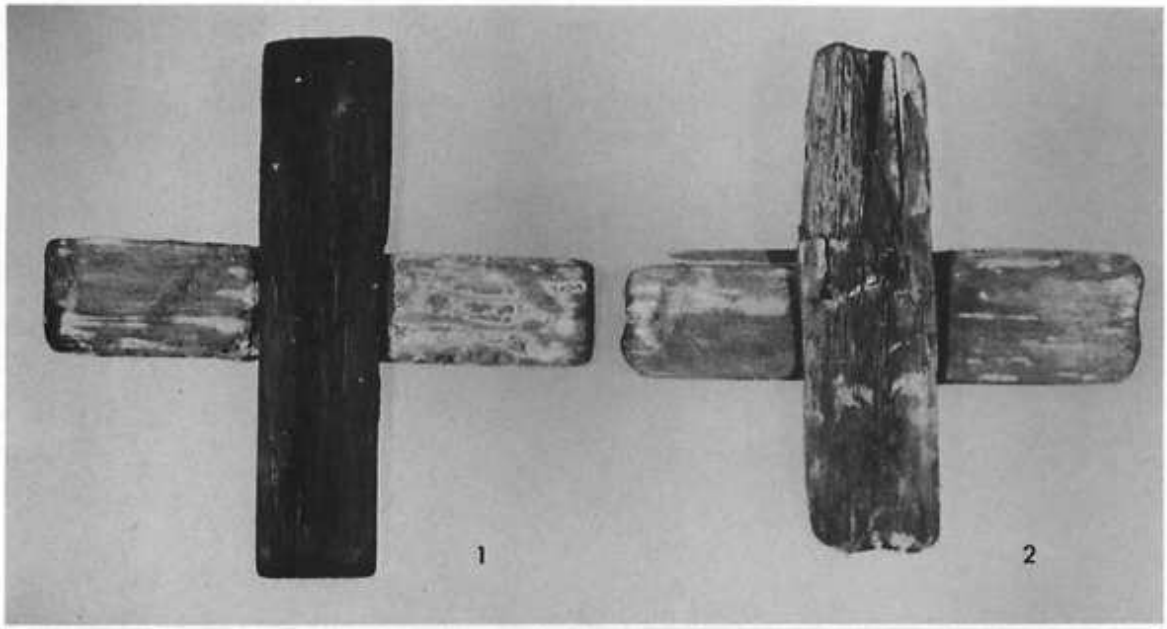


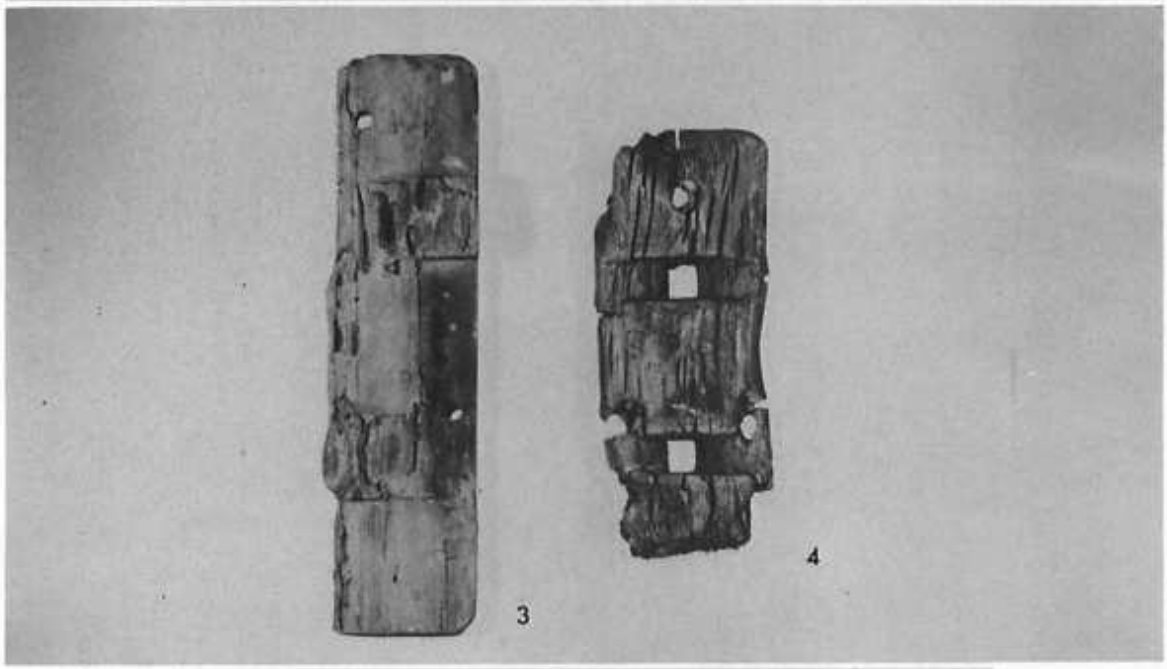
木　器(1)

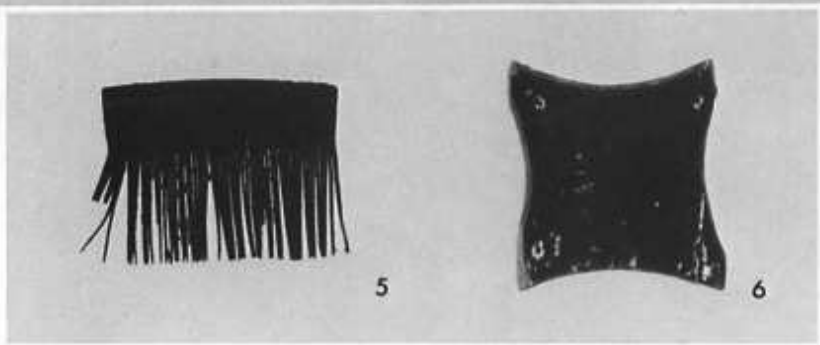


木　器(2)

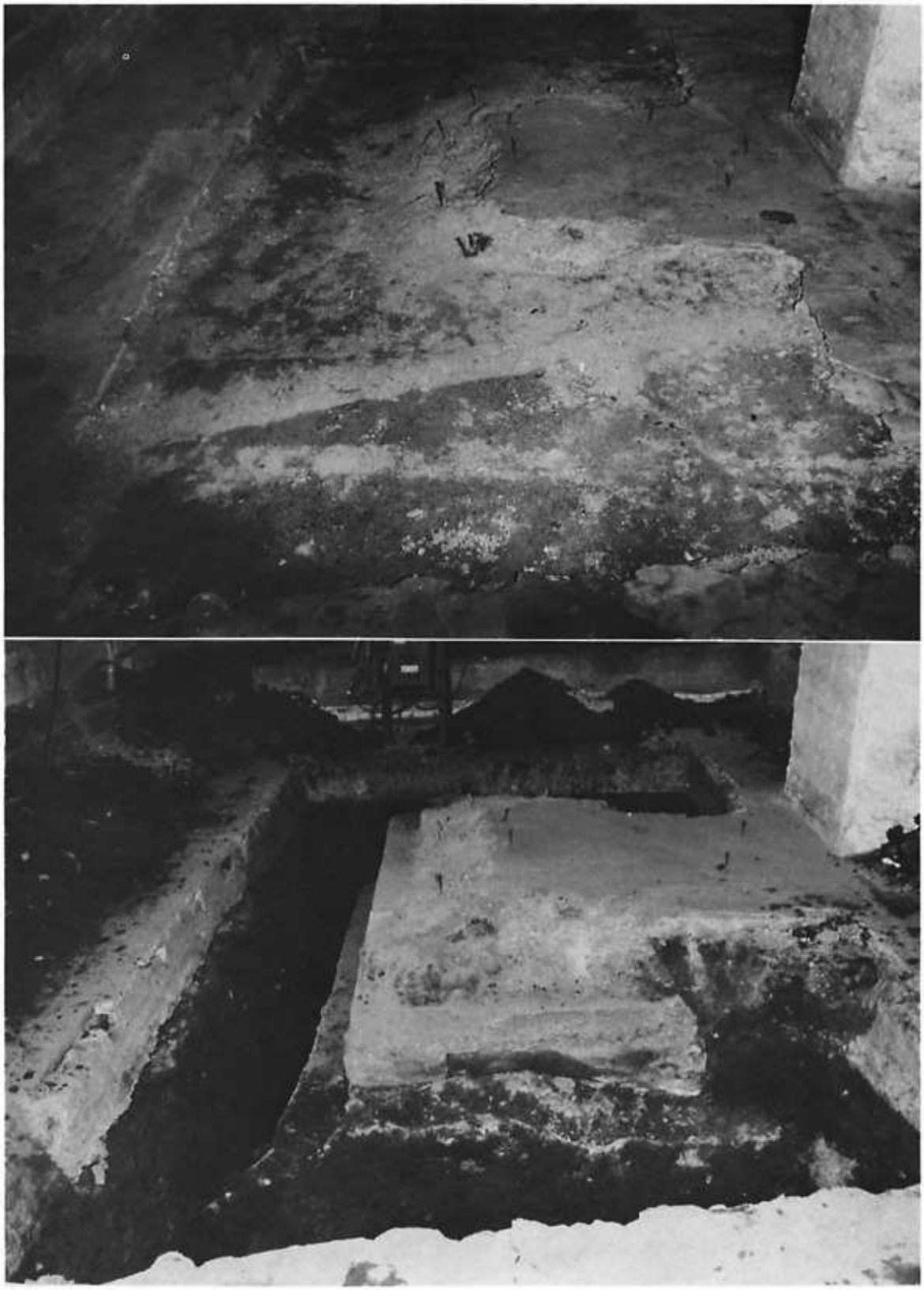
図版第62





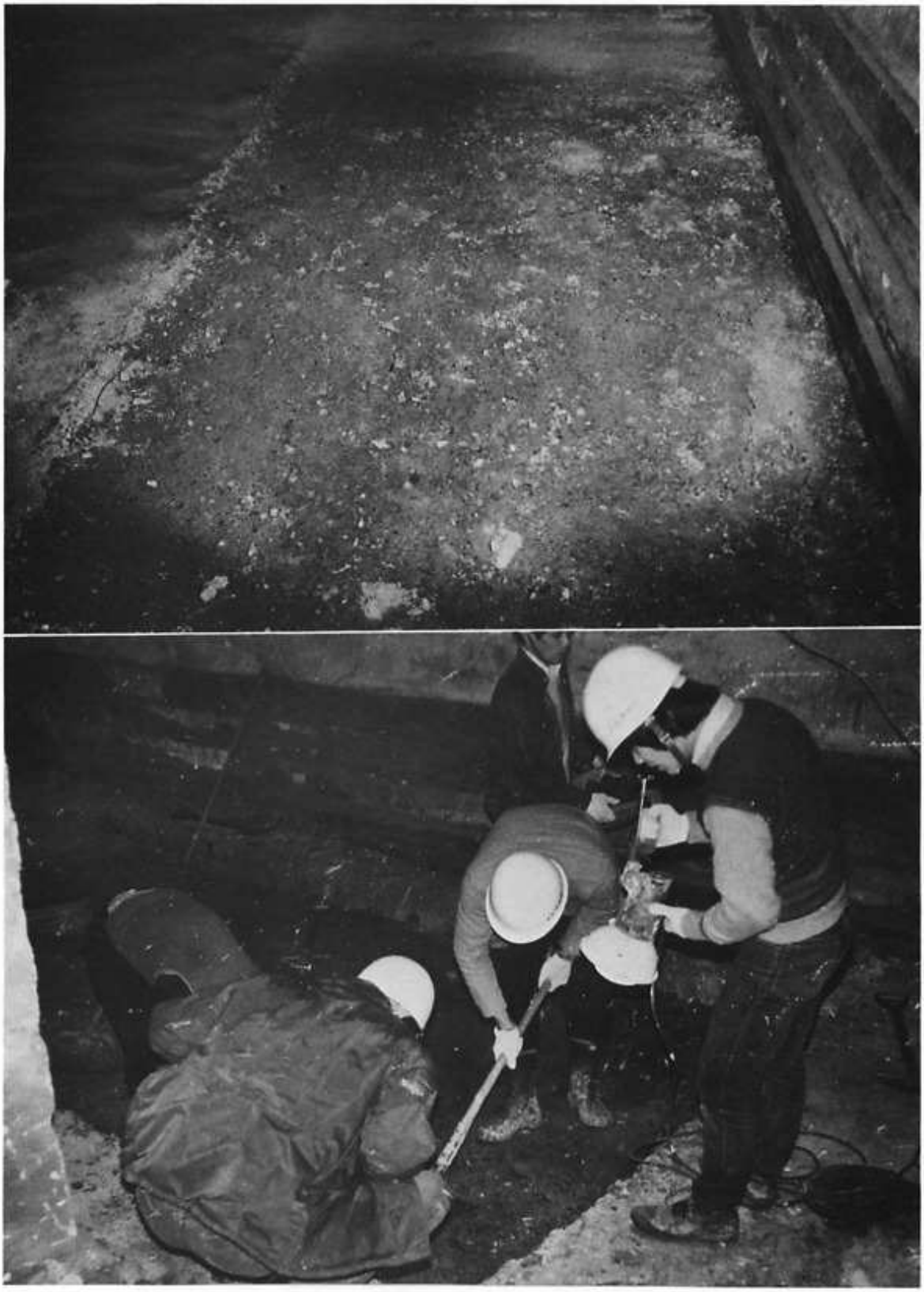


木　器(3)

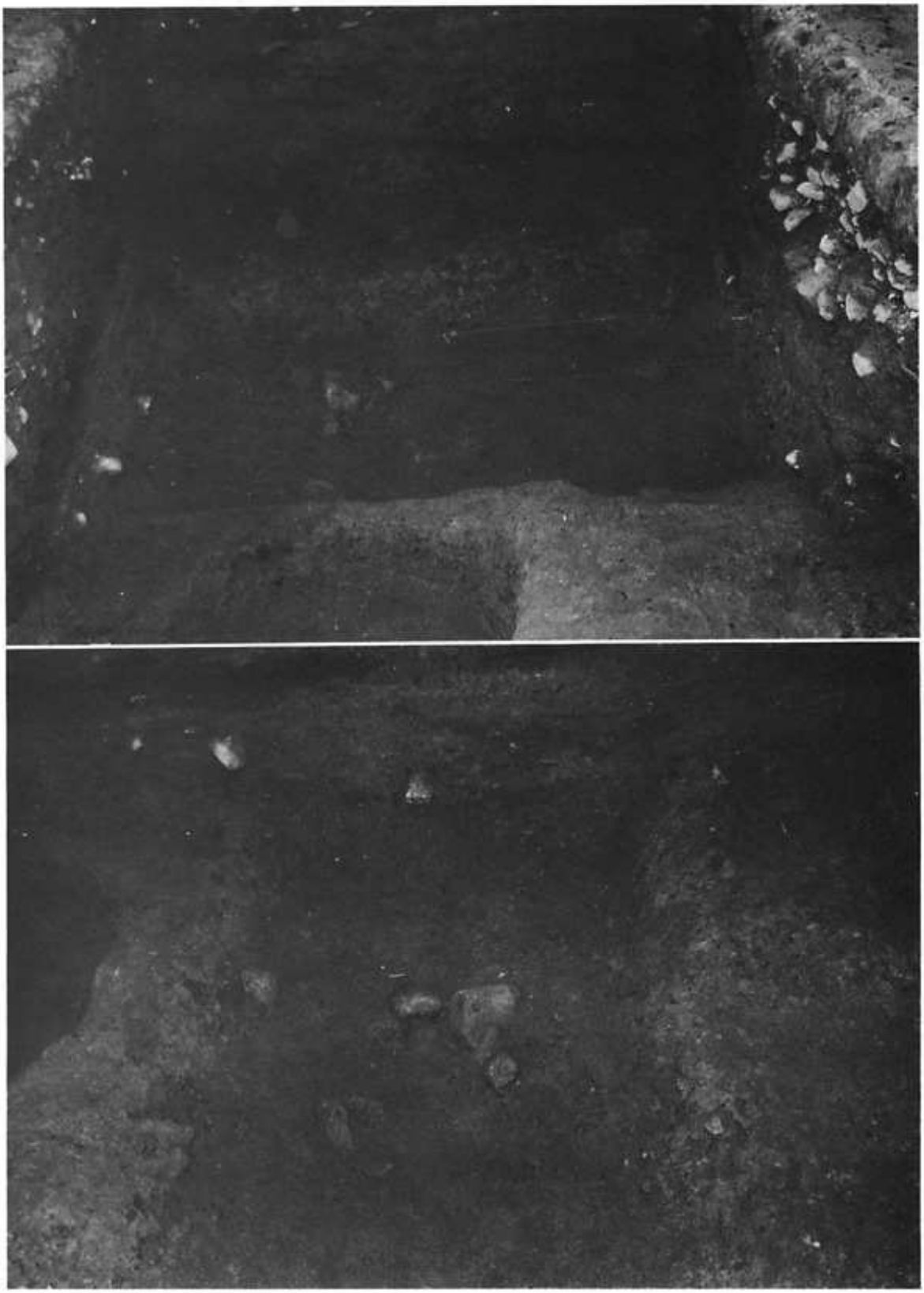


上：Aトレンチ発掘前，下：完掘後

図版第64

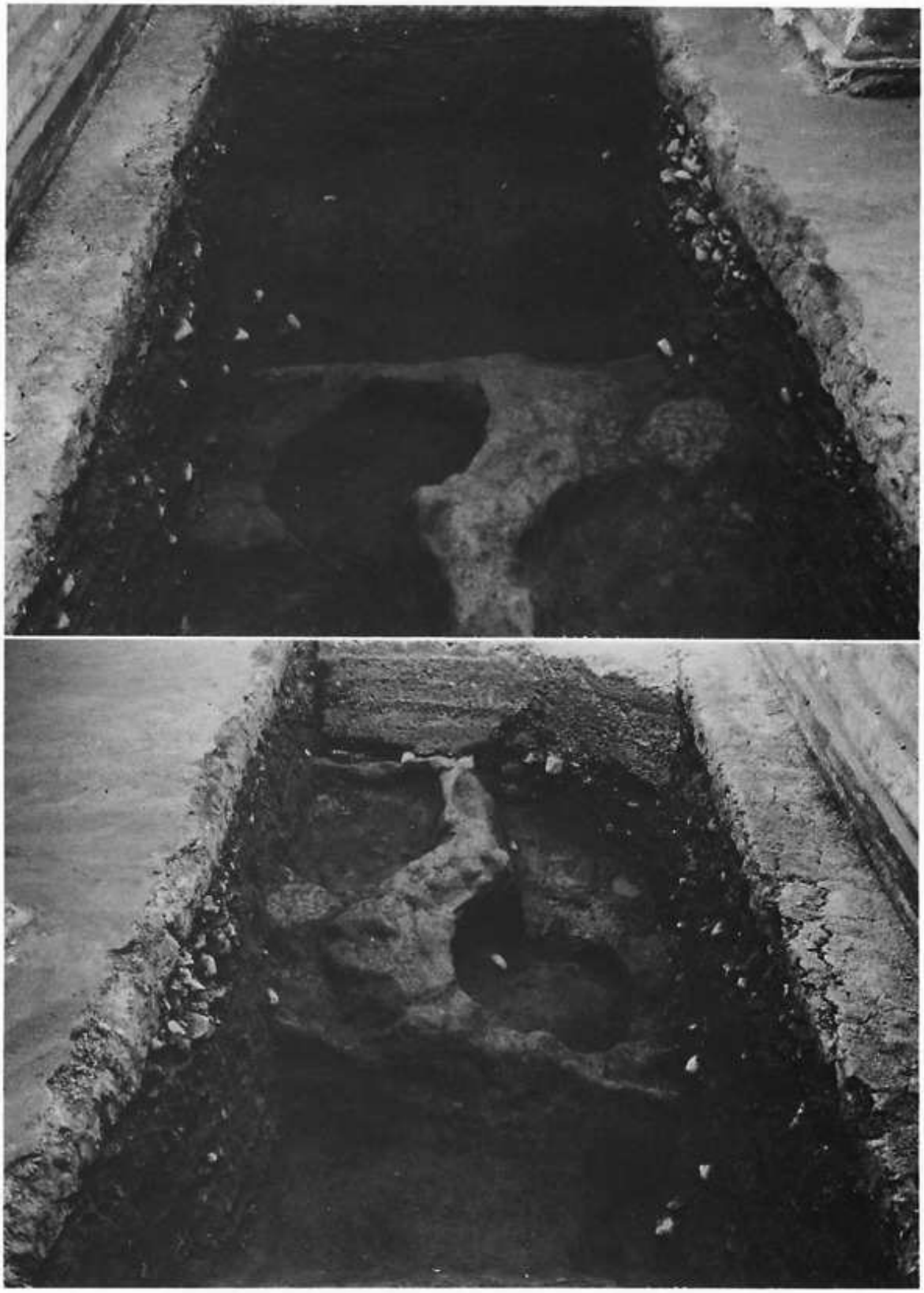


上：Bトレンチ発掘前，下：調査状況

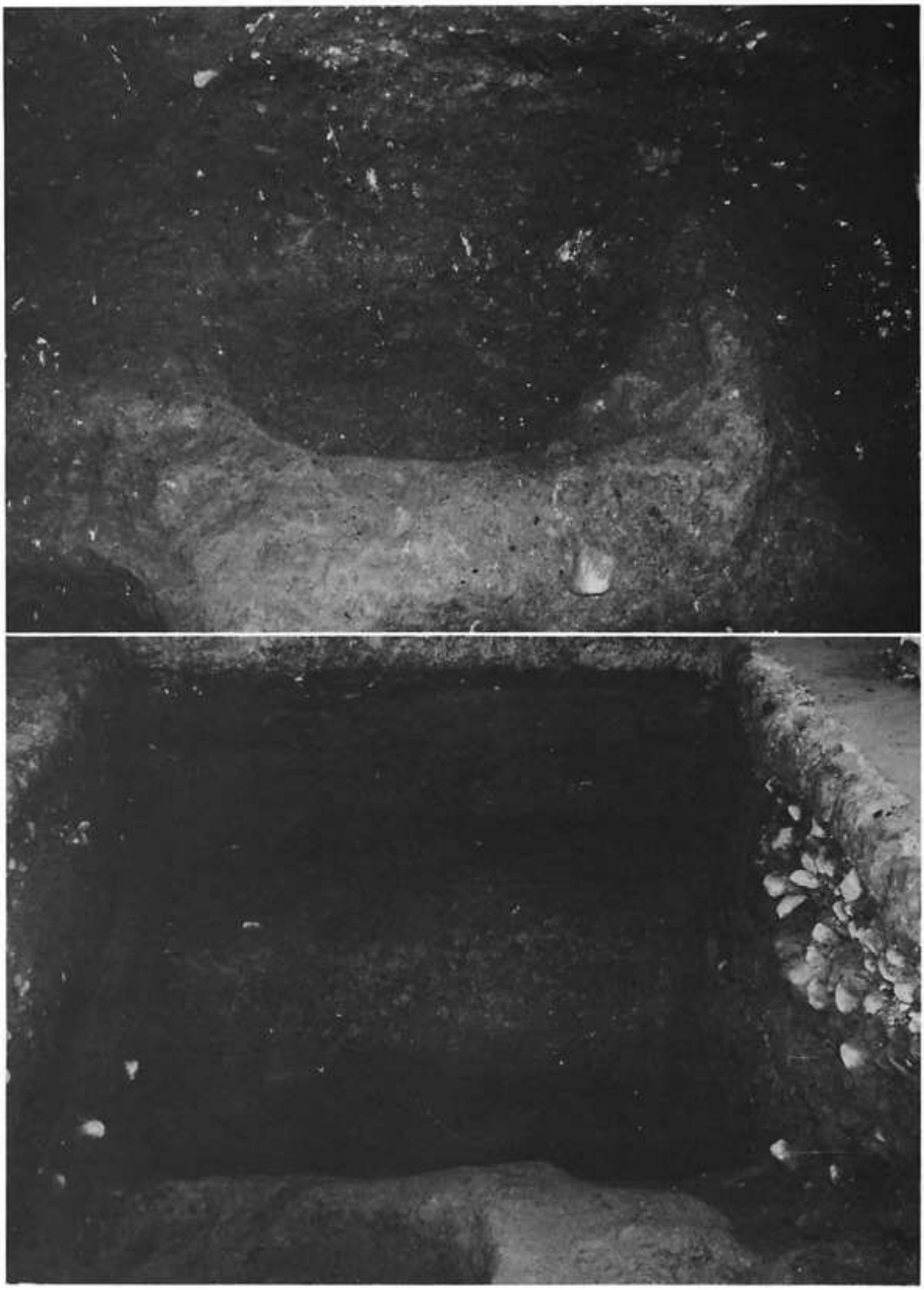


Bトレンチ溝Ⅲ

図版第66

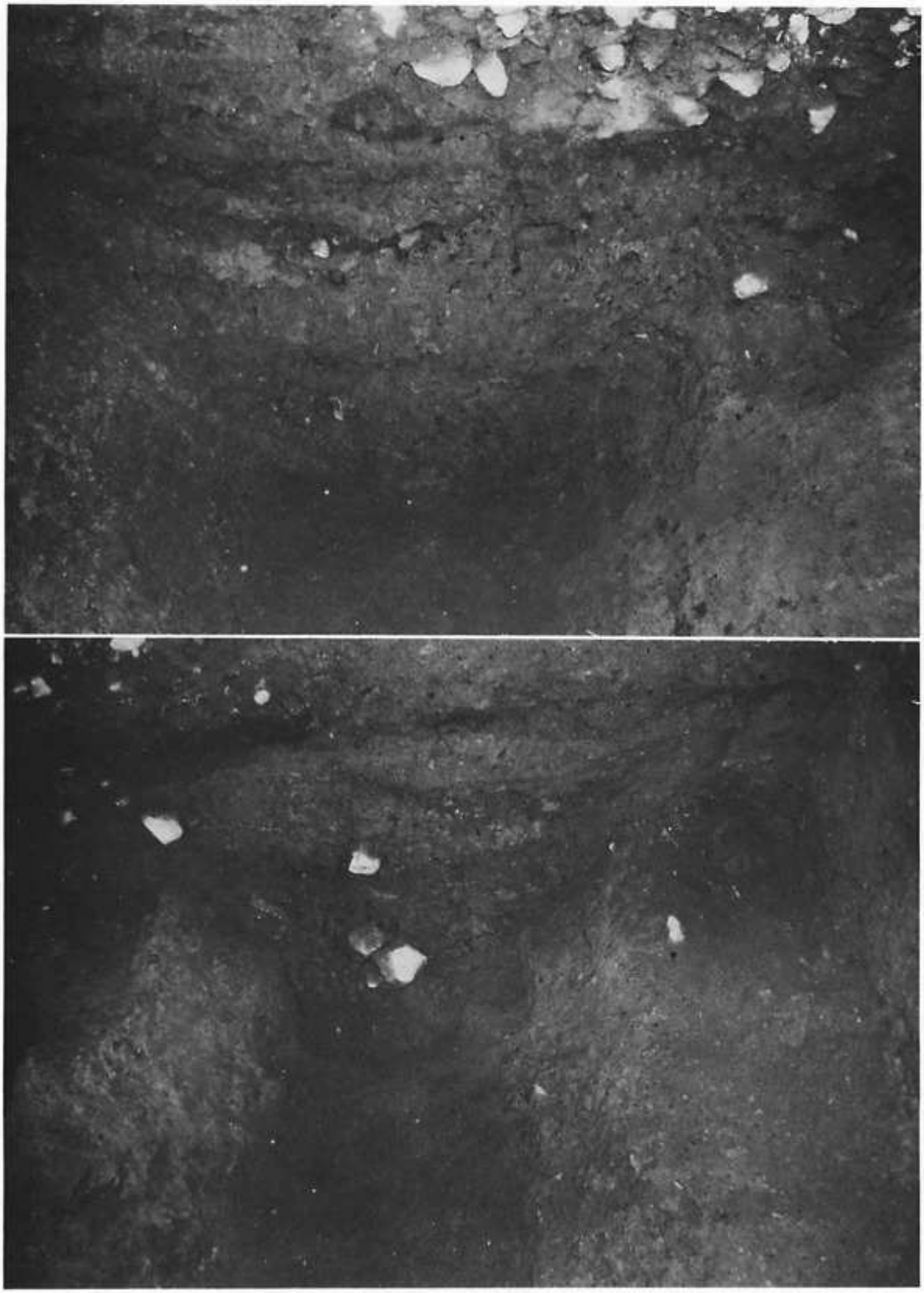


Bトレンチ完掘後全景

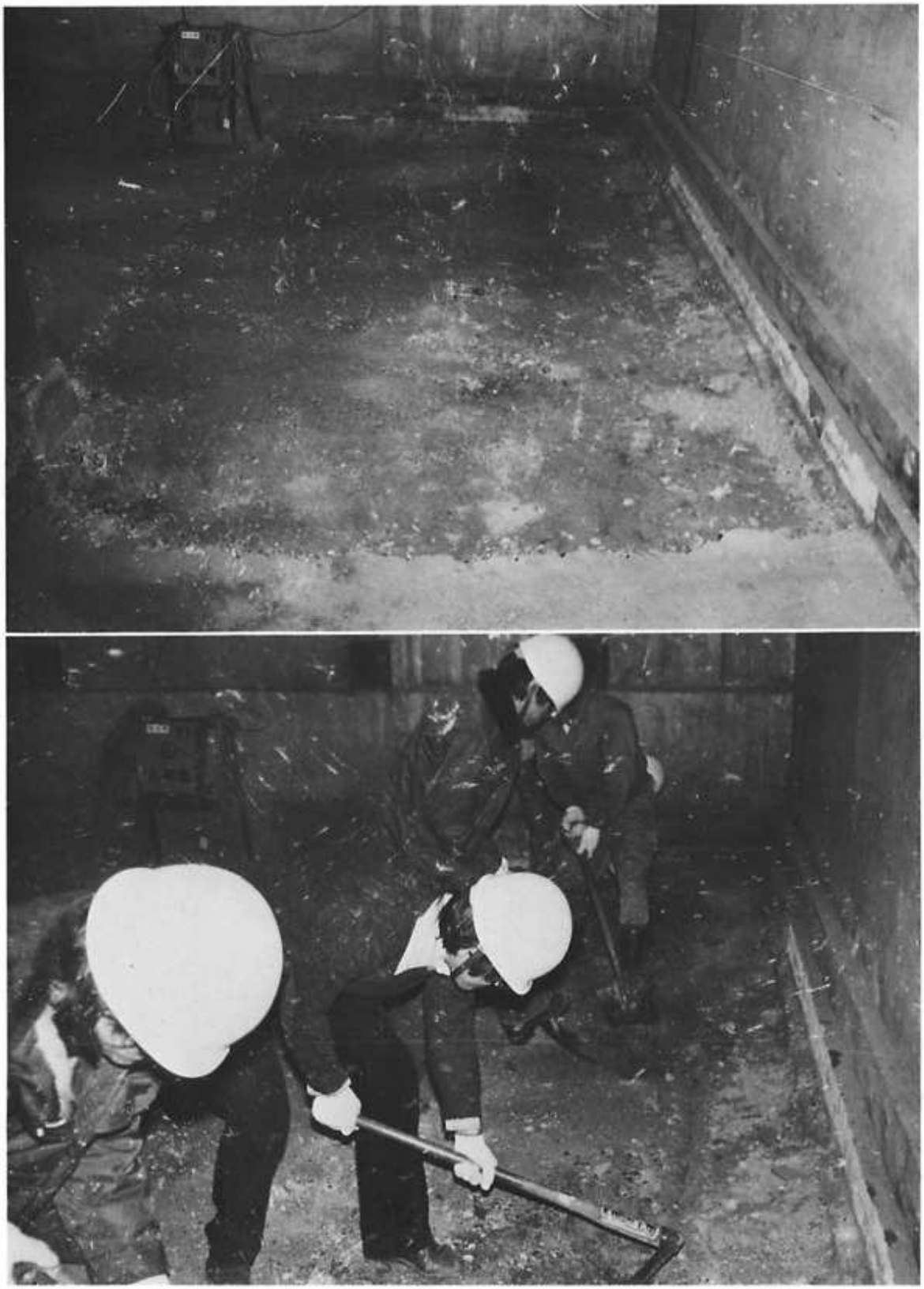


Bトレンチ溝Ⅳ

図版第68

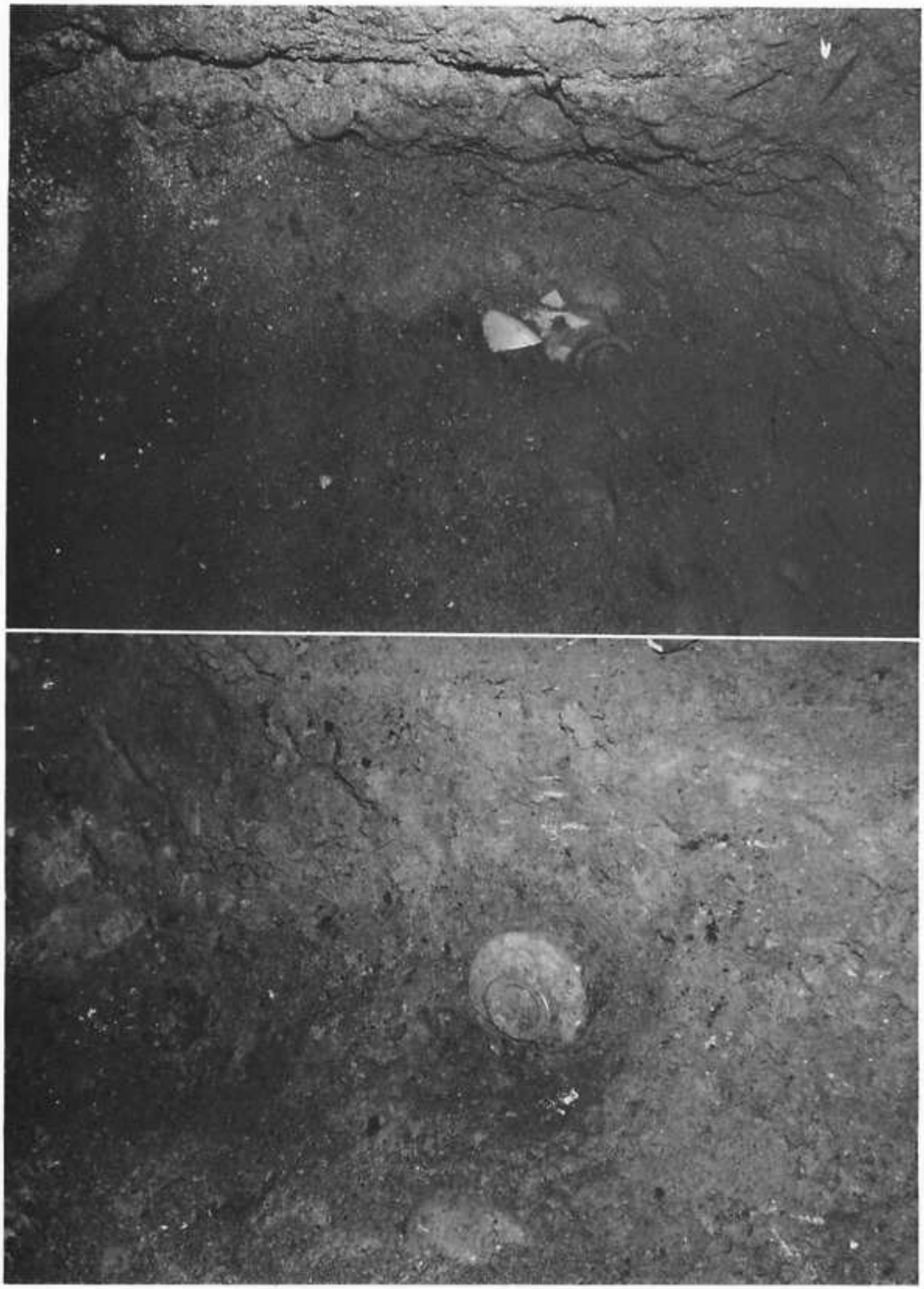


上：Bトレンチ溝断面，下：溝Ⅳ部分

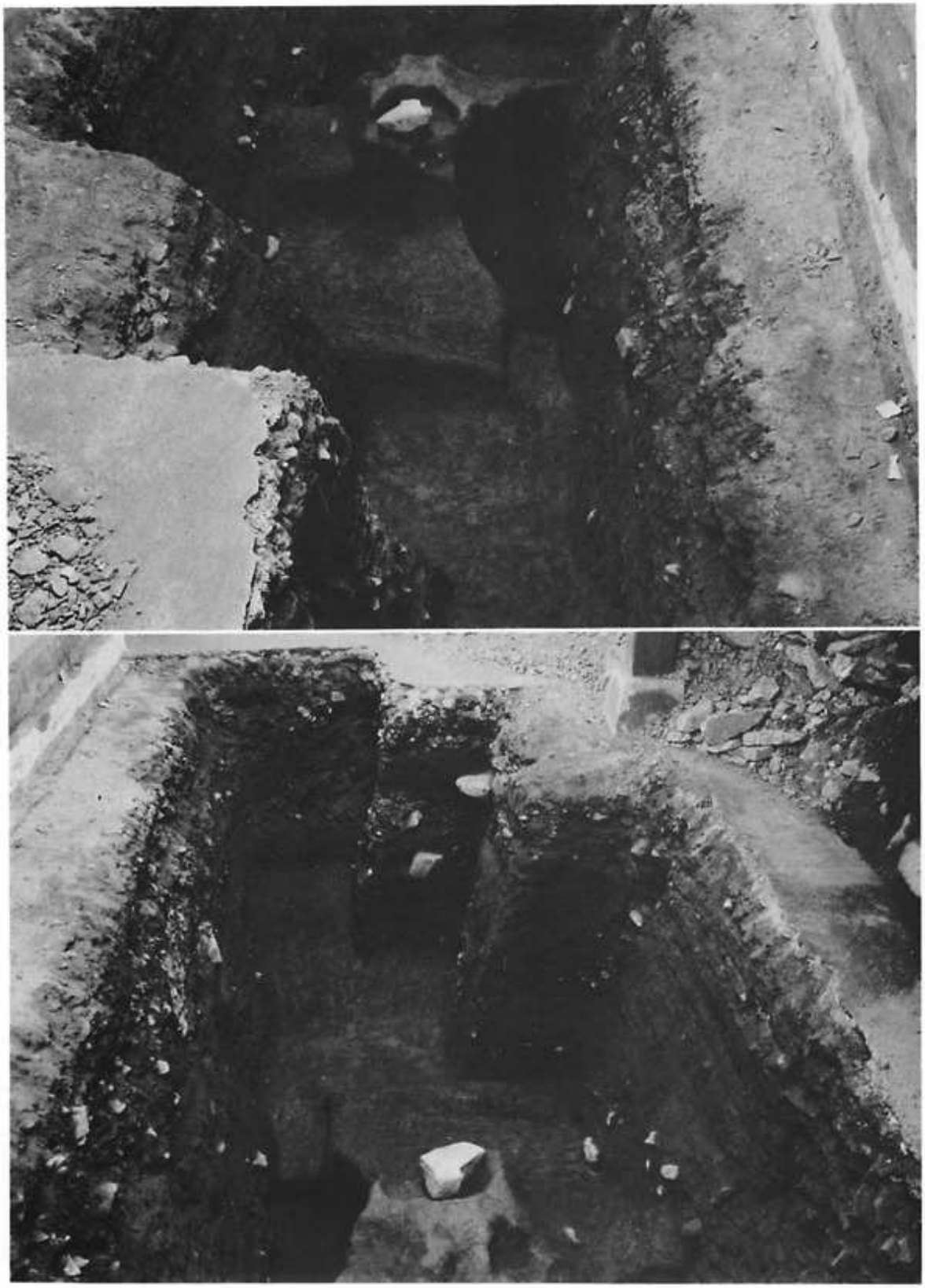


上：Cトレンチ発掘前，下：調査状況

図版第70

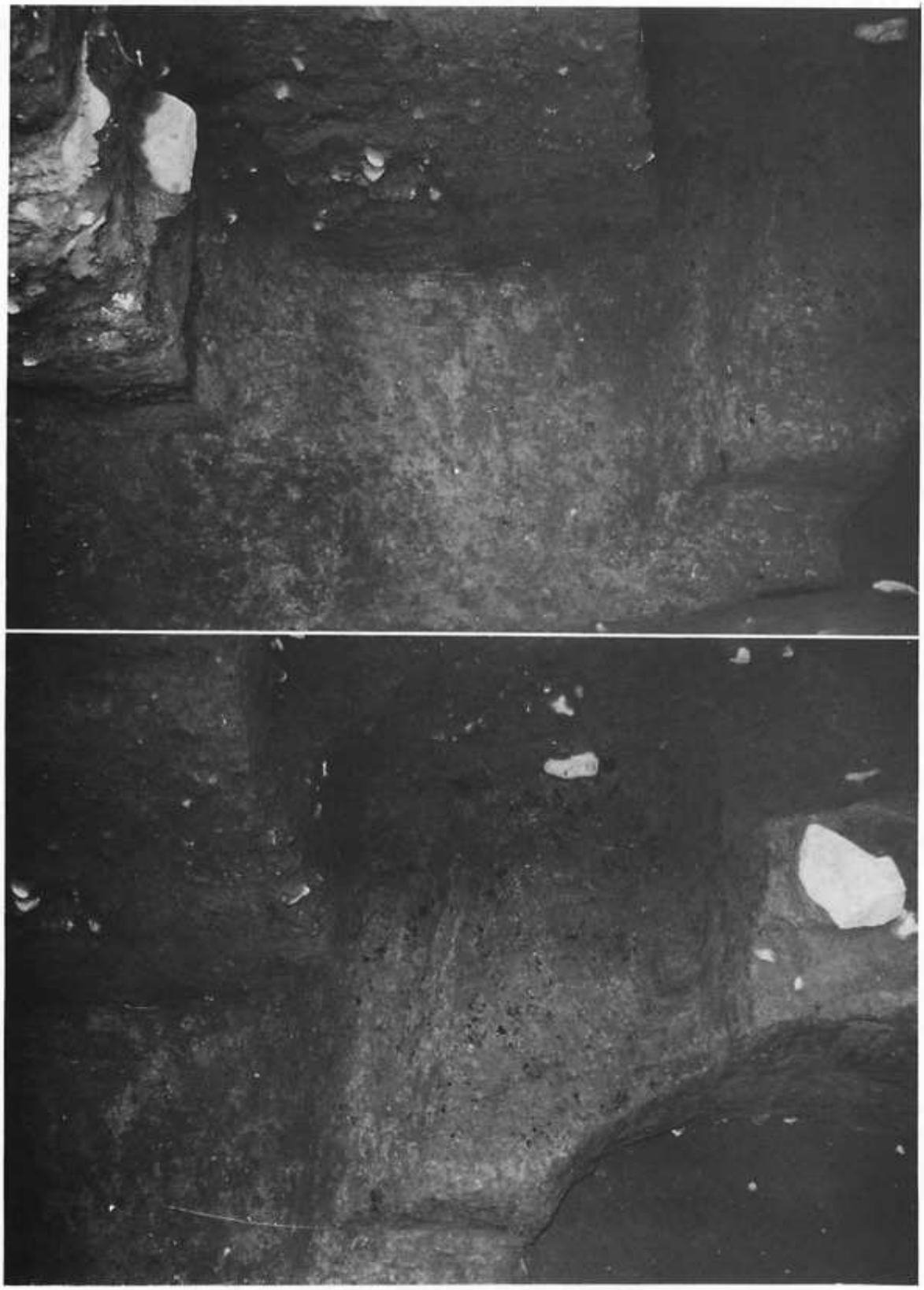


Cトレンチ溝Ⅰ遺物出土状況



Cトレンチ完掘後全景

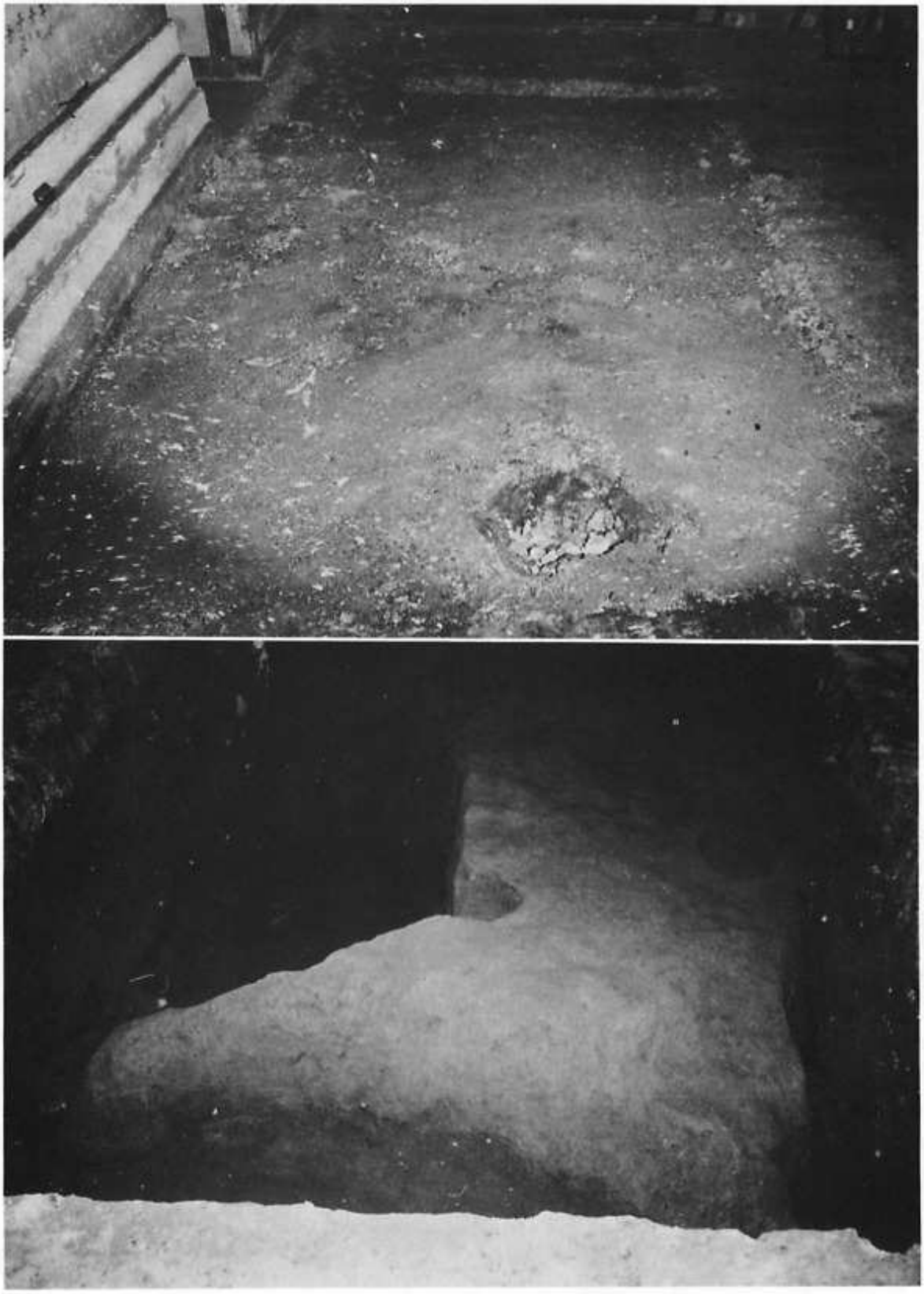
図版第72



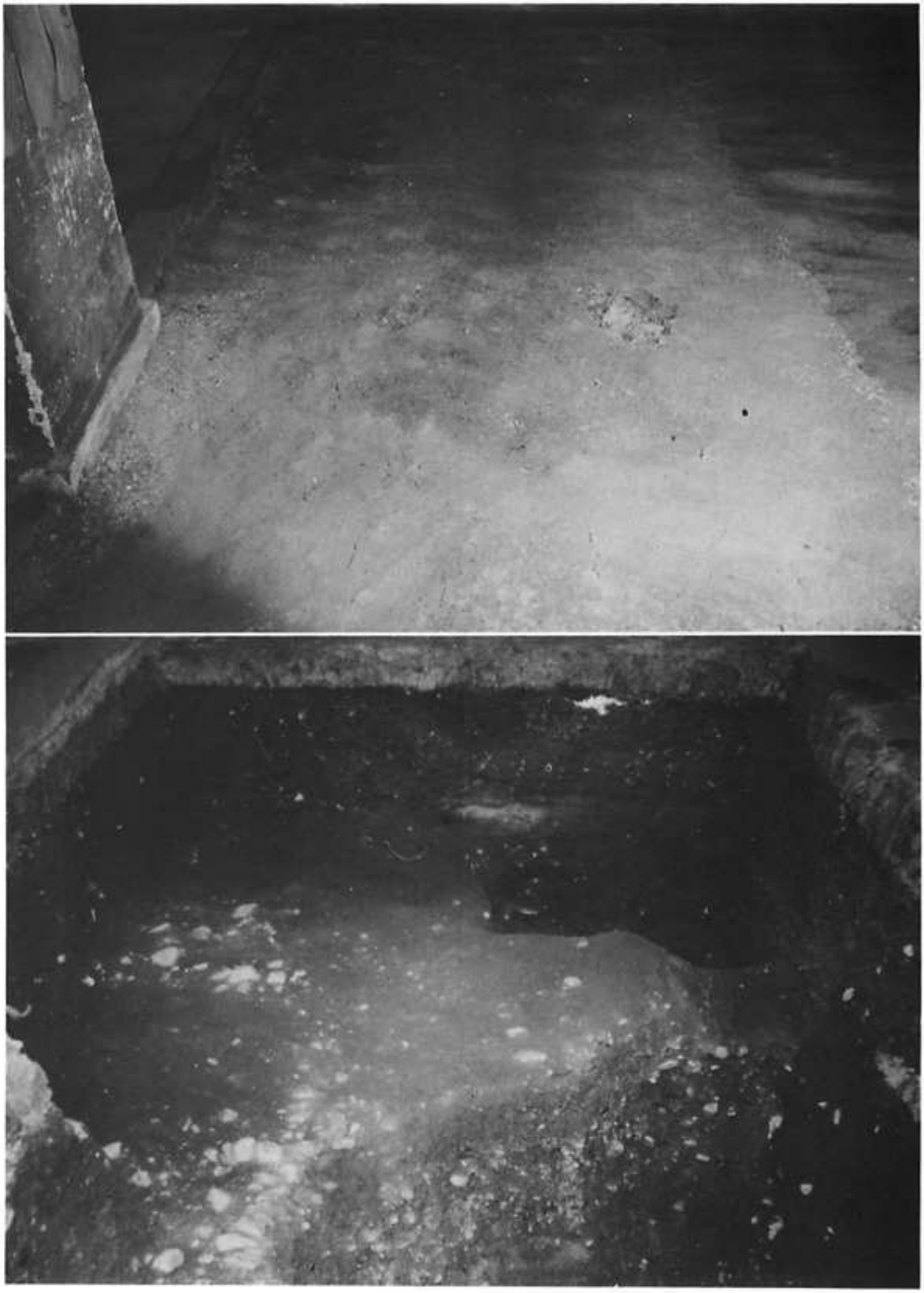
Cトレンチ溝Ⅳ(RⅣ)全景

Cトレンチ断面

図版第74

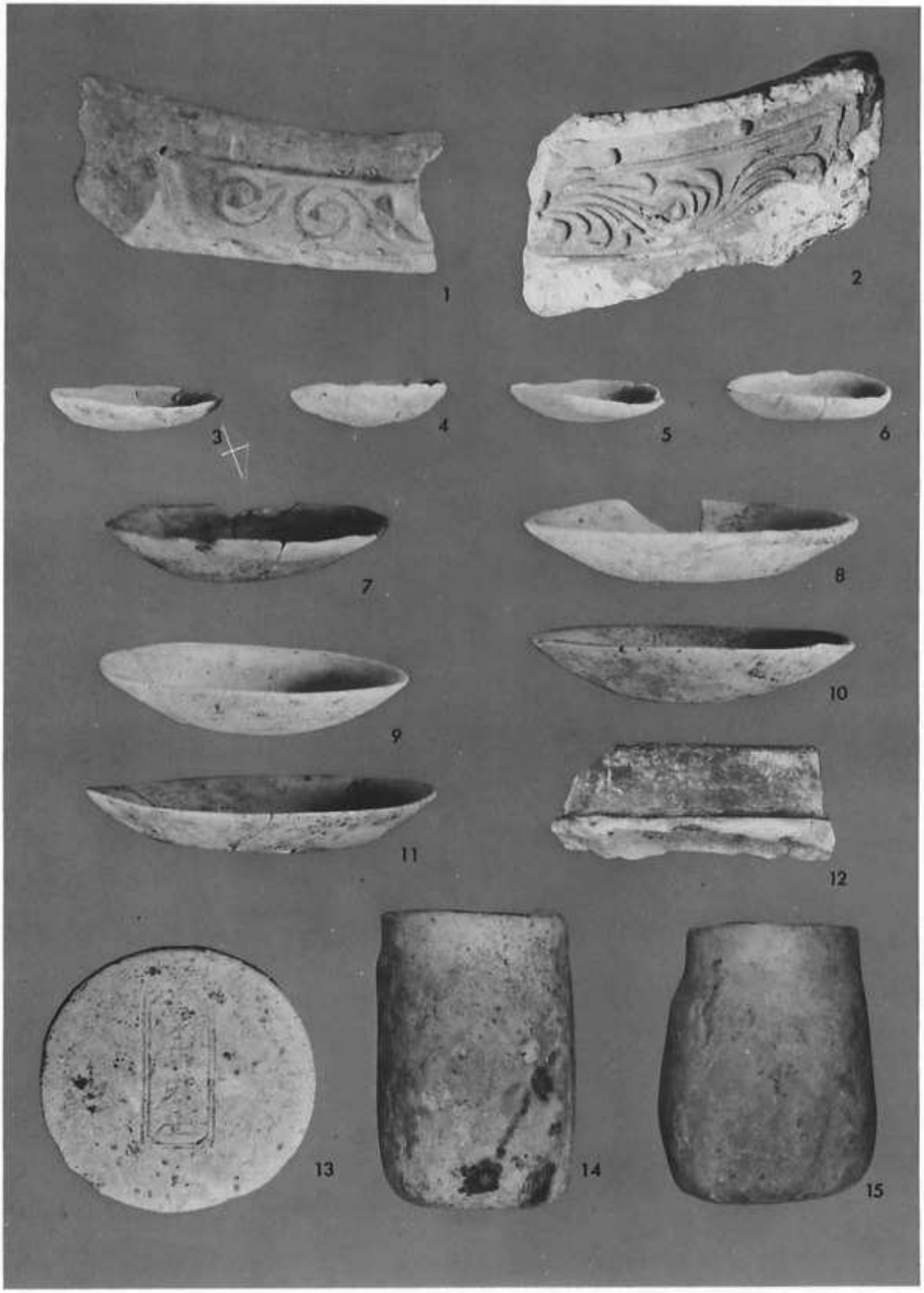


上：Dトレンチ発掘前，下：完掘後



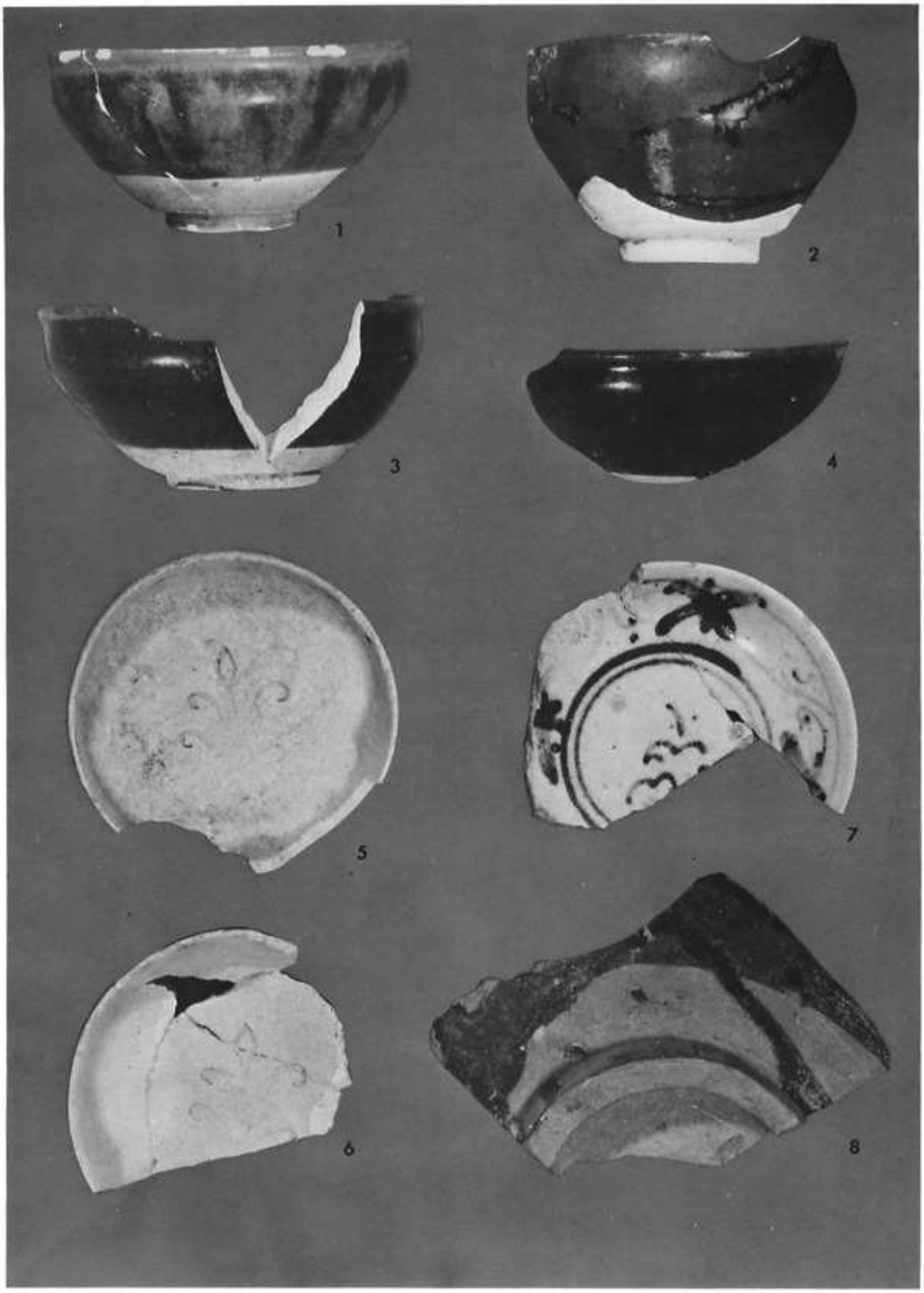
上：Eトレンチ発掘前，下：完掘後

図版第76

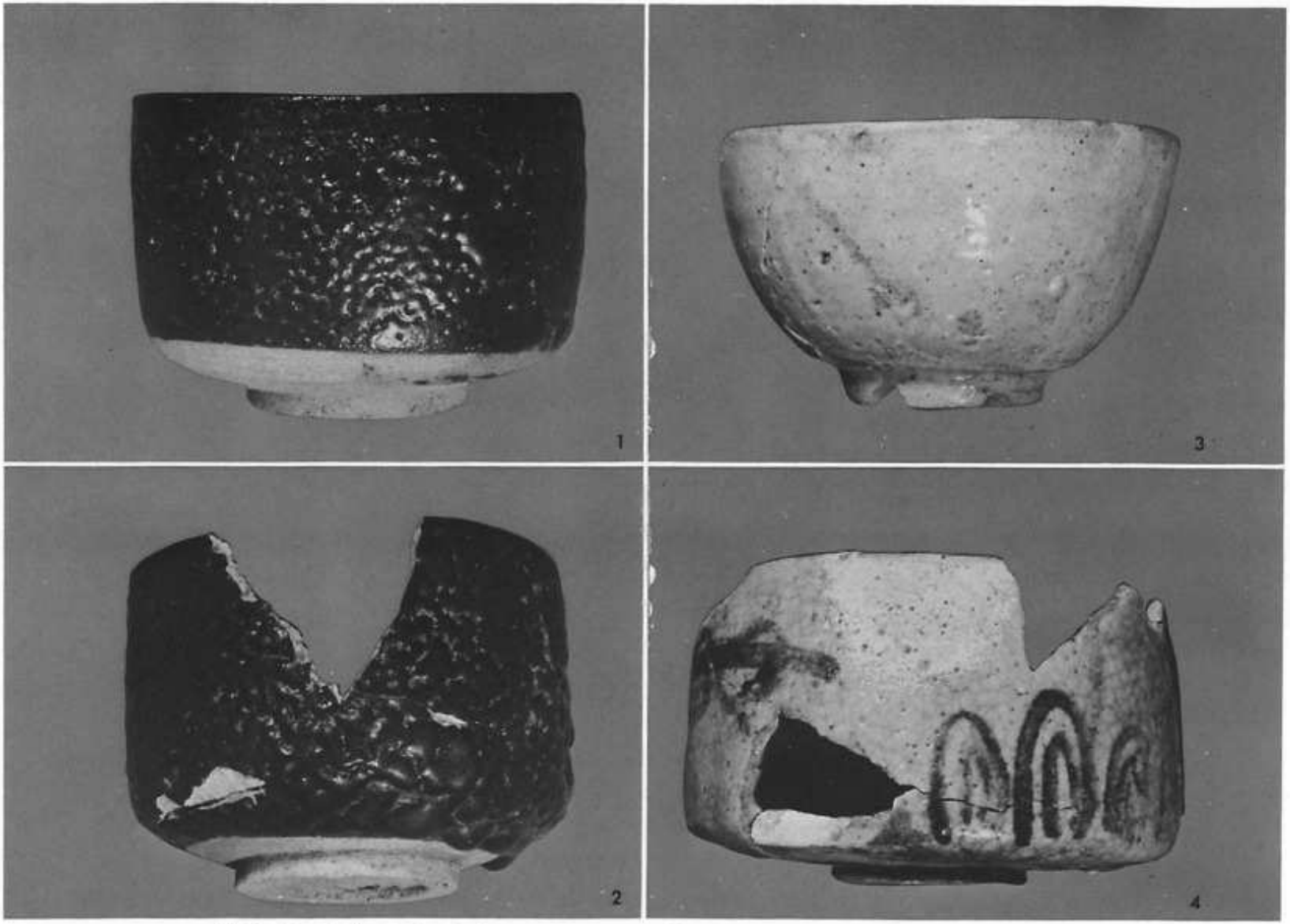


軒平瓦及土師皿，塩壺

（1：CトレンチWⅠ，2：Aトレンチ第3層，3～6：Eトレンチ第3層，7：Eトレンチ第2層，8・9：Aトレンチ第2層，10：Eトレンチ第4層，11：Bトレンチ第7層，12：EトレンチWⅡ，13：Dトレンチ第2層，14：CトレンチR3，15：Cトレンチ第4焼土層）



美濃・瀬戸及唐津系陶器　1・2：瀬戸天目，3・4：美濃天目，5・6：黄瀬戸向付，7：志野，8：絵唐津
（1・3・4：Cトレンチ溝Ⅰ，2：Eトレンチ第2層，5：Cトレンチ溝Ⅱ，6：Bトレンチ第5層，7：Cトレンチ第3焼土層，8：Cトレンチ第4焼土層）



美濃及唐津系陶器　1・2＝瀬戸黒，3＝唐津，4＝美濃　（1・2・4＝Cトレンチ溝Ⅱ，3＝CトレンチⅧⅠ）

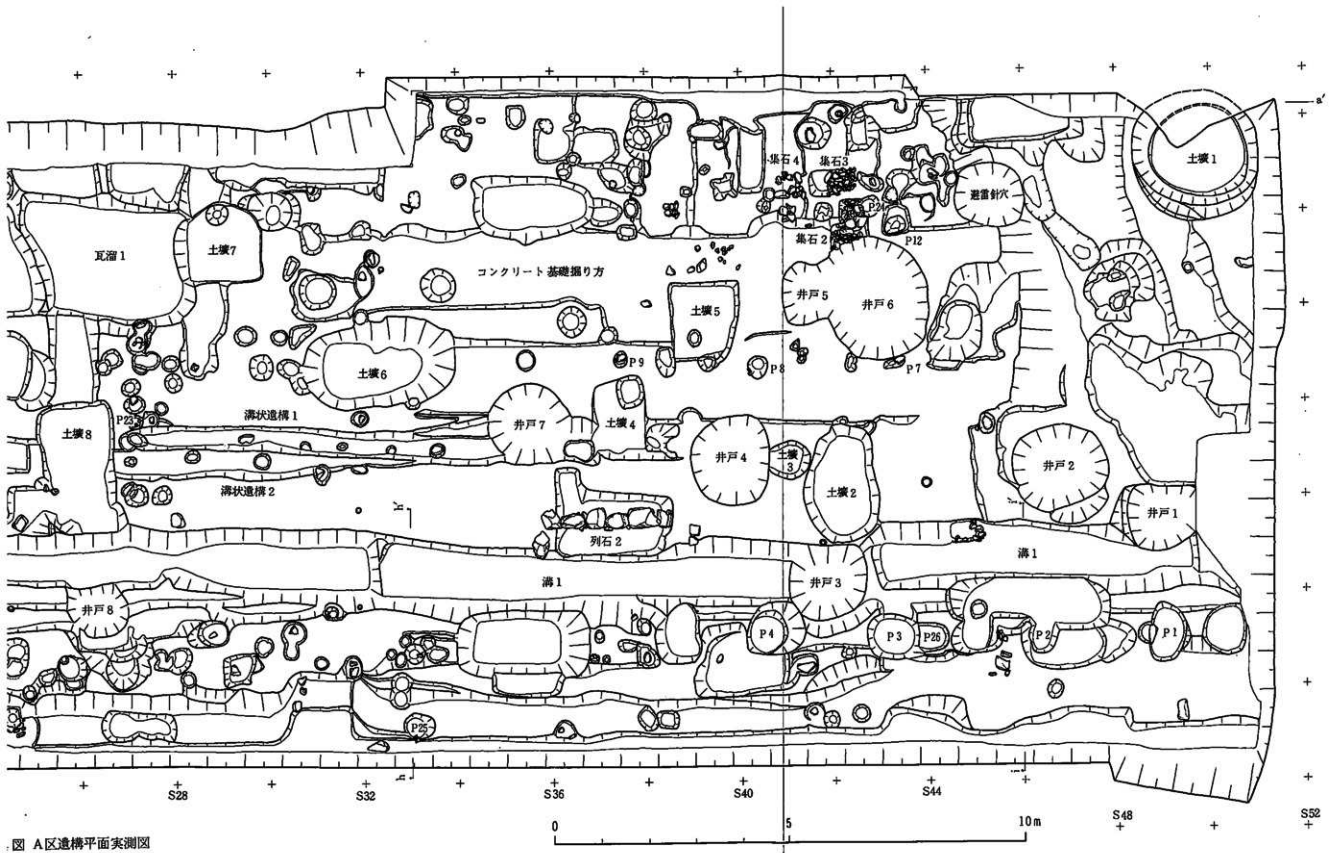
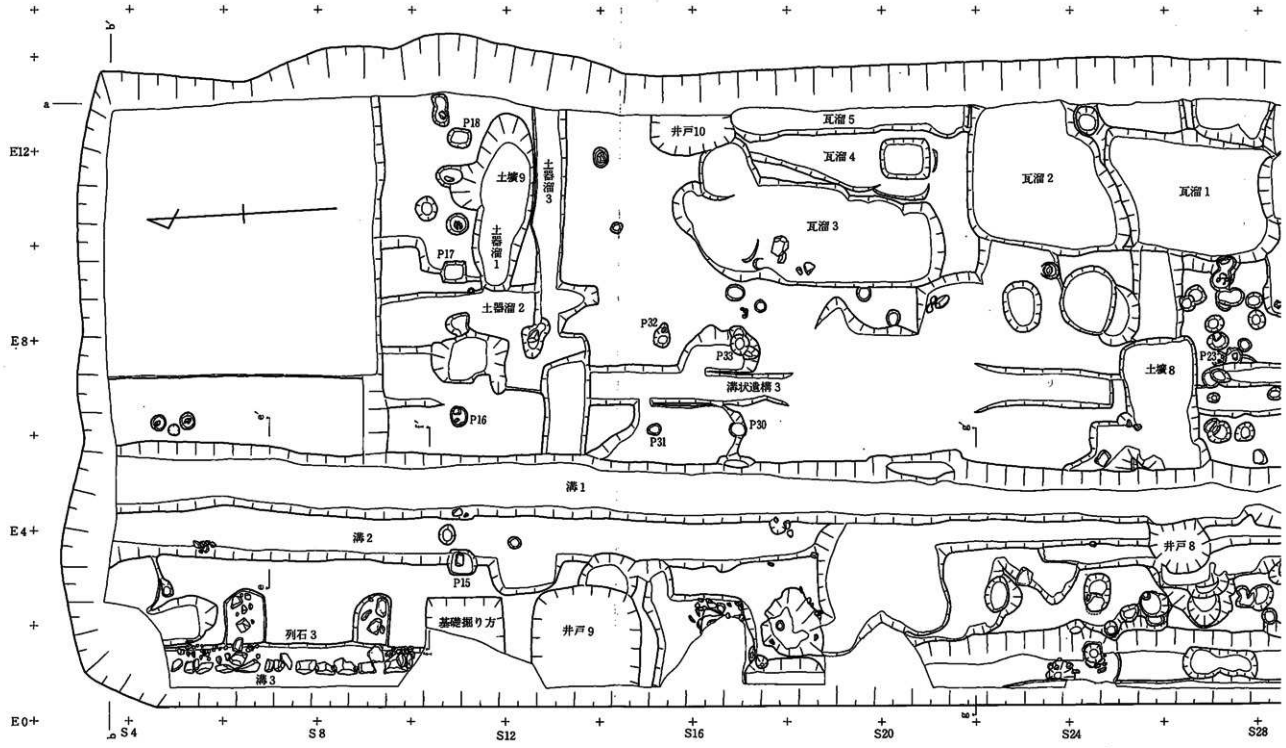
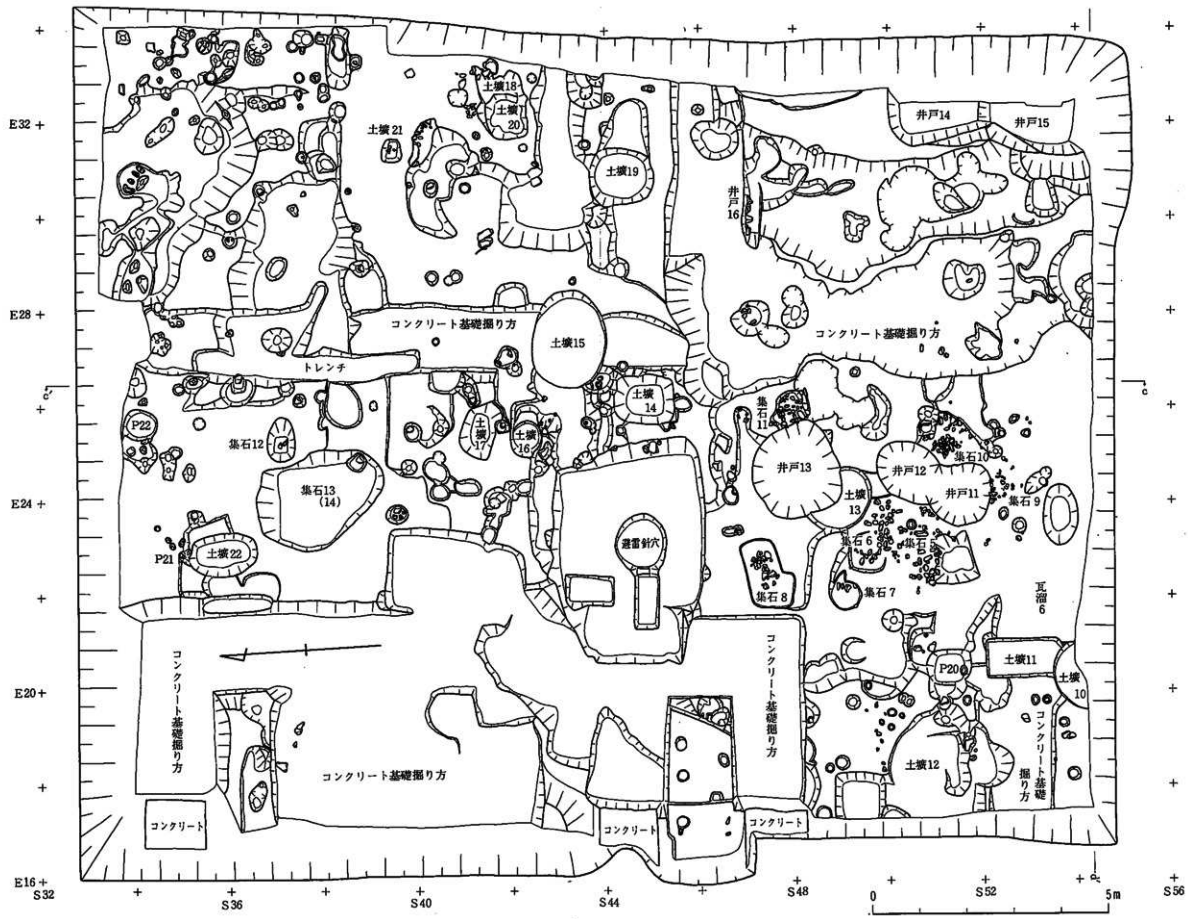

瓦溜1
土壙7
土壙8
土壙6
土壙5
土壙4
土壙3
土壙2
土壙1
コンクリート基礎掘り方
集石4
集石3
集石2
避雷針穴
井戸5
井戸6
井戸7
井戸4
井戸2
井戸1
井戸3
井戸8
溝状遺構1
溝状遺構2
列石2
溝1
P1
P2
P3
P4
P5
P7
P8
P9
P12
P25
P26
S28
S32
S36
S40
S44
S48
S52
0
5
10m

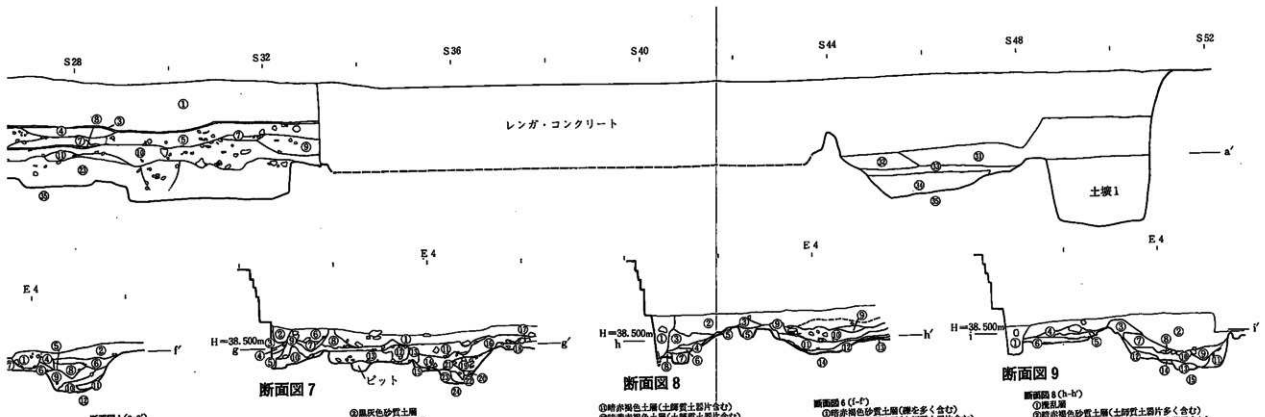
図 A区遺構平面実測図



第4図 A区遺構平面実測図



第5図 B区遺構平面実測図



断面図 7

断面図 8

断面図 9

断面図 1 (a-a′)
①撹乱層
②瓦層
③焼土層
④明黄褐色砂質土層(カーボン多く含み，土師質土器片もみられる。礫を含む)
⑤黄褐色土層(土師質土器片，瓦を含む。礫多く含む)
⑥明灰褐色砂層
⑦茶褐色粘質土層(カーボン，灰が混在，土師質土器片含む)
⑧灰茶褐色砂質土層
⑨明灰茶褐色粘質土層(土師質土器片，瓦を含む)
⑩黄灰褐色粘質土層(瓦，礫を多く含む)
⑪黄褐色粘質土層
⑫黄褐色土層
⑬明黄褐色砂質土層(土師質土器片，礫含む)
⑭黄褐色土層
⑮焼土層
⑯黄褐色砂質土層(土師質土器片，灰を含む)
⑰暗灰色粘質土層(木炭が散在し，下部に礫を多く含む)
⑱黄褐灰色砂層(礫を多く含む)
⑲灰茶褐色粘質土層
⑳黒灰色粘質土層(木片含む)
㉑暗黄褐色粘質土層(土師質土器片，瓦，礫を多く含む)
㉒茶褐色土層(土師質土器片，カーボン含む)
㉓明茶褐色粘質土層(土師質土器片含む)
㉔明茶褐色粘質土層(土師質土器片，カーボン，灰を含む)
㉕暗灰色粘質土層
㉖灰茶褐色粘質土層(瓦を含む)
㉗暗茶褐色粘質土層
㉘明緑灰色砂層
㉙暗赤褐色土層
㉚青灰色土層
㉛褐色砂質土層
㉜黒灰色粘質土層
㉝地山

断面図 2 (b-b′)
①撹乱層
②瓦層
③暗黒色砂質土層
④暗赤褐色砂質土層
⑤黒褐色砂質土層(小礫を多く含む，土師質土器片若干含む)
⑥暗赤褐色砂質土層
⑦暗赤褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑧暗赤褐色砂質土層
⑨暗赤褐色砂質土層
⑩茶褐色粘質土層(土師質土器片若干含む)
⑪黒灰色砂質土層(土師質土器片若干含む)
⑫暗赤褐色砂質土層(土師質土器片多く含む)
⑬茶褐色粘質土層
⑭暗赤褐色砂質土層
⑮茶褐色粘質土層(土師質土器片若干含む)
⑯暗赤褐色砂質土層(土師質土器片多く含む)
⑰暗赤褐色砂質土層
⑱暗赤褐色砂質土層(礫を多量に含む)
⑲黒灰色砂質土層(土師質土器片，礫を若干含む)
⑳黒灰色砂質土層(土師質土器片，礫を若干含む)
㉑茶褐色砂質土層
㉒茶褐色粘質土層
㉓黒灰色砂質土層(土師質土器片多く含む)
㉔黒灰色砂質土層(土師質土器片多く含む)
㉕青灰色砂質土層
㉖黒灰色粘質土層(土師質土器片多く含む)
㉗黒灰色砂質土層(土師質土器片若干含む)
㉘黒灰色粘質土層
㉙黒灰色粘質土層(木片，土師質土器片若干含む)
㉚地山

断面図 3 (c-c′)
①撹乱層
②瓦層
③暗褐色粘質土層(礫を含む)
④暗赤褐色土層
⑤砂質暗赤褐色土層(須恵器片含む)
⑥暗赤褐色土層
⑦暗黄褐色土層
⑧砂質暗赤褐色土層(土師質土器片含む)
⑨暗褐色砂層(土師質土器片含む)
⑩暗赤褐色土層(土師質土器片含む)

断面図 4 (d-d′)
①撹乱層
②瓦層(焼土を含む)
③褐灰層(後瓦，砂礫，砂利含む)
④黄褐灰色粘質土層
⑤暗褐色粘質土層
⑥褐灰層(瓦，礫を含む)
⑦暗褐色土層(小礫多く含む)
⑧暗褐色土層(瓦礫混合土)
⑨暗褐色土層
⑩灰青色粘質土層
⑪暗褐色土層
⑫暗褐色粘質土層
⑬暗赤褐色粘質土層
⑭暗赤褐色土層
⑮暗褐色土層
⑯地山

断面図 5 (e-e′)
①暗赤褐色粘質土層(土師質土器片，小礫含む)
②暗赤褐色粘質土層(土師質土器片含む)
③暗黒褐色粘質土層(土師質土器片，木片，小礫含む)
④礫1

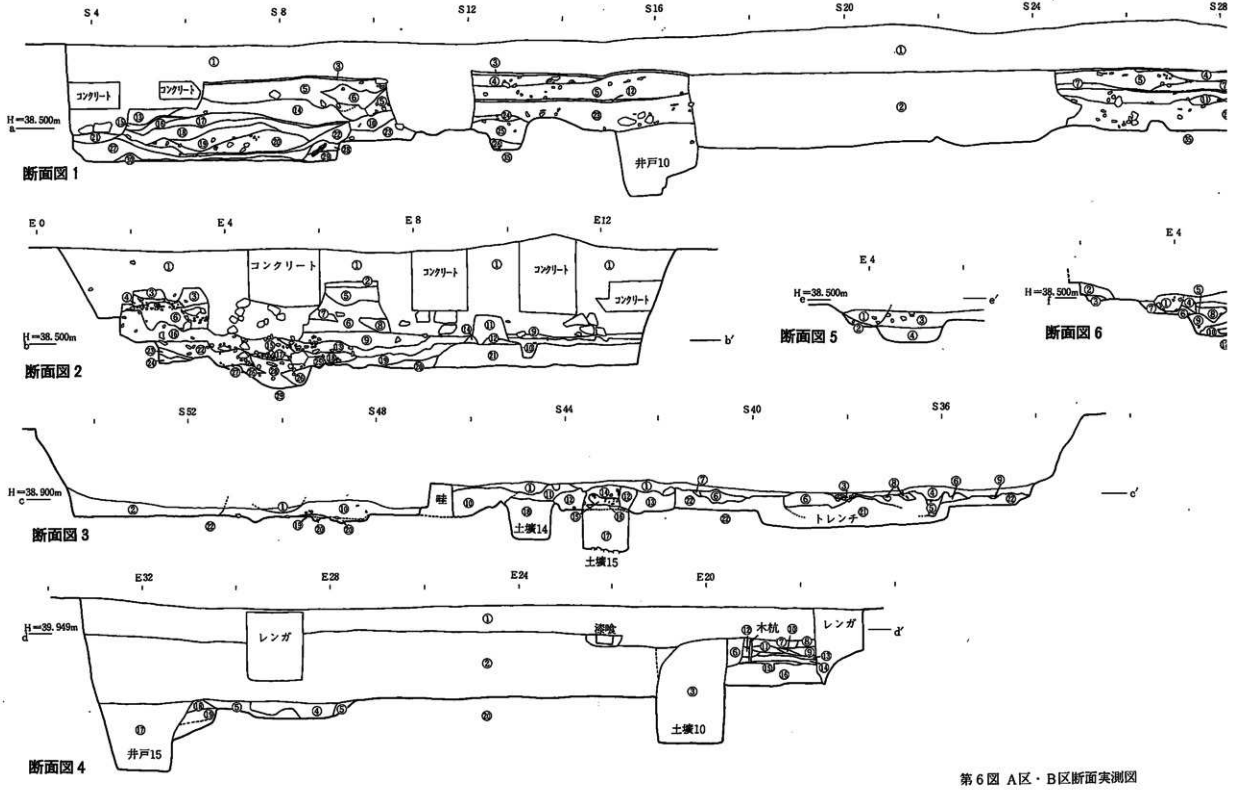
断面図 6 (f-f′)
①暗赤褐色砂質土層(礫を多く含む)
②暗赤褐色砂質土層(土師質土器片含む)
③暗灰褐色砂質土層
④暗赤褐色砂質土層
⑤暗赤褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑥暗灰褐色砂質土層(小礫，土師質土器片含む)
⑦暗灰褐色砂質土層(小礫を多く含む)
⑧黒灰色粘質土層(木片含む)
⑨黒灰色砂質土層(小礫，土師質土器片含む)
⑩黒灰色粘質土層
⑪地山

断面図 7 (g-g′)
①撹乱層
②暗灰青色土層(土師質土器片，小礫含む)
③地山
④黒色砂質土層(海藻片，小礫含む)
⑤褐色土層(土師質土器片含む)
⑥褐色土層(土師質土器片含む，礫を多く含む)
⑦地山
⑧暗褐色土層(土師質土器片含む)
⑨灰青色土層(土師質土器片含む)
⑩灰青色粘質土層(土師質土器片含む)
⑪灰青色粘質土層(土師質土器片含む)
⑫褐色土層(土師質土器片含む)
⑬明褐色土層(円礫を多く含む，土師質土器片含む)
⑭明褐色土層(円礫を多く含む，土師質土器片含む)
⑮暗灰青色粘質土層(土師質土器片含む)
⑯暗灰青色粘質土層
⑰暗褐色土層(小礫，土師質土器片含む)
⑱黄褐色粘質土(瓦含む)
⑲暗褐色土層
⑳暗褐色土層(土師質土器片，須恵器片含む)
㉑灰褐色土層(土師質土器片含む)
㉒灰青色粘質土層(土師質土器片含む)
㉓明褐色土層
㉔暗灰青色地土層
㉕地山

断面図 8 (h-h′)
①撹乱層
②暗赤褐色砂質土層(土師質土器片多く含む)
③暗赤褐色砂質土層(土師質土器片を若干含む)
④暗赤褐色砂質土層(土師質土器片を若干含む)
⑤暗赤褐色粘質土層(土師質土器片を若干含む)
⑥暗赤褐色砂質土層(土師質土器片を若干含む)
⑦赤灰色粘質土層
⑧灰色粘質土層
⑨暗赤褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑩暗赤褐色砂質土層(土師質土器片を多量に含み，大きな礫が多く見られる)
⑪暗赤褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑫暗褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑬暗赤褐色粘質土層
⑭地山

断面図 9 (i-i′)
①撹乱層
②暗赤褐色砂質土層(土師質土器片含む)
③暗赤褐色砂質土層
④赤褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑤赤灰色砂質土層(カーボン含む)
⑥灰青色砂質土層(骸骨片含む)
⑦灰褐色砂質土層(土師質土器片，陶器片含む)
⑧灰色砂質土層
⑨暗褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑩暗赤褐色砂質土層(円礫，瓦片含む)
⑪暗褐色砂質土層(瓦片含む)
⑫暗褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑬暗灰色砂質土層(土師質土器片含む)
⑭暗赤褐色砂質土層(土師質土器片含む)
⑮地山

0　5　10m



第6図 A区・B区断面実測図

平安京跡研究調査報告 第3輯
—東洞院大路・桑華院跡発掘調査報告書—

発行日　昭和52年3月20日

編集・発行　財団法人 古代學協會
京都市中京区三条大路北・高倉小路西
TEL 075-222-0888　振替京都 850

制作　ピクトリー社
京都市中京区油小路通錦上ル
TEL 075-221-1428

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. III

EXCAVATION AT THE SITES OF THE OLD HIGASHINOTOIN AVENUE AND DONGE-IN TEMPLE OF THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXVII